

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第209集

新  
上  
小  
阪  
遺  
跡  
Ⅲ

東大阪市

# 新上小阪遺跡Ⅲ

大阪府営東大阪新上小阪住宅民活プロジェクトに伴う新上小阪遺跡発掘調査報告書

二〇一〇年十一月

財団法人 大阪府文化財センター

2010年11月

財団法人 大阪府文化財センター

東大阪市

# 新上小阪遺跡Ⅲ

大阪府営東大阪新上小阪住宅民活プロジェクトに伴う新上小阪遺跡発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター





方形周溝墓出土弥生土器集合



# 序 文

大阪府内各地では、昭和の中頃に建てられ老朽化が進んだ府営住宅の建替え工事が順次進められております。当センターではその事前の発掘調査を数多く実施し、これまでに多くの成果をあげてまいりました。本書に掲載した新上小阪遺跡の調査も、この府営住宅の建替え工事に伴い行なわれたものです。

新上小阪遺跡は長瀬川右岸の沖積地に立地しており、周辺には山賀遺跡・上小阪遺跡・小若江遺跡など著名な遺跡が広がっております。当遺跡の存在については近年まで全く知られておりませんでした。平成11年に実施された府営住宅建替えに伴う事前の試掘調査によって、はじめてその存在が明らかとなり、以後周知されることとなりました。平成13年度からは、大阪府の委託を受けた当センターが、2次にわたって本格的な調査を実施し、弥生時代から中世にかけての良好な遺構・遺物を確認いたしました。その成果については、既に「新上小阪遺跡」・「新上小阪遺跡Ⅱ」として報告したところです。

第3次目にあたる今回の調査では、当遺跡内で初めて弥生時代中期後半の方形周溝墓が見つかり、墓域の位置や広がりをつかむことができました。また古代の建物跡も検出され、出土遺物の中には一般の村落では見ることの少ない製塩土器や硯、瓦、また貴重な新羅系土器など、公的な施設、あるいは古代寺院の存在を推測させるものが数多く含まれていることが明らかとなりました。

このように中河内地域における弥生時代中期以降の歴史解明に欠くことのできない数多くの成果をあげることができました。これらの成果を取めた本書が、多くの方々にも活用され、地域史の解明に少しでも役立てていただければ幸いです。

最後に、今回のプロジェクトの事業者である中道・コーナン特定建設工事共同企業体をはじめ、ご指導とご協力を賜った大阪府住宅まちづくり部・大阪府教育委員会等の関係諸機関、並びに地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきまして、より一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2010年11月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正 好



# 例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市新上小阪に所在する新上小阪遺跡の発掘調査報告書である。調査名称は「新上小阪遺跡08-1」であるが、調査途中に実施した下水管理設工事に伴う小規模な調査（新上小阪遺跡09-1）の成果についても併せて収録している。
2. 調査は、大阪府営東大阪新上小阪住宅民活プロジェクトに伴い、中道・コーナン特定建設工事共同企業体から委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人 大阪府文化財センターが実施した。受託契約期間は平成20年9月1日から平成22年12月22日までである。現地での調査期間は平成20年9月1日から平成21年8月31日までで、引き続き中部調査事務所にて、平成21年9月1日から平成22年8月31日までの間整理作業を行ない、平成22年11月30日に本書刊行を以って完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

【平成20年度】 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘  
中部調査事務所長（兼 調査係長）寺川史郎、副主査 林日佐子・伊藤 武

【平成21年度】 調査部長（兼 調査課長）福田英人、調整グループ長 金光正裕  
調査グループ長 寺川史郎、中部総括主査 秋山浩三、主査 片山彰一〔写真〕  
副主査 林日佐子・伊藤 武、専門調査員 河本純一

【平成22年度】 調査部長（兼 調査課長）福田英人、調整グループ長 江浦 洋、同主幹 岡本茂史  
調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、主査 片山彰一〔写真〕、副主査 伊藤 武
4. 出土木製品の樹種鑑定及びその後の保存処理は、当センター調査グループ主査 山口誠治が行なった。
5. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地元東大阪市教育委員会、新上小阪・南上小阪自治会、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめとし、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）  
菅原章太（東大阪市教育委員会）、藤井 整（京都府教育庁）、若林邦彦（同志社大学歴史資料館）
6. 本書の作成にあたっては、専門調査員・非常勤職員の協力の下、伊藤が執筆・編集を行なった。  
なお、第2章の「遺跡の位置と環境」については、これまでの調査と変わるものではないため、既刊の『新上小阪遺跡』・『新上小阪遺跡Ⅱ』から引用し、一部伊藤が加筆・修正した。第5章の「新上小阪遺跡09-1の調査成果」については、調査担当者である林が平成21年6月に提出した発掘調査終了報告書の原稿に、伊藤が一部修正・加筆したものである。
7. 本調査に関わる遺物・写真・実測図等は財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡 例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。単位は全てmである。
2. 発掘調査での使用測地系は世界測地系（測地成果2000）である。遺構図に記載した座標値の単位は全てmである。
3. 本書で用いた北はいずれも国土座標軸第VI系の座標北を示す。ちなみに当遺跡では座標北は磁北より東へ約 $6^{\circ}36'$ 、真北より西へ約 $0^{\circ}14'$ 振っている。
4. 現地調査及び整理作業は、平成15年度に改訂された財団法人 大阪府文化財センター 2003『遺跡調査基本マニュアル』【暫定版】に準拠して行なった。
5. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。なおその記載順は土色・記号・土質とした。  
例：暗褐 10YR3/3 粘土質シルト
6. 遺構番号は、遺構の種類や調査区にかかわらず1から通して付し、複数の遺構の集合体である掘立柱建物や方形周溝墓などについては、それとは別に遺構番号を付した。  
例：「1溝」・「2土坑」・「掘立柱建物1」・「方形周溝墓1」  
本書中の遺構番号・種類は、基本的に現地調査段階での遺構番号をそのまま使用している。ただし現地では全ての遺構に漏れなく番号を付しているわけではないため、整理作業の段階で新たに遺構番号を振り足したものがある。これらについては現地で付した最終番号以降の番号を振っているため、たとえ一連の遺構でも番号が続かないものがある。
7. 遺構図における断面位置は、図面上に「└」形によってその位置を示した。縮尺は各図のスケールを参照されたい。
8. 遺物実測図の縮尺は、土器・瓦・木製品 $1/4$ 、石製品 $1/2$ 、土製品 $1/3$ を基本としたが、砥石や埴など大型のものは $1/4$ にするなど、適宜遺物に即して異なる縮尺としており、必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、スケールに明示しているのでそちらを参照されたい。
9. 遺物の実測図のうち、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器は断面を白抜きとし、それ以外の須恵器・陶磁器類は黒塗りで表現した。また黒色土器のうち、内黒（A類）は内面側に、両黒（B類）は内外面にアマカケを施した。土製品・瓦の断面にもアマカケを施した。
10. 写真図版中の遺物番号は挿図の遺物番号と対応する。写真図版中に遺物番号のないものは、実測図を載せていない写真のみの掲載であることを示す。
11. 遺物写真のうち、俯瞰撮影を行なったものなど縮尺率が判明するもののみ図版中に縮尺率を記した。
12. 引用文献、参考文献等は各節の末尾に記した。なお、弥生土器の年代観は、寺沢薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社、及び、森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社に準拠した。

# 目 次

巻頭図版

序文・例言・凡例

第1章 調査に至る経緯と既往の調査 .....	1
第1節 調査に至る経緯と経過 .....	1
第2節 既往の調査 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 .....	4
第1節 地理的環境 .....	4
第2節 歴史的環境 .....	5
第3章 調査の方法 .....	11
第1節 発掘調査 .....	11
第2節 整理作業 .....	13
第4章 新上小阪遺跡08-1の調査成果 .....	17
第1節 基本層序と各層出土遺物 .....	17
1. 1区  2. 2区  3. 3区  4. 4区	
第2節 1区の調査成果 .....	40
1. 2層下面  2. 3-1層下面  3. 第3面	
4. 4b層下面  5. 第5面  6. 6-1層下面	
第3節 2区の調査成果 .....	70
1. 2層下面  2. 第3面  3. 4b層下面  4. 第5面	
第4節 3区の調査成果 .....	103
1. 第3面  2. 4b層下面  3. 第5面	
第5節 4区の調査成果 .....	114
1. 第3面  2. 4b層下面  3. 第5面	
第5章 新上小阪遺跡09-1の調査成果 .....	120
第1節 はじめに .....	120
第2節 調査成果 .....	120
1. 1区  2. 2区	
第3節 小 結 .....	122
第6章 まとめ .....	123

# 卷頭図版目次

卷頭図版 方形周溝墓出土弥生土器集合

## 表目次

表1 土器計測表……………	133~142	表4 木製品計測表……………	144
表2 軒丸瓦計測表……………	143	表5 石製品計測表……………	144
表3 丸瓦・平瓦・道具瓦計測表……………	143	表6 土製品計測表……………	144

## 写真目次

写真1 現地公開資料と公開風景……………	2	写真3 整理作業風景……………	15
写真2 現場作業風景……………	14		

## 挿図目次

図1 調査区配置図……………	3	図20 貯留槽部細溝群出土遺物実測図……………	44
図2 新上小阪遺跡周辺の地形……………	4	図21 西半部細溝群出土遺物実測図……………	45
図3 新上小阪遺跡周辺の遺跡分布図……………	6	図22 掘立柱建物1平面・断面図……………	46
図4 調査区内地区割り図……………	12	図23 第3面ビット出土遺物実測図……………	47
図5 1~3区地層断面図……………	19~22	図24 14・41・42土坑平面・断面図……………	48
図6 3・4区地層断面図……………	23・24	図25 14・41・42・50土坑出土遺物実測図……………	49
図7 1区3-1層出土遺物実測図……………	25	図26 49・50・171土坑、18・75溝 平面・断面図……………	50
図8 1区3-2層出土遺物実測図(1)……………	26	図27 1区4b-1層下面全体平面図 及び河道跡断面図……………	51
図9 1区3-2層出土遺物実測図(2)……………	27	図28 1区第5面検出遺構全体平面図……………	53
図10 1区4・5層出土遺物実測図……………	28	図29 方形周溝墓1全体平面図……………	54
図11 2区3層出土遺物実測図(1)……………	31	図30 方形周溝墓1・2周辺土器出土状況 平面・断面図……………	55
図12 2区3層出土遺物実測図(2)……………	32	図31 129溝土器出土状況平面・断面図……………	56
図13 2区4層出土遺物実測図……………	33	図32 方形周溝墓1周辺遺構断面図……………	57・58
図14 2区5層出土遺物実測図……………	34	図33 129溝出土遺物実測図……………	60
図15 3区遺物包含層出土遺物実測図……………	36	図34 141溝出土遺物実測図……………	61
図16 4区遺物包含層出土遺物実測図……………	38	図35 132・184溝出土遺物実測図……………	63
図17 1区2層下面検出遺構平面・断面図 及び出土遺物実測図……………	41	図36 130・133~135・138・139・172土坑 平面・断面図……………	64
図18 1区北辺3-1層下面検出遺構平面・ 断面図及び出土遺物実測図……………	42		
図19 1区第3面検出遺構全体平面図……………	43		

図37	130・133・135・138・172土坑 出土遺物実測図……………	65	図66	方形周溝墓2 検出土器棺 平面・断面図……………	94
図38	124～128溝断面図……………	66	図67	方形周溝墓2 周辺遺構断面図……	95・96
図39	124・131溝出土遺物実測図……………	68	図68	方形周溝墓2 出土遺物実測図……………	97
図40	1区6-1層下面平面図……………	69	図69	攪乱出土勾玉実測図……………	98
図41	2区北西隅2層下面検出遺構平面図…	70	図70	432～436・438～443・447・472ピット、 458・468土坑平面・断面図……………	99
図42	2区第3面検出遺構全体平面図……………	71	図71	450溝土器出土状況平面・断面図 ……	100
図43	227・278溝断面図……………	72	図72	450溝出土遺物実測図 ……	101
図44	第3面溝出土遺物実測図……………	72	図73	431・445・451・452・459・460溝 断面図……………	101
図45	掘立柱建物2平面・断面図……………	73	図74	3区第3面検出遺構全体平面図……………	103
図46	掘立柱建物3平面・断面図……………	74	図75	掘立柱建物5平面・断面図……………	104
図47	塀1平面・断面図……………	75	図76	144ピット、145～148土坑 平面・断面図……………	104
図48	第3面ピット出土遺物実測図……………	75	図77	第3面遺構出土遺物実測図……………	105
図49	196・356土坑平面・断面図……………	76	図78	3区4b-1層下面全体平面図……………	106
図50	196土坑出土遺物実測図 ……	77	図79	176・177落ち込み断面図……………	107
図51	356土坑出土遺物実測図 ……	78	図80	3区第5面検出遺構全体平面図……………	108
図52	210・211・224・277・366土坑 平面・断面図……………	79	図81	方形周溝墓3 周辺遺構平面・断面図 及び土器出土状況図……………	109・110
図53	197溝、225土坑平面・断面図……………	80	図82	180・181・185土坑平面・断面図 ……	112
図54	210・211・224・225・277土坑 出土遺物実測図……………	80	図83	182溝断面図 ……	112
図55	296～298・306・308土坑 平面・断面図……………	81	図84	500・501溝、502・503土坑 平面・断面図……………	113
図56	358・359・365・385・411・429土坑 平面・断面図……………	82	図85	4b層下面・第5面 遺構出土遺物実測図……………	113
図57	408～410・412土坑平面・断面図 ……	84	図86	4区第3面検出遺構全体平面図……………	114
図58	358・359・365・429土坑 出土遺物実測図……………	85	図87	475・476ピット、491溝 平面・断面図……………	115
図59	2区4b層下面全体平面図 及び遺物出土状況図……………	86	図88	492・493土坑平面・断面図……………	115
図60	2区4b-1層下面 出土遺物実測図……………	87	図89	細溝、493土坑出土遺物実測図 ……	116
図61	5層高まり部出土遺物実測図……………	88	図90	4区4b-1層下面全体平面図……………	117
図62	2区第5面検出遺構全体平面図……………	90	図91	497・498落ち込み、 496・504溝断面図……………	118
図63	掘立柱建物4平面・断面図……………	91	図92	第5面土器出土状況……………	118
図64	掘立柱建物4 周辺、462溝 出土遺物実測図……………	92	図93	4区第5面検出遺構全体平面図……………	119
図65	方形周溝墓2 全体平面図……………	93	図94	調査区平面図……………	120

図95	1区地層断面図	121
図96	2区出土遺物実測図	121
図97	2区地層断面図	122
図98	遺構分布図1 (弥生時代中期後半)	124

図99	遺構分布図2 (弥生時代後期後半～布留式期)	126
図100	遺構分布図3 (古代)	127
図101	第3面・第5面検出遺構 全体平面図	131・132

## 写真図版目次

### 【08-1調査】

#### 写真図版1 1区遺構

1. 第3面全景 (西から)
2. 貯留層部第3面全景 (南西から)
3. 周囲拡張部東辺～南辺第3面 (北東から)
4. 周囲拡張部南辺第3面 (西から)

#### 写真図版2 1区遺構

1. 2層下面検出遺構 (中央は7土坑)
2. 7土坑
3. 19溝
4. 3-1層下面検出斜行溝
5. 75溝
6. 41・42土坑
7. 41土坑 土器出土状況
8. 50土坑

#### 写真図版3 1区遺構

1. 49土坑
2. 171土坑
3. 掘立柱建物1 (南から)
4. 28ピット
5. 32ピット
6. 40ピット
7. 160ピット
8. 4b-1層下面全景 (西から)

#### 写真図版4 1区遺構

1. 貯留層部4b-1層下面検出河遺跡  
(北西から)
2. 貯留層部第5面全景 (南から)

#### 写真図版5 1区遺構

1. 第5面全景 (西から)

#### 2. 方形周溝墓1 (北から)

#### 写真図版6 1区遺構

1. 129溝 土器出土状況
2. 129溝 土器 (346・350～352) 出土状況
3. 129溝 土器 (354) 出土状況
4. 方形周溝墓1 墳丘南裾部  
土器 (360) 出土状況
5. 方形周溝墓1 墳丘南裾部  
土器 (357) 出土状況

#### 写真図版7 1区遺構

1. 141溝 土器 (358) 出土状況
2. 132溝 土器 (361) 出土状況
3. 131溝 (南東から)
4. 131・141溝 断面 (南西から)
5. 方形周溝墓1 地層断面 (南西から)
6. 方形周溝墓1 地層断面 (西から)
7. 方形周溝墓1 盛土下面検出507溝
8. 方形周溝墓2 墳丘断ち割り断面  
(南西から)

#### 写真図版8 1区遺構

1. 130土坑
2. 133土坑
3. 134土坑
4. 135土坑
5. 138土坑
6. 139土坑
7. 172土坑
8. 124溝

#### 写真図版9 1区遺構

1. 125溝

2. 126溝
3. 127溝
4. 128溝
5. 周囲拡張部北辺第5面（西から）
6. 周囲拡張部南辺第5面（北東から）
7. 6-1層下面検出段（南西から）
8. オリフィス部調査完了状況（南東から）

写真図版10 2区遺構

1. 第3面全景（東から）
2. 北西部2層下面検出溝（西から）
3. 掘立柱建物2周辺検出遺構（東から）
4. 西半部第3面検出遺構（北から）
5. 中央部196土坑周辺検出遺構（北から）

写真図版11 2区遺構

1. 掘立柱建物2（北から）
2. 掘立柱建物2柱痕跡（北から）
3. 塀1（西から）
4. 掘立柱建物3（東から）
5. 322ピット
6. 302ピット
7. 335・270ピット

写真図版12 2区遺構

1. 210土坑
2. 211土坑
3. 224土坑
4. 197溝、225土坑
5. 277・366土坑
6. 297土坑
7. 298土坑
8. 306土坑

写真図版13 2区遺構

1. 308土坑
2. 356土坑
3. 358土坑
4. 359土坑
5. 365土坑
6. 412土坑
7. 429土坑 土器(499)出土状況

8. 227・278溝

写真図版14 2区遺構

1. 4b-1層下面全景（東から）
2. 4b-1層下面 土器(169)出土状況
3. 4b-1層下面 土器(500)出土状況
4. 4b-1層下面 木製品(501)出土状況
5. 第5面全景（東から）

写真図版15 2区遺構

1. 掘立柱建物4（南から）
2. 掘立柱建物4周辺 土器(516)出土状況
3. 掘立柱建物4周辺 土器(513)出土状況
4. 掘立柱建物4周辺 土器(517)出土状況
5. 掘立柱建物4周辺 土器(515)出土状況

写真図版16 2区遺構

1. 453ピット
2. 432~434ピット
3. 438~443ピット
4. 448土坑
5. 458土坑
6. 450溝 土器(532)出土状況
7. 第5面 木製品(180)出土状況
8. 第5面 石庖丁(177)出土状況

写真図版17 2区遺構

1. 方形周溝墓2周辺遺構検出状況  
(南西から)
2. 方形周溝墓2（南西から）

写真図版18 2区遺構

1. 方形周溝墓2 土器棺出土状況（西から）
2. 方形周溝墓2 土器棺出土状況（北東から）
3. 方形周溝墓2 北辺周溝完掘状況  
(北西から)
4. 方形周溝墓2 盛土下面検出474溝  
(北西から)
5. 方形周溝墓2 墳丘下部砂層堆積状況  
(南西から)

写真図版19 3区遺構

1. 東半部第3面検出遺構（北東から）
2. 東壁地層断面（北西から）

3. 144ピット
4. 145土坑
5. 146土坑
- 写真図版20 3区遺構
1. 147・148土坑
  2. 154ピット
  3. 4b-1層下面全景(東から)
  4. 西端部4b-1層下面(北から)
  5. 第5面全景(東から)
- 写真図版21 3区遺構
1. 中央部第5面検出遺構(南東から)
  2. 182溝
  3. 西端部第5面検出遺構(南東から)
  4. 177落ち込み
  5. 176落ち込み
  6. 180土坑
  7. 181土坑
  8. 185土坑
- 写真図版22 3区遺構
1. 方形周溝墓3(北から)
  2. 186溝(北西から)
  3. 186溝 土器出土状況(北西から)
  4. 186溝 土器(550)出土状況
  5. 南壁面検出墳丘盛土内土坑断面
- 写真図版23 3区遺構
1. 方形周溝墓3 断面(北東から)
  2. 178土坑
  3. 方形周溝墓3 断面(北西から)
  4. 西端部第5面検出遺構(北から)
  5. 500溝
  6. 501溝
  7. 502土坑
  8. 503土坑
- 写真図版24 4区遺構
1. 492・493土坑、491溝(南西から)
  2. 東端部第3面検出遺構(東から)
  3. 4b-1層下面全景(東から)
  4. 4b-1層下面検出ヒトの足跡
  5. 4b-1層下面検出鳥の足跡
- 写真図版25 4区遺構
1. 第5面全景(東から)
  2. 496溝
  3. 497・498・506落ち込み、504溝
  4. 第5面 土器(236)出土状況
  5. オリフィス部調査完了状況(東から)
- 写真図版26 1区遺物
- 写真図版27 1区遺物
- 写真図版28 1区遺物
- 写真図版29 1区遺物
- 写真図版30 1区遺物
- 写真図版31 1区遺物
- 写真図版32 1区遺物
- 写真図版33 1区遺物
- 写真図版34 1区遺物
- 写真図版35 1・2区遺物
- 写真図版36 2区遺物
- 写真図版37 2区遺物
- 写真図版38 2区遺物
- 写真図版39 2区遺物
- 写真図版40 2区遺物
- 写真図版41 2区遺物
- 写真図版42 2・3区遺物
- 写真図版43 1～3区遺物
- 写真図版44 4区遺物
- 【09-1調査】**
- 写真図版45 遺構・遺物
1. 1区1層上面全景(西から)
  2. 1区調査完了状況全景(西から)
  3. 1区南壁地層断面(上層部)
  4. 1区南壁地層断面(下層部)
  5. 2区11層上面全景(西から)
  6. 2区南壁地層断面(上層部)
  7. 2区南壁地層断面(下層部)
  8. 2区出土遺物

# 第1章 調査に至る経緯と既往の調査

## 第1節 調査に至る経緯と経過

本調査は、東大阪市新上小阪に所在する大阪府営東大阪新上小阪住宅の建替え工事に伴うものである。これまでの第1期・第2期の建替え工事に伴う調査は、当センターが大阪府建築都市部住宅整備課（平成18年度より大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課）からの委託を受けて実施していたが、近年大阪府が推進している、民間の資金や経営能力、及び技術力を活用した公共施設等の整備事業（PFI事業）に、この大阪府営東大阪新上小阪住宅の建替え事業も選定されたことから、今回は「大阪府営東大阪新上小阪住宅民生活プロジェクト」として、大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課民生活事業グループと事業契約した中道・コーナン特定建設工事共同企業体と、当センターとが受託契約を締結し、事前の発掘調査を実施することとなった。調査名は「新上小阪遺跡08-1」である。

受託契約期間は平成20年9月1日から平成22年12月22日までで、このうち現地での調査を平成21年8月31日まで実施し、引き続き平成22年8月31日までの1年間整理作業を行なった。

発掘調査の対象となったのは、新たに建設される高層住宅の基礎部分と、雨水を貯める貯留槽部分で、調査面積は2,918㎡である。

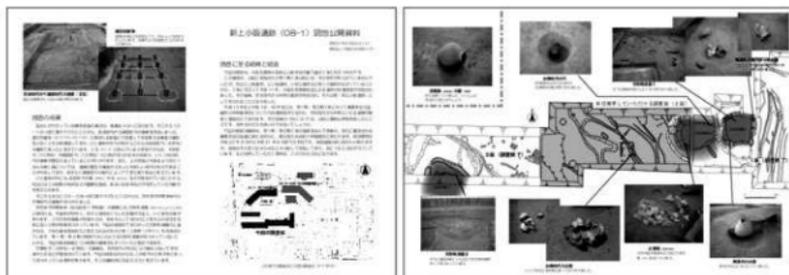
また調査期間中に、調査地の北側を通る道路下に、今回の工事に伴う下水管理設工事が必要となったため、急遽平成21年5月8日から同年6月2日までの間、本体の調査と並行して、下水マンホールを設置するための立坑部2箇所において、小規模な発掘調査を実施することとなった。こちらの調査面積は2箇所併せて19.2㎡である。調査名は08-1調査とは分け、「新上小阪遺跡09-1」とした。

調査の途中には、全ての調査区において大阪府教育委員会文化財保護課の確認・指導を受けた。各調査区とも、基本的に第5面検出の遺構が見頃となった状況で、1区は平成20年11月28日に、3区は平成21年1月29日に、2区は同年5月18日に、4区と3区西端部は同年7月28日に立会を受けた。

調査完了後の現地引き渡しについては、これも調査区ごとに、調査が完了した時点において大阪府教育委員会文化財保護課の立会を受け、最終確認を得た後、平成21年2月4日に1区、同年2月16日に3区、同年5月21日に西側立坑部、同年6月2日に東側立坑部、同年6月10日に2区、同年8月6日に4区と3区西端部を引き渡した。

4区と3区西端部を引き渡した平成21年8月6日以降、8月31日までは現地詰所にて片付け作業や遺物洗浄、注記、登録、図面整理、写真整理等の基礎整理作業を行なった。9月からは中部調査事務所に移り、平成22年8月31日までの間、本格的な整理作業を実施し、平成22年11月30日、本書の刊行をもって一連の事業を終了した。

なお、現地調査期間中の平成21年5月23日には、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代前期の建物跡を検出した第5面において、遺跡を公開し地元の方々への説明会を開催した（写真1）<sup>1)</sup>。一部の新聞に掲載されたこともあり、392名もの見学者が来場された。当日は見学者の方々に調査区内に下りて、出土したままの状態の土器棺などを見学していただいた。また遺物展示場では出土した完形の土器を実際に持って重さを体験していただくなど、日頃ガラス越しでしか見ることのできない土器に直接触れることのできるコーナーも設け、地元の歴史に親しんでいただいた。



現地公開資料



写真1 現地公開資料と公開風景

また、整理期間中の平成22年7月10日には、大阪府立弥生文化博物館で開催された「近畿弥生の会第13回集会」において、当遺跡の方形周溝墓についての調査報告も行なっている。<sup>10)</sup>

## 引用・参考文献

- 1) 財団法人 大阪府文化財センター 2009.5.23 『新上小阪遺跡 (08-1) 現地公開資料』
- 2) 伊藤 武 2010 『東大阪市新上小阪遺跡—中期後半の方形周溝墓—』近畿弥生の会 第13回集会 大阪場所 発表要旨集 近畿弥生の会

## 第2節 既往の調査

この新上小阪遺跡は、第1期工事以前は、周知の遺跡として認知されていなかったが、工事予定地の周辺には小若江遺跡、上小阪遺跡、山賀遺跡など数多くの遺跡が分布していることから(図3)、第1期工事に先立つ平成11年に、大阪府教育委員会による遺跡の試掘調査が実施されることとなった。その結果、弥生時代から中世の遺跡が発見され、府営東大阪新上小阪住宅一帯が遺跡であることが判明した。直ちに文化財保護法に基づく遺跡発見通知が提出され、以後「新上小阪遺跡」として周知されることとなった。

その後の平成13年には、第1期の建替え工事に伴う本格的な発掘調査が当センターによって実施され、弥生時代中期前半、古墳時代前期、また古代の集落跡が確認された。なかでも古代の集落跡からは、多くの瓦や埴、硯などが出土し、仏教施設<sup>3)</sup>の存在も考えられた。その後、第1期高層住宅建設中の平成15年度に、住宅の南と北にそれぞれ1箇所ずつの地下雨水貯留槽が設置されることとなり、大阪府教育委員会による調査が実施された。調査では7世紀から10世紀にかけての良好な集落跡が検出され、先の調査成果を含めて屋敷地範囲の推定復原がなされた。同じく平成15年度には、遺跡範囲北西隅部において東大阪府教育委員会による下水道管理設工事に伴う立会調査が行なわれたが、遺構・遺物は見つからない。続く平成17年度から18年度にかけては、第1期建替え地の東側において、第2期工事に伴う発掘調査が当センターによって実施され、弥生時代中期の溝群や水田跡が検出された。また弥生時代後期の良好な集落跡も確認され、建物には、周囲に溝をめぐるす堅穴建物と、周囲に細い溝を有する掘立柱建物の2種があることが明らかとなった。ただしこの時の調査では、西側の調査で検出されたような古代の遺構は全く確認されていない<sup>4)</sup>。

#### 引用・参考文献

- 1) 大阪府教育委員会文化財調査事務所編 2001 『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 4』 大阪府教育委員会
- 2) 財団法人大阪府文化財センター 2003 『新上小阪遺跡』
- 3) 大阪府教育委員会 2006 『新上小阪遺跡』
- 4) 東大阪府教育委員会 2005 『新上小阪遺跡の調査』[東大阪府下水道事業関係発掘調査概要報告 一平成16年度一]
- 5) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『新上小阪遺跡Ⅱ』

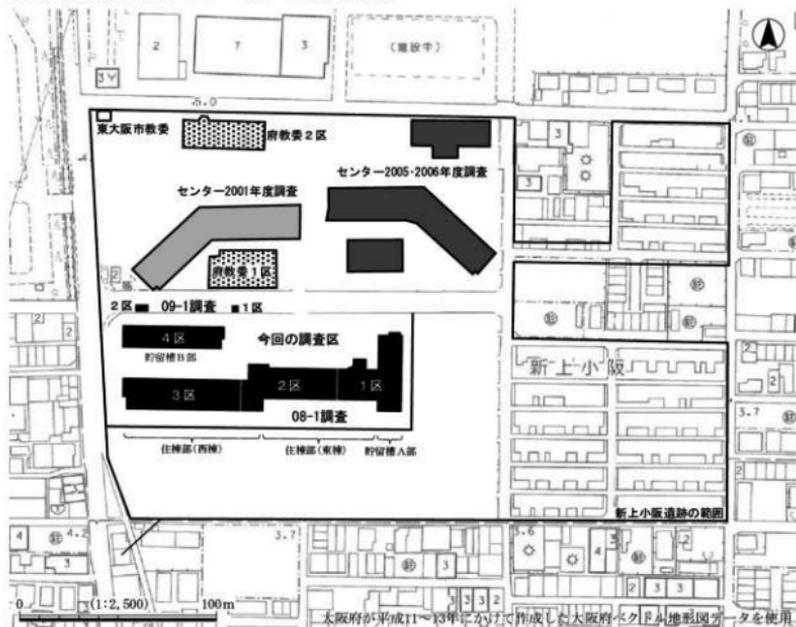


図1 調査区配置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

新上小阪遺跡は大阪府東大阪市新上小阪に所在する。かつての布施市、古代でいえば河内国若江郡に属する地域で、東に約300m、南に900mほどで八尾市と接する市の南西部に位置している。現在、遺跡の北側は近畿大学本部キャンパスに囲まれ、東約500mには近畿自動車道が南北に縦走する。北に約1kmには近鉄奈良線が、同じく西に約1kmには近鉄大阪線が通っており、金物団地をはじめとする工場だけでなく、学生街あるいは一般住宅地としても賑わう、開発の進んだ地域である。

東大阪市は大阪平野の東部から生駒山山頂の奈良県との県境までを含んでおり、市の東と西では標高差が600m以上もある。新上小阪遺跡はそのうちの長瀬川右岸の標高約4mの沖積平野上に立地している(図2)。この長瀬川沿いには、旧長瀬川により形成された自然堤防の痕跡である微高地が幅200~300mほどの範囲で認められ、また地表面には旧長瀬川の氾濫痕跡や氾濫を防ぐための人工堤防が随所にみられる。遺跡の南西に位置する弥刀遺跡周辺や、南の佐堂遺跡、宮町遺跡周辺などには分流路の痕



図2 新上小阪遺跡周辺の地形

跡が認められており、当遺跡一帯も、分流路などを通じた氾濫によって、過去に多くの洪水被害に遭ったことが容易に想像される。

河内平野の古地理については、戦後の都市開発の進展とともに急速に解明されてきた。梶山彦太郎・市原実が約2万年前以降の大阪平野の古地理の変遷を明らかにした一連の研究は代表的なものである。今から約2万～9000年前、気候は世界的に現在より寒冷で、海面は最寒冷期（約2万年前）で100m以上低かったことがわかっている。そのため縄文時代に海底に沈むことになる低地部には古大阪平野と呼ばれる大地が広がっていた。最寒冷期以降、温暖化の過程で海面は次第に上昇をはじめ、古大阪平野は縮小していくことになる。約7000～5000年前（縄文時代前期）に気候は完新世の最温暖期を迎え、縄文海進が進む。大阪平野の大部分は上町台地を残して現在の寝屋川市付近まで海水が浸入し、河内湾が形成される。約5000年前以後、河内湾は次第に淀川・大和川の運ぶ土砂によって埋積が進み、上町台地北方には沿岸流による砂嘴が発達する。この砂嘴は河内潟の時代（約3500～3000年前、縄文時代後期）を経て発達を続け、約2800～2300年前（縄文時代晩期～弥生時代前期）には潟の出口を塞ぎ、河内湖に変化していったと考えられている。その後、河内湖はさらに埋積が進み、河内平野が拡大していくことになる。

河内平野の地理的景観の形成史を辿るうえで重要な一つの変化は、1704年の大和川の付け替え工事である。付け替え以前の大和川は生駒山系を抜けたのち、分流しながら上町台地に沿うように北上し淀川と合流していた。これら大和川の支流は天井川であったため、周辺地域はしばしば氾濫の被害に見舞われていたが、今米村の庄屋であった中甚兵衛らの度重なる幕府への請願が実を結び、現在の上町台地を西へ抜け、堺市北部で大阪湾に注ぐ流路をとるようになった。以降、河内平野の堆積環境は大きく変化し、現在では長瀬川・玉串川ともに農業用水路あるいは工業排水路として細い流れを残すのみとなっている。

## 第2節 歴史的環境

新上小阪遺跡周辺地域での考古学的調査は、昭和51年から本格的に開始した近畿自動車道天理吹田線（大阪線）の建設に伴う調査によって飛躍的な発展を遂げた。それ以前からも部分的な調査は行なわれており、その中には学史上重要な成果も含まれているが、河内平野を縦断するように掘られた一連の調査は、人間活動の歴史的展開を平野規模で追究しうる視点をもたらしただけでなく、自然環境復原のためのデータを豊富に提供したという点でも画期的なものであった。

**旧石器時代** 府内では後期旧石器時代の遺跡が、羽曳野丘陵や北摂の丘陵地帯を主としてすでに相当数が調査されているが、現在の平野部ではこの時代の遺跡は沖積層下深くに埋没していると考えられている。新上小阪近辺では若江北遺跡で断片的な資料が出土しているにすぎず、実態はなお不明である。

**縄文時代** 完新世に向かう温暖化はすでに1.8万年前からその兆しがみられ、縄文時代前期にかけて河内湾の形成が進むが、遺跡周辺が再び陸地化するのは同後期頃のことである。新上小阪遺跡の東に広がる山賀遺跡は、この時期までの河内潟の南岸付近に位置していたと考えられており、T.P.-0.7m以下で当該期の堆積層が観察されている。池島・福万寺遺跡では後期中頃に形成された黒色土壌化層が観察され、遺構は不明瞭ながら元住吉山式（後期中葉）に位置づけられる深鉢が出土している。同時期に相当すると考えられる土壌化層は、2001年度の新上小阪遺跡の調査でもT.P.-0.3m付近で確認されている。この時期の人間活動の痕跡は乏しいが、若江北遺跡では福田KⅡ式頃（後期前葉）の深鉢が出土してお

り、山賀遺跡では宮流式（後期末）の一括資料が確認されている。地表面化後間もなくの時期に低地部への人間の往来がしばしばあったことを示すものであろう。晩期になると遺跡数は増加しはじめ、弓削ノ庄遺跡や長原遺跡で集落跡が確認されている。断片的ではあるが山賀、新家、若江北、友井東、佐堂、久宝寺、亀井遺跡に晩期の出土資料がみられる。

**弥生時代** 狩猟採集を主体とした生活様式を脱し、水稲農耕の本格的な導入へと移り変わるこの時代以降、平野部の開発はおおいに進展をみることになる。その端緒となる若江北遺跡は、河内平野で最も古



図3 新上小阪遺跡周辺の遺跡分布図

く位置づけられる前期前半段階の居住域の一つである<sup>71</sup>。また近年の調査では、瓜生堂遺跡においても前期前半の集落と水田跡が確認されている<sup>81</sup>。前期後半では、山賀遺跡、美園遺跡が当地域の拠点集落と目される規模をもつようになる。とりわけ山賀遺跡では居住域と大規模な水田城が近接し、その間には8条の並行する大溝と、その掘削土を積み上げた9条の土手を造営するなど、活発な開発行為がみられる<sup>82</sup>。同様の並行する大溝は、友井東遺跡、美園遺跡、志紀遺跡で見つかり、時期は下るものの久宝寺遺跡や亀井北遺跡、第2期の新上小阪遺跡の中期前半の遺構面においても確認されている。これら大溝内にはブロック土が堆積しているため短期間人為的に埋め戻された可能性や、再掘削によって長期維持された可能性などが指摘されているが、機能についての定まった評価はないのが現状である。

弥生時代中期になると遺跡は大きな広がりを見せるようになる。周辺では、若江遺跡、若江北遺跡、美園遺跡、瓜生堂遺跡、壹振遺跡が居住域が、山賀遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩遺跡などから多数の方形周溝墓が見つかり、とりわけ瓜生堂遺跡は、当地域を代表する拠点集落としてよく知られており、現在までに100基近くの方角周溝墓が調査されている。また、大阪湾型銅戈・銅短片・鳥形木製品などの出土品も特筆すべきものである。山賀遺跡においても前期から継続して集落が営まれており、やはり拠点集落と捉えるべき内容をもっている。中期初頭の方角周溝墓10基や水田跡が確認されているほか<sup>83</sup>、最近の調査では中期初頭の堤を伴う溝や、溝間の堤などに築かれた19基の木棺墓が新たに発見されている<sup>84</sup>。同時期の新上小阪遺跡の土地利用は山賀遺跡と密接な関連をもちつつ展開した可能性が高い。

弥生時代後期は、河内平野全体で集落景観に大きな変化がみられる時期である。これは河内湖の水面上昇や河川流路の頻繁な移動など自然環境の変化に起因すると考えられている。微高地の移動に伴って集落も移動したと考えられ、集落規模自体も縮小傾向にある。巨摩庵寺遺跡では方形周溝墓の主体部から碧玉製管玉やガラス小玉が、河内川から貨泉が出土しており<sup>85</sup>。若江北遺跡では当該期の周堤をもつ平地式住居が確認されている<sup>86</sup>。新上小阪遺跡の北に位置する上小阪遺跡では、東大阪市遺跡保護調査会、財団法人東大阪市文化財協会による調査が継続して行なわれている。いずれも小規模な調査ではあるが、東西150m、南北200m以上の範囲に居住域が広がっており、後期中頃の大集落であった可能性が指摘されている<sup>87</sup>。最近の調査では、やはり後期中頃に属する周溝をもつ住居が確認されており<sup>88</sup>、第2期の新上小阪遺跡の調査で確認された住居との構造上の共通点が指摘できる。第2期の新上小阪遺跡の調査では、弥生時代後期末の居住域が確認されているが、同じ時期の上小阪遺跡は、人間活動から放棄された湿性草原に変化していたと推測されており<sup>89</sup>、居住域の移動が生じていた可能性が高い。

**古墳時代** 古墳時代前期になると、弥生時代後期に新たに形成された微高地上に居住域が、その後背湿地に水田跡が検出されるようになる。当遺跡南東に位置する壹振遺跡、東郷遺跡、小阪合遺跡、成法寺遺跡などの諸遺跡は、中田遺跡群と称され、当該期の中心地と考えられている<sup>90</sup>。当遺跡周辺では西岩田遺跡、瓜生堂遺跡、美園遺跡、山賀遺跡と同様の時期の居住域が見つかり、当遺跡西側に位置する小若江遺跡は、古墳時代の土器編年では前期に相当する布留式新段階の標式遺跡として著名である。昭和15年に実施された近畿大学の前身である大阪専門学校構内の工事に伴う調査の成果をもとに、昭和31年、坪井清足が『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』中で資料を紹介し<sup>91</sup>、その後横山浩一が小若江式として位置づけたことにより周知されることになった<sup>92</sup>。しかし、その後の継続的な構内調査では、当該期の詳細は明らかになっていない<sup>93</sup>。

古墳時代は墓制がきわめて特異な発達をみせる時期である。久宝寺遺跡、加美遺跡の調査では弥生時代末から古墳時代前期にかけて築造された墳墓が多数見つかり、河内平野における古墳の出現過

程を跡付けることのできる資料の蓄積が進みつつある<sup>211</sup>。また、久宝寺遺跡からは準構造船の一部や木製権が見つかっており、当地が水運に重要な役割を果たしていたことがうかがえる。そのほか周辺には、日本最大の榎形埴輪が出土した萱振1号墳、当時の豪族居館を表現したと考えられる精巧な家形埴輪や壺形埴輪の出土した美園古墳が分布している。

古墳時代中期では、西岩田遺跡、瓜生堂遺跡、友井東遺跡で居住域がみられる。巨摩遺跡には5世紀末から6世紀初頭に巨摩1号墳、山賀遺跡では5世紀末に近大山賀古墳が築かれた<sup>212</sup>。また、後期には新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡が居住域となり、山賀遺跡では6世紀中頃の山賀古墳がみられる<sup>213</sup>。久宝寺遺跡で確認された七ツ門古墳は右片袖式の横穴式石室で、低地に築かれた当該期の古墳としては稀有な例である<sup>214</sup>。

**古代** 飛鳥時代以降、豪族の権力象徴は古墳築造から寺院建立へと推移していく。この地域は河内国若江郡に属しており、難波津・四天王寺と平城京を結ぶ交通の要衝（十三街道・俊徳道）に位置していたため、早くから古代寺院が造営された。また、周辺地域は物部氏の本拠地の一つで、蘇我馬子らは河内国淡川郡（東大阪市衣摺）で物部守屋を打ち破ったとされている。当遺跡周辺には、若江寺、西郡廃寺が存在し、若江郡内においても中心的な一角を占めていたことがうかがえる。若江寺は出土遺物から7世紀前半の創建に比定され、元慶年間（877～885）の文獻「尊意贈僧正傳」にその名がみられる。付近の瓜生堂遺跡からは「若」と記した墨書土器が出土しており<sup>215</sup>、若江郡衙が存在した可能性が考えられる。若江遺跡の断続的な調査では若江城に関連する遺構が見つかっており、同じ場所にあったと想定される若江寺は、築城の際に破壊されたと考えられている。西郡廃寺も同じく7世紀前半の建立で、当地の有力者であった錦織連の氏寺とされている。現在の西郡天神社の境内に西郡廃寺の塔心礎が遺存しているものの、若江寺同様、伽藍地やその実態の詳細は明らかになっていない。このほか、同じ若江郡の宝持村には「宝持廃寺」が存在していたことが、江戸時代に編纂された「五畿内志」<sup>216</sup>に記載されている。当遺跡のすぐ北側には、今でも宝持という地名が残っているが、廃寺についての詳細は全く明らかにされていない。第1期や今回の調査は、瓦や埴・硯など仏教施設存在を示す遺物が数多く出土しており、その存在が目目される。また西郡廃寺遺跡の南側に接する萱振遺跡からは、計画的に配置された8世紀代の掘立柱建物群が見つかっており、錦織氏に関連する集落であった可能性が指摘されている<sup>217</sup>。このほか瓜生堂遺跡、美園遺跡からも当該期の掘立柱建物群が見つかっている。

**中世** この時期は荘園が発達するが、若江郡内には10世紀中頃に成立する醍醐寺領河内五箇庄の一つである若江庄、11世紀後半には成立したとされる岩清水八幡宮領掃部別宮、12世紀中頃には興福寺領若江庄があったとされている<sup>218</sup>。14世紀後半になると、当地には若江城が築かれる。文獻から康暦元年（1379）までには築かれていたことがわかっており、応仁の乱の契機となる畠山義就と畠山政長の合戦を経て、織田信長の石山本願寺攻略（1577年～）の拠点に利用されたのち、天正8年（1580）には廃城になったようである<sup>219</sup>。発掘調査により関連遺構が確認されており、城郭規模はおおよそ東西500m、南北400mの範囲に及ぶとの推定がなされている<sup>220</sup>。そのほか、巨摩遺跡で11～12世紀の黒色土器・瓦器の良好な一括遺物がみられる<sup>221</sup>。

詳細な成立時期は不明だが、古代以来、周辺地域には多くの街道がみられる。十三街道は現在も大阪市玉造駅付近から奈良県斑鳩町を結んでおり、当遺跡の北約200mの地点を東西に通っている。俊徳道は四天王寺南門付近を起点とする街道で、東大阪市の三ノ瀬付近で上記十三街道に合流している。河内街道は京から南河内の各地域に至る街道。立石街道もやはり十三街道・俊徳道と同じく奈良街道の一つ

で、現在の八尾市本町で河内街道・八尾街道と別れ、奈良県平群町へとつながっている。

**近世以降** 中世以降、河内平野では島畠と呼ばれる低地特有の農業技術が発達してきた。池島・福万寺遺跡では、中世に相当する層からソバなどの栽培作物の花粉が検出されているが、近世になるとアブラナ科の急増、ワタの花粉も検出されるなどの違いがみられることが指摘されている<sup>20)</sup>。慶長年間（1596～1615）頃に始まった綿の生産は、大和川の付け替え以後さらに盛んとなり、当地域を「河内木綿」の一大生産地に押し上げるまでになっていく。これは付け替え後の旧流路やそれに接続していた池床の新田開発による畑地が増加したことが、一つの大きな要因である。東大阪市域には大和川付け替え後の時期に開かれた新田が18箇所あるが、その中でも、鴻池新田は当時設置された会所が現存し、国の史跡・重要文化財に指定されており、よく知られている。

新上小阪周辺も、昭和17年に撮影された航空写真を見ると、条里地割が残る田畑が広がっている様子が確認でき、戦後まもなくの時期まで一帯が生産域として利用されていたことがうかがえる。

#### 引用・参考文献

- 1) 財団法人東大阪市文化財協会 2002「老人ホーム建設に伴う弥刀遺跡第8次発掘調査概要報告書」
- 2) 梶山彦太郎・市原実 1972「大阪平野の発達史」『地質学論集』7号 日本地質学会  
1986「大阪平野のおいたち」青木書店
- 3) 福澤仁之他 2003「日本列島における更新世後期以降の気候変動のトリガーはなにか?」  
『第四紀研究』42-3 日本第四紀学会
- 4) 財団法人大阪文化財センター 1984「山賀（その3）」
- 5) 財団法人大阪府文化財調査研究センター 2002「池島・福万寺遺跡発掘調査概要XVI」
- 6) 財団法人大阪府文化財センター 2007「山賀遺跡」
- 7) 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1996「巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第5次—」
- 8) 財団法人大阪府文化財センター 2004「瓜生堂遺跡1」
- 9) 前掲書4)
- 10) 財団法人大阪文化財センター 1983「山賀その2」、及び前掲書4)
- 11) 前掲書6)
- 12) 財団法人大阪文化財センター 1982「巨摩・瓜生堂」、同 1998「河内平野遺跡群の動態IV」
- 13) 前掲書7)
- 14) 財団法人東大阪市文化財協会 1998「上小阪遺跡第3次発掘調査報告書」
- 15) 財団法人東大阪市文化財協会 2001「上小阪遺跡東端部における弥生時代後期以後の遺構群  
共同住宅建設に伴う上小阪遺跡第6次発掘調査報告」
- 16) 前掲書15)
- 17) 山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告3』  
大阪府立弥生文化博物館
- 18) 坪井清足 1956「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」岡山県高島遺跡調査委員会
- 19) 横山浩一 1959「手工業生産の発展 土師器と須恵器」『世界考古学大系』第3巻 平凡社
- 20) 近畿大学文化会考古学研究会 1986「小若江遺跡」近畿大学小若江遺跡調査運営委員会  
近畿大学 1991「小若江遺跡（第5次調査）・山賀遺跡（第4次調査）」

- 21) 財団法人大阪府文化財センター 2005 『久宝寺遺跡 発掘調査成果－2001～2004年度のまとめ－』
- 22) 近畿大学 1989 『近大山賀遺跡Ⅱ』
- 23) 前掲書10)
- 24) 財団法人大阪府文化財調査研究センター 2001 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ』
- 25) 瓜生堂遺跡調査会 1973 『瓜生堂遺跡調査報告書Ⅱ』
- 26) 大日本地誌大系 1971 『五畿内志・泉州志』第一巻 雄山閣  
財団法人大阪府文化財センター 1987 『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』
- 27) 財団法人八尾市文化財調査研究会 1996 『萱振遺跡 第7次調査』『萱振遺跡』
- 28) 布施市史編纂委員会 1962 『布施市史』第一巻 布施市役所
- 29) 東大阪市遺跡保護調査会 1982 『文献から見た若江城』『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』本文編
- 30) 東大阪市遺跡保護調査会 1982 『考古学から見た若江城』『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』本文編
- 31) 前掲書12) の1998
- 32) 井上智博 1995 『八尾市福万寺地区における現景観の形成過程』『大阪文化財研究』第9号  
財団法人大阪府文化財調査研究センター  
1996 『河内平野東部における縄紋時代の環境変遷と人間活動』『大阪文化財研究』  
第11号 財団法人大阪府文化財調査研究センター  
1999 『島畠の考古学的研究—池島・福万寺遺跡の事例の再検討—』『光陰如矢』  
『光陰如矢』刊行会
- ・大阪府の歴史散歩編集委員会 1990 『大阪府の歴史散歩』下 山川出版社
- ・地学団体研究会大阪支部 1999 『大地のおいたち』築地書館
- ・藤井直正 1983 『東大阪の歴史』松籟社

## 第3章 調査の方法

### 第1節 発掘調査

08-1調査の調査区は、調査地の東端に位置する南北に長い貯留槽A部から、東西に長い住棟部（東棟）・（西棟）が東西方向にひと続きとなっていたため、調査工程・残土置き場等を考慮し、ほぼ調査面積が同じになるように、この箇所を1区から3区までの3地区に分割して設定した。1区は貯留槽A部から住棟部（東棟）のY=-37,500mまで、2区は住棟部（東棟）の残り住棟部（西棟）東端のY=-37,550mまで、3区は住棟部（西棟）の残りである。調査区名は、調査順ではなく、東側から順に事前に振った。また住棟部（西棟）の北側に貯留槽B部がやや隔てて位置しており、ここを4区とした。ちなみに調査は1区→3区→2区→4区の順で行なった。ただし3区西端部（Y=-37,600m以西）については、トランスの立った使用中の電柱が立っていたため、その取扱いについての協議に時間を要し、3区本体と同時に調査できずに、端の一部のみ4区と同時進行となった。また1区については、調査完了時点になって、調査区の周囲に幅約1mの未調査箇所が残っていることが判明したため、3区調査と並行して急速1区の拡張調査を行なうこととなった。調査区の配置は図1・4に示したとおりである。なお09-1調査の調査区については、東側立坑部を1区、西側立坑部を2区とした。

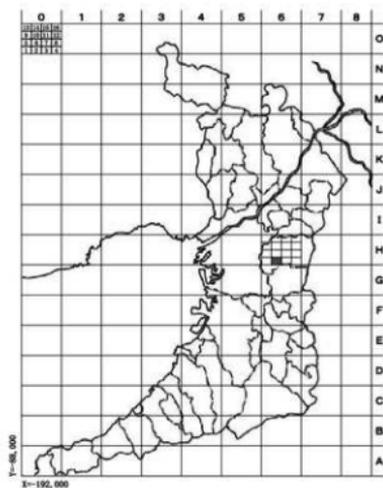
調査深度は、住棟部がT.P.+1.9mまでの約2.4m、貯留槽部がT.P.+2.0mまでの約2.3mであるが、両貯留槽部のオリフィス部17mについては、更に下部に工事の影響が及ぶため、T.P.+1.7mまで調査を行なっている。

調査地一帯はもともと低湿地であったため、以前の府営住宅建設に伴う造成にあたって、旧地表面上に厚さ約1mに及ぶ盛土を施していた。調査ではまずこの盛土を機械掘削で除去した。また水道管等のライフライン設置に伴う攪乱が規則的に幾筋も通っていたため、その掘削もある程度までバックホウで行なった。その後、旧表土層及び近世以降の耕作土層もバックホウで掘削し、続いてスコップ・鋤簾等を使った人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査によって遺構を検出した。

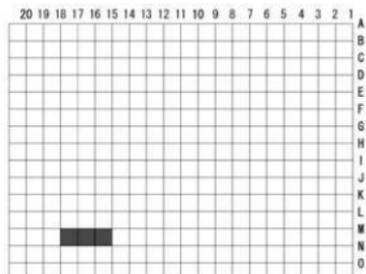
遺物の取り上げ、遺構図面の作成、写真撮影等の作業については、当センターが2003年に作成した「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」<sup>9)</sup>に準拠して行なった。

調査名は、第1章にも記したとおり「新上小阪遺跡08-1」とし、平成21年度に追加で実施した下水道立坑部の調査を「新上小阪遺跡09-1」とした。

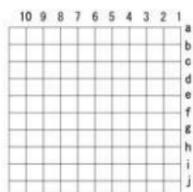
地区割りについては、世界測地系に則った国土座標軸（第Ⅵ座標系）を基準とし、Ⅰ～Ⅵの大小6段階の区画を設定した（図4）。これは大阪府内全域に共通する地区割りである。第Ⅰ区画は大阪府の西部を通るX=-192,000m・Y=-88,000mを起点に、府域を南北15(A-O)、東西9(0-8)区画に分割したもので、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を東西、南北各4分割の、計16区画(1-16)に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20(1-20)分割、南北15(A-O)分割する一辺100mの区画である。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画をさらに東西、南北ともに10(東西1-10、南北a-j)分割した一辺10mの区画である。第Ⅴ区画は第Ⅳ区画をさらに「田」の字状に4(Ⅰ-Ⅳ)分割したもので、一辺5mの区画である。Ⅵ区画は遺構・遺物が密に確認された場合に使用するが、今回の調査では使用しなかったのが割愛する。



第Ⅰ区画 (1区画=南北6×東西8km)  
 第Ⅱ区画 (1区画=南北1.5×東西2km)



第Ⅲ区画 (1区画=100×100m)



第Ⅳ区画 (1区画=10×10m)



第Ⅴ区画  
 (1区画=5×5m)

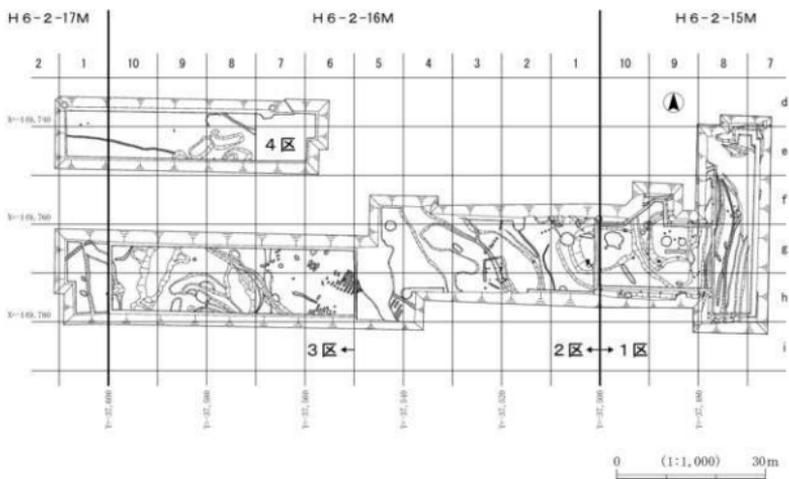


図4 調査区内地区割り図

上記の方法で区画した場合、新上小阪遺跡08-1調査の第Ⅰ・Ⅱ区画は、「Ⅰ6（第Ⅰ区画）-11（第Ⅱ区画）」及び「Ⅰ6-15」となる。

遺物の取り上げ作業は、この地区割りを用い、基本的に第Ⅳ区画の10m区画ごとに行なったが、方形周溝墓周辺については更に細分した第Ⅴ区画を用いた。遺物取上げ用ラベルへの記入は、煩雑となるため第Ⅰ・Ⅱ区画は省略し、第Ⅲ区画以降を記入した。ただし、09-1調査については狭い範囲の調査であったことから、遺物取り上げ作業にはこの地区割りは使わず、調査区名を用いた。

遺構の写真撮影は、35mmカメラ・6×7カメラ・デジタルカメラを併用して行なった。調査区の全景を撮影するような場合には、通常5段、あるいは8段の写真撮影用足場を設置するが、今回は作業ヤードの制約もあり、高所作業車を利用して高位置からの撮影を行なった。

遺構全体の平面測量は、主にクレーンによる空中写真測量を行ない、50分の1の平面図とそれを縮小編集した100分の1の遺構全体図を作成した。ただし、3区と4区の第3面検出遺構のように、遺構数が少なく、エスロンテープやメジャーを使って行なう、いわゆる「手測り」による図面作成の方が時間的に早いと判断した場合には、1・2区の同一遺構面でクレーンによる写真測量を行なっているが、無理に空中写真測量はせず、「手測り」による図面作成を行なっている。そのほか、遺物出土状況等各遺構の詳細図面や、土の堆積状況を示す断面図等については、必要に応じ、随時20分の1・10分の1の図面を作成した。これらの遺構図面は全て世界測地系に準拠して作成している。

方位は座標北を使用し、水準は全て東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

遺構番号は遺構の種類、調査区等にかかわらず、1から通して振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに付した。「1溝」、「2土坑」、「3ピット」という具合である。ただし複数の遺構の集合体である掘立柱建物などについては、「掘立柱建物1」のように前に遺構種類を標記し、後ろに番号を付している。なお、調査の際には全ての遺構に遺構番号を付していなかったため、整理作業の段階で新たに振り足したものがあつた。これについては調査時点での最終番号より付した。

## 第2節 整理作業

整理作業の対象となった遺物は、弥生時代から中世にかけての、弥生土器甕・壺・鉢・高杯・水差し、土師器甕・壺・鉢・羽釜・杯・椀・皿・高杯、須恵器甕・壺・提瓶・杯・硯、黒色土器椀・皿、瓦器椀・足釜、灰軸・緑軸陶器椀・皿、青磁・白磁の碗、陶器甕、製塩土器、瓦、木製品、勾玉・石磨丁・砥石・凝灰岩切石等の石製品、土錘・甕等の土製品などで、55×35×15cmの収納コンテナに、約90箱にのぼる。これらの整理作業も、「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」に準拠して行なった。

遺物は洗浄し、遺物登録台帳と照合できるよう注記作業を行なった。遺物への注記は、本来マニュアルに従えば「シンカミコサカ08-1-△-□」（△は調査区番号、□は遺物登録番号）とすべきで、実際に整理開始直後はそのように記入したが、文字数が多く、時間的なロスが大きいため、登録番号56番以降はより簡単に「シン上小08-1-△-□」と改めた。

出土遺物は登録番号ごとにデジタルカメラで撮影し、台帳に登録した。その後遺構ごと、また遺物包含層出土遺物については、近隣の地区とも確認しながら接合作業を行ない、必要に応じて石膏を用いた遺物復元作業を行なった。同時に実測可能な遺物をピックアップし、ピックアップしたものは順次実測作業を行ない、瓦等については拓本をとった。遺物実測数は瓦や木製品等も含め約600点となった。実測した遺物については、遺物登録台帳とは別に掲載遺物台帳とリンクした実測遺物台帳を作成した。



出土遺物検出作業



大阪府教育委員会文化財保護課立会風景



図面作成作業



高所作業車からの写真撮影作業



図面作成作業



空中写真測量作業



写真撮影作業

写真2 現場作業風景



写真3 整理作業風景

上記の手順で作成した遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、描画ソフトを用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。最終的には実測した遺物のうちの563点を本書に掲載することとした。

遺構図のうちの平面図については、空中写真測量によって全体図が既にデジタル化されていたため、必要な箇所を拡大・加工し、遺構平面図を作成した。現地で作成した個々の遺構平面図・断面図についても、遺物同様の手順でデジタルトレースし、挿図を作成した。

このように報告書掲載の挿図は、遺構図・遺物実測図ともにデジタルデータによって作成した。

遺物写真については、報告書に掲載する遺物がほぼ決まった段階で、レイアウトを組み、中部調査事務所の写真室へ遺物を搬入し、撮影を行なった。

出土遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外の未掲載遺物とに分け、マニュアルに従って収納・保管している。

遺物整理作業と並行して、現地にて作成した遺構図面や撮影した遺構写真の整理・収納も行ない、これらも台帳に登録した。

#### 参考文献

- 1) 財団法人 大府文化財センター 2003 「遺跡調査基本マニュアル」【暫定版】

## 第4章 新上小阪遺跡08-1の調査成果

### 第1節 基本層序と各層出土遺物

現代の盛土や近世以降の堆積層を地表面から1m程度機械掘削した後は、調査区の周囲にめぐらせた掘溝の壁面や、攪乱の壁面の観察結果をもとに一層ずつ人力掘削し、遺構検出を行なった。その掘削順に上から「1層」・「2層」と層位名を付した。ただし分層が可能な地層であっても、大きく見れば一つの地層としてまとめられるものについては、「5-1層」・「5-2層」という具合に枝番を付け、一括りの地層とした。また、耕作土など人の手が加わった土壌化層と、その母材となる自然堆積層などがセットで観察できる場合については、前者をa層、後者をb層とし、「4a層」・「4b層」のように呼ぶこととした。

各調査区の層位名は、基本的に最初に着手した1区の層序を参考にして付した。

なお1区については、前記のとおり、周囲約1mを後に拡張して調査している。断面図は最初の調査区の壁面を記録しているため、2区の図面とはうまく重ならない。

遺構面の名称については、現地調査の段階では、3層を除去した面を「3層下面」、4b-1層を除去した面「4b-1層下面」と呼び、あえて各層理面に番号を振ることはしなかったが、特に今回の調査で良好な遺構を検出した3層下面と5層下面の遺構面については、本書中では調査マニュアルに従い、3層を除去した遺構面を「第3面」、5層を除去した遺構面を「第5面」と呼ぶこととする。なお、そのほか枝番を付した途中の3-1層を除去した面や2層下面などについては、現地での呼称どおり「3-1層下面」・「2層下面」とした。

#### 1. 1区

##### 【層序】(図5)

調査地のもっとも東側に位置する調査区で、平面形は南北に長い貯留槽部から東西方向の住棟部へとやや入り込んだT字状を呈する。断面の記録については、住棟部は南壁、貯留槽部は南壁と東壁で行なった。ただし、この調査区は一旦調査が終了し、壁面の記録をとった後に周囲の拡張調査を行なっている。したがって、断面の記録は最終的な調査区の壁面ではなく、周囲から1mほど内側の断面ということになる。

〈1・2層〉近世の堆積層である。1層は黄褐色シルト、2層は粘質の強い暗灰黄色粘土質シルトで、部分的にその間に1b層とした粗～極粗粒砂が入る。南壁際では島畠と思われる高まりを検出したが、近世以降の遺構であったため、調査は断面観察にとどめた。後述する3層を芯として盛られた遺構である。

〈3層〉貯留槽部の南端部がもっとも厚く、地表面下約0.6mのT.P.+3.6m付近で直ちにこの地層となる。厚さは約0.5～0.6mを測るが、貯留槽部北半に向かって徐々に薄くなり、北端部では完全に無くなっている。検出面も貯留槽部中央付近ではT.P.+3.0m付近となる。住棟部でも南壁際で一部が盛り上がるように厚くなっており、地表面下約0.35mで直ちに3層となる。厚さは約0.85mを測る。上記島畠はこの部分を芯として築かれている。このように部分的に厚く盛り上がる箇所が認められるが、平均的には

0.2m前後の厚みで堆積する。土色がチョコレートの色によく似ていたことから、現場では「チョコレート」と呼んでいた地層で、古代の遺物を非常に多く含んでいる。南半の厚い箇所では大きく上層の3-1層と、下層の3-2層とに分層でき、部分的に3-1層はさらに上下2層に分けることができる。3-1層(上)は粗粒砂～細礫混じりのにぶい黄褐色シルト、3-1層(下)は黒褐～暗褐色シルト、3-2層は灰黄褐色シルトである。

古代、特に8世紀から9世紀代の遺物が圧倒的に多いが、確実に中世の遺物も包含している。

〈4層〉洪水堆積層とそれに人の手が加わった土壌化層である。洪水堆積層は大きく洪水本体の砂層と、その下層の粒径が小さい粘土層とに分かれる。前者を4b-1層、後者を4b-2層とした。このセット関係は、1区のみならず全ての調査区で観察できる。4b-1層は中粒砂～細礫で、住棟部の厚い箇所では0.3mほどの厚みがみられる。貯留槽部では大量に砂礫が流れた河道跡を検出しており、その中心部では約0.8mの厚みがある。4b-2層は灰～黄灰色のシルト質粘土で、平均的な厚みは約0.1mを測る。4b-1層の上層部には人々の生活のために攪拌され、やや土壌化している部分が認められる。これを4a層とした。多くの箇所では粗粒砂～細礫混じりの暗灰黄色、あるいはにぶい黄褐色の砂質シルトで、平均0.1mほどの厚みであるが、貯留槽部北側ではシルトを含む褐色の粗粒砂～細礫や灰黄褐色の粘土質シルトに変わり、厚さも0.3mほどとなる。本来は砂礫層の上面全体にこの4a層とした土壌化層があり、その上面で人々の生活が営まれていたが、後の開発によってそのほとんどが大きく攪拌され、削られてしまったと考えている。このため3-2層掘削後の面が直ちに4b-1層となる場所もある。3層中に遺物が多く含まれているのは、この生活面を攪拌したためと考えられる。

〈5層〉弥生時代から古墳時代末の遺物包含層である。粗粒砂～細礫混じりのオリブ黒色粘土質シルトで、約0.1mから厚い箇所0.4mほどの厚さがある。特に住棟部南壁際では厚くなっており、そこでは4層がなく、3層掘削後の面が直ちにこの5層となっている。これはこの下の6層がやや高まっていることが影響していると考えられる。また、遺構の節でも報告するが、方形周溝墓1の墳丘部は、この5層以下が盛り上がり高まりを形成しているため、5層はその高まりにすり付くような状況で薄くなり、墳丘上面までは及ばない。

〈6層〉細粒砂～小礫の自然堆積層である。上層部には比較的粒径の小さい暗オリブ灰色の細～中粒砂が堆積しており、オリブ黒色の浸み込みがみられる(6-1層)。攪拌による汚れのようにも見えるが、上の5層の影響によるものと判断した。なお、6層の上面から0.3～0.4mほど下には、炭状に変質した植物遺体を多く含む細～中粒砂混じりの暗灰色シルト質粘土の薄層が、貯留槽部南半及び北端の一部に広がっている(6-2層)。面的にも検出でき、水田に伴う遺構が検出される可能性も考えられたが、調査区全体に広がっておらず、途中6層の中で不明瞭となり、無くなることから、この上面を遺構面とは判断しなかった。

【遺物】(図7～10、写真図版26～28・30)

3-1層や3層上面からは須恵器、土師器、陶器類、製塩土器、瓦、土錘等が出土している。8世紀末～9世紀前半の時期の遺物が中心である。

1・2は須恵器の蓋、3～6は杯である。いずれも8世紀末～9世紀初頭に位置する。7は須恵器の椀。壺の可能性もあるが、椀Aと呼ばれるタイプと判断した。精良な胎土で、丁寧なつくり。底部は切り離し後、回転を利用したナデで仕上げる。8世紀～9世紀前半頃。8～12は須恵器壺。8・9は底部を糸切りとする。9世紀中頃。13は灰釉陶器皿。体部は直線的に開き、口縁部は外面を強くヨコ

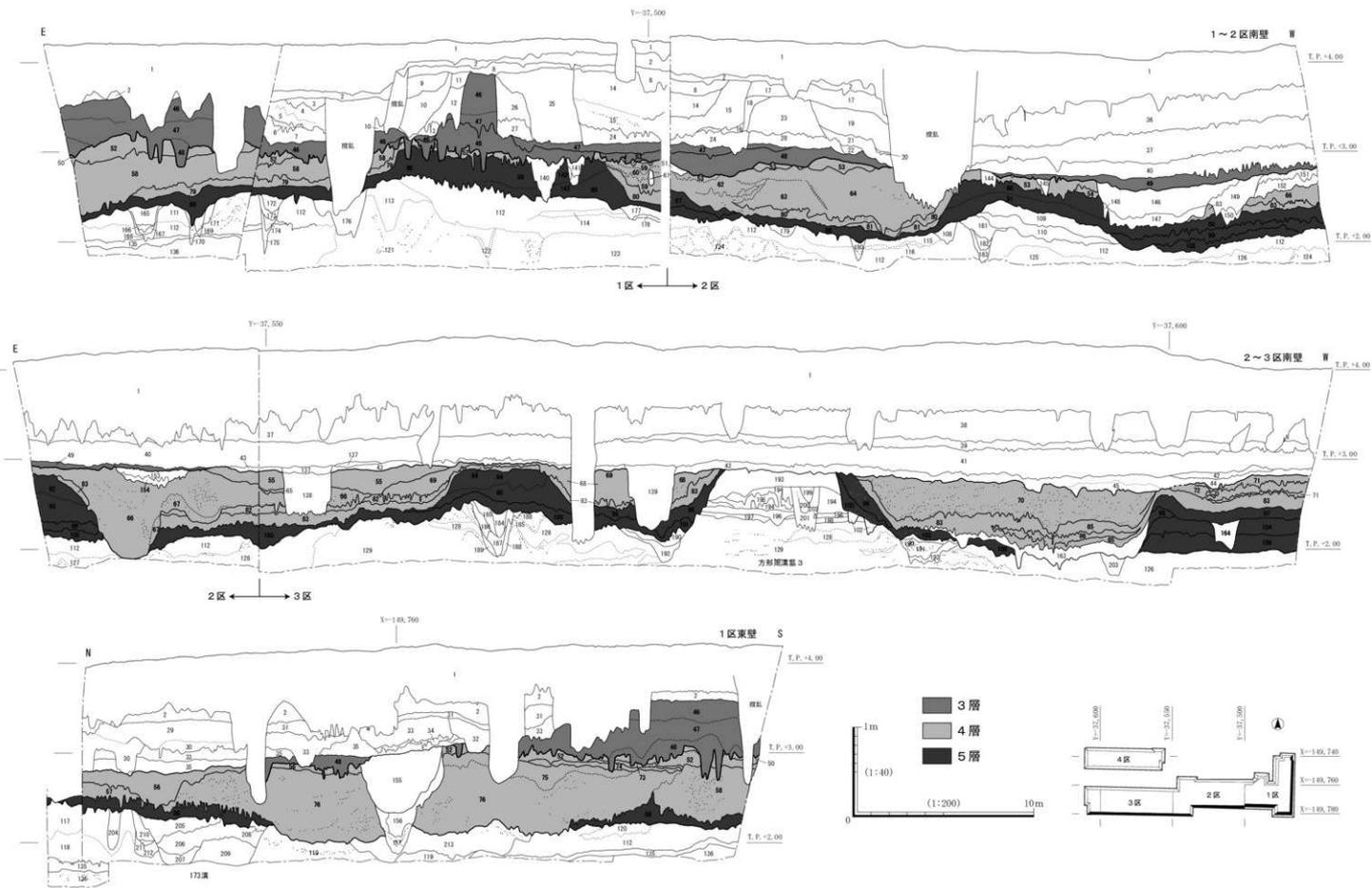
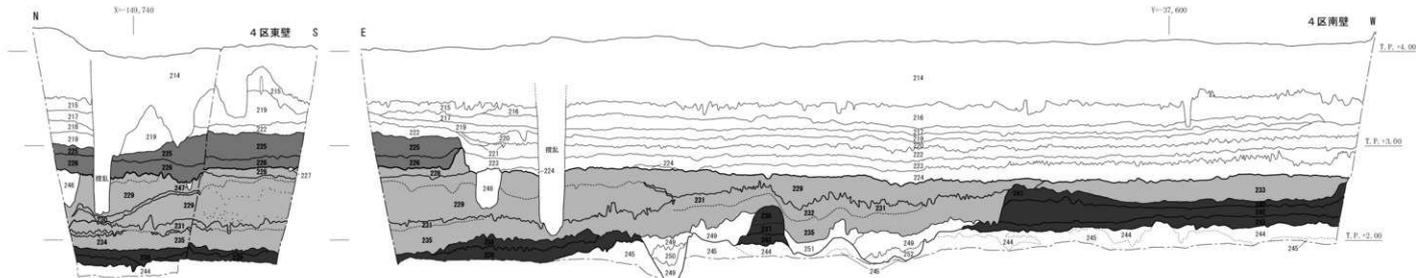


图5 1~3区地层断面图

図5の土色

1. 底土
2. 灰オリーブ 3/4/2 砂質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
3. 暗オリーブ黄 5G1/4 シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
4. 暗オリーブ灰 5G1/4 中～粗粒砂
5. 黄褐色 2.5Y5/4 粗～極粗粒砂
6. オリーブ灰 2.5G5/3 粘土
7. 暗灰黄 2.5Y5/2 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
8. 暗 10YR/4 砂質シルト (シルトが少量混じる)
9. 暗 10YR/4 砂質シルト (シルトが少量混じる)
10. 暗 10YR/4 中～粗粒砂 (シルトを含む。粗粒砂～細粒を多く含む)
11. にがい黄褐色 10YR5/4 シルト (細粒が少量混じる)
12. 暗 10YR/4 砂質シルト (粗粒砂～細粒が混じる。粗粒砂を多く含む)
13. オリーブ黄 2.5Y4/4 シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
14. にがい黄褐色 10YR5/4 中～粗粒砂 (クミンチ無く。締まっている)
15. にがい黄褐色 10YR5/4 中～粗粒砂
16. 灰黄 2.5B6/2 粘土質シルト (中粒砂を多く含む)
17. 暗 10YR/4 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
18. 黄褐色 2.5Y5/3 砂質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
19. にがい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト (細粒が多く混じる)
20. 黄褐色 2.5Y5/4 粗～極粗粒砂
21. にがい黄褐色 10YR5/4 砂質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
22. 暗 10YR/4 粘土質シルト
23. にがい黄褐色 10YR5/4 粘土質シルト
24. 灰黄褐色 10YR5/2 シルト質粘土 (粗～極粗粒砂が混じる)
25. にがい黄褐色 10YR5/3 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる。土器小片含む)
26. にがい黄褐色 10YR5/4 強～粘質シルト
27. にがい黄褐色 10YR4/3 シルト (粗粒砂～細粒が混じる。土器小片を含む)
28. にがい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト
29. 暗灰黄 2.5Y5/2 砂質シルト (中粒砂～細粒を多く混じる)
30. 黄褐色 2.5Y5/4 砂質シルト (中粒砂～細粒を多く混じる)
31. 暗灰黄 2.5Y5/2 砂質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
32. にがい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト (中～粗粒砂を多く含む)
33. 黄褐色 2.5Y5/3 シルト
34. オリーブ黄 2.5Y4/6 粗～極粗粒砂
35. 暗灰黄 2.5Y5/2 粘土質シルト (粘質強い) 【15C層】
36. オリーブ黄 暗オリーブ灰 5G2/2～3/1 砂質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む)
37. 黄褐色 2.5Y5/3 砂質シルト (粗～極粗粒砂を含む)
38. 暗青灰 10B5/1 砂質シルト
39. 灰オリーブ 7.5Y4/2 砂質シルト
40. 暗灰黄 2.5Y5/2 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が少量混じる。締まっている)
41. 灰オリーブ 3Y5/2 やや粘土質シルト 【25E層】
42. にがい黄褐色 10YR5/4 粘土質シルト (中～粗粒砂が混じる)
43. 暗 10YR/4 シルト (粗～極粗粒砂が混じる) 【15C層】
44. 暗～にがい黄褐色 10YR4/4～4/4 やや砂質シルト (粗～中粒砂を多く含む)
45. 灰オリーブ 5Y4/2 砂質シルト (粗～粗粒砂を非常に多く含む)
46. にがい黄褐色 10YR4/3 シルト (粗粒砂～細粒が混じる。土器を多く含む) 【3-1層】
47. 黒褐色 暗褐色 10YR3/2～3/3 シルト (粗粒砂～細粒が混じる。土器を多く含む) 【3-1層】
48. 灰黄褐色 10YR4/2～5/2 シルト 【3-2層】
49. 灰黄褐色～にがい黄褐色 10YR4/2～4/3 砂質シルト (粗粒砂～細粒～土器を多く含む) 【3層相替】
50. 黒 2.5Y2/1 シルト状の泥 【4層相替】
51. 灰黄褐色 10YR4/2 粘土質シルト
52. 暗灰黄 2.5Y4/2 砂質シルト (粗粒砂～細粒が混じる) 【4層】
53. にがい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト (中～粗粒砂が混じる) 【4層】
54. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト (粗～極粗粒砂が混じる) 【4層】
55. 暗 2.5YR/3 シルト (粗～極粗粒砂が混じる) 【4層】
56. 暗 10YR/4 粗粒砂～細粒 (シルトを含む) 【4層】
57. 灰黄褐色 10YR5/2 粘土質シルト 【4層】
58. 灰～明褐色 10Y5/1～7.5YR5/6 粗粒砂～細粒 【4層-1層】
59. 灰黄褐色～明褐色 2.5YR5/2～7.5YR5/6 中～極粗粒砂 【4層-1層】
60. 暗褐色 10YR3/4 砂質シルト (中～粗粒砂が混じる) 【4層-1層】
61. 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト (灰～中～粗粒砂が混じる)
62. 灰 5Y4/1 粘土質シルト (中～粗粒砂を多く含む) 【4層-1層】
63. にがい黄褐色 2.5Y6/3～7.5YR4/4 粗粒砂～小礫 【4層-1層】
64. にがい黄褐色 2.5Y6/3～7.5YR4/4 粗粒砂～小礫 【4層-1層】
65. 暗灰黄 2.5Y5/2 粘土質シルト (中～粗粒砂が混じる) 【4層】
66. 灰黄～黄褐色 2.5Y7/3～10YR5/6 中粒砂～細粒 【4層-1層】
67. 暗緑灰 7.5G1/1 中～粗粒砂 (シルトが混じる) 【4層-1層】
68. 灰オリーブ～明褐色 3Y6/2～7.5YR5/6 中～粗粒砂 【4層-1層】
69. このあたりは、68に替って 7.5YR4/4 シルトが多く混じる 【4層-1層】
70. 灰 5Y4/1 シルト質粘土の上層部分が入る 【4層-1層】
71. 暗～明黄褐色 10YR4/6～7.5YR6 粗～粗粒砂 (シルトが混じる) 【4層-1層】
72. 暗灰黄 2.5Y5/2 粘土質シルト 【4層-1層】
73. オリーブ黄 2.5Y4/3 粗粒砂～細粒 【4層-1層】
74. 暗灰黄 2.5Y5/2 細～中粒砂 (細粒～シルトが混じる) 【4層-1層】
75. 暗～にがい黄褐色 10YR4/4～2.5YR5/6 細～中粒砂 (よく締まっている) 【4層-1層】
76. 灰オリーブ～暗 2.5Y6/2～10YR4/6 中粒砂～細粒 【4層-1層】
77. (66相当層) 灰白～黄褐色 5Y7/2～10YR5/6 中～粗粒砂 【4層-1層】
78. 灰オリーブ～明褐色 5Y5/2～7.5YR5/6 中粒砂～細粒 【4層-1層】
79. 灰 5Y4/1 シルト質粘土 【4層-2層】
80. 灰黄 2.5Y4/1 シルト質粘土 (植物遺体がラミネアが入る) 【4層-2層】
81. オリーブ黄 5Y3/2 粗粒砂～細粒 (シルトが混じる) 【4層-2層】
82. 暗灰 2.5Y4/1 シルト質粘土 (植物遺体を多く含む) 【4層-2層】
83. 灰 5Y4/1 シルト質粘土 【4層-2層】
84. 83に替って 10YR4/4 に灰色 【4層-2層】
85. 植物遺体を多く含む灰色 【4層-2層】
86. 灰オリーブ 5Y5/2 中～粗粒砂 (灰 5Y4/1 シルト質粘土 (粗粒砂が多く、灰はシルト質粘土への変化) 【4層-2層】
87. オリーブ黄 5Y3/1 粘土質シルト (粘砂少ない) 【5層】
88. オリーブ黄 5Y3/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる) 【5層】
89. 黄褐色 10YR3/2 シルト (粗粒砂～細粒が混じる) 【5層】
90. 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト (粗～極粗粒砂が混じる。低い部分より粘砂少ない) 【5層】
91. 灰黄褐色 10YR4/2 粘土質シルト (粗～極粗粒砂が混じる。低い部分より粘砂少ない) 【5層】
92. 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト 【5層】
93. 黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルト 【5層】
94. 土面付近は、黄褐色 7.5YR3/2～4/4 に灰色 【5層】
95. 灰黄 2.5Y4/1 粘質シルト (粗～極粗粒砂が僅かに混じる) 【5層】
96. 灰黄 2.5Y4/1 シルト質粘土 (灰オリーブ 7.5Y5/2 細～中粒砂や細粒が多く混じる) 【5層】
97. 灰～暗灰黄 5Y4/1～2.5Y4/2 砂質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む) 【5-1層】
98. 灰 5Y4/1 砂質シルト (中～粗粒砂が混じる) 【5-1層】
99. 灰黄 2.5Y4/1 粗粒砂～小礫 (オリーブ黄 5Y3/1 シルトが混じる) 【5-2層】
100. 黒褐色 2.5Y3/1 やや粘土質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む) 【5層】
101. 黄褐色 粘土質粗粒砂～細粒が非常に多くシルト混じり粗粒砂～細粒 【5-2層】
102. このあたりは、砂、礫や小礫が、砂、礫や小礫が混じる
103. 黄褐色 粘土質粗粒砂～細粒が非常に多い 【5層】
104. 灰オリーブ～オリーブ黄 5Y5/3～2.5G1/1 細～粗粒砂 (シルトが混じる) 【5-2層】
105. オリーブ黄 7.5Y3/1 粘土質シルト (中～粗粒砂を多く含む) 【5-3層】
106. オリーブ黄 5Y3/1 粗粒砂～細粒 (粗粒砂～細粒を含む。南端部は粘砂少ない) 【5-3層】
107. このあたりは、灰 5Y4/1 粘砂少ない、粘質シルト 【5-3層】
108. オリーブ黄 5Y3/1 粘土質シルトコック土と 暗オリーブ灰 5G1/4 細～中粒砂ブロックとの混合
109. 灰黄～暗灰黄 2.5Y4/1～4/2 粘土質シルト (粗～極粗粒砂が混じる)
110. 黒～黒褐色 2.5Y2/1～3/1 粘土質シルト (粗～極粗粒砂が混じる)
111. 灰オリーブ 5Y4/2 細粒
112. 暗オリーブ灰 5G1/4 細～中粒砂 (5層のオリーブ黄 5Y3/1 シルトが入りこむ)
113. オリーブ黄 5Y6/3 細～中粒砂 (粗粒砂～細粒が混じる)
114. オリーブ黄 7.5Y3/1 粗～極粗粒砂 (シルトが混じる)
115. このあたりは、上部がやや粘質砂になる
116. 暗オリーブ灰 5G1/4 粗粒砂～細粒
117. 灰オリーブ 5Y5/2 細～中粒砂
118. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗粒砂～細粒
119. 灰 10Y5/1 粗粒砂～細粒 (一部に灰 5Y4/1 粘土質シルトラミネアが入る)
120. 灰 2.5Y4/1 細～小礫
121. オリーブ黄 2.5Y4/4 粗粒砂～小礫
122. オリーブ黄 7.5Y3/1 粘土質シルト (粗～中粒砂が混じる)
123. 暗オリーブ灰 5G1/4 中～極粗粒砂
124. このあたりは、細～小礫
125. このあたり、暗オリーブ灰 5G1/4 中～粗粒砂
126. 暗オリーブ灰 5G1/4 細～中粒砂
127. 灰 7.5Y4/1 粘土質シルト (細～中粒砂を多く含む)
128. 暗オリーブ灰 5G1/4 中～粗粒砂
129. 灰オリーブ 5Y5/2 粗粒砂～小礫
130. オリーブ黄 5Y3/2 粗粒砂～細粒
131. (28相当層) 暗オリーブ灰 5G1/4 細～中粒砂
132. 灰 5Y4/1 砂質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む)
133. 灰 5Y4/1 と暗オリーブ灰 5G1/4 細～中粒砂の混合
134. 灰オリーブ 5Y5/2 細～小礫
135. 暗灰 5Y3/0 シルト質粘土 (粗～中粒砂が混じる。民家の植物遺体を多く含む)
136. 暗オリーブ灰 5G1/4 細～中粒砂 (オリーブ黄 5Y3/1 粘土質シルトブロック土が若干混じる)

137. 戻黄粉 1034/2 砂質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む)
138. 4b-1層の中～粗粒砂を多く含む4b～4b-2層のブロック上の真合
139. 4b-2層・5層のブロック上と4b-1層との混合
140. 近い黄粉～黄 1034/3～4/4 粘土質シルト
141. 戻黄粉 1034/2 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
142. 黒粉 103K3/2 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
143. 黄 7.53R4/4 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
144. 増戻黄 2.534/2 中～粗粒砂 (シルトが混じる)
145. 増オリーブ 534/3 中～極粗粒砂
146. 増戻～戻黄粉 103R1/1～4/2 粘土質シルト (中粒砂～細粒が混じる)
147. 戻戻 2.534/1 シルト質粘土
148. 増戻黄 2.535/2 砂質シルト (中粒砂を多く含む)
149. 上部 戻戻黄粉 103R4/2 下部 増戻黄 2.534/2 粘土質シルト (中粒砂が多く混じる)
150. 戻戻 2.534/1 シルト質粘土 (戻戻黄粉 103R4/2 粘土質シルトブロック上を多く含む、粗～極粗粒砂が多く混じる)
151. 戻 (近い黄粉 103R4/3 シルトブロック土が混じる)
152. 戻戻 2.534/1 粘土質シルト (細～中粒砂が少量混じる)
153. 黄 7.53R4/4 砂質シルト (粗粒砂～細粒が多く混じる)
154. 戻
155. 戻戻 2.534/1 極粗粒砂～細粒 (粘土質シルトブロック土が混じる)
156. 戻 1034/1 粘土質シルト (黄粉 103S/6 粗～極粗粒砂を多く含む)
157. 黄粉～戻 103S/6～7.536/1 中～極粗粒砂 (戻 534/1 粘土質シルトラミナが入る)
158. 増粉 103K3/3 中粒砂～細粒 (シルトを含む)
159. 黄 103R4/4 中粒砂～細粒 (シルトを含む)
160. 戻 2.534/1 シルト質粘土 (細～中粒砂のラミナが顕著) 【4b-1層】
161. 戻戻 2.534/1 シルト質粘土 (種別遺体を多く含む) 【4b-1層】
162. 戻 2.534/1 シルト質粘土 (粗粒砂～細粒を多く含む) 【4b-1層】
163. オリーブ黒 533/2 砂質シルト (中～粗粒砂を多く含む、落ち込み埋土)
164. オリーブ黒 533/1 粘土質シルト (増オリーブ戻 5G34/1 細～中粒砂を多く含む)
165. オリーブ黒 533/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む)
166. 黒粉 2.533/1 シルト質粘土 (炭を多く含む)
167. 戻 534/1 シルト質粘土 (炭を多く含む)
168. 戻 1034/1 砂質シルト (細粒砂～細粒を多く含む)
169. 増オリーブ戻 5G33/1 細～粗粒砂
170. オリーブ黒 1033/1 粘土質シルトと増オリーブ戻 5G34/1 細～中粒砂との互層 (炭を多く含む)
171. 増オリーブ戻 5G33/1 細～中粒砂 (オリーブ黒 1033/1 粘土質シルトブロック土が混じる)
172. オリーブ黒 1033/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
173. 黒粉 2.533/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
174. オリーブ黒 533/1 粘土質シルト (細粒を多く含む)
175. 黒粉 2.533/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
176. オリーブ黒 533/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む)
177. オリーブ黒 533/1 粘土質シルト (粗～極粗粒砂を多く含む)
178. 黒 532/1 シルト質粘土 (粗～極粗粒砂が混じる)
179. 5層 オリーブ戻 533/1 粘土質シルトブロック上と 6層 増オリーブ戻 5G34/1 細～中粒砂ブロック土の混合
180. オリーブ黒～戻 7.533/1～1034/1 粘土質シルト (間層として粗粒砂～細粒が入る)
181. 増戻黄 2.534/2 粘土質シルト
182. 黒粉 2.533/1 粘土質シルト (炭が混じる)
183. オリーブ黒 1033/1 粘土質シルト (中～粗粒砂を多く含む、炭が混じる)
184. オリーブ黒 533/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
185. 戻オリーブ 534/2 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が混じる)
186. 戻 1034/1 砂質シルト (粗粒砂～細粒が多く混じる)
187. オリーブ黒 1033/2 粘土質シルト (オリーブ黒 533/1 粘土質シルトブロック土が多く混じる)
188. 戻 1034/1 砂質シルト (粗粒砂～細粒が多く混じる)
189. 増オリーブ戻 2.5G34/1 細～粗粒砂
190. 黒 532/1 粘土質シルト (中粒砂～細粒が少量混じる)
191. 増オリーブ戻 5G34/1 細～中粒砂 (粗粒砂～細粒を非常に多く含む、オリーブ黒 533/1 の粘土質シルトブロック土が多く混じる)
192. 増オリーブ戻 5G34/1 細～中粒砂 (オリーブ黒 533/1 粘土質シルトブロック土が多く混じる)
193. 黒粉 103K3/2 粗粒砂～細粒 (シルトを多く含む)
194. 戻戻 2.535/1 細粒砂～細粒
195. 増戻黄 2.535/2 細～粗粒砂
196. 増戻黄 2.534/2 細～粗粒砂
197. 戻戻 2.534/1 細粒砂～細粒
198. 戻戻 2.534/1 細～中粒砂
199. 戻戻 2.534/1 中粒砂～細粒
200. 戻オリーブ 535/2 中粒砂～細粒
201. 増戻黄 2.534/2 中粒砂～細粒
202. 増戻黄 2.534/2 細～中粒砂のブロック上
203. オリーブ黒 533/1 粘土質シルト (増オリーブ戻 5G34/1 の細～中粒砂をブロック状に多く含む)
204. 戻 534/1 細～中粒砂 (戻オリーブ 535/2 中粒砂を多く含む、粗粒砂～細粒、炭が混じる)
205. オリーブ黒 533/2 粘土質シルト (細～極粗粒砂が混じる)
206. 戻 1034/1 粘土質シルト (細～中粒砂を多く含む)
207. 戻 2.534/1 細～中粒砂 (粘土質シルトが混じる)
208. 戻 536/1 中粒砂 (戻 534/1 粘土質シルトブロック土が混じる)
209. 戻 2.535/1 細～極粗粒砂 (戻 534/1 粘土質シルトを多く含む)
210. 増戻 103R4/1 粘土質シルト (戻オリーブ 535/2 中粒砂を多く含む、炭・粗粒砂～細粒が混じる)
211. 戻戻 2.534/1 シルト質粘土
212. 戻 534/1 中～極粗粒砂 (戻戻 2.534/1 粘土が混じる)
213. 戻 536/1 粗粒砂～細粒 (黒 532/1 シルト質粘土または粘土質シルトブロック上を多く含む)



- 214. 黄土
- 215. オリーブ層 1073/1 シルト (中～粗粒砂を多く含む。216と217が混じったような土)
- 216. オリーブ層 1073/1 シルト(中粒砂 (上)粘土質シルト)
- 217. 灰 574/1～5/1 砂質シルト (粗～細粒砂が混じる)
- 218. 増反層→灰オリーブ 2, 573/2～573/2 砂質シルト (粗粒砂～細粒砂が混じる)
- 219. 黄砂 2, 573/3 シルト (粗～細粒砂が混じる。上部は地層 1070/4 に変色)
- 220. 灰 575/1 砂質シルト (粗～細粒砂を多く含む)
- 221. 灰オリーブ→黄砂 573/3～2, 573/3 細～中粒砂
- 222. 灰オリーブ 573/2 粘土質シルト (黄砂が50%混入)黄砂は粗粒砂～細粒砂が混じる)
- 223. 125号黄砂→灰オリーブ 1070/4/3～574/2 粘土質シルト (粗粒砂～細粒砂を多く含む)
- 224. 地層 1070/4/4 粘土質シルト (粗粒砂～細粒砂を多く含む) 【5-2層】
- 225. 灰黄砂→黄砂 1070/4/2～574/2 粘土質シルト (粗粒砂～細粒砂を多く含む) 【5-1層】
- 226. 黄砂 1070/4/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒砂を多く含む) 【3-2層】
- 227. 黄砂 2, 573/1 粘土質シルト (粗粒砂が混じる)

- 228. 125号黄砂 1070/4/3 粗粒砂～細粒 (シルトが混じる。上部は軟状土層で締まる) 【4層】
- 229. 黄砂→地層 2, 573/2～7, 573/4/4 中粒砂～細粒 (シルトが混じる。上部は軟状土層で締まる) 【4～1層】
- 230. オリーブ層 7, 573/1/1 粘土質シルト→増反層 2, 567/4/1 細～中粒砂 【4～1層】
- 231. オリーブ層→灰 7, 573/1/1～1074/1 シル 質粘土 (粘物遺体を多く含む) 【4～2層】
- 232. このあたりは、粘物遺体を多く含む (9/1) シルト) 【4～2層】
- 233. 125号黄砂→黄砂 2, 574/1 シルト質粘土 (4～2層)
- 234. 灰オリーブ 574/2 細～中粒砂 (オリーブ層 573/1 シルトが混じる) 【4～2層】
- 235. オリーブ層 1073/1 シルト質粘土 (4～2層)
- 236. 黄砂 2, 574/1 砂質シルト (中粒砂～細粒を多く含む) 【5-1層】
- 237. オリーブ層 573/1 中～粘土質シルト (中粒砂～細粒を多く含む) 【5-2層】
- 238. オリーブ層 573/1 粘土質シルト (中～粗粒砂～細粒を多く含む) 【5層】
- 239. オリーブ層 573/1 中～細粒砂 (粘土質シルトが混じる) 【5層】
- 240. オリーブ層 573/1 粘土質粘土 (5-1層)

- 241. 東端のこのあたりは、粗粒砂～細粒砂を多く、黒砂 2, 573/2 砂質シルトに変化 【5-1層】
- 242. オリーブ層 7, 573/1 粘土質シルト (黄砂 2, 573/3 中～粗粒砂を非常に多く含む) 【5-2層】
- 243. オリーブ層 573/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む) 【5-3層】
- 244. 増反層 2, 567/4/1～567/4/1 細～中粒砂
- 245. 増反層→灰 2, 567/4/1 粗粒砂→小粒
- 246. 増反層 2, 573/2 粗粒砂～細粒 (黄砂 1070/4/2 シルトブロック土を多く含む)
- 247. 黒砂 2, 573/2 粘土質シルト (粗粒砂が混じる)
- 248. 明層→灰黄 7, 573/5/6～2, 577/2 粗粒砂～細粒 (灰 7, 574/1 粘土ブロック土を多く含む)
- 249. オリーブ層 573/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む)
- 250. オリーブ層 573/1 シルト質粘土
- 251. 増反層 574/1 粗粒砂～細粒 (増反層 2, 567/4/1 や オリーブ層 7, 573/1 シルトブロック土を多く含む)
- 252. オリーブ層 7, 573/1 粘土質シルト (粘物遺体を多く含む)



- 49. 増反層 2, 573/2 粘土質シルト (粗粒砂～細粒が少量混じる。締まっている)
- 43. 地層 1070/4/4 シルト (粗～細粒砂が混じる) 【5層】
- 55. 地層 7, 574/4 シルト (粗～細粒砂が混じる) 【4層】
- 77. 6号地層 灰白→黄砂 577/2→1070/4/4 中～粗粒砂 【44～1層】
- 82. 黄砂 2, 574/1 シルト質粘土 (粘物遺体を多く含む) 【4～2層】
- 83. 灰 574/1 シルト質粘土 【4～2層】
- 100. 黒砂 2, 573/1 中～粘土質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む) 【5-2層】
- 130. オリーブ層 573/2 粗粒砂～細粒
- 131. (125号黄砂) 増反層 567/4/1 細～中粒砂
- 136. 増反層 1070/4/3 中粒砂～細粒 (シルトを含む)
- 139. 地層 1070/4/4 中粒砂～細粒 (シルトを含む)

- 41. 灰オリーブ 575/2 中～粘土質シルト
- 42. 地層 1070/4/1 シルト (粗～細粒砂が混じる) 【5層】
- 76. 灰オリーブ→明層 567/2～573/5/6 中粒砂～細粒 【4～1層】
- 83. 灰 574/1 シルト質粘土 【4～2層】
- 87. 灰→増反層 574/1～2, 574/2 砂質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む) 【5-1層】
- 96. 灰 574/1 砂質シルト (中～粗粒砂が混じる) 【5-1層】
- 104. 灰オリーブ→増反層 573/2 灰 573/3/2～2, 567/4/1 細～粗粒砂 (シルトが混じる) 【5-2層】
- 106. オリーブ層 573/1 粘土質シルト (粗粒砂～細粒を含む。粘物遺体は少なく含む) 【5-3層】
- 107. このあたりは、灰 574/1 砂質粘土、粘物遺体は少なく含む
- 128. 増反層 574/1 中～粗粒砂
- 132. 灰 574/1 砂質シルト (粗粒砂～細粒を多く含む)
- 133. 灰 574/1 増反層 567/4/1 細～中粒砂の混合
- 134. 灰オリーブ 575/2 細～小粒
- 160. 灰 574/1 シルト質粘土 (細～中粒砂のラミネーション) 【4～2層】
- 161. 黄砂 2, 574/1 シルト質粘土 (粘物遺体を多く含む) 【4～2層】
- 162. 灰 7, 574/1 シルト質粘土 (粗粒砂～細粒を多く含む) 【4～2層】

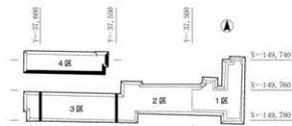
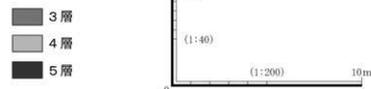


図6 3・4区地層断面図

ナデすることによりやや外湾気味となる。断面形が細く長い高台で、端部は丸くおさめる。内面全体と外面上半に軸を施し、見込み部にトチンの痕跡が残る。9世紀前半頃のものと考えられる。14は9世紀後半～10世紀前半頃の緑釉陶器碗。口縁部を僅かに外反させる。内外面に淡緑灰色の施軸が認められるが、大部分が磨減して薄くなっている。胎土の色調は灰色を呈する。15～17は8世紀後半頃の土師器類。18・19は製塩土器。20は土鍾。21～23は凸面縄タタキの平瓦である。

3～2層出土遺物は、8世紀前半～9世紀前半の時期の須恵器、土師器、瓦などが中心であるが、72・73のような中世の遺物も確実に含んでいる。

24～29は8世紀後半～9世紀前半の須恵器蓋。27・28は天井部外周が強く凹んでおり、この中でも新しい様相を示している。30～36は須恵器杯。30は杯Aと呼ばれる高台がないタイプで、体部は直線的に外側に開く。30・31は8世紀末～9世紀初頭、そのほかは8世紀後半頃と思われる。34の底部外面には非常に薄い墨書が確認できる。「庄」であろうか。37・38は須恵器小壺。37は体部が低く、肩が強く張る。ともに底部ヘラ切り後に高台を貼り付けている。8世紀後半。39～44は須恵器壺。39は短頸壺で、口縁端部はやや内傾する面をもつ。8世紀後半。41の底部外面にはヘラ記号がある。44は9世紀代のもので底部糸切りとする。45・46は須恵器甕。46は体部が開かず、上に向かってのびる。外面最下部にタタキが残る。8世紀後半頃か。47は9世紀後半の灰釉陶器碗。体部下半にはヘラケズリが認められる。外面に稜をもつ三日月高台を付し、内面にのみ軸を施す。48～52は土師器杯で、53～55は土師器皿。48～50・53・55は内面を暗紋で飾る。50は底部外面ヘラケズリ。8世紀前半～中頃。51は8世紀後半か。

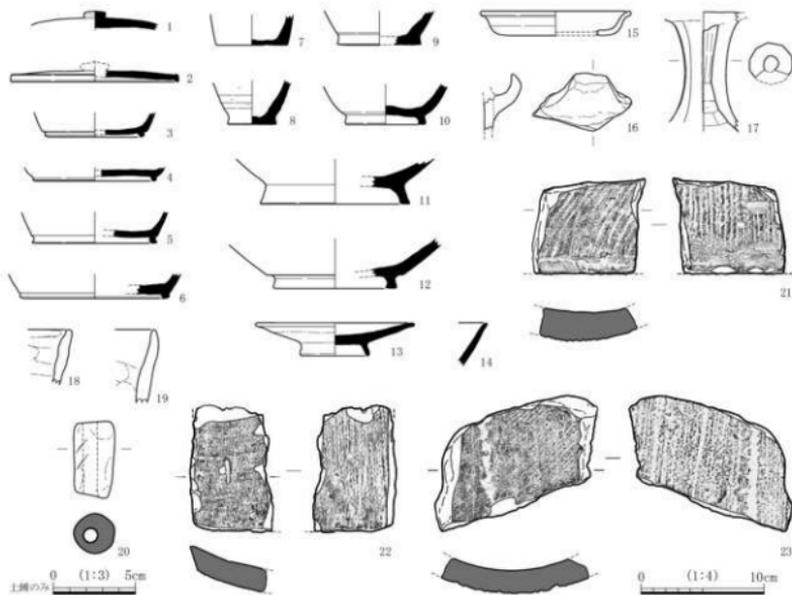


図7 1区3-1層出土遺物実測図

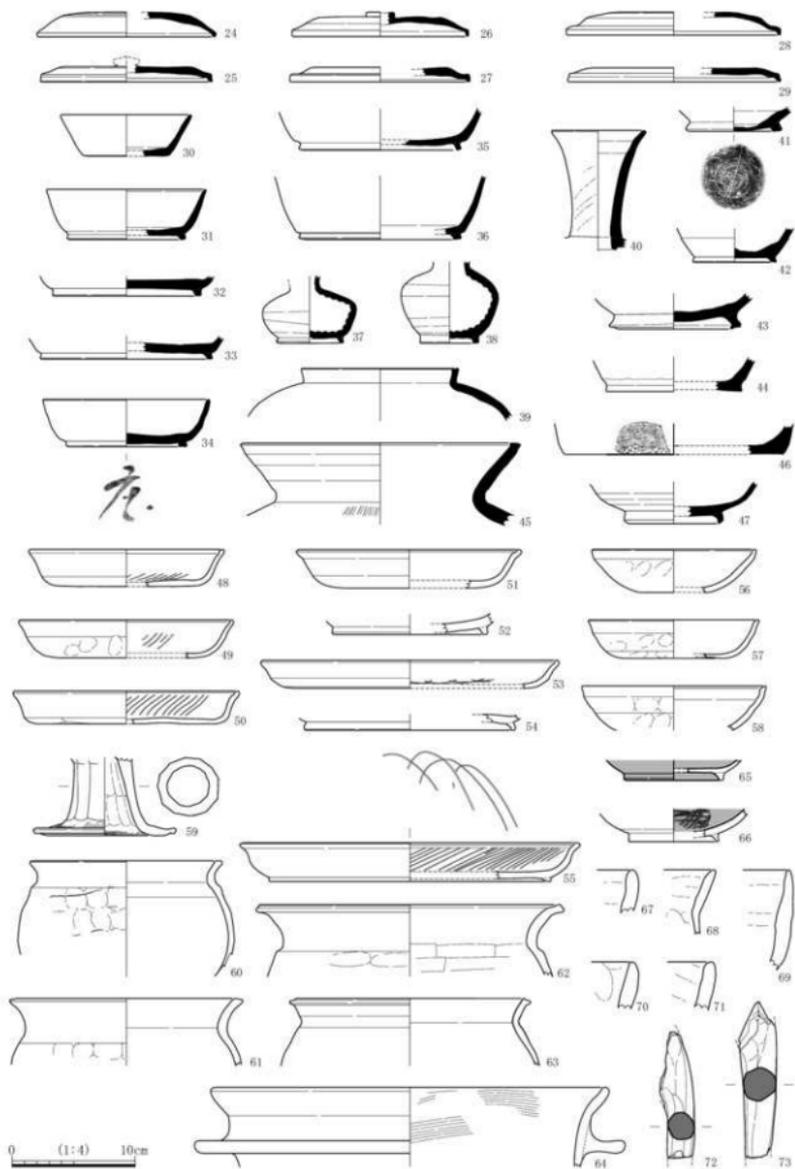


图8 1区3-2层出土文物实测图(1)

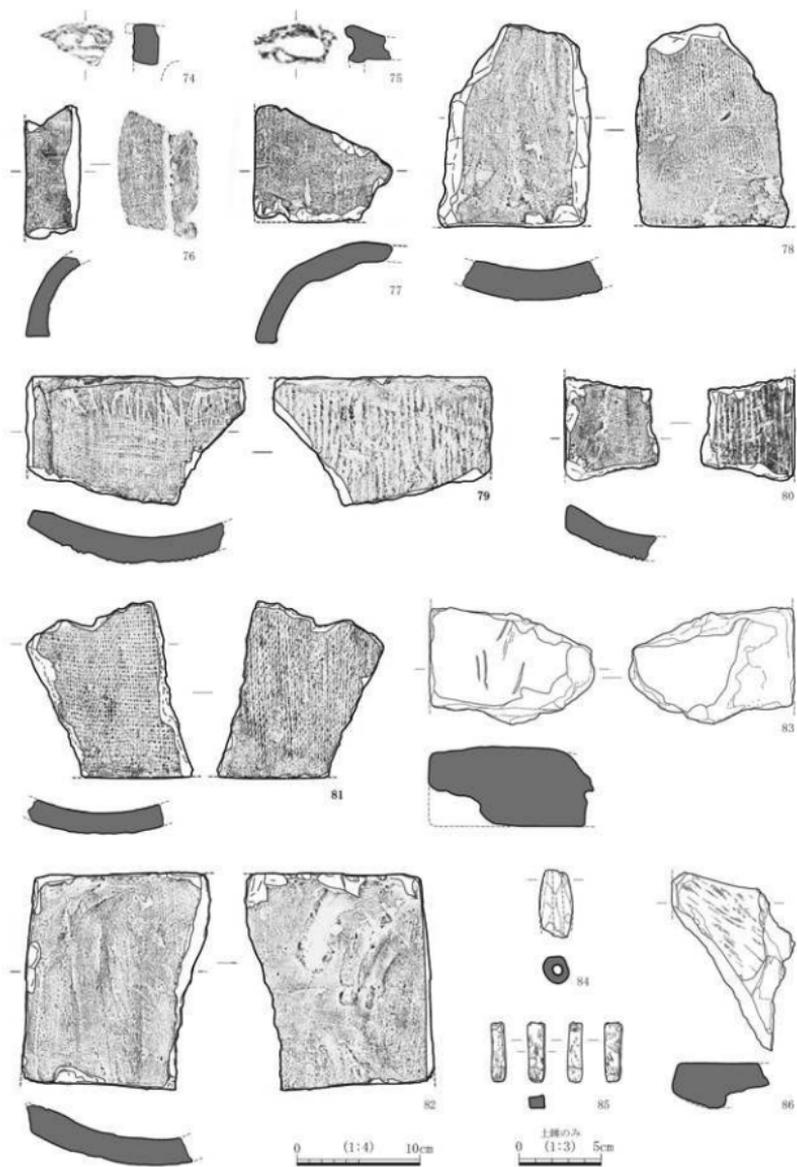


図9 1区3-2層出土遺物実測図(2)

56~58はやや時代が下がった8世紀末~9世紀前半の土師器椀。指オサエの後、口縁部をヨコナデする。58は口縁端部に内傾する面をもち、部分的に細い沈線がみられる。59は8世紀前半の土師器高杯。脚柱部の面取りは12面。裾部は内外面ともにハケ調整とする。60~63は土師器甕。体部外面は指オサエ、頸部より上をヨコナデとし、体部との境には明瞭な稜ができる。62はそれが特に顕著である。口縁部は外側に摘み、端部には外傾する面をつくる。8世紀末~9世紀初頭。64は8世紀後半~9世紀前半頃の鈎付長胴甕。65は両黒の黒色土器椀。10世紀後半~11世紀。66は内黒の黒色土器椀。やや細めの高台が付く。10世紀。67~71は製塩土器。72・73は12世紀後半~13世紀の瓦器足釜の脚部である。74・75は軒丸瓦。ともに外区のみ破片で、全体の紋様は不明。75の外区には珠文等みられないことから、重圈紋になる可能性が考えられる。74は外区には鋸齒紋がみられる。8世紀後半~9世紀初頭。76は丸瓦

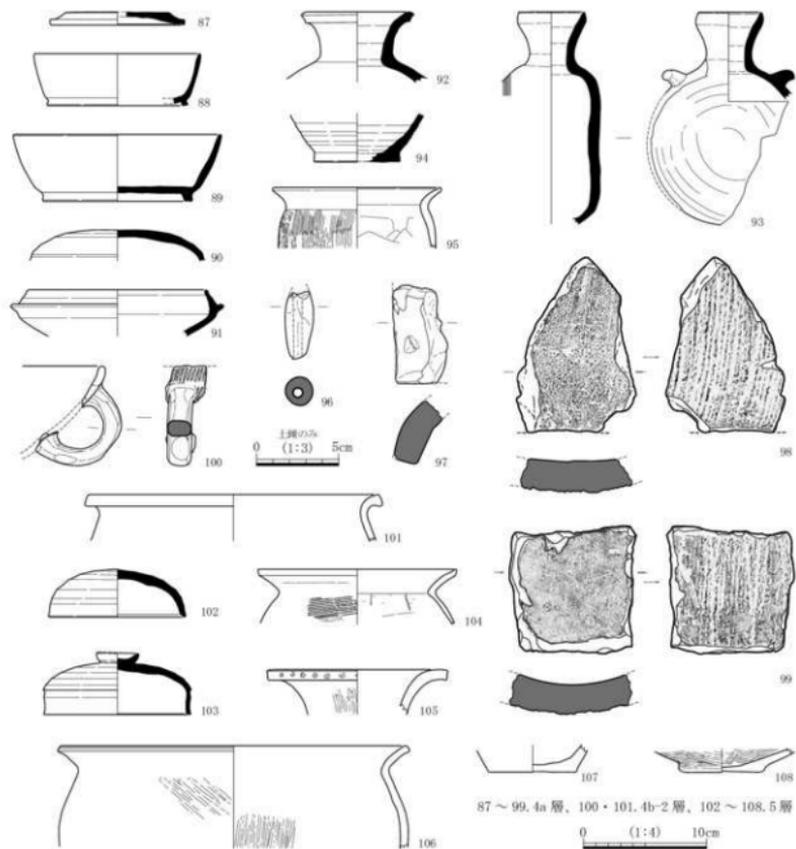


図10 1区4・5層出土遺物実測図

で、77は雁振瓦。共に凸面には縄タタキが僅かに残る。78～82は凸面縄タタキの平瓦。78は凹面の布目と凸面の端部約10cmの範囲の縄タタキをナデ消す。81の凹面布目はやや粗い。82は凹面の布目と凸面の縄タタキをナデ消すが、凸面のそれは非常に雑で、ナデの痕跡が明瞭に残る。83は埴。厚さ約6.5cmを測る。やや軟質。84は土鍾、85・86は砥石である。

4 a層からは主に須恵器、土師器、瓦が出土した。遺物の時期は6世紀から9世紀までと幅をもつ。

87はやや小型の須恵器蓋。ほぼ中央付近まで残っているが、つまみを接合したナデの痕跡が認められないことから、つまみのないタイプと判断した。9世紀前半。88・89は8世紀末頃の須恵器杯。89の高台内側には、高台接合時に付いた爪痕が一周する。90～93は6世紀後半の須恵器。90・91は蓋杯。92・93は提瓶。93には短いカギ状把手が付く。94は9世紀中頃の須恵器壺。底部の切り離しは糸切りとする。95は土師器甕。体部外面は縦方向のハケ目。8世紀後半。96は土鍾。97は丸瓦。98・99は凸面縄タタキの平瓦で、99は凹面の布目をナデ消す。

4 b-2層は7世紀～8世紀初頭頃の地層と考えられるが、出土遺物はやや古い中期中葉から後半の弥生土器である。

100は鉢の把手部であるが、僅かに残る体部には櫛描列点紋がみられる。Ⅳ様式前半。101はⅢ様式の甕。共に生駒西麓産胎土。

5層からは弥生時代中期から6世紀後半までの土器が出土している。

102は6世紀後半の須恵器杯蓋。103は5世紀後半の有蓋高杯の蓋。天井部との境の稜はシャープである。104は生駒西麓産胎土の庄内式甕。外面には細いタタキとハケ目が僅かに残る。105・106は弥生時代後期前半の広口壺と鉢。105は口縁部端面に竹管紋を押す。頸部外面は面取り後、縦方向のミガキ。106の体部内外面はミガキで、口縁端面には凹線状の沈線がめぐる。両者ともに生駒西麓産胎土。107は甕、108は壺の底部である。

## 2. 2区

### 【層序】(図5)

1区の西側に続く調査区で、層序も基本的に1区と同じである。断面の記録は南壁で行なった。

〈2層〉1区の2層に対応する近世の堆積層である。極粗粒砂～細礫が少量混じる暗灰黄色の締まった粘土質シルトで、厚さは0.15～0.2m程度である。次に報告する3区2層の1層上の地層にあたる。3区2層に対応する地層は、2区の西端部で僅かに認められる。厚さは0.05m程度である。なお2層より上の地層は機械掘削にて除去した。

〈3層〉西半部は粗粒砂～細礫を多く含む灰黄褐～にぶい黄褐色の砂質シルトである。1区の貯留槽部でみられたような厚い堆積ではなく、数cmの非常に薄い堆積であったが、1区同様に多くの遺物を含んでいたことから、1区3層の続きであることが容易に認識できた。東側では厚い箇所約0.3mの厚みがあり、1区同様上下2層に分層できる。上部3-1層は粗粒砂～細礫混じりの黒褐～暗褐色シルトで、下部の3-2層は灰黄褐色シルトである。両層共に多くの土器を包含している。

〈4層〉1区と同じく、洪水堆積層とそれに手を加えた土壌化層である。4 a層は砂層上面にみられる攪拌された地層で、数cmから中央付近では約0.2mの厚みとなる。中～粗粒砂が混じるにぶい黄褐色砂質シルトである。図面を作成した南壁には僅かしか表れていないが、調査区のほぼ全面で認められた。

4 b-1層は中粒砂～小礫で、厚い箇所約0.5～0.7mの厚みとなる。調査区西端部ではこの砂礫が大量

に流れた河道の跡も検出している。この砂層とセットとなる4b-2層は、灰～黄灰色のシルト質粘土で、間層に植物遺体がラミナ状に入っている。約0.1mから、西端で0.2mほどの厚みがある。

〈5層〉1区から続く弥生時代から古墳時代末の遺物包含層である。粗粒砂～細礫が混じるオリブ黒色粘土質シルトで、厚さは東側で約0.1mを測る。ただしところどころ厚く盛り上がり、0.3～0.4m、中には0.65mほどの厚みとなっている箇所もある。この盛り上がりを形成した要因には、これより下層の影響によるものと、4b層が5層を削ったために、結果的に5層が盛り上がったように残ったという2つが考えられる。西側の盛り上がり箇所は、上下2層に分層できる黒褐色粘土質シルトとなっており、中央部の盛り上がり箇所では、粗～極粗粒砂混じりの暗褐色粘土質シルトの上層と、粗～極粗粒砂混じりの灰黄褐色粘土質シルトの下層とに分層ができる。また西半部では、オリブ黒色粘土質シルトの下に、オリブ黒色シルト混じりの黄灰色粗粒砂～小礫(5-2層)と、中～粗粒砂を多く含むオリブ黒色粘土質シルト(5-3層)が認められ、3層合わせて約0.3mの厚さとなっている箇所がある。

〈6層〉暗オリブ灰色の細～中粒砂、あるいは細粒砂～小礫の自然堆積層である。上層部に広がる細～中粒砂には、オリブ黒色シルトが若干浸み込んだようにやや汚れて見える箇所もある。これはこの上にのる5層の影響によるものであり、攪拌によるものではないと判断した。また、部分的にやや粘土質が強くなる箇所もみられる。

#### 【遺物】(図11～14、写真図版35～38)

3-1層出土遺物は、8～9世紀の須恵器、土師器、瓦などが中心であるが、確実に瓦器片も出土している。特筆すべきものに新羅系陶質土器がある。

109は7世紀後半のかえりの付く須恵器蓋。110・111は8世紀後半の須恵器杯。112は同時期の須恵器壺。113・114は8世紀末～9世紀初頭頃の土師器椀と甕である。113は口縁端部に内傾する面をもつ。115・116は緑軸陶器椀。115は外反する細い口縁をもつ。口縁部直下の外面にはヨコナデによる筋が明瞭に残る。116の高台は断面台形で、内側に段をつける。見込みには凹線がめぐり、全面施軸とする。両者ともに軸調は濃緑色を呈する。10世紀の近江産。117は瓦器椀。太くしっかりした高台が付く。11世紀後半か。118は新羅系陶質土器の長頸壺である。体部片で、頸部より上と高台を欠損する。体部は下半が最大径となる下膨れの形状を呈し、頸部との境には凸帯がめぐる。肩部には2条2組の沈線によって3段の紋様帯を区画し、その上段と下段に円紋、中段に省略化が進んだ鋸歯紋を施している。いずれもスタンプによる施紋である。円紋は沈線に重なっており、やや雑な作業がうかがえる。7世紀後半頃のものと考えられる。150～152は凸面縄タキの平瓦。152は凸面の端部個約10cmの範囲の縄タキをナゲ消している。

3-2層からは8～9世紀の須恵器、土師器、瓦などのほか、10世紀の黒色土器などが出土している。

119～121は8世紀代の須恵器蓋。122～125は須恵器杯。122・123は杯A。122は底部ヘラ切り、123はヘラ切り後ケズリによって仕上げる。8世紀後半。124は8世紀後半、125は8世紀末～9世紀初頭頃か。126～129は須恵器壺。127は底部ヘラ切り後に高台を貼り付ける。8世紀後半。128の肩部は明瞭な稜を為し、頸部までを強いヨコナデによる段をつくる。口縁部は外側下方に積み出すことにより、端部に外傾する面をつくる。東海からの搬入品か。8世紀後半～9世紀前半頃か。130・131は圈足円面鏡。130は小型である。陸部は滑らかとなっているものの、回転ヘラケズリによってできた凹凸が微妙に残っている。海部は狭く浅い。台脚部までは残っていないが、幅の狭い透しが開けられていた痕跡が認め



图11 2区3层出土文物实测图(1)

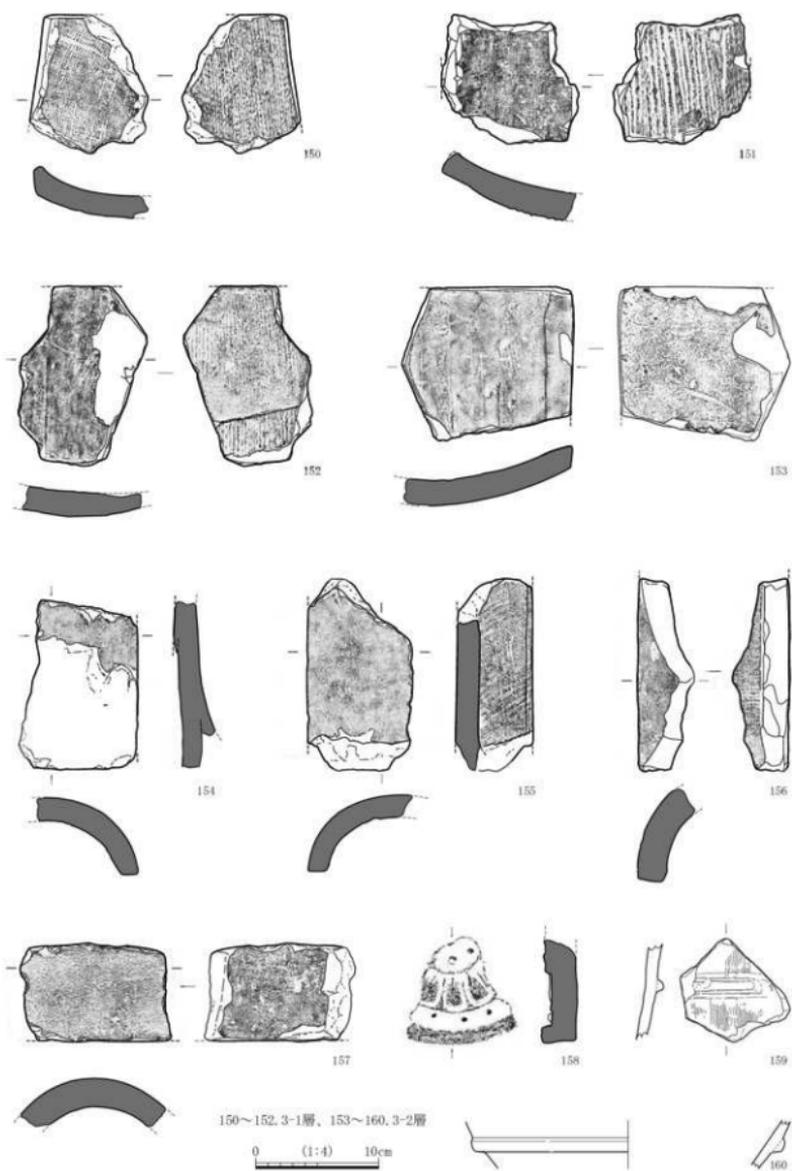


图12 2区3層出土遺物実測図(2)

られる。131は台脚部片で、幅約7mmの透しが開けられている。8世紀後半か。132・133は8世紀前半～中頃の土師器杯と皿。132は表面が完全に磨滅している。133は内面を暗紋で飾る。134・135は9世紀後半～10世紀の土師器甕。口縁は短く、端部には平坦な面をもつ。136は8世紀代の土師器壺。非常に丁寧なつくりの把手が付く。137・138は土師器鉢。137は口縁部を内外に肥厚し丸くおさめる。8世紀末～9世紀前半頃。138は口縁端部を内側に拡張する。内面には横方向の粗いミガキが認められる。8世紀末～9世紀初頭。139・140は移動式竈の一部と考えられる破片である。141は小型高杯。142～144は黒色土器碗。内黒で、断面三角形の低い高台を付し、内面を密に磨く。10世紀代。145は灰軸陶器皿。外側に開いた体部から口縁部を上方に曲げ、端部を外反させる。体部下半にはヘラケズリを施し、内面にのみ施軸する。9世紀前半。146は緑軸陶器。焼成は軟質で、高台は糸切り未調整の平高台とする。軸調は淡緑灰色を呈し、底面以外を施軸する。9世紀前半。147～149は製塩土器。150～153は平瓦。152は凹面の布目と凸面の端部調約11cmの範囲の縄タタキを薄くナデ消している。154・155は瓦当が完全に外れた状態の軒丸瓦。156・157は丸瓦。156の凸面には縄タタキの痕跡が僅かに認められる。158は単弁蓮華紋軒丸瓦である。中房の連子は1+6に、蓮弁は14葉に復原できる。外区には珠文を配すが、内区と外区とを分ける圏線はなく、蓮弁の輪郭線がそれを兼ねる。8世紀末～9世紀前半。159は円筒埴輪、160は朝顔形円筒埴輪の一部と考えられる破片である。159はタテハケのみ。淡い黄橙色を呈する。160のタガは断面台形を呈する。表面は磨滅しており、調整は不明。6世紀。

4 a層やその上面からは、主に8世紀を中心とした土師器、須恵器が出土している。

161・162は8世紀前半の須恵器蓋。163は8世紀後半の須恵器杯。164は8世紀代の須恵器壺。いわゆる壺Aと呼ばれるタイプで、丸底の底部に高台を貼り付けているが、高台の高さが足りず、据わりの悪い仕上がりとなっている。165は内面を暗紋で飾る8世紀前半～中頃の土師器杯。166は土師器鍋。頸部は大きく外側に開く。内面は横ハケ、外面は縦ハケ後、横方向のケズリ。8世紀後半。167は8世紀後

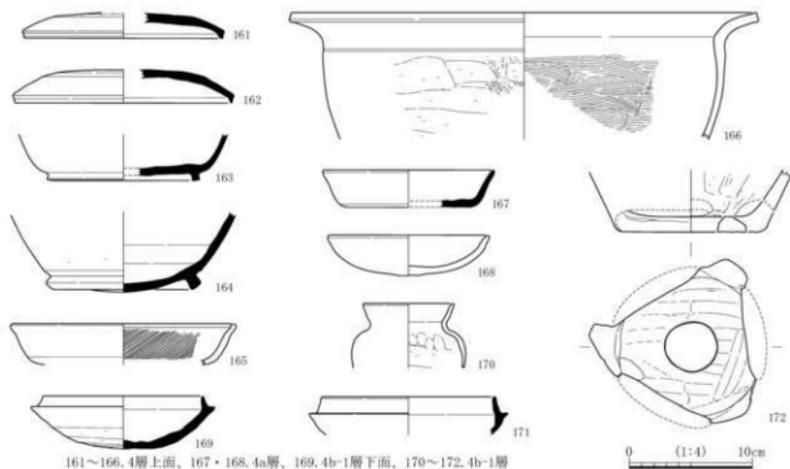


図13 2区4層出土遺物実測図

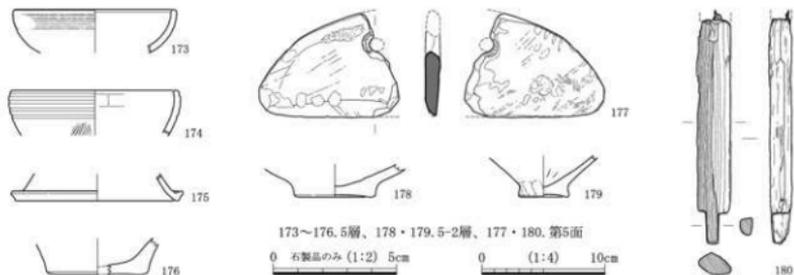


図14 2区5層出土遺物実測図

半の須恵器杯A。168は7世紀末～8世紀初頭の土師器杯。表面は磨滅が著しく、調整等確認できない。口縁部は僅かに外反する。

4b-1層からは古墳時代の遺物が少量出土している。

170は4世紀代の土師器小型丸底壺。171は6世紀後半の須恵器杯。172は土師器甌で、蒸気孔は中央の円孔と周囲に楕円孔3孔の形態である。6～7世紀。

169は4b-1層下面出土の須恵器杯。6世紀後半。

5層からは弥生時代中期後葉の遺物が少量出土している。

173・174は鉢、175は高杯の脚根部、176は甕である。173は表面の磨滅が著しいが、内外面共に赤色顔料が残っている。口縁部外面には凹線紋の痕跡が僅かに確認できる。174は口縁部外面に凹線紋を4条まわす。凹線以下はミガキ。共に生駒西麓産胎土。

5-2層からは弥生時代から古墳時代の遺物が出土している。

178は弥生時代中期の壺底部片。生駒西麓産胎土。179は鉢あるいは壺の底部片。底部外面には指頭圧痕が明瞭に残り、底面はレンズ状に窪む。庄内式期。

177と180は第5面から出土。177は緑色片岩製の石庖丁。180は大足(田下駄)の横棧と考えているが、窓の棧などの建築部材の可能性もある。片端が折れており、長さは19cm分しか残っていない。幅2.7cm、厚さ1.8cmで、断面は菱形を呈する。木口には2.5cmの長さの柄が削り出されている。

### 3. 3区

【層序】(図5・6)

2区の西側に続く東西に長い調査区である。断面の記録は南壁と東壁のY=-37.550mのライン上と西方のY=-37.600mのライン上で行なった。

〈2層〉近世の堆積層である。粗～極粗粒砂泥じりの褐色シルトで、東方は薄く約0.05～0.1m、西方では約0.2mの厚みとなる。念のため上面にて遺構検出を行なったが、遺構は検出できなかった。1・2区でいう2層には対応せず、その一つ下の地層となる。なお、この2層より上の1層(1・2区の2層対応層)及び盛土は機械掘削にて除去した。

〈3層〉2区の西端部までは3層が薄く認められるが、この3区には全く及んでいない。3区では2層掘削後の面が直ちに次の4層となる。したがって遺構面の名称は「第2面」とすべきなのかもしれないが、1・2区の第3面と同一の遺構面であることから、混乱を避けるため、2層下面であっても「第3

面」と呼ぶこととする。

〈4層〉1・2区と同じく、洪水堆積層とそれに手を加えた土壌化層である。4 a層とした上層の土壌化層は、粗～極粗粒砂が多く混じる褐色シルトで、平均約0.2mの厚みがある。全体に広がるものではなく、東半部にのみ認められる。西半部は後世の開発（2層）によって削られたのであろうか。4 b-1層とした中～粗粒砂はほぼ全体に広がっており、厚い箇所では約0.4mの厚みがある。その下の4 b-2層は、植物遺体を多く含む黄灰色シルト質粘土の上層と、灰色シルト質粘土の下層に分けられ、両者合わせて0.2m強の厚みをもつ。

〈5層〉1・2区から続く弥生時代から古墳時代末の遺物包含層である。粗粒砂～細礫を多く含む黒褐色のやや粘土質のシルトで、部分的にまるで方形周溝墓の存在を示しているかのように厚く盛り上がり、0.5m程度の厚みとなっている箇所もある。そこでは2層に分層でき、上層は粗～極粗粒砂が僅かに混じる黄灰色の粘土質が強いシルトとなる。方形周溝墓3の墳丘に向かっては、5層は方形周溝墓1と同様にすり付くような状況で徐々に薄くなり、墳丘上面では全く認められなくなる。

なお3区西端部では、5層は全体に厚く盛り上がっており、5-1層～5-3層の3層（部分的に4層）に分かれている。5-1層は中粒砂～細礫が混じる灰～暗灰黄色砂質シルトで、5-2層はシルト混じりの灰オリーブ～暗オリーブ灰色の細～粗粒砂、5-3層は粗粒砂～細礫を含むオリーブ黒色粘土質シルトである。3層合わせて約0.5mの厚みがある。なお、この5-1層～5-3層は、2区で分層した5層・5-2層・5-3層に対応するものではない。2区や3区東半部の5層は西端部でいう5-3層に対応する。

〈6層〉灰オリーブ色の粗粒砂～小礫に、暗オリーブ灰色の中～極粗粒砂が部分的に入り込む自然堆積層である。後者の混じり具合によって、平面的には中～極粗粒砂の溝が通っているかのように見える箇所もあるが、これは単なる粒径の違いによる砂粒の模様であることを、断面観察によって確認している。弥生土器片やササカイト剥片を少量包含する。ピンボールを用いて厚さを確認したが、砂礫以外の感触が全く伝わってこないことから、かなり厚い堆積層であると推測できる。

【遺物】(図15、写真図版42・43)

3区出土の遺物は、1・2区に比べ少ない。

4 a層及びその上面からは古代から中世までの遺物が出土している。

181は7世紀前半の須恵器杯蓋。天井部外面にはつまみを囲むように八角形に復元できる沈線がめぐる。182は8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯A。183・184は8世紀後半の須恵器壺である。185は陸径約8cmの小型圓足円面碗である。陸部は滑らかで、周縁には細い沈線がめぐる。海はU字状を呈し、外側は陸部よりも高い外堤となる。台脚部までは残っていないが、幅約5mmの狭い透しが開けられていた痕跡が認められる。8世紀後半か。186は8世紀後半の土師器杯、187は12世紀代の土師器皿。187の外面には4段のナデによる凹凸が残る。188・189は土師器甕。188は9世紀後半～10世紀前半頃のもので、口縁が短く広がる。189はやや古い8世紀末～9世紀初頭に位置する。190は10世紀代の内黒の黒色土器である。

4 b(-1)層や4 b-2層からは6世紀後半の須恵器蓋杯(191・192)が出土している。

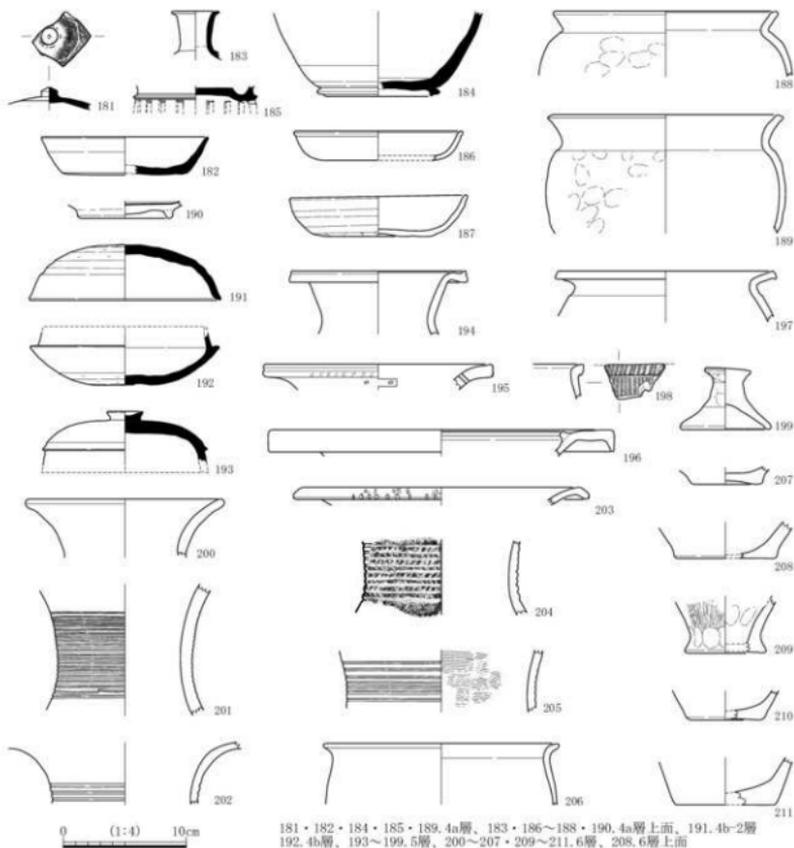
5層からは弥生時代前期から古墳時代までの遺物が出土している。多くは弥生時代中期に属す。

193は5世紀前半の須恵器高杯蓋。外面の稜はシャープで、天井部のヘラケズリはその稜のすぐ近くまで及んでいる。内面には不定方向のナデが認められる。194は弥生時代中期後葉の広口壺。口縁端部

を上方に摘み上げる。非生駒西麓産胎土。195は前期後葉の広口壺。口縁端面に沈線を入れる。磨滅し不明瞭だが、下端部に刻み目の痕跡が認められ、2個一対の紐孔を有す。胎土には極粗粒砂～細礫を多く含む。196は水平口縁をもつ弥生時代中期後半の高杯。生駒西麓産胎土。197は中期後葉～後期初頭の甕。口縁端部を下方に摘む。非生駒西麓産胎土。198は鉢。口縁部外面から体部には簾状紋を施す。生駒西麓産胎土。199はラッパ状に開く裾部に、小さく広がる頂部水平のつまみをもつ。裾端部に残る使用痕から天地を判断したが、用途は不明。生駒西麓産胎土。弥生時代後期頃のものと考えている。

6層からは、胎土に極粗粒砂～細礫を多く含む弥生時代前期の土器片が、他の調査区に比べ多く出土している。

200は前期の広口壺。極粗粒砂～細礫を多く含む前期特有の胎土である。201・202・204・205は前期



181・182・184・185・189, 4a層, 183・186～188・190, 4a層上面, 191, 4b-2層  
192, 4b層, 193～199, 5層, 200～207・209～211, 6層, 208, 6層上面

図15 3区遺物包含層出土遺物実測図

後半の広口壺。いずれも頸部に沈線を施す。201の沈線は21条を数える。204は沈線と沈線との間に綾杉状の列点紋を加える。203は長頸の広口壺。口縁部は外側に広がり気味に垂下する。端面には波状紋、下端部に刻み目を施す。中期前半。206は前期後半の甕。207・208・210・211は胎土に砂粒を含む前期の壺、あるいは甕の底部片。209はⅡ様式の甕。外面はミガキとする。

このほか11点のササカイトの剥片が出土している。(写真図版43-i~l)。ただし製品はない。

#### 4. 4区

##### 【層序】(図6・92)

3区の北側に約17m隔てる東西に長い調査区である。断面の記録は南壁と東壁で行なった。

2層より上の地層は機械掘削で除去したが、東端部には2層がなく、機械掘削の下面が直ちに3層となった。

〈2層〉3区の2層に対応する粗粒砂～細礫を多く含む褐色粘土質シルトである。西方ほど含まれる砂粒が少なく、厚さは数cmから約0.2mを測る。近世の堆積層であるが、念のためこの上面にて遺構検出を行なった。その結果、南西～北東方向に斜行する耕作痕跡が幾筋も認められた。

〈3層〉東端部の一部にのみ存在する。1区検出の3層によく似た「チョコレート色」の遺物包含層で、1区3層に対応する地層であることが容易に認識できた。1区同様に、粗粒砂～細礫を多く含む灰黄褐～暗灰黄色の粘土質シルトの3-1層と、粗粒砂～細礫を多く含む黒褐色粘土質シルトの3-2層とに分層できる。両者合わせて約0.3～0.4mの厚みがある。古代から中世の遺物を多く包含するが、中でも古代の土器が圧倒的に多い。

〈4層〉1～3区と同じ洪水堆積層とそれに手を加えた土壌化層である。4a層とした上層の土壌化層は、全体に広がるものではなく、3層が残っていた東半部の一部にのみ認められる。シルト混じりのにぶい黄褐色粗粒砂～細礫で、厚さは約0.1mである。

4b-1層は中粒砂～細礫で、約0.5mの厚さがある。西方の約3分の1の範囲には広がっていない。その下の4b-2層は、植物遺体を多く含むオリーブ黒～灰色シルト質粘土の上層と、オリーブ黒色シルト質粘土の下層とに分けられる。両者合わせて0.2～0.3m程度の厚みがある。なお、4b-2層は4b-1層が認められない西方にも広がっており、そのあたりでは黄灰色に変色している。

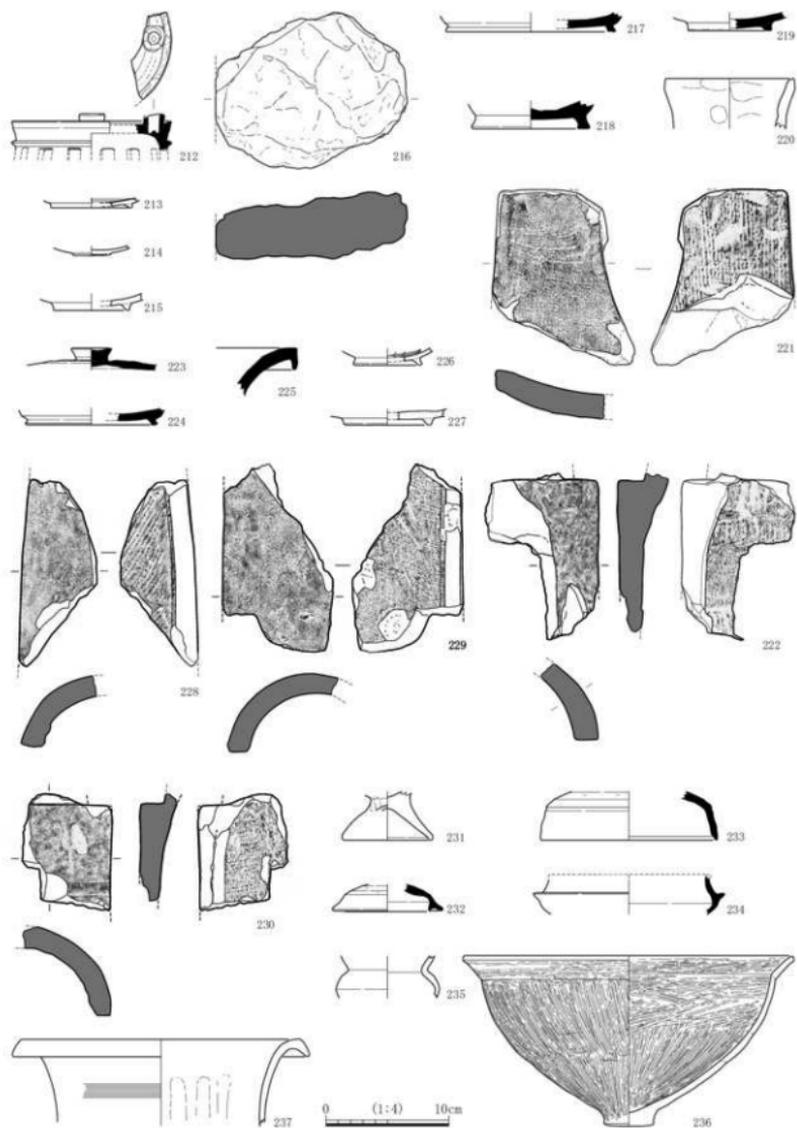
〈5層〉1～3区から続く弥生時代から古墳時代末の遺物包含層である。東半部は、中～極粗粒砂を多く含むオリーブ黒色粘土質シルトや、粘土質シルト混じりのオリーブ黒色中～極粗粒砂で、0.15～0.2m程度の厚みがある。西方の約3分の1の範囲(4b-1層が認められない範囲にほぼ対応する)は、3区の西端部の堆積状況と同じく5-1層～5-3層の3層に分層できる。すなわち5-1層はオリーブ黒色シルト質粘土で、5-2層は中～粗粒砂を多く含むオリーブ黒色粘土質シルト、5-3層は粗粒砂～細礫を多く含むオリーブ黒色粘土質シルトである。3層合わせて約0.25～0.3mの厚みで、厚い部分では約0.45mの厚みがある。なお、東方の5層は西方でいう5-3層に対応する。

西半部の5-3層中、及び下面から弥生時代後期後半の鉢(236)が出土している(図92)。

〈6層〉暗オリーブ灰色の細～中粒砂や粗粒砂～小礫の自然堆積層である。非常に厚い堆積層で、3区同様にピンボールを用いて厚さを確認したが、砂礫以外の感触が全く伝わってこなかった。

##### 【遺物】(図16、写真図版44)

4つの調査区の中でもっとも遺物の出土量が少ない。



212~216. 3-1层, 217~222. 3-2层, 223~230. 4a层, 231·232. 4b-2层, 233·234. 5-2层, 235. 5-3层, 236. 第5面, 237. 6层

图16 4区遗物包含层出土遗物实测图

3-1層及び3-2層からは他の調査区同様、古代の遺物が多く出土するが、瓦器碗など中世の遺物が確実に含まれている。

212は圈足円面甕である。海部を埋めるように円筒形の筆立てを設ける特異な形態をとる。筆立ての内径は1cmを測る。外境は陸部よりも高く、端部には内傾する面をもつ。陸部はそれほど滑らかでない。陸から海に向かってはなだらかな傾斜で、海は浅い。台脚部までは残っていないが、幅1cm強の透しが開けられていた痕跡がある。8世紀代。213は内黒の黒色土器底部片。低い高台を付す。10世紀代。214・215は瓦器碗である。214には形骸化した小さくて低く高い高台が、215には径が大きくて高めのしっかりとした高台が付く。前者は13世紀後半、後者は12世紀前半に位置する。216は赤褐色を呈する埴である。最大厚は約6cmを測る。217・218は8世紀後半頃の須恵器の杯と壺。219は緑釉陶器。高台は削り出しによる輪高台。内面から高台外面までを施釉する。釉調は淡緑灰色を呈する。9世紀後半～10世紀前半頃か。220は製塩土器。221は凸面縄タキの平瓦、222は丸瓦である。

4 a層からも3層とほぼ同時期の遺物が出土している。

223は5世紀後半の須恵器有蓋高杯の蓋、224は8世紀後半の須恵器杯である。225は口縁端部が下方に垂下する須恵器甕。頸部外面にはナデ消されたタキの痕跡が認められる。8世紀後半～9世紀前半。もっとも新しい時代の遺物は226の瓦器碗で、12世紀前半に位置する。高台は細く外側に開き、見込みには格子状の暗紋を施す。このほかにも瓦器碗片が数点出土している。227は土師器杯、228～230は丸瓦である。

4 b-2層からは7世紀までの遺物が出土した。

231は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の製塩土器。外面には僅かにタキの痕跡が認められ、二次焼成による変色が見られる。胎土には弥生時代前期の土器のように多くの砂粒を含んでいる。232は7世紀前半の須恵器蓋である。

5-2・5-3層からは弥生時代後期から古墳時代後期までの土器が出土している。

233・234は6世紀前半の須恵器蓋杯である。235は布留式期の小型丸底壺。体部最大径となる屈曲部には明瞭な稜が認められる。236は第5面から出土した。弥生時代後期後半の中型の鉢で、内湾する体部に外側に開く口縁部をもつ。口縁端部には僅かな面があり、底部は小さな平底とする。体部内外面共に密にミガキを施す。

6層からは弥生時代中期中葉の広口壺(237)が出土している。口縁部は外側に広がり気味に垂下し、頸部には縄描直線紋が見られる。

## 第2節 1区の調査成果

### 1. 2層下面 (図17、写真図版2)

古代から中世の遺物を多く包含する3層の上面 (= 2層下面) 検出遺構である。土坑1基とピット3基があるが、遺構は非常に稀薄である。近世の遺構である可能性もあるが、遺構から出土する遺物の中に、新しい時代のものが全く含まれていないことから、近世までは下らない中世の遺構と判断した。

**7土坑** 調査区の北西部に位置する。東西方向に長い平面長方形の土坑である。東西長は4.0m、幅は約1.1m、深さは約0.5mを測る。埋土はにぶい黄褐～黒褐色ブロック土を多く含む中粒砂混じりの暗灰黄色砂質シルトである。

古代の土師器・須恵器・瓦の小片のほか、内黒の黒色土器片が出土しているが、層序からは、古くとも中世の遺構と判断できる。

238は8世紀代の土師器皿杯、239は8世紀末～9世紀初頭の須恵器小壺である。

**8・9ピット** 調査区中央やや北寄りに位置する。両者共に深さ0.1m足らずの浅いピットで、埋土も同じ細礫混じりににぶい黄褐色シルトである。9ピットは直径約0.35m、8ピットは長径約0.6mを測る。

両ピットからは土師器の小片が出土している。

**13ピット** 調査区中央やや南寄りに位置する。東側が後世の攪乱により削られているため、全体規模は不明である。残った西側の平面形は隅丸方形で、一辺約0.7mを測る。深さは0.35mで、埋土は中～極粗粒砂混じりの暗灰黄色粘土である。遺物は出土していない。

### 2. 3-1層下面 (図18、写真図版2・30)

住棟部北東隅の、次に報告する第3面よりも1面上の3-1層下面で、数条の溝を検出した。東西方向の溝が1条と南西-北東方向に斜行する細溝が数条ある。

**19溝** 第3面で検出し、他の遺構と共に空中写真測量を実施したが、実際には3-1層下面で検出できる遺構であることが、後の調査区壁面の断面観察によって判明した。幅は約0.4mから広い箇所0.7m、深さは0.15m前後を測る。埋土は暗褐色の粘土質シルトブロック土が混じる褐色粘土質シルトである。

6世紀後半の須恵器蓋(240)が1点出土している。天井部内面には当て具痕が残る。

**斜行溝** 幅約0.2～0.7m、深さは0.1m以下と、次項で報告する第3面検出の溝とはほぼ同規模である。また第3面でもこの溝の周辺で同じ方向の斜行溝を検出していることから、第3面検出のもの、それほど時期を隔てない時期の耕作に伴う溝と考えている。

これらの溝は、遺構の重なり具合から中世の時期の遺構と考えられるが、その時期の遺物は出土せず、古代の遺物が出土している。

241は土師器甕。242は土師器の把手部で、体部側の厚みが約1cmあることから、甕の一部と考えられる。ともに8世紀代。243は9世紀後半～10世紀前半の灰軸陶器椀。器壁は薄手で、高台は三日月高台とする。軸は非常に薄く、その痕跡がかすかに確認できる程度である。

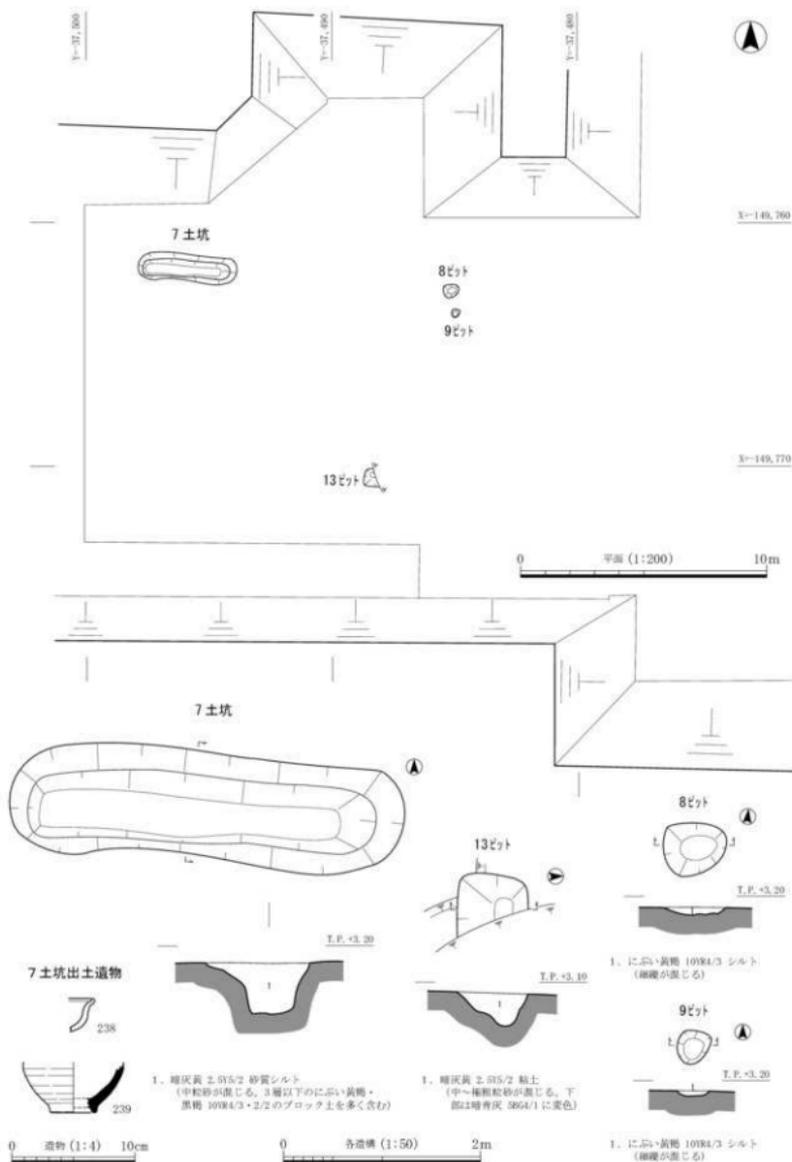


図17 1区2層下面検出遺構平面・断面図及び出土遺物実測図

### 3. 第3面 (図19~26、写真図版1~3・29・30)

古代から中世にかけての遺構面で、北側に向かって緩やかに下がっている。掘立柱建物1棟や土坑などのほか、多くの細溝を検出した。ただし貯留槽部の北側約3分の1の範囲には、それらの遺構は続いておらず、土坑や溝等の遺構は全く認められない。

**細溝** 調査区のほぼ全面に広がる溝で、3-1層下面検出の溝と同じく耕作に伴う畝溝のようなものと考えている。大半は東西・南北方向で、多くの箇所でも東西方向の溝が南北方向の溝を切っていることが確認できる。前述のとおり、住棟部北東隅から貯留槽部にかけての一部には、南西-北東方向に斜行するものも認められる。また、後述する掘立柱建物1の柱穴とも重複する。図面上では一部の溝が柱穴に切られているように表現しているが、実際には溝が柱穴を切った状況で検出している。溝の幅は平均0.2~0.5mであるが、広いものでは約0.85mを測るものもある。深さは浅いものから深いものまでまちまちだが、深いものは南壁の断面観察によって、0.25mほどあることが確認できた。埋土は暗褐色粘土質シルトブロック土混じりの褐色粘土質シルトや、粗粒砂~細礫混じりの黒褐色粘土質シルト、あるいは灰黄褐色シルトである。

出土遺物については、現地では18溝・75溝のように溝1条ごとに遺構番号を付け、遺構ごとに遺物取り上げを行なったが、遺構数が多すぎ挿図が煩雑となるため、本書では細溝群として、出土地点を大きく貯留槽部北半と南半、調査区西半部の3ブロックにまとめて図示することとした。

細溝からは須恵器・土師器が多く出土した。8世紀後半から9世紀初頭頃のものを中心であるが、8世紀前半~中頃に位置する暗紋を施した土師器や、11世紀代の土師器皿も出土している。特記すべきものに重圓紋軒丸瓦が挙げられる。

244~246・260~263・291~293は須恵器の蓋、247・248・264~271は杯である。その多くは8世紀末~9世紀初頭のものである。291はやや古手で、内面を不定方向のナデで仕上げる。247・264の杯は9世紀前半頃か。272~275は8世紀後半頃の須恵器壺。272は小壺で、底部はヘラ切り後に高台を貼り付

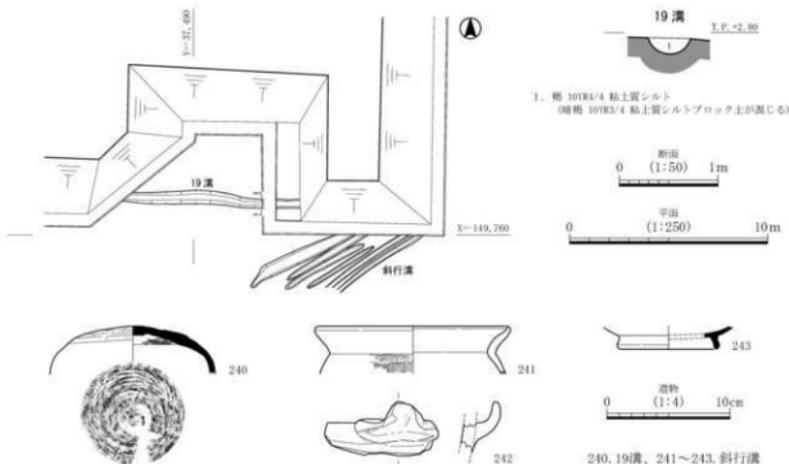


図18 1区北辺3-1層下面検出遺構平面・断面図及び出土遺物実測図

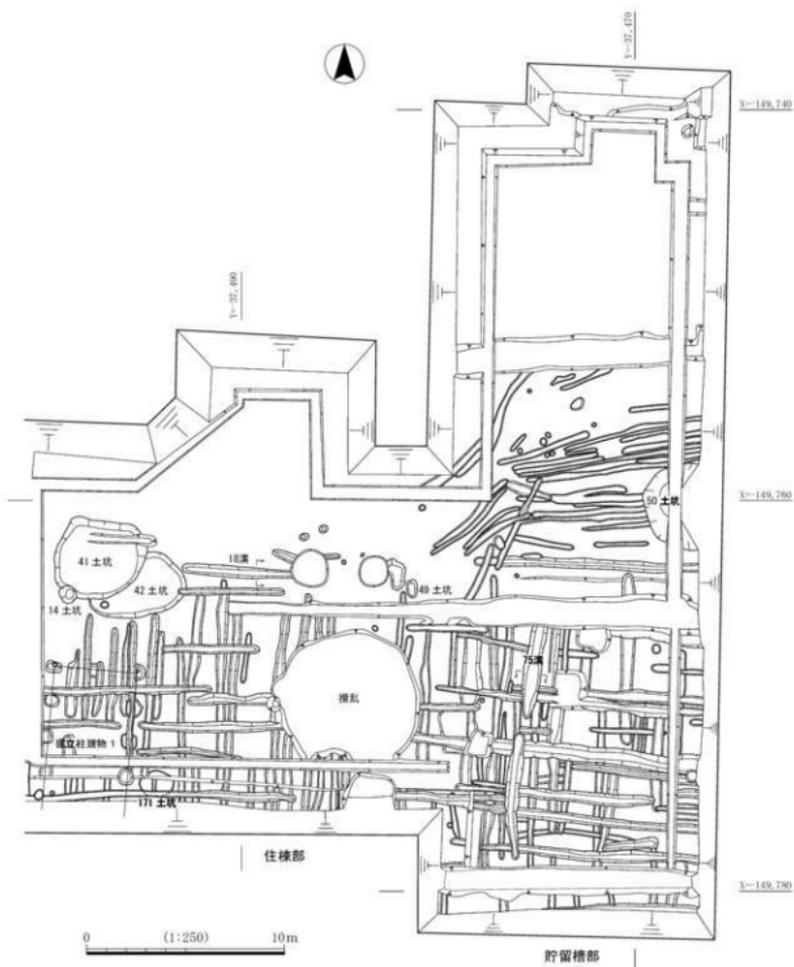


図19 1区第3面検出遺構全体平面図

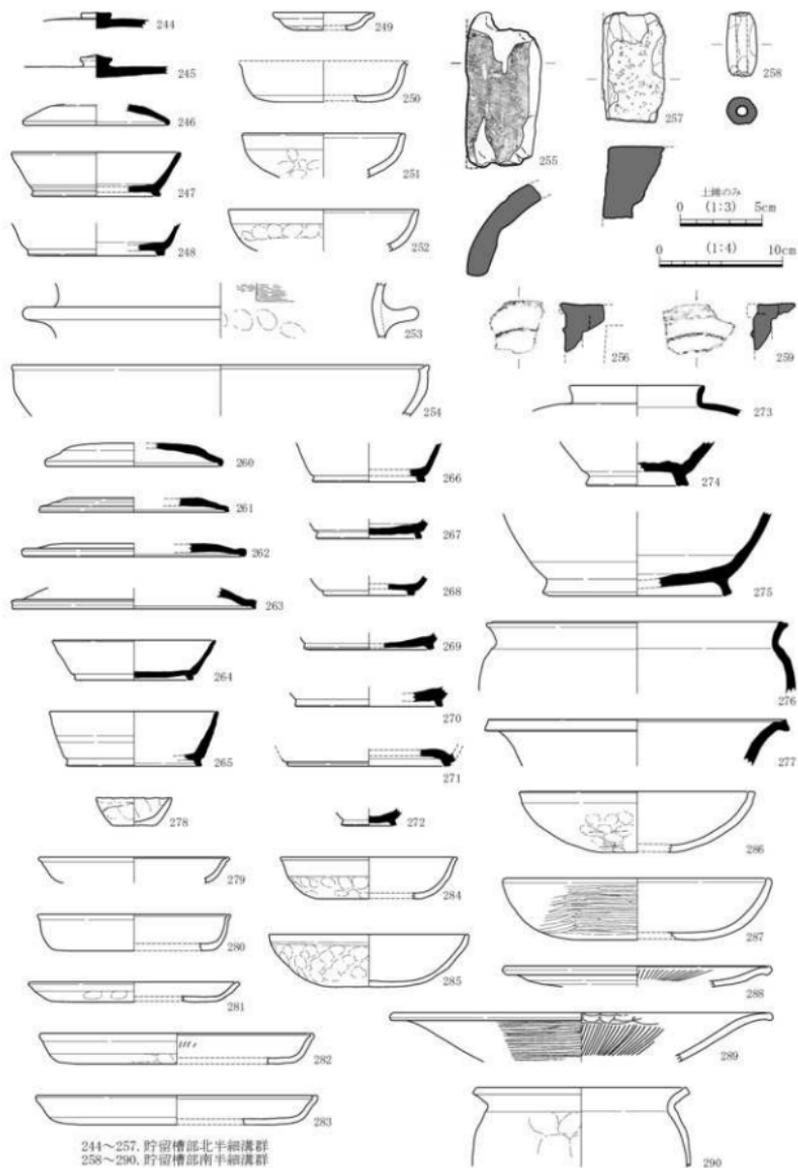


図20 貯留槽部細溝群出土遺物実測図

けている。273短頸壺で、口縁端部を丸くおさめる。275の底部内面は磨滅し、非常に滑らかとなっている。276は須恵器の鉢、277は甕である。8世紀後半か。250・278～280・297～302は土師器杯。297～299のように、内面を暗紋で飾る8世紀前半～中頃のものが多い。300の口縁部は僅かに外反する。8世紀後半か。302には高台が付く。278は小型の杯である。249・281～283は土師器皿。249は11世紀代のいわゆる「て」の字状口縁皿。282は内面に暗紋がみられる。8世紀前半。251・252・284・285・303・304は8世紀末～9世紀前半頃の土師器椀。284の口縁部はヨコナデによりやや外反する。285は口縁部

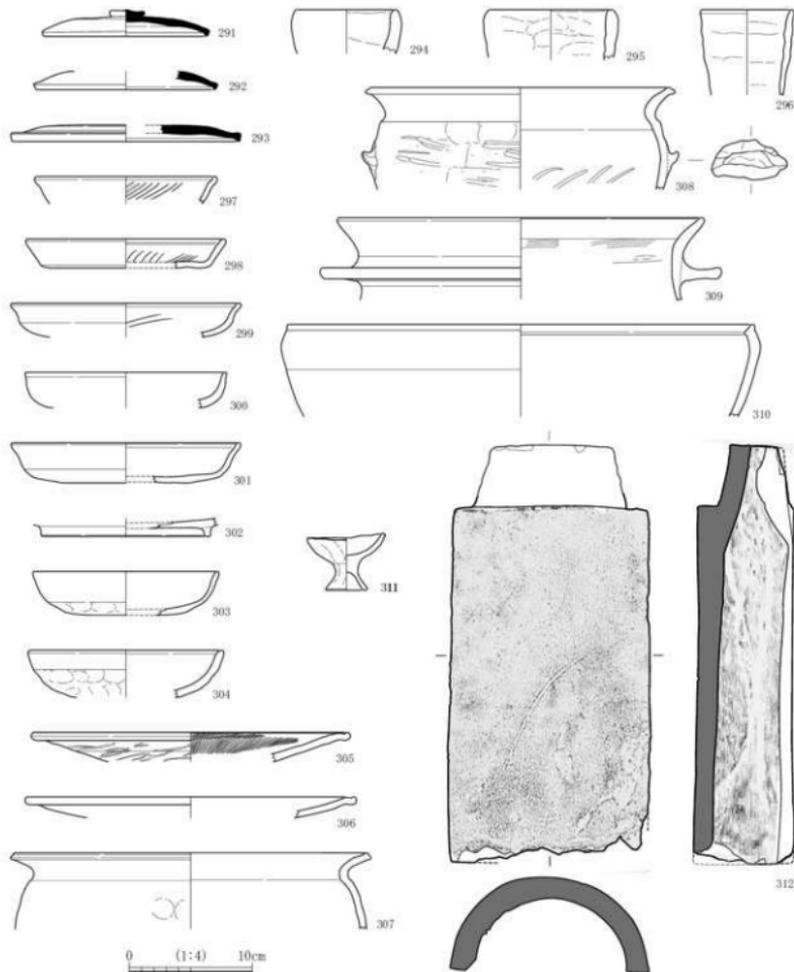
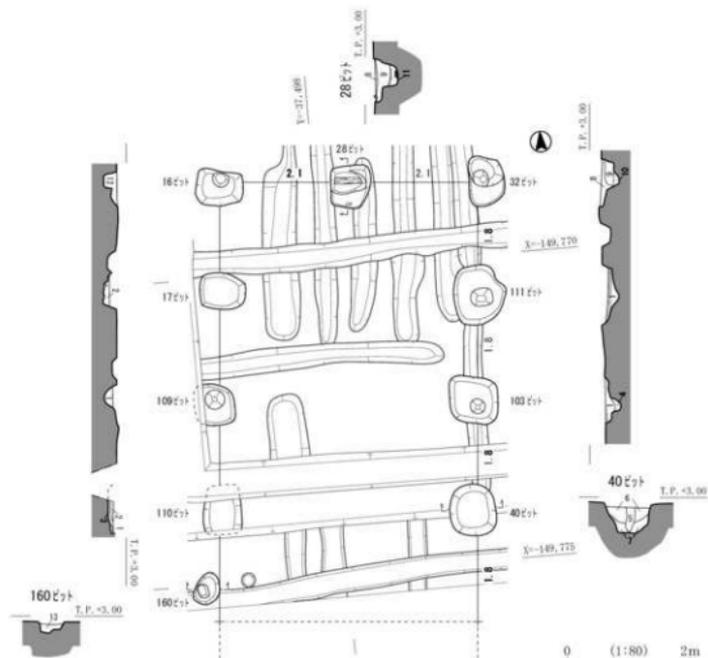


図21 西半部細溝群出土遺物実測図

の内外面をヨコナデとし、体部外面には右上がりの指オサエの痕跡が規則正しく並ぶ。304の器壁はやや厚い。254・286・287・310は土師器鉢。254・310は鉄鉢形で、286・287は碗形を呈する。286は口縁部をヨコナデとし、端部はほぼ水平な面を為す。287は体部外面を丁寧に磨く。8世紀末～9世紀前半か。288・289・305・306は8世紀前半～中頃の土師器高杯。288は口縁部がヨコナデで、内面には放射状の暗紋を施す。289も内面には放射状暗紋を施すが、その外側には螺旋状暗紋が2周する。外面も横方向に磨く。305の内面にも丁寧な暗紋がみられる。290・307・308は土師器甕。307・308の内面には焦げが付着する。308の口縁部は外側に摘み出し、端面を作る。頸部より上はヨコナデで、体部外面は指押えて成形した後、ケズリを加え、最後にミガキで飾る。内面にも粗いミガキが認められる。形骸化した短い把手を付す。8世紀後半。253・309は8世紀後半～9世紀前半の土師器甕付長胴甕。257は砥石、258は土鉢、294～296は製塩土器である。296はやや器壁が薄い。311は土師器の小型高杯。8世紀後半～9世紀前半頃のものと考えている。255・312は丸瓦。312はほぼ完成品で、黒灰色を呈する。凸面に



1. 灰黄褐色 1019A/2 粘土質シルト（粗粒砂～細礫を多く含む。上面は鉄分が着色し、焼 1019A/6 に変色）
2. 褐色 1019A/1 粘土質シルト（粗粒砂が混じる。焼 1019A/4 シルトブロック土を多く含む）
3. 黄灰 2.515/1 粗～細粒粗砂（粘土質シルトを含む）
4. オリーブ黒 1019/1 粗～細粒粗砂（粘土質シルトを多く含む）
5. 褐色 1019A/1 粘土質シルト（粗粒砂～細礫が混じる）
6. 焼 1019A/4 粘土質シルト（にぶい黄褐色 1019A/3 シルトブロック土を多く含む）
7. 灰 1019/1 シルト質粘土（オリーブ黒 513/1 シルトブロック土を含む。中～細粒粗砂を多く含む）
8. 黒 1019E/1 砂質シルト（灰黄褐色 1019A/2 シルトブロック土が混じる）
9. 灰黄褐色 1019A/2 粘土質シルト（黄灰 2.514/1 砂質シルトブロック土が混じる）
10. 黒 2.513/1 粘土質シルト（粗粒砂～細礫を多く含む）
11. 黄灰 2.514/1 シルト質粘土（中粒砂～細礫が混じる。上面は鉄分が着色し、焼 1019A/6 に変色）
12. 黄灰 2.514/1 砂質シルト（オリーブ黒 2.514/3 砂質シルトブロック土を多く含む）
13. 黒 1019E/1 粘土質シルト（粗粒砂～細礫が混じる）

図22 掘立柱建物1平面・断面図

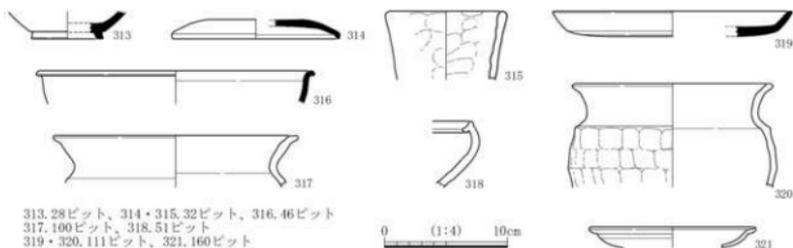


図23 第3面ピット出土遺物実測図

は縄タタキの痕跡がかすかに残り、一本線のヘラ記号を刻む。256・259は重圓紋軒丸瓦。8世紀後半～9世紀初頭。

**掘立柱建物1** 調査区の南西隅に位置する。梁間2間の南北棟である。北辺の妻柱筋から3間目の柱穴までを検出しているが、3間目の柱筋には妻柱の痕跡が検出できないことから、桁行はさらに南の調査区外へとのび、4間以上であったと推定できる。柱間寸法は梁間が2.1m等間、桁行が1.8m等間で、主軸は座標北から僅かに東に振っている。柱穴は一边約0.5～0.95mの隅丸の方形ないしは長方形で、一部の柱穴には柱の掘わっていた痕跡が明瞭に認められ、また北側妻柱の柱穴(28ピット)底からは礎板も検出された。柱穴の埋土は、黄灰色砂質シルトブロック土混じりの灰黄褐色粘土質シルトや、粗粒砂～細礫を多く含む灰黄褐色粘土質シルトなどである。

掘立柱建物1の柱穴からは、8世紀代～9世紀初頭の須恵器・土師器などが出土している。28ピットからは須恵器壺(313)、32ピットからは須恵器蓋(314)や製塩土器(315)、111ピットからは須恵器皿(319)や土師器甕(320)などである。

320は頸部が強いヨコナデにより外半し、口縁端部には僅かな面をもつ。体部外面には横方向に並ぶ指オサエの痕跡があり、頸部との境は明瞭な稜を成している。

このほか、第3面で検出した46ピットからは、口縁部を短く外側に折り曲げる須恵器鉢(316)、100ピットからは土師器甕(317)、51ピットからは土師器鉢(318)など、掘立柱建物1の柱穴から出土した土器とはほぼ同時期の8世紀後半～9世紀前半頃の遺物が出土しているが、掘立柱建物1の南西側に近接する160ピットからは、10世紀末～11世紀前半の土師器「て」の字状口縁皿(321)が出土している。

**41土坑** 調査区の北西隅に位置する。平面形は東西約4.7m、南北約4mの歪んだ円形、ないしは隅丸方形を呈する。深さは0.4mで、埋土は下層が細粒砂混じりの灰色粘土質シルト、上層が粗粒砂～細礫混じりの黄灰色粘土質シルトである。

出土遺物には須恵器、土師器、黒色土器などがある。古代の須恵器も僅かに含まれているが、10～11世紀の土器が圧倒的に多い。

322は須恵器蓋、323は壺である。324～326は土師器皿。324の外面は2段のナデで、外反する口縁端部の内側には僅かな面をもつ。灯明皿として使用されている。11世紀代。325・326は10世紀末～11世紀前半の「て」の字状口縁皿。器壁は薄い。327・328は9世紀後半～10世紀代と考えられる土師器甕。体部の大きさに対して、短い口縁部をもつ。口縁端部には外傾する面をもつ。328の外面全体には口縁部にまで及ぶ煤が付着する。329～332は内黒の黒色土器碗。332はやや高めの高台に内湾する体部をもつ。口縁端部に沈線がみられ、内面は密に磨く。10世紀代。333・334は両黒の黒色土器碗。333は外側に踏

ん張った高台を付け、底部外面までも磨く。334はやや小型で、低い高台を付す。口縁部内側には沈線を施す。10世紀後半～11世紀。343砥石、344は凸面縄タタキの平瓦である。

**14土坑** 41土坑の南西隅に位置する。41土坑と重複し、41土坑を切る。当初は浅い遺構と思われたが、下層の調査で、第5面までも残る深い遺構と判明した。平面形は直径約0.8～0.9mの歪んだ六角形で、深さは0.73mを測る。埋土は上層が灰黄褐色や黒色の粘土質シルトで、下層が粗粒砂～細礫混じりの灰黄褐色粘土質シルトである。

この土坑からも、10世紀末～11世紀前半に位置する土師器「て」の字状口縁皿(335)が出土している。

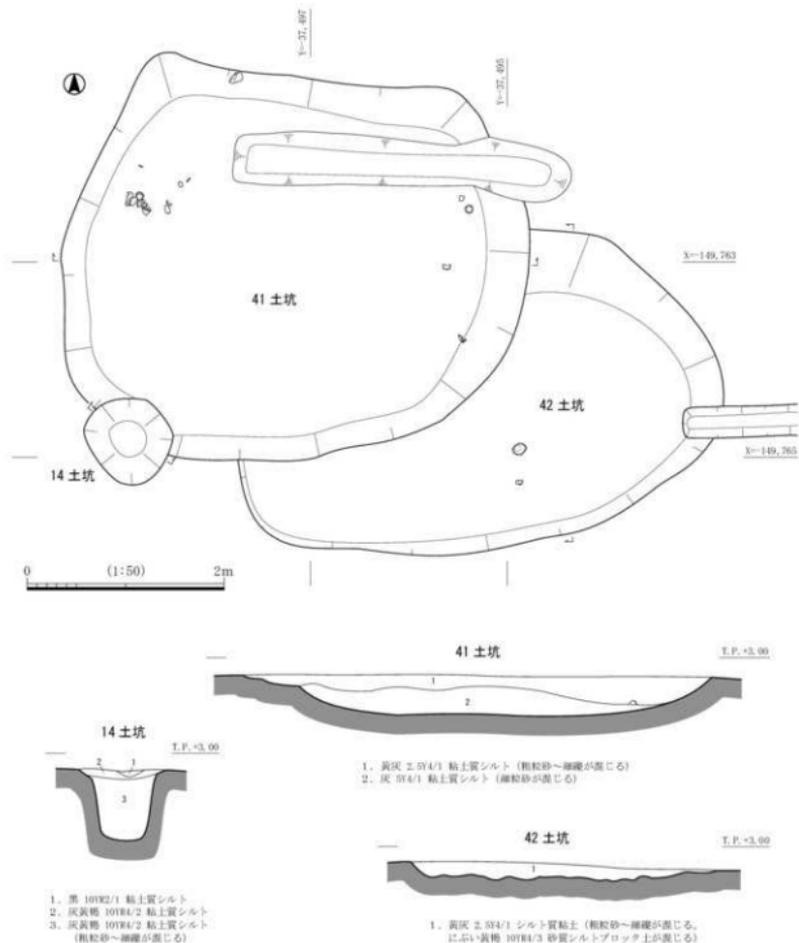


図24 14・41・42土坑平面・断面図

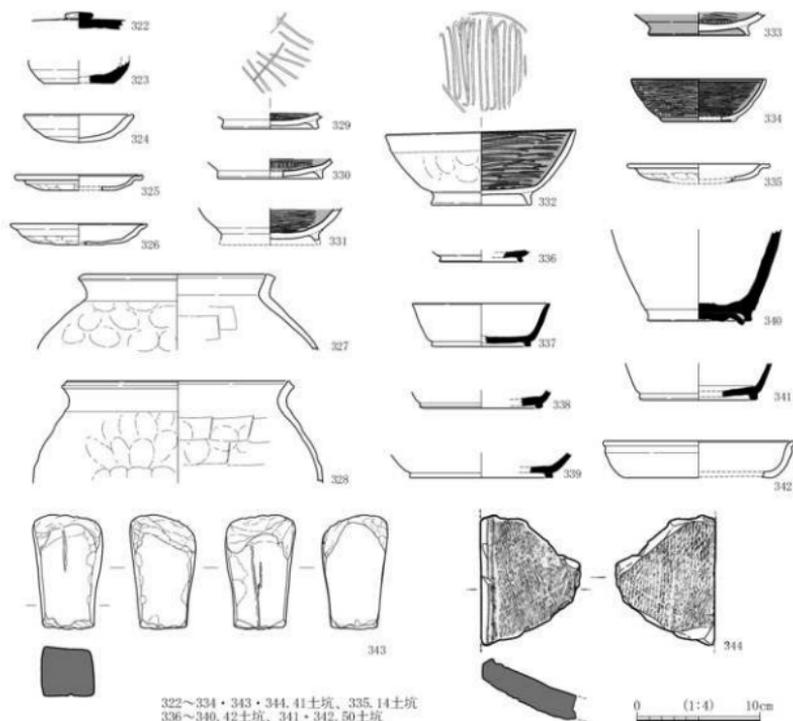


図25 14・41・42・50土坑出土遺物実測図

**42土坑** 41土坑の南側に位置する。41土坑と重複し、41土坑に切られる。平面形は東西約5m、南北約3.3mの東西に長い楕円形を呈する。深さは0.15~0.2mで、埋土にはふい黄褐色砂質シルトブロック土や粗粒砂~細礫混じりの黄灰色シルト質粘土である。

出土遺物は、8世紀後半~9世紀初頭の須恵器杯(336~339)や壺(340)である。

340の体部は直線的に立ち上がり、高台の内側には他の須恵器片が溶着する。

**49土坑** 調査区のはほぼ中央に位置する。平面形は南北約0.9m、東西約0.55mの垂んだ楕円形で、深さは0.5mを測る。埋土は灰黄褐色の粘土質シルトブロック土を多く含む、細礫混じりの黒褐色粘土質シルトである。

古代の土師器小片が1点出土している。

**50土坑** 貯留槽部の東壁際に位置する。東側の約3分の1は調査区外のため未検出であるが、平面形はほぼ円形に復原できる。大型の土坑で、直径は約2.7m、深さは約1.2mを測る。埋土は粘土質シルト混じりの黄灰色極粗粒砂~細礫や、黄褐~灰色の中~極粗粒砂、あるいは粗~極粗粒砂を多く含む灰色粘土質シルトである。

古代の須恵器と土師器が出土している。

341は8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯、342は8世紀後半の土師器杯である。

**171土坑** 住棟部の南壁際に位置する。前記の細溝に切られる土坑で、平面形は東西1.75m、南北1.3mの楕円形を呈する。深さは約0.6mで、最下層にオリープ黒色シルトや中～極粗粒砂を多く含む灰色シルト質粘土が、その上に中～粗粒砂が僅かに混じる粘土質シルトが堆積する。この粘土質シルトは下から順に暗緑灰色、褐色、にぶい黄褐色に変色している。

遺物は出土していない。

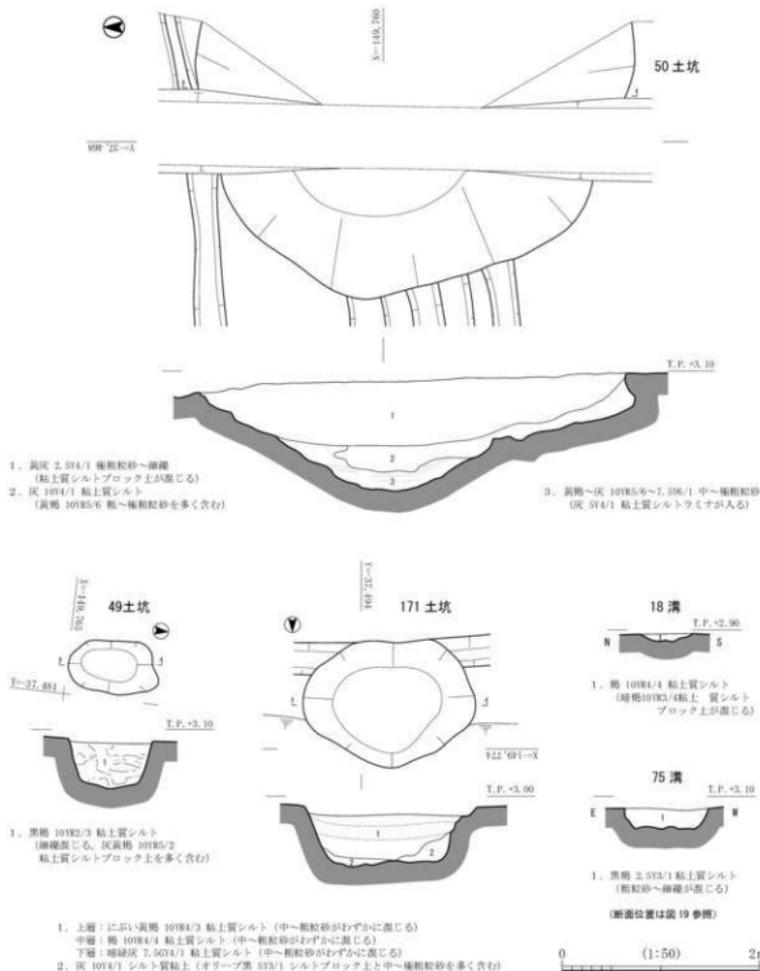


図26 49・50・171土坑、18・75溝平面・断面図

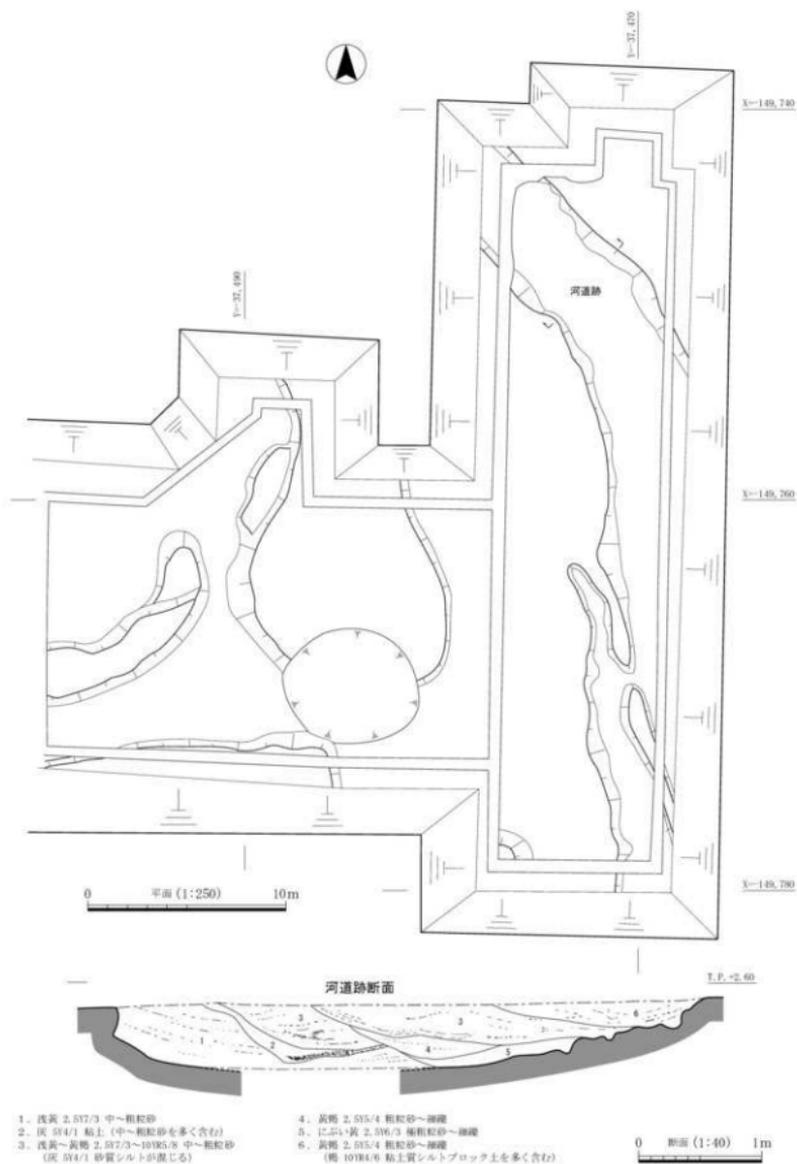


図27 1区4b-1層下面全体平面図及び河道跡断面図

#### 4. 4 b 層下面 (図27、写真図版3・4)

厚い砂層を除去した面である。本来ならば、4 b-1層とセットとなる4 b-2層の粘土層を除去した面での状況を報告すべきであるが、地形の凹凸が若干強調される程度で、状況に大きな変化がないことから、洪水本体の砂層のみを除去した段階の状況を報告する。

貯留槽部では、大量の砂が流れた河道の跡を検出した。貯留槽部の南東隅から北西隅に向かって続いており、幅は約4.8mを測る。埋土は中～粗粒砂や粗粒砂～細礫などで、4 b-1層下面から更に0.5mの深さまで掘削した段階で、調査設計深度に達したため、それ以下の掘削は中止した。したがって河道の底までは確認できていない。砂粒の堆積状況から、南から北への流れであったことが推測できる。

住棟部では、洪水砂が及ばず、鳥状に盛り上がる箇所が何箇所もある。もっとも大きく鳥状に残っているのは、第5面で検出する方形周溝墓1の墳丘部で、まさに下層に方形周溝墓の存在を示しているかのように盛り上がっていた。周囲との高低差は約0.3～0.35mである。

このほか南壁際でも同規模の盛り上がりが見られる。第5面で方形周溝墓2を検出する箇所でも、その存在を示すほど方形周溝墓1のようなきれいな盛り上がりを見せないが、砂層が及ばず、舌状にのびる盛り上がりが見られる。

#### 5. 第5面 (図5・28～39、写真図版4～9・31～35・43)

弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての遺構面である。方形周溝墓2基のほか、土坑・溝等を検出した。当遺跡内で方形周溝墓が検出されたのはこれがはじめてである。

第2期工事に伴う調査では、弥生時代中期後半の水田跡を検出しており、その遺構面はT.P.+1.8m前後から、低い箇所ではT.P.+1.4m前後であったが、この1区では、ほぼ同時期の遺構をT.P.+2.4～2.5mの高さで検出している。第2期工事の調査区とは90mほどしか離れていないにもかかわらず、高低差が大きく、今回の調査地帯が1mほど高くなっていたことが明らかとなった。

**方形周溝墓1** 調査区中央部の北壁際に位置する。北東角の一部は調査区外のため未検出であるが、全体規模はほぼ明らかである。129・137溝を東辺、141溝を北辺及び西辺の周溝とする周溝墓で、西辺周溝については西側に接する方形周溝墓2と共有していた可能性もあるが、古墳時代になって同位置に開削された131溝によって不明瞭となっている。墳丘の規模は東西約9m、南北約10mで、主軸はほぼ座標軸ののっている。墳丘は貯留槽部側の第5面と比べ、0.4mほど盛り上がっているが、これは下の6層が盛り上がっているためで、盛土によるものではない。墳丘の西端部には盛土と思われる堆積が認められるが、中央部や北壁際では確認できない。なお主体部については、丹念に精査したが確認できなかった。

東辺周溝である129溝と137溝は、空中写真測量の段階では繋がらず、1mほど隔てた状態で検出・掘削していたが、その後の断ち割り・精査によって、ひと続きの一連の溝となることが判明した。溝の幅はもっとも広い箇所では2.65m、深さは約0.3～0.4mを測る。埋土は底に細～中粒砂混じりのオリブ黒色粘土質シルトが薄くあり、墳丘側にはおそらく墳丘からの崩壊土と思われるオリブ黒色粘土質シルトの小ブロックや小礫が混じる灰色細～中粒砂が堆積する。それより上はオリブ黒色砂質シルトや黒褐色粘土質シルト、黒色シルト質粘土などとなる。ほぼ完形の甕・壺・鉢・高杯・水差し形土器などの供献土器が多数出土した(345～354)。

北辺周溝(141溝)もまた、空中写真測量の段階では検出できていなかったが、その後の丹念な平

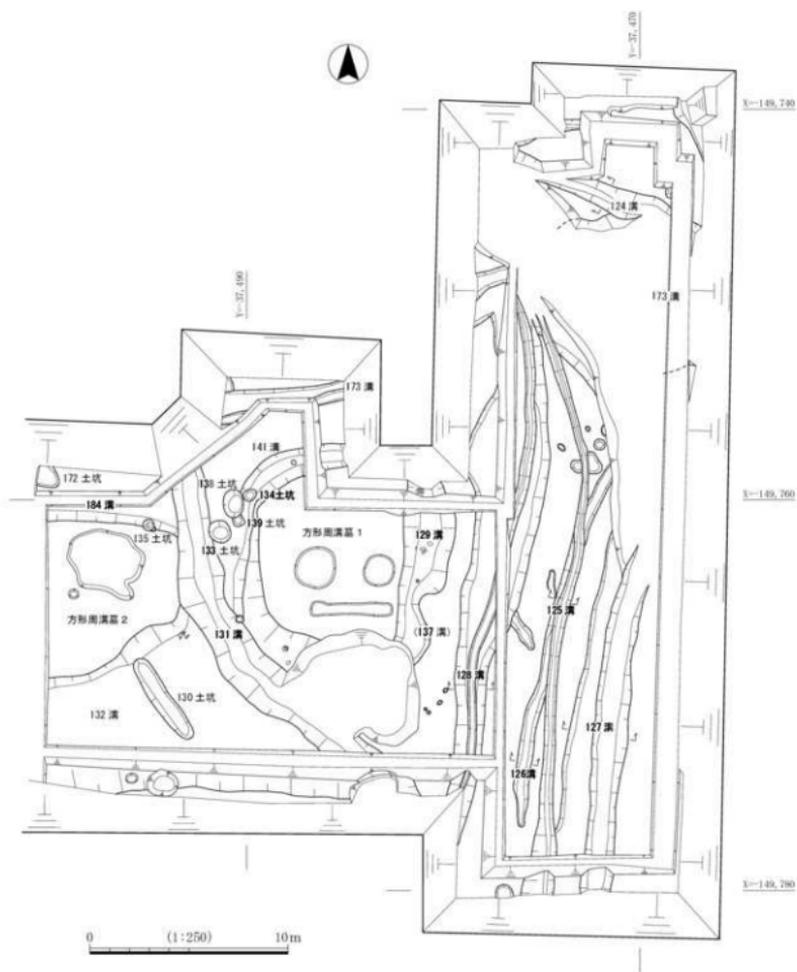


图28 1区第5面検出遺構全体平面図

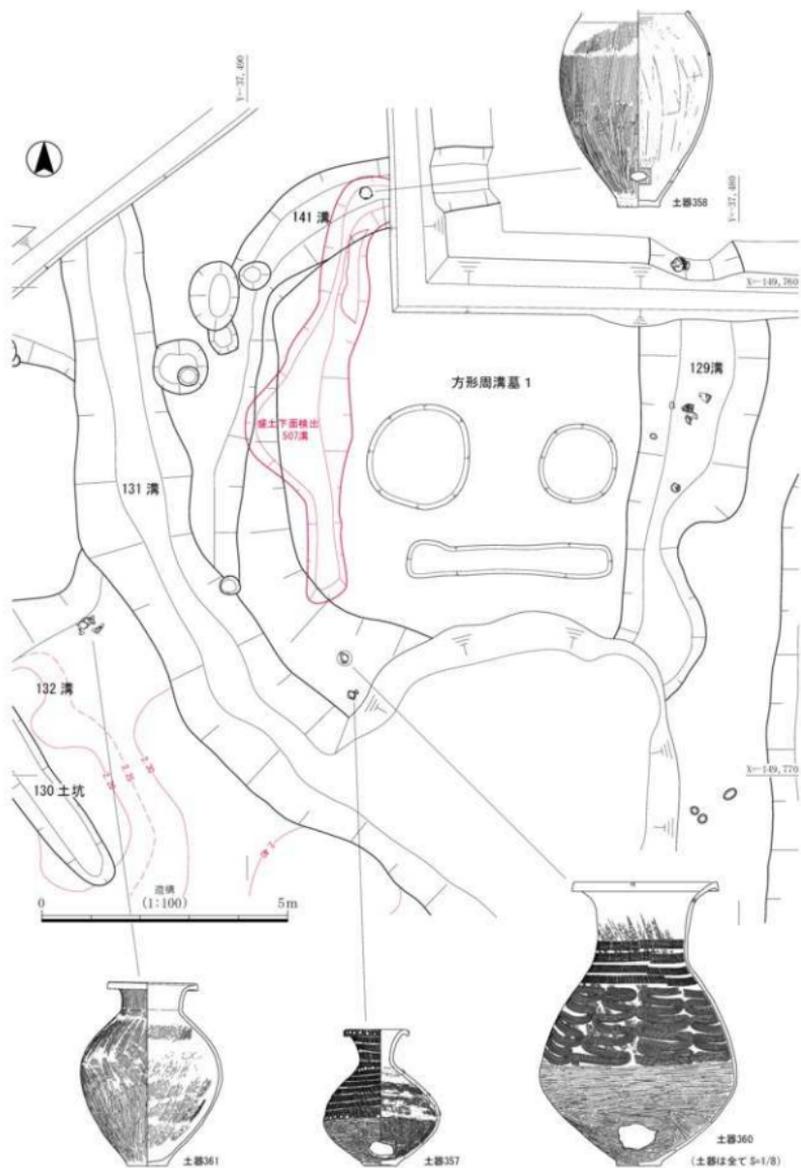


図29 方形周溝墓1 全体平面図

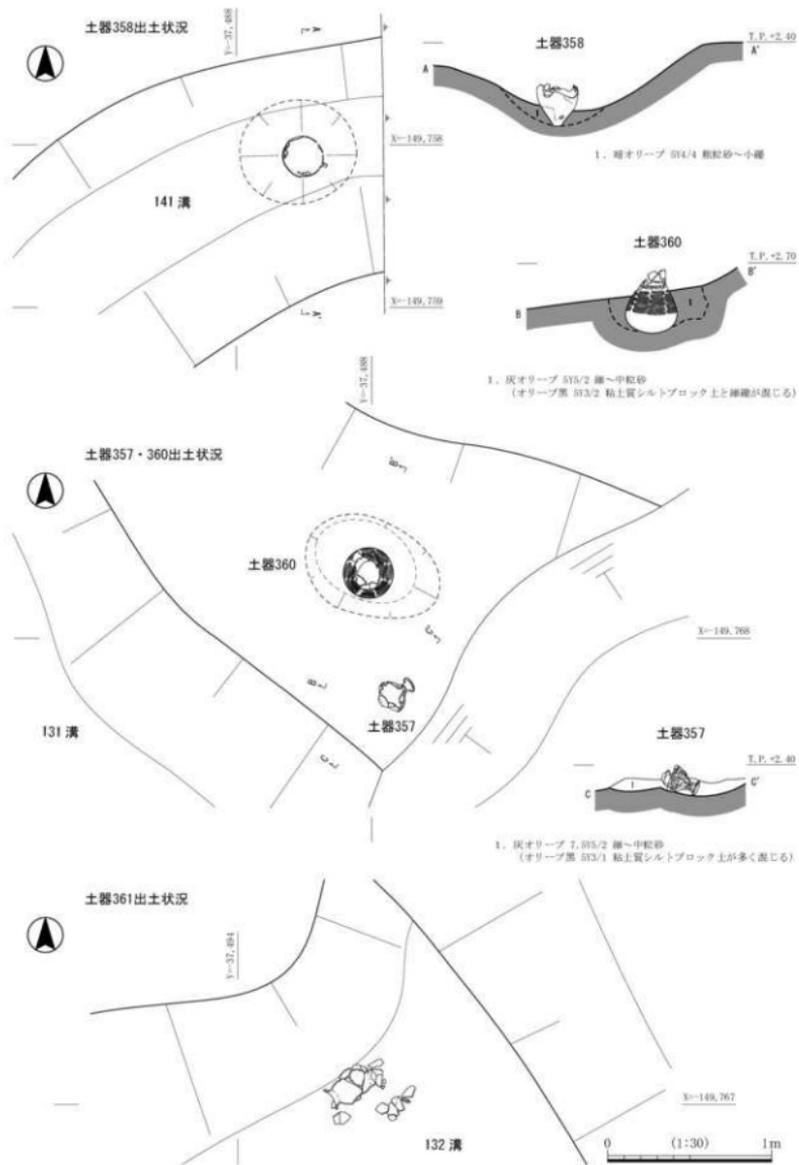


図30 方形周溝墓 1・2 周辺土器出土状況平面・断面図

面精査・断面観察によって、その存在が明らかとなったものである。溝の幅は約1.3~1.4m、深さは約0.25mを測る。埋土が周囲の6層によく似た細～小礫を多く含むオリブ黒色シルトブロック混じりの灰色細～粗粒砂であったため、遺構の輪郭が不明瞭で、検出が非常に難しかった。周溝の底からは、甕(358)が1点、正位で据えられたような状態で出土した。その掘方の検出に努めたが、土器の周りは周辺と全く同じ粗粒砂～小礫であったため、掘方があったとしても非常に不明瞭で、正確には検出することができなかった。

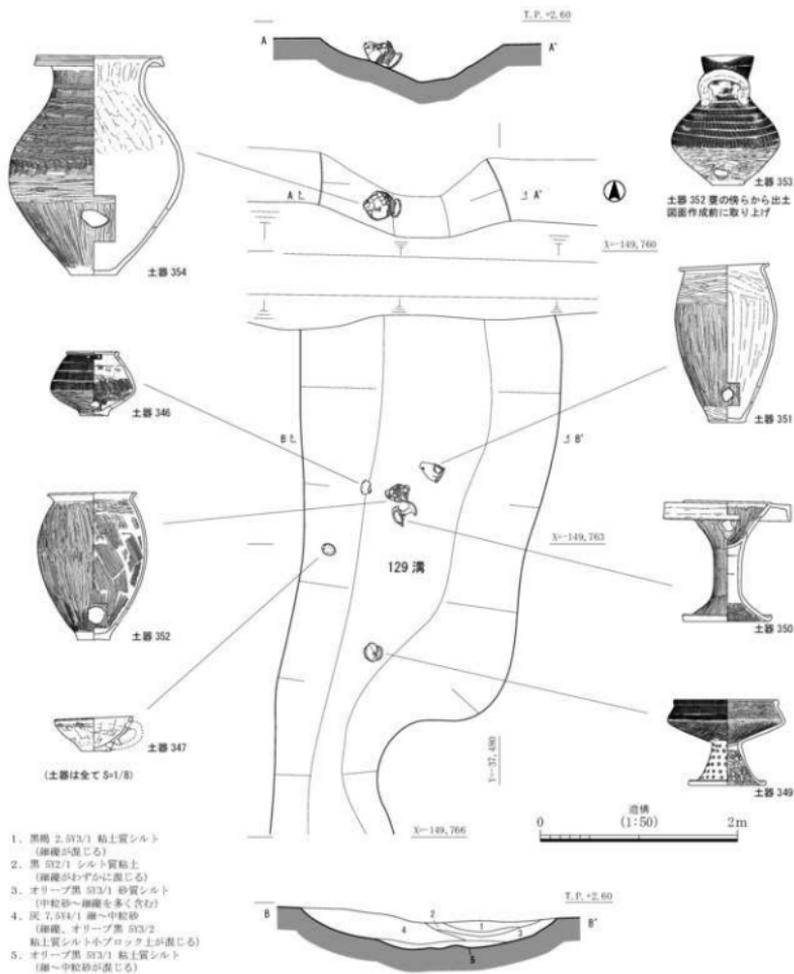
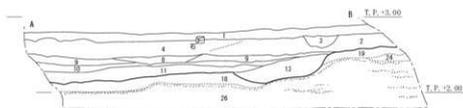


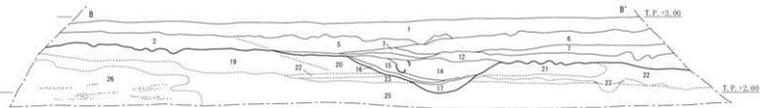
図31 129溝土器出土状況平面・断面図

方形周溝墓 1 北方南北断面



1. 埴床黄~灰黄層 2. 灰4/2~10/14/2 シルト  
【粗砂砂~細砂が多く含む。上面は多少により褐色に着色】
2. 黒層 10/12/2 粘土質シルト【細砂を多く含む】
3. にい+黄層 10/14/1 粘土質シルト【黒層10/12/2 シルトブロック土が混じる】
4. にい+黄層 10/14/1 粘土質シルト【黒層が少なくなる】
5. にい+黄層 10/14/1 粘土質シルト
6. にい+黄層 2. 灰5/4~7. 灰4/4 中~粗砂砂【中~黒】
7. 埴床黄 2. 灰5/2 粘土【中~黒】
8. 灰オリーブ 灰5/2 粘土【黒層 2. 灰3/1 シルトブロック土が混じる】
9. 黒層 2. 灰3/1 粘土質シルト【細砂が混じる】

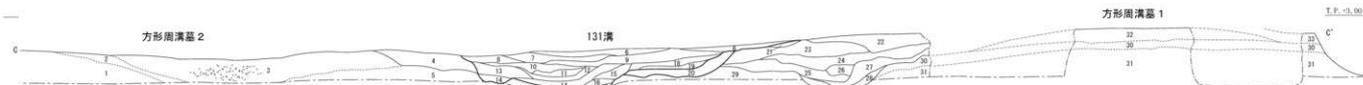
方形周溝墓 1 北方東西断面



10. 埴床黄 2. 灰4/2 中粗砂~細砂【黒層 2. 灰3/1 シルトブロック土を多く含む】
11. 黒層 10/14/1 粘土質シルト【粗砂砂~細砂が混じる】
12. 黒層 2. 灰3/2 粘土質シルト【粗砂砂~細砂が混じる】【埴床黄】
13. 灰 7. 灰4/1 細~中粗砂  
【細~小礫を多く含む。オリーブ黒 灰3/1 シルトブロック土が混じる】【埴床黄土】
14. 黒層 2. 灰3/1 粘土質シルト【黒層が混じる】【埴床黄土】
15. 灰 10/14/1 中粗砂【オリーブ黒 灰3/2 粘土質シルト小ブロック土。黒層が混じる】【埴床黄土】
16. オリーブ黒 灰3/1 粘土質シルト【細~中粗砂が混じる】【埴床黄土】
17. 灰 10/14/1 細~中粗砂【オリーブ黒 灰3/2 粘土質シルト小ブロック土が多く混じる】【埴床黄土】
18. 灰 7. 灰4/1~5/1 細~中粗砂

19. 灰 10/14/1 細~中粗砂  
【粗砂砂~細砂を多く含む。黒層 2. 灰3/1 シルトブロック土が混じる】
20. 19より中粗砂~細砂が少くなる】
21. 灰オリーブ 灰5/2 細~中粗砂【黒層 2. 灰3/1 シルトブロック土が混じる】
22. 黒層 2. 灰3/2 粗砂砂~小礫
23. オリーブ黒 10/14/1 粘土質シルト  
【質化したような粘粉質土を多く含む。細~中粗砂が混じる。他の箇所よりも砂質。西にわたって砂質化】
24. 灰 7. 灰5/1 細~中粗砂
25. 埴床黄~灰 灰5/1/1 細~中粗砂
26. 黄灰~黄層 2. 灰5/1/1~5/2 粗砂砂~小礫

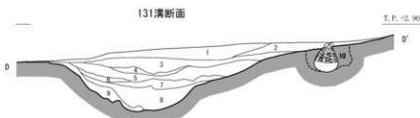
方形周溝墓 2~131溝~方形周溝墓 1 東西断面



1. 埴~埴床黄 7. 灰4/4~2. 灰3/2 粗砂砂~細砂【中黒】
2. 灰 10/14/1 シルト質粘土【中黒】
3. にい+黄層 2. 灰3/1 中粗砂  
【砂中粗砂。灰 10/14/1 粗砂シルトブロック土が混じる】【中黒】
4. 埴床黄 2. 灰3/2 シルト質細~中粗砂  
【黒層 2. 灰3/1 粘土質シルトブロック土が少し混じる】【埴床黄土】
5. 灰 10/14/1 シルト質細~中粗砂【中黒】
6. 黒層 2. 灰3/2 粘土質シルト【細砂が少なくなる】
7. 黒層 2. 灰3/2 粘土質シルト【細砂が多く混じる】
8. 埴床黄 2. 灰3/2 粘土質シルト【割合が多少異なる】
9. オリーブ黒 灰3/1 粘土質シルト【細~小礫を多く含む】
10. オリーブ黒 灰3/1 シルト質粘土【灰が混じる】
11. 黄灰 2. 灰3/1 シルト質粘土【灰が多少異なる】
12. オリーブ黒 灰3/1 粘土質シルト【細~小礫を多く含む】

13. 黒層 10/12/2 粘土質シルト【細砂が混じる。割合が異なる】
14. 黄灰 2. 灰4/1 シルト質粘土【埴床黄土。灰オリーブ黒 灰5/1/1 細~中粗砂ブロック土が混じる】
15. オリーブ黒 灰3/1 粘土質シルト【中粗砂~細砂を多く含む】
16. オリーブ黒 灰3/2 細~小礫【粘土質シルトが混じる】
17. 灰 10/14/1 細~中粗砂【シルトが混じる】
18. 黒層 2. 灰3/1 粘土質シルト
19. 灰 10/14/1 中粗砂【灰オリーブ 7. 灰5/2 細~中粗砂を多く含む】
20. 灰オリーブ 7. 灰5/2 細~中粗砂
21. オリーブ黒 2. 灰3/2 砂質シルト【細砂を多く含む】
22. 黄層 2. 灰3/2 粘土質シルト【黒層が少なくなる】
23. 黄層 2. 灰3/2 粘土質シルト【黒層が少なくなる】
24. 黒層 2. 灰3/2 細~中粗砂
25. 灰 10/14/1 シルト質粘土

26. 灰オリーブ 灰4/2 細~中粗砂【灰オリーブ 灰5/2 粘土質シルトを含む】
27. 灰オリーブ 灰4/2 細~中粗砂【埴床黄土。細砂を多く含む】
28. 灰 10/14/1 シルト質粘土
29. 灰オリーブ 7. 灰5/2 細~中粗砂【中黒】
30. 灰オリーブ 灰5/2 細~中粗砂【中黒】
31. 黄層~灰黄 2. 灰5/1/1~6/2 粗砂砂~小礫【砂質】
32. 埴床黄 2. 灰5/2 細~中粗砂【細~小礫を多く含む】【中黒】
33. 黒層 10/14/1 砂質シルト【粗砂砂~細砂を多く含む】【中黒】

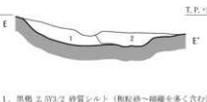


131溝断面

1. 灰 灰4/1 粘土
2. 埴オリーブ黒 2. 灰3/3 粘土質シルト【粗砂砂~細砂が混じる】
3. 黒 灰2/1 粘土質シルト【粗砂砂~細砂を多く含む】
4. オリーブ黒 灰3/1 シルト質粘土【粗砂砂~細砂が混じる】
5. 黒層 2. 灰3/1 粘土質シルト【粗砂砂~細砂を多く含む】
6. 灰オリーブ 灰4/2 細~中粗砂【オリーブ黒 灰3/1 粘土質シルトが混じる】
7. 粘土質粘土。細~小礫
8. オリーブ黒 灰3/1 粘土質シルト【細~中粗砂を多く含む】
9. 黒 2. 灰3/2 細~中粗砂【オリーブ黒 灰3/1 粘土質シルトブロック土を多く含む】
10. 灰オリーブ 灰3/2 細~中粗砂  
【オリーブ黒 灰3/2 粘土質シルトブロック土と細砂が混じる】

0 (1:50) 2m

(137溝) 断面



1. 黒層 2. 灰3/2 砂質シルト【粗砂砂~細砂を多く含む】
2. 黒 2. 灰2/1 粘土質シルト【粗砂砂~細砂が混じる】

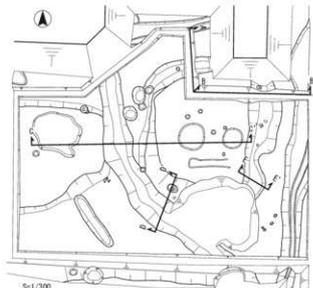


図32 方形周溝墓 1 周辺遺構断面図

西辺の周溝については、以下に報告する古墳時代後期になって開削された131溝の影響により、輪郭が不明瞭となっている。南辺部についても、近世以降の攪乱によって大きく削られているが、僅かに残った南西隅の墳丘裾部からは、流水紋を施した壺(360)と円形浮紋を付した壺(357)の2点の土器が出土している。前者については、明らかに埋められたように、下半部が0.5mほど埋まった状態で直立していた。掘方については、辛うじて長径0.86m、短径0.6mの東西に長い楕円形の輪郭を検出したが、埋土が周囲の土と非常によく似たオリブ黒色の粘土質シルトブロック土や細礫混じりの、灰オリブ色細～中粒砂であったため、輪郭は不明瞭で、検出が非常に難しかった。なお遺物取り上げ時には、他の遺物とは分け、140土坑として取り上げているが、本書では、141溝出土としてまとめた。後者については周溝内に横転したような状態で出土しており、その状況から、周溝として認識はできなかったが、141溝出土として取り上げている。

このほか墳丘の西半部では、わずかに残る盛土を除去した面で、南北方向の溝(507溝)を検出している。幅は0.7mから、広い部分で2.2mを測る。深さは約0.3mで、灰色のシルト質粘土が堆積する。墳丘構築の際に掘られた水捌け用の溝とも考えられるが、その機能の詳細は不明。遺物は出土していない。

以下、方形周溝墓1周辺から出土した遺物について報告する。

129・141溝から出土した供獻土器は、それぞれに微妙な様式差がみられるが、どれもⅣ-2様式を中心とした弥生時代中期後半に属するものである。

345は蓋である。346に伴うものか。生駒西麓産胎土。346は無頸壺で、口縁部は短く外側に折り返し、直下には2個一対の紐孔を開ける。内面はハケ調整。外面上半は4条の簾状紋の後、紋様帯間にミガキを施す丁寧な加飾。体部下半は5分割のミガキで、底部外面まで磨く。下半に穿孔あり。生駒西麓産胎土。347は把手付きの鉢。把手は欠損するが、口縁部直下には把手を接合した際の穿孔がみられる。体部は指オサエで成形し、内面は板状工具により整える。口縁部外面にはヨコナデを一周し、その後短いハケを施す。このハケは一部分にのみみられるもので、全体には及ばない。端部には刻み目を入れる。生駒西麓産胎土。348は台付鉢の脚台部。外面は縦ミガキ。把手は脚台部に挿入して接合する方法をとる。非生駒西麓産胎土。この1点は若干新しいⅣ様式後半の様相を示している。349は台付鉢。鉢体部はほぼ90度の角度で内側に折れ曲がり、口縁部は外側に折り返して段状となる。口縁端面には簾状紋を施す。上半外面にも2条の簾状紋があるが、下段側の紋様は列点紋風で、施紋の方向も上段側とは異なり、左から右へと為されている内外面はミガキ調整とする。脚台部には直径5mmの竹管紋が7段に施されている。内面側にまで貫通せず、内面は円形の影らみとなっている。生駒西麓産胎土。350は水平口縁の高杯。杯部と脚裾の外面はミガキだが、脚柱部のみハケ調整のままとする。脚裾内面はハケ。杯部下方には内側からの穿孔がある。生駒西麓産胎土。351・352は甕。351は細身の体部に90度近い角度で折れ曲がる短い口縁をもつ。外面は縦ミガキの後、下端部に横ミガキを加える。上端部にもやや雑な粗い横ミガキを施す。穿孔あり。生駒西麓産胎土。352の外面は縦ミガキであるが、下部には前段階のハケ目が残る。下端をヨコナデで仕上げる。内面はハケ調整で、頸部直下にのみ横ミガキを施す。穿孔あり。非生駒西麓産胎土。353は水差し形土器。口縁部に刻み目を入れ、頸部には6条の列点紋風の間隔の狭い簾状紋を施す。それに続く体部上半には、頸部よりは間隔の広い簾状紋が7条施されている。頸部の簾状紋はやや右上がりだが、体部の簾状紋はそれとは逆のやや左上がりとなっている。内面は磨滅しているが、ハケ目が確認できる。体部下半に穿孔あり。非生駒西麓産胎土。354は摂津産の広

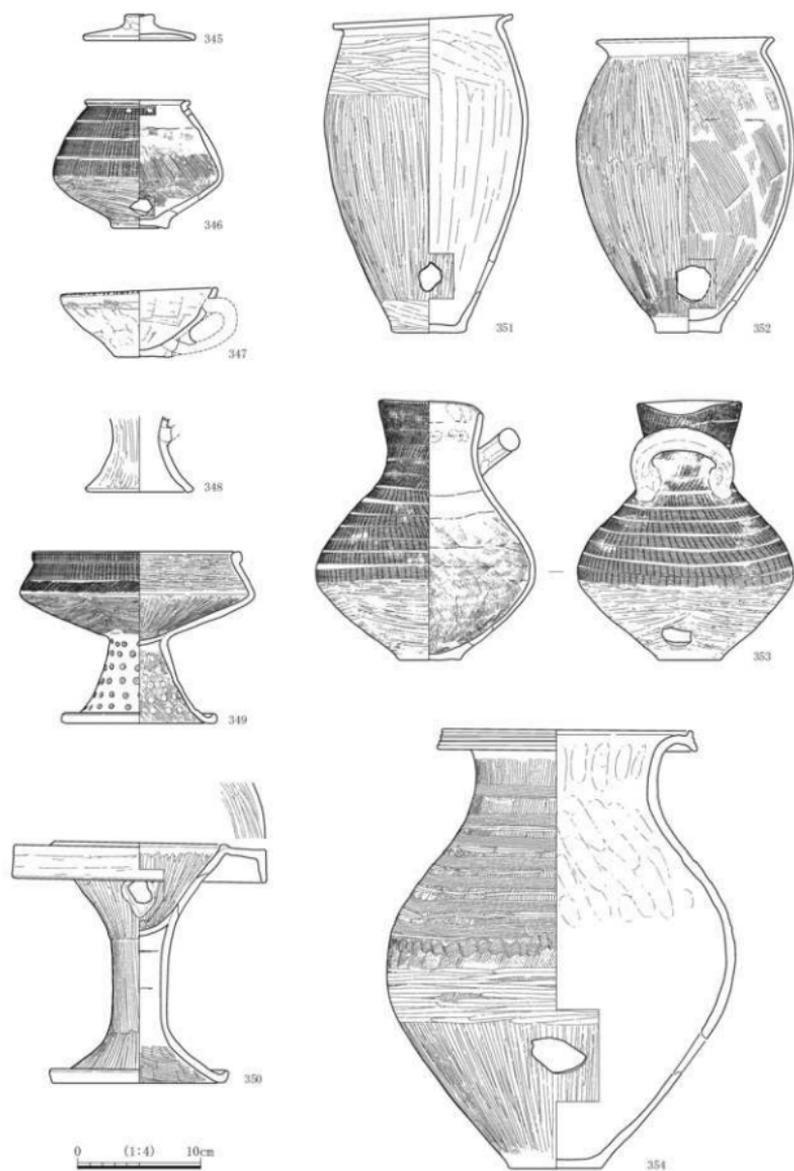


图33 129溝出土遺物実測図

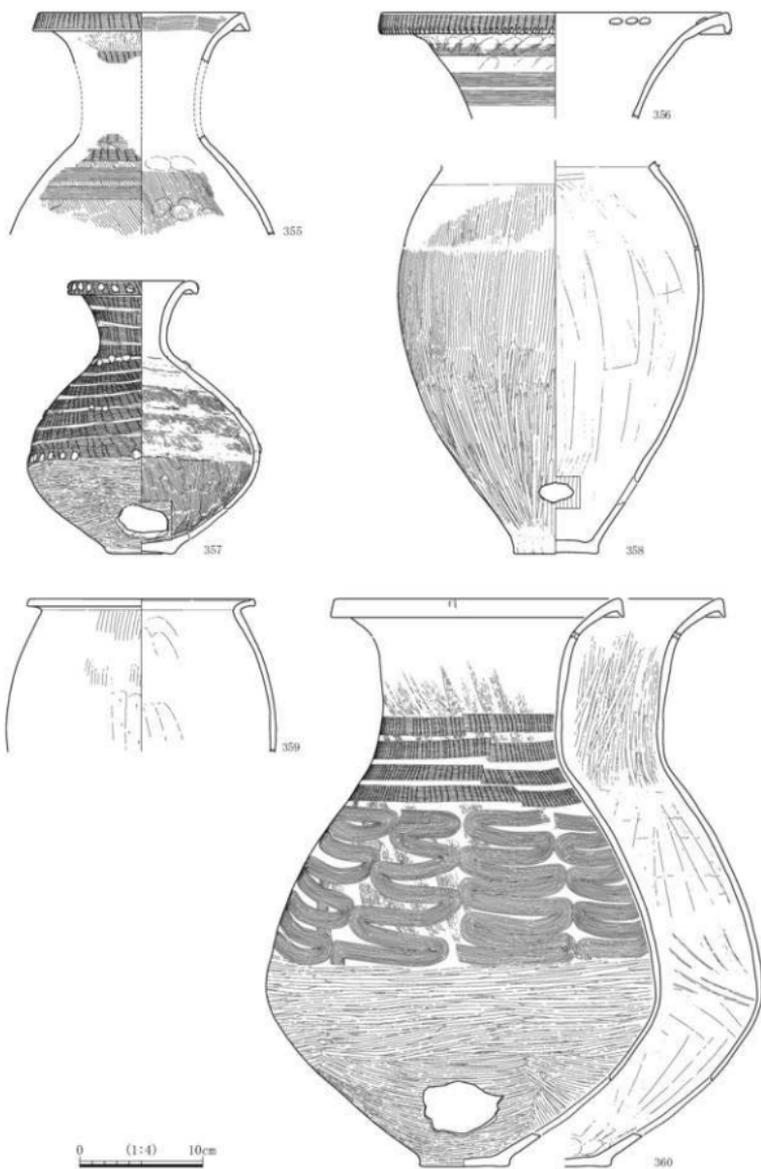


图34 141清出土文物实测图

口壺。口縁部に凹線を3条めぐらす。外面はハケ調整の後、頸部から体部上半にかけて櫛描直線紋を7条、その下に波状紋を1条施す。紋様帯の間には1～2条のヘラミガキが認められる。波状紋下の体部中央付近は横方向のミガキで、下半部は縦方向のミガキ。頸部から体部上半の内面には指頭瓦痕が明瞭に残る。体部下半の一部に薄く煤が付着する。穿孔あり。355・356は広口壺。355は接合しない口縁部片と体部片とがある。口縁部は外側に向かって垂下し、端面に簾状紋を刻む。頸部にはハケ目の上に簾状紋を、それに続く体部上部には直線紋を施し、頸部下端にはさらに扇形紋を付ける。口縁部内側には1条のハケ目が認められる。体部内面もハケ調整。外面には煤が付着する。生駒西麓産胎土。356の口縁部は垂下し、下端部に刻みを入れる。端面には簾状紋を施す。内面には3個一単位の円形浮紋を付け、頸部は櫛描直線紋で飾る。生駒西麓産胎土。357は細頸壺。口縁は垂下し、端面には簾状紋を施した後、円形浮紋を付ける。頸部から体部上半は12条の簾状紋で飾った後、紋様帯間にミガキを施し、さらに頸部下・体部上・体部中位の3箇所に円形浮紋を付ける。体部上部の浮紋は2個一単位として9箇所に、体部中位の浮紋は5～6個を一単位として6箇所に付されている。体部下半は横方向のミガキで、内面はハケ調整である。穿孔あり。非生駒西麓産胎土。358・359は甕。358は接合しない体部上半の破片もあり、頸部まで復元可能。外面下半はミガキで、上半は目の粗いハケ目。内面は板状の工具による縦方向のナデである。穿孔あり。外面のほぼ全体に厚めの煤が付着し、内面下部にもこびり付いた焦げが認められる。非生駒西麓産胎土。359は外面下半がケズリ、上半は粗いハケの後ナデとする。部分的にタタキのような痕跡も認められるが、ナデ消されて不明瞭である。非生駒西麓産胎土。360は広口壺。頸部以下と接合はできないが口縁部の小片がある。口縁部は垂下し、端面には僅かに簾状紋の痕跡が認められる。頸部下半にはハケ調整の後、4条の簾状紋。体部上半は流水紋で飾る。流水紋は4段の縦型流水紋が8連描かれている。それぞれ連結はしない。始点と終点がバラバラで、反転部の位置もずれている。正確な割付けができておらず、緻密さに欠けるやや雑な施紋である。櫛原体の幅は1.4cm。外面下部はミガキで、やや大きめの穿孔がある。黒斑が明瞭で、体部下半には煤が付着する。体部内面はハケ調整で、頸部内面には縦方向のミガキが施されている。生駒西麓産胎土。

**方形周溝墓 2** 方形周溝墓1の西側、2区との調査区境に位置する。132溝を南辺周溝、184溝を北辺周溝とする方形周溝墓で、西側の約3分の1は2区での検出となった。東辺部の状況については、方形周溝墓1で報告したとおり、古墳時代に掘られた131溝によって削られており、詳細は明らかでない。

南辺周溝である132溝は、2区側では外側の肩部が検出できているが、この1区側では、ちょうど調査区周囲にめぐらせた側溝の位置にあっていたこと、また周溝底が外側に向かって非常になだらかな傾斜となっていたことから、肩部の位置がはっきりとせず、現地では正確には検出できていない。平面図のコンタを見ると、周溝の心とその外側とは、高低差が0.15mほどあり、幅が3m程度であったことが辛うじて復元できる。墳丘部と周溝底との高低差は約0.4mで、埋土は下層が粗～極粗粒砂が混じる黒色シルト質粘土、上層が粗～極粗粒砂を多く含むオリブ黒色粘土質シルトである。

なお、南東隅の墳丘裾からは、供献土器(361)が1点出土している。ほぼ完形に復元できる1個体分の土器であったが、方形周溝墓1出土土器のような完形品ではなく、潰れた状態であった。

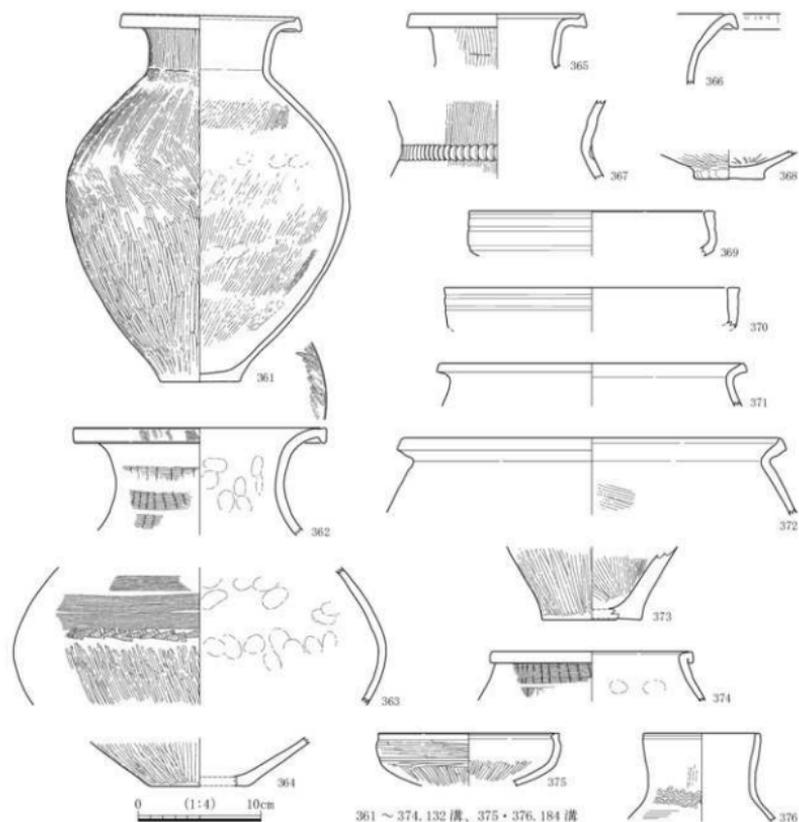
北辺周溝(184溝)についても、こちらは調査区外のため、外側の肩部が検出できていない。周溝の心と思われる箇所と墳丘部との高低差は約0.2m強で、埋土はシルト混じりの暗オリブ灰色中～粗粒砂や、粗～極粗粒砂混じりの黄灰色粘土質シルトである。

この1区の調査段階では、墳丘は低い高まりとして検出できるものの、平面形も整っておらず、また

墳丘裾から土器が1点出土した以外は、方形周溝墓1のように多くの供献土器を伴っているわけでもなかったため、方形周溝墓であるという根拠に乏しく、方形周溝墓と断定するには至らなかった。2区での調査によって土器棺等が検出され、方形周溝墓であることが確実となった。このため遺構の詳細については次の2区の節で報告することとする。

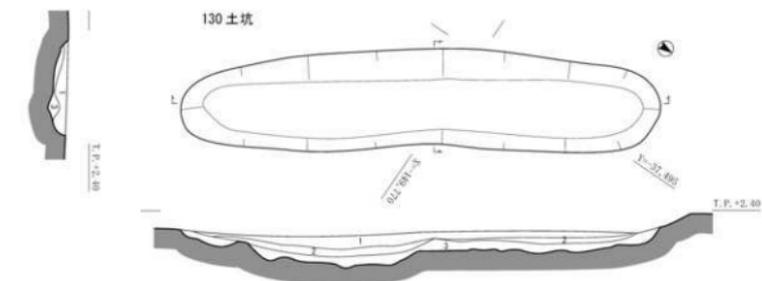
132溝から出土した土器も、それぞれには若干の様式差が認められるが、方形周溝墓1出土の土器と同じく、Ⅳ-2様式を中心とした弥生時代中期後半に属するものである。

361は墳丘裾から出土した広口壺である。下半に穿孔があったと思われるが、その周辺が欠損しており現状では確認できない。外面下半はミガキ。上半から頸部及び内面はハケ調整とする。口縁部まで厚めの煤が付着する。生駒西麓産胎土。362～364はおそらく同一個体と思われる広口壺片。口縁部外面は波状紋で、上面を扇形紋で飾る。頸部には籐状紋を施す。体部最大径付近には連続の扇形紋を配し、

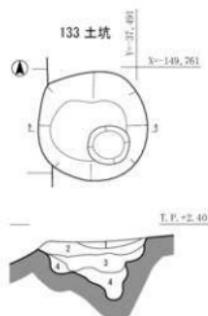


361～374、132溝、375・376、184溝

図35 132・184溝出土遺物実測図



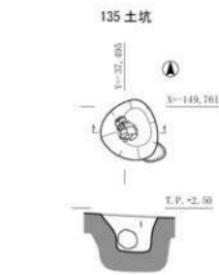
1. 黒 2.512/1 粘土質シルト (粗粒砂～細礫が混じる)
2. 黒 10.82/1 粘土質シルト
3. オリーブ黒 0.53/1 粘土質シルトブロック上と暗オリーブ灰 2.5614/1 細～中粒砂ブロック上の混合



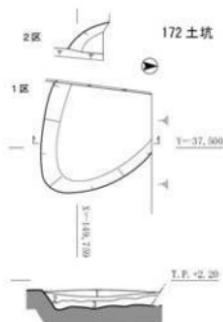
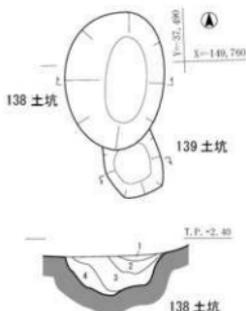
1. 黒 512/1 粘土
2. 黒色 2.513/1 粘土質シルト (中～細粒砂が混じる)
3. オリーブ黒 0.52/1 粘土質シルト (中～粗粒砂が混じる)
4. オリーブ黒 0.53/1 粘土質シルトブロック上と暗オリーブ灰 2.5634/1 細～中粒砂ブロック上の混合



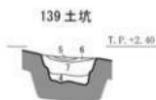
1. 黒 2.512/1 粘土質シルト (粗粒砂～細礫が混じる)



1. オリーブ黒 0.53/1 粘土質シルト



1. 黒 512/1 粘土質シルト (粗～細粒砂が混じる。炭化した植物遺体を多く含む)
2. オリーブ黒 0.53/1 シルト質粘土
3. オリーブ黒 0.52/1 粘土質シルトブロック上と暗オリーブ灰 2.5634/1 細～中粒砂ブロック上の混合



1. 灰 7.514/1 粘土
2. 黒 512/1 粘土
3. オリーブ黒 0.53/1 粘土質シルト (中～粗粒砂が混じる)
4. オリーブ黒 0.53/1 粘土質シルトブロック上と暗オリーブ灰 2.5614/1 細～中粒砂ブロック上の混合
5. オリーブ黒 2.514/4 粗粒砂～細礫
6. オリーブ灰 0.515/1 細～中粒砂
7. オリーブ黒 0.53/1 シルト質粘土 (中～粗粒砂が混じる)



図36 130・133～135・138・139・172土坑平面・断面図

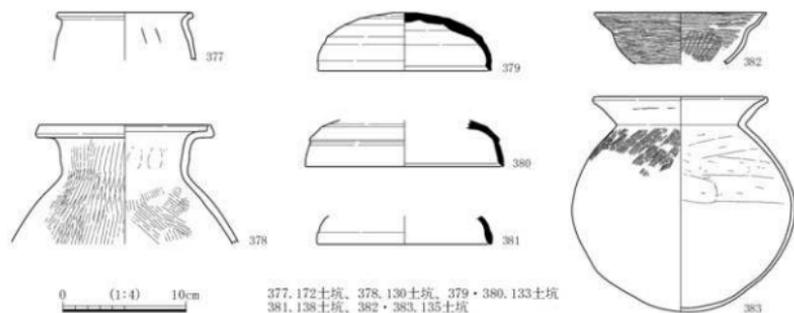


図37 130・133・135・138・172土坑出土遺物実測図

それより上に直線紋を施す。体部下半はミガキとする。下半部には煤が付着する。非生駒西麓産胎土。365～368は広口壺。365は頸部外面に粗いハケ目がみられる。130土坑出土の広口壺(378)と同一個体か。366は口縁部外面には波状紋、もしくは籐状紋と思われる紋様が観察できるが、磨滅しており判断が難しい。両者は生駒西麓産胎土。367の体部外面はハケ調整で、頸部に指頭圧痕を加飾する。非生駒西麓産胎土。368は外面ミガキ。内面には板ナデ時の工具痕が残る。生駒西麓産胎土。369・370は受口状口縁壺の口縁部片。外面には凹線紋がめぐる。両者ともに非生駒西麓産胎土。371～373は甕。371はやや古手のⅢ様式か。生駒西麓産胎土。372と373は同一個体と考えられる破片である。口縁部は上下に僅かに摘み出す。体部外面はミガキで、内面は粗いハケ目。非生駒西麓産胎土。374は鉢。口縁部は無紋で、体部に籐状紋を施す。生駒西麓産胎土。131溝出土の鉢(397)と同一個体か。

184溝出土の2点(375・376)は方形周溝墓1出土のものよりもやや新しいⅣ様式後半の様相を示す。375は椀形の杯部をもつ高杯で、口縁部を内側に肥厚させて面をもたせる。内外面はミガキで、外面屈曲部に凹線を施す。非生駒西麓産胎土。376は水差し形土器。口縁部に1条の凹線紋を入れ、頸部最下部に雑な波状紋、その下に直線紋を施す。波状紋より上は非常に不明瞭であるが、ミガキと考えられる痕跡が認められる。生駒西麓産胎土。

**130土坑** 方形周溝墓2の南側、周溝内に位置する。調査では周溝下面で検出しているが、周溝埋土上面での検出が不十分、また調査者の注意不足のため、その段階で見落としていたという可能性もある。以下に報告する土坑と同様に、周溝埋土上面で検出できる古墳時代前期の遺構である可能性も考えておきたい。平面形は長さ1.0m、幅4.9mの細長い楕円形で、主軸は座標北から西に大きく振れる。深さは約0.2～0.4mで、埋土は下層からオリブ黒色粘土質シルトと暗オリブ灰色細～中粒砂ブロック土の混合土、黒色粘土質シルト、粗粒砂～細礫混じりの黒色粘土質シルトの3層である。

古墳時代の遺物は出土しておらず、弥生時代中期後半の土器(378)が出土している。Ⅳ様式後半に位置する広口壺で、口縁部は上方に折り曲げ、体部内外面及び頸部外面には目の粗いハケを施す。132溝出土の広口壺(365)と同一個体か。生駒西麓産胎土。

**133土坑** 方形周溝墓1と2の中間に位置する。平面形は直径約1.1mのほぼ円形を呈する。深さは約0.3mで、一部は二段掘り状に更に0.3mほど深くなる箇所がある。埋土は下層からオリブ黒色粘土質シルトブロック土と暗オリブ灰色細～中粒砂ブロック土の混合土、中～極粗粒砂混じりのオリブ黒色粘土質シルト、中～極粗粒砂混じりの黒褐色粘土質シルト、黒色粘土である。

6世紀代の須恵器蓋が出土している。379は6世紀中葉、380は6世紀前半に位置する。

**134土坑** 方形周溝墓1の北西隅の、周溝(141溝)上に位置する。周溝埋土上面から検出できる土坑で、平面形は直径0.6~0.65mの円形を呈する。深さは約0.2mで、埋土は粗粒砂~細礫が混じる黒色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

**135土坑** 方形周溝墓2の北東部に位置する。平面形は直径約0.6mのほぼ円形で、深さは約0.4mを測る。埋土はオリブ黒色粘土質シルトで、内部から古墳時代前期の甕(383)がほぼ完全な形で出土した。

383はほぼ完形の庄内式甕である。口縁端部は上方に拡張するが、丸味があまりシャープでない。体部は球形で、肩部には目の細かい右上がりのタタキ。内面上半はケズリで頸部内面がシャープな稜となる。外面下部の約3分の2の範囲には厚い煤が付着する。生駒西麓産胎土。このほか布留式期前半の有段口縁鉢(382)も出土している。内外面に細いミガキを施す。

**138土坑** 133土坑のすぐ北側に位置する。平面形は東西1.0m、南北1.4mの南北にやや長い楕円形を呈する。深さは約0.4mで、埋土は133土坑と同じオリブ黒色粘土質シルトブロック土と暗オリブ灰色細~中粒砂ブロック土の混合土、中~極粗粒砂混じりのオリブ黒色粘土質シルトなどで、最上層には灰色粘土が堆積する。

6世紀後半の須恵器蓋(381)が出土している。

**139土坑** 138土坑の南側に接する。平面形は歪んだ長方形で、東西0.56m、南北0.65m以上を測る。深さは0.3mで、埋土は最下層にオリブ黒色の粘土質シルトブロック土と暗オリブ灰色の細~中粒砂ブロック土の混合土があり、その上が中~極粗粒砂が混じるオリブ黒色シルト質粘土、オリブ灰色細~中粒砂、オリブ褐色極粗粒砂~細礫となる。

遺物は出土していない。

**172土坑** 方形周溝墓2の北辺周溝(184溝)内の、2区との調査区境に位置する。遺構の西端部は2区での検出で、北端部は調査区外へと広がる。平面形は尖り気味の楕円形を呈する。周溝埋土を除去した溝の底面で検出できる土坑で、深さは0.2mを測る。埋土は下層からオリブ黒色粘土質シルトブロッ

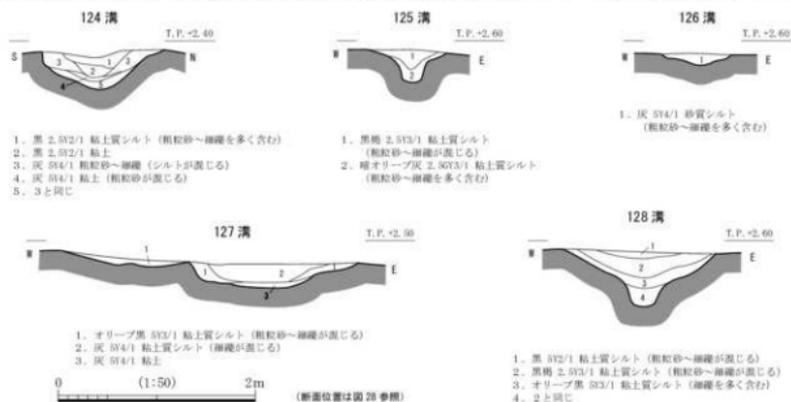


図38 124~128溝断面図

ク土と暗オリーブ灰色細～中粒砂ブロック土の混合土、オリーブ黒色シルト質粘土、炭化した植物遺体を多く含む粗～極粗粒砂混じりの黒色粘土質シルトである。

弥生時代中期後半の甕(377)小片が出土している。生駒西麓産胎土。

**124溝** 貯留槽部の北端部に位置する。東西方向の溝で、幅1.2～1.5m、深さ約0.4mを測る。埋土はシルト混じりの粗粒砂～細礫や粗粒砂混じりの灰色粘土・黒色粘土などである。以下に報告する173溝と東側の一部が重複し、173溝に切られる。

溝からは弥生時代後期の甕(401)が出土している。

**125溝** 貯留槽部のほぼ中央に位置する南北溝である。幅は約0.3～0.6mであるが、南端部ではやや広がり約1.7mとなる。深さは約0.4mで、埋土は粗粒砂～細礫を多く含む暗オリーブ灰色粘土質シルトや粗粒砂～細礫混じりの黒褐色粘土質シルトなどである。次に報告する126溝と交差し、126溝を切る。

遺物は出土していない。

**126溝** 125溝に近接する南北溝である。南端部では125溝の西側に位置するが、上記のとおり途中で125溝と交差し、貯留槽部中央付近では125溝の東側となる。幅は0.65～0.8mで、深さは0.1m程度と浅い。埋土は粗粒砂～細礫を多く含む灰色砂質シルトである。

遺物は出土していない。

**127溝** 125溝の東側に並行する。幅約1～1.2mの南北溝で、東側の約半分がさらに一段深くなる二段掘りの構造を呈する。深さは西半が約0.1～0.2m、東半が約0.4mで、埋土には底に灰色粘土があり、その上に粗粒砂～細礫混じりのオリーブ黒色粘土質シルトや灰色粘土質シルトが堆積する。

遺物は出土していない。

**128溝** 方形周溝墓1のすぐ東側に位置する。幅は南壁寄りでは約1.3～1.4mであるが、北に向かって徐々に広がり3m以上になる。また溝の中心にはさらに幅約0.4～0.6mの一段深い掘り込みがあり、漏斗状の二段掘りとなっている。深さは浅い側で約0.1～0.2mで、二段掘りの底までは約0.7mを測る。埋土は二段掘り状の底に粗粒砂～細礫混じりの黒褐色粘土質シルトがあり、その上に細礫を多く含むオリーブ黒色粘土質シルトや粗粒砂～細礫混じりの黒色粘土質シルトなどが堆積する。

遺物は出土していない。

**131溝** 方形周溝墓1と2の間に位置する。調査当初は方形周溝墓1の周溝になるものと考え、調査を進めていたが、出土遺物から、古墳時代後期になって周溝とほぼ同じ位置に新たに開削された溝であることが判明した。溝は調査区北壁から方形周溝墓1と2の間を通り、周溝墓1の南西隅をかすめながら、調査区の南側へと抜けている。溝底のレベルにほとんど差がみられないため、流れの方向は明らかでない。幅は約1.7～2.5m、深さは深い箇所約0.55mを測る。埋土は細～小礫を含む黒褐色やオリーブ黒色の粘土質シルト、あるいは細～中粒砂、細～小礫などである。

方形周溝墓の周溝上に掘られた溝であることから、埋土中には当然多くの弥生土器を包含するが、6世紀後半や7世紀初頭の須恵器も確実に数点含まれている。

384・385は須恵器蓋で、384は7世紀初頭、385は6世紀後半に位置する。384は天井部外面にヘラ記号あり。385は口縁部のすぐ上に、焼成前の小穿孔がみられる。386は提瓶である。大型で、体部前面は丸く膨れ、カギ状の把手が付く。前面ではなく、ほぼ平らな背面側にカギ目を施し、前面はタクキの痕跡をヨコナデによってナデ消している。6世紀後半。387・388は土師器の椀。387は底部外面を削り、口縁部は軽く外反する。5世紀前半頃。388は平底で、外面には指頭圧痕が残る。暗紋はみられない。

口縁部は僅かに内湾する。6世紀末～7世紀前半。389・390は布留式期後半頃の土師器高杯。389は杯部上半が外反気味に外側に開く。内面は横ハケ。脚柱部内面は雑なケズリで、裾部との境に明瞭な稜をつくる。391は同期の複合口縁壺。受部と口縁部との境を垂下させ、複合口縁を強調する。口縁部内外面はハケ調整とする。生駒西麓産胎土。392・393は庄内式甕。392のタタキ目は非常に細かいが、393のタタキ目は粗い。両者とも頸部内面の稜はシャープである。共に生駒西麓産胎土。394～399は弥生時代中期の土器。397は中期後半の鉢。口縁部を外側に折り曲げ段状とし、口縁部直下の体部に縞状紋を施す。398・399はやや時期の上る中葉の甕。398は口縁部に僅かながら下方への垂下がみられる。外面は斜め方向のミガキ。394以外は生駒西麓産胎土。400はやや大型のサヌカイト剥片。

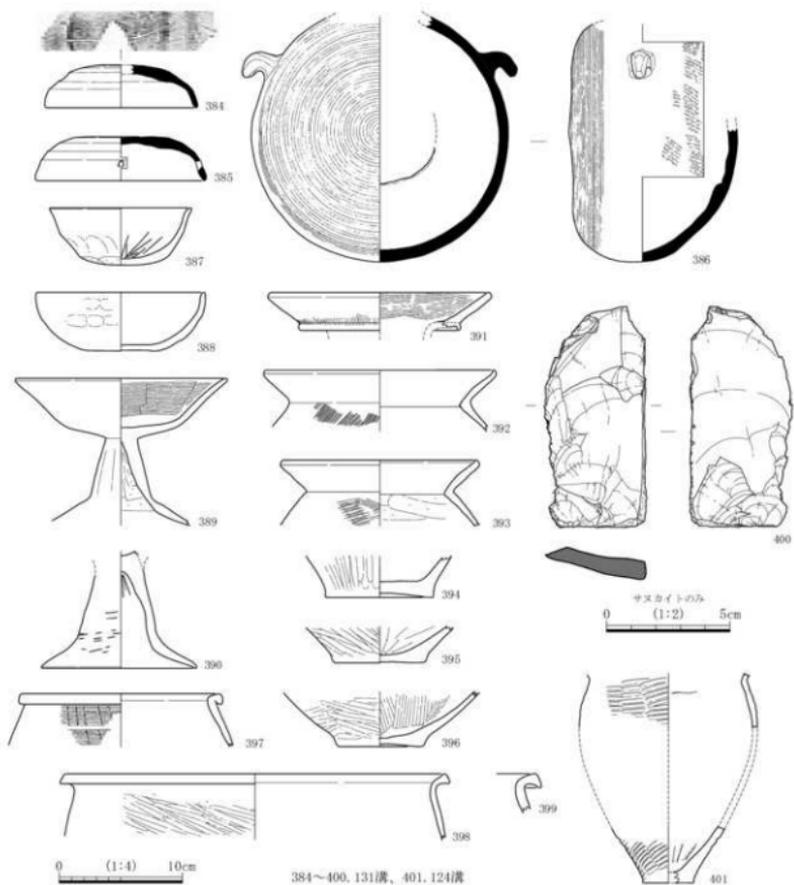


図39 124・131溝出土遺物実測図

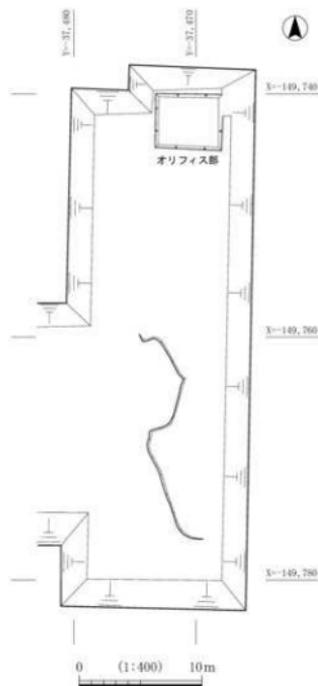


図40 1区6-1層下面平面図

り、水田畦畔の可能性も考えられた。ただし畦畔のように枝分かれしている様子は観察できず、また6-2層は面的な広がりがあるとはいえ、住棟部までも含んだ調査区全体には広がっておらず、途中6層の中で不明瞭となり、無くなってしまっていた。したがってこの蛇行する段を遺構とはせず、自然の堆積によるものと判断した。

**173溝** 方形周溝墓1の北辺周溝北側に約2m隔てて位置する。浅い部分と深い部分の二段掘りになっており、幅は約1~2.4m、深さは約0.05~0.15mを測る。この溝は斜行しながら貯留槽部の北半にぬけ、貯留槽部東壁際では幅7m以上の落ち込み状の大きなものとなる。ただし、方形周溝墓北側部分と貯留槽部東壁際部分とは、4b-1層下面検出の河道によって分断されているため、そのつながりははっきりとしない。別々の遺構である可能性もある。東壁付近では深さは0.5m以上で、埋土は細~極粗粒砂が混じるオリープ黒色粘土質シルト、細~中粒砂を多く含む灰色粘土質シルト、粘土質シルトを多く含む灰色細~極粗粒砂などである(図5)。

先述のとおり124溝を切っていることから、弥生時代後期よりも新しい時期の溝であることは確実である。131溝と同じく6世紀末~7世紀初頭の時期である可能性が高いが、遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでない。

#### 6. 6-1層下面(図40、写真図版9)

基本層序の節でも報告したとおり、貯留槽部の6-1層下面で、炭状に変質した植物遺体を多く含む細~中粒砂混じりの暗灰色シルト質粘土の薄層(6-2層)を検出した。この6-2層は面的な広がりをもち、一部が僅かな高低差のある段となって検出できた。段は大きく蛇行するものであ

### 第3節 2区の調査成果

#### 1. 2層下面(図41、写真図版10)

古代から中世の遺物を多く包含する3層の上面(=2層下面)検出遺構である。4区に近い北西隅部で、東西方向の細溝を数条と畦畔状の高まりを検出した。

溝はどれも幅0.2m程度の浅いものである。以下に報告する第3面検出のものと同様、方向や規模が同じであることから、第3面検出のものと同様、時期を隔てない時期の、畝溝のような耕作に伴う溝と考えている。畦畔状の高まりは北壁際にあり、溝と同じ方向で、0.1m程度の盛り上がりが見られる。

検出した溝からは古代の土師器・須恵器小片が出土している。

#### 2. 第3面(図42~58、写真図版10~13・38~40・43)

1区から続く古代から中世にかけての遺構面である。掘立柱建物2棟、塀1条のほか、土坑や溝、ピット、またそれらと重複する東西・南北方向、あるいは斜行する細溝を多数検出した。

**細溝** 調査区のほぼ全面に広がる溝である。後述する227・278溝の周辺は南南西-北北東方向であるが、それ以外の大半の溝は東西・南北方向を向いている。1区では基本的に東西方向の溝が南北方向の溝を切っていたが、2区では東西方向の溝が南北方向の溝を切っている箇所もあれば、それとは逆の箇所もありまちまちである。なお、後述する建物や塀の柱穴や多くのピット、土坑などと重複しており、図面上は細溝が切られているように表現しているが、実際には溝が柱穴や土坑を切った状況で検出している。

溝の幅は約0.2~0.4mのものが多いが、0.5m前後や、またそれ以上のやや幅広のものもみられる。深さは約0.1~0.2mを測る。中世の時期の、畝溝のような耕作溝と考えている。

細溝からは須恵器・土師器・瓦などが出土した。中世のものは含まれておらず、8世紀後半から9世紀初頭頃のもものが中心である。なお、現地では溝1条ごとに番号を付し遺物取り上げを行なっているが、遺構数が多く挿図が煩雑となるため、本書では1区同様に出土地点を227・278溝の東側と西側とに分け、細溝群としてまとめて図示している。

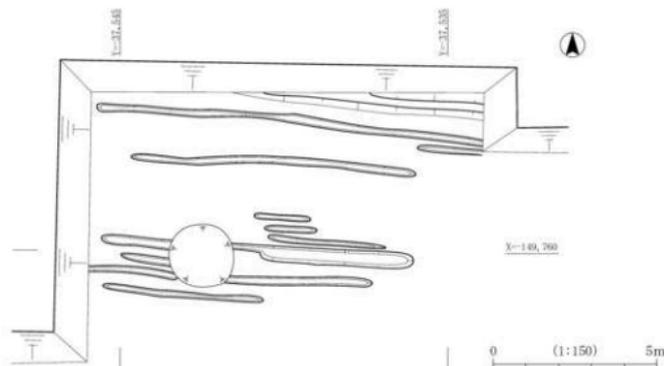


図41 2区北西隅2層下面検出遺構平面図



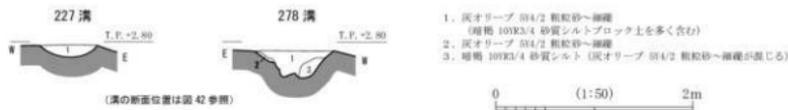
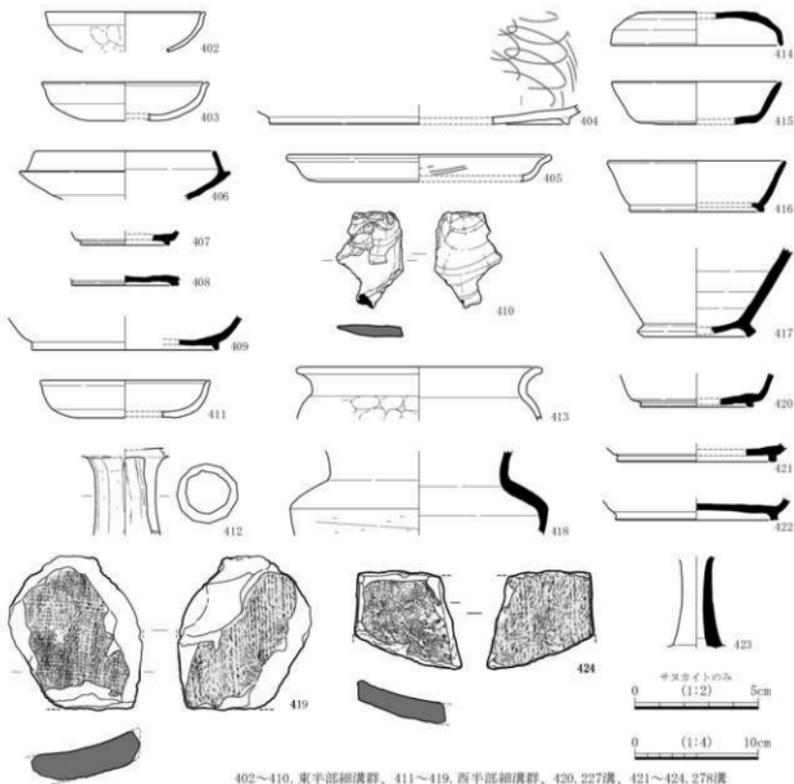


図43 227・278溝断面図

402・403は土師器碗。402は8世紀後半～9世紀初頭。403は口縁端部が外反し、内側に面をもつ。8世紀前半。404・405は8世紀前半～中頃の土師器皿。404の内面には丁寧に螺旋状の暗紋が施されている。405にも暗紋あり。406は6世紀後半の須恵器杯。407～409・415・416は古代の須恵器杯。415のみ杯A。407～409は8世紀後半。415・416は8世紀末～9世紀初頭頃。411は8世紀後半の土師器杯。412は8世紀前半～中頃の土師器高杯。11面の面取りをする。413は土師器甕。口縁端部は外反し、端部に水平な面をもつ。8世紀末～9世紀前半。414は7世紀前半の須恵器蓋。417・418は8世紀代の須恵器



402～410, 東半部細溝群, 411～419, 西半部細溝群, 420, 227溝, 421～424, 278溝

図44 第3面溝出土遺物実測図

壺。417は内面見込みを不定方向のナデで仕上げる。419は凸面縄タキの平瓦。凹面の布目はやや粗い。410はサヌカイトの剥片。

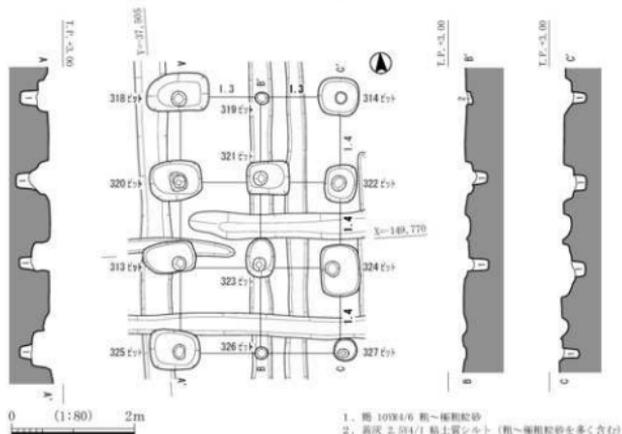
**227・278溝** 調査区中央やや東寄りに位置する。北壁から調査区中央付近までのびる溝を227溝、227溝の西側に若干ずれて、調査区中央付近から南壁までのびる溝を278溝とした。両者は同一の溝ではないが、南北に連続しており、一連の溝であったことがうかがえる。南南西-北北東方向に斜行しており、この2条の溝の周辺には、前述のとおり同じ方向の斜行溝が何条もみられる。ただし、他の溝よりも若干規模が大きく、また、斜行溝のある範囲のほぼ中心に、他の溝とはやや距離を空けて設けられている。このため227・278溝の東と西側には、他の場所に比べ細溝が稀薄となるエリアが広がっている。このように他の細溝とはやや性格を異にしている状況が読み取れる。他の細溝が実際の耕作によるものであるのに対して、この両溝は耕作地境に設けられた溝であった可能性が考えられる。

溝の規模は227溝が幅約0.55～0.6m、深さ0.1m強で、278溝が幅約0.4～0.8m、深さ約0.15～0.25mを測る。埋土は両者ほぼ同じで、暗褐色砂質シルトブロック土を多く含む灰オリープ色粗粒砂～細礫や、粗粒砂～細礫が混じる暗褐色砂質シルトなどである。

出土遺物は細溝群と同時期の須恵器・土師器・瓦などであるが、内黒の黒色土器小片も出土している。

420～422は須恵器杯。420は8世紀前半～中頃、421・422は8世紀末～9世紀初頭に位置する。423は8世紀代の水瓶。もっとも細くなった箇所ので外径2.3cmを測る。424は凸面縄タキの平瓦。

**掘立柱建物2** 東端部の調査区際に位置する。1区検出の掘立柱建物1のすぐ西側にあたり、掘立柱建物1とは柱通りで約2.5m隔てる。梁間2間、桁行3間の総柱立ちの南北棟である。柱間寸法は梁間が1.3m等間、桁行が1.4m等間で、主軸は座標北から僅かに東に振る。前述のとおり、図面上は柱穴が細溝を切っているように表現しているが、実際には細溝に切られた状態で検出している。柱穴は隅丸の方形ないしは長方形で、柱の掘っていた痕跡が直径0.2～0.25mの円形に認められた。この痕跡は柱掘方の底よりも深く達しており、掘方を完掘した状態でも明瞭に検出できた。なお、両側の妻柱については柱掘方が認められず、この柱痕跡のみが検出できた。柱掘方の埋土は粗粒砂～細礫を多く含む黒褐色砂



1. 掘 103X4/6 掘～掘立柱砂  
2. 溝次 2.034/1 粘土質シルト (掘～掘立柱砂を多く含む)

図45 掘立柱建物2平面・断面図

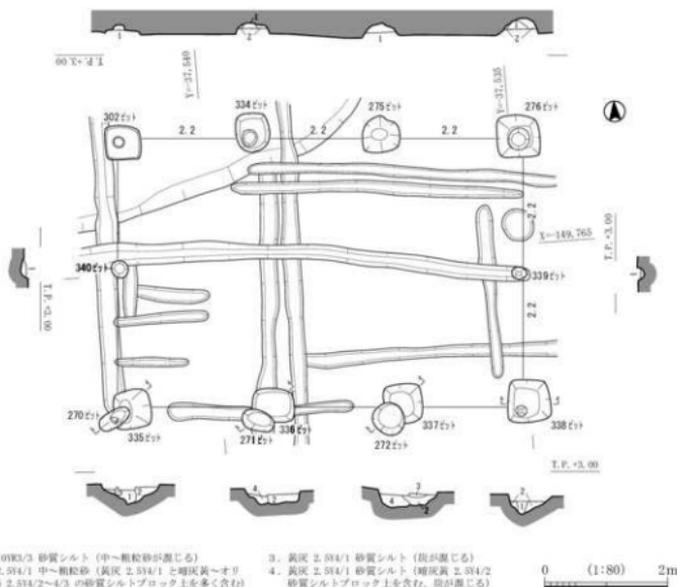


図46 掘立柱建物3平面・断面図

質シルトや、灰色粘土質シルト～にぶい黄褐色砂質シルトのブロック土を多く含む暗灰黄色粗粒砂～細礫で、柱痕跡の埋土は粗～極粗粒砂混じりの黄灰色粘土質シルトや、褐色粗～極粗粒砂である。東側の掘立柱建物1と主軸の振れが同じであり、同時並存していた可能性が高い。

建物の柱穴(313ピット)からは、8世紀後半～9世紀初頭頃と考えられる土師器の壺(426)が出土している。323ピット出土片と接合する破片で、頸部を強くヨコナデする。

**掘立柱建物3** 西半部のはほぼ中央に位置する。梁間2間、桁行3間のやや大型の東西棟である。柱間寸法は梁間が2.2m等間、桁行が2.2m等間で、座標北から僅かに東に振っている。柱穴は一辺約0.55～0.7mの隅丸方形を呈する。柱痕跡は不明瞭で、検出できるものどきないものがあった。また南の柱筋では、柱を抜き取ったと思われる痕跡が認められた。両側の妻柱については柱掘方が検出できず、直径約0.2～0.3mの円形の柱痕跡のみが残っていた。これによって据わっていた柱の直径が約0.2～0.3mであったことが復元できる。柱掘方の埋土は、暗灰黄～オリーブ褐色砂質シルトと黄灰色砂質シルトのブロック土を多く含む黄灰色中～粗粒砂で、柱痕跡は中～粗粒砂混じりの暗褐色砂質シルトである。

358土坑と一部重複するが、柱掘方は358土坑の埋土上面から検出できた。

建物の柱穴(276ピット)からは、8世紀後半の土師器杯(425)が出土している。

**掘立柱建物5** 調査区北西隅の調査区境に位置する。梁間2間の南北棟の、南妻柱筋のみの検出で、このうち2区では南西隅にあたる柱穴1基(361ピット)のみを検出している。残りの2基は3区での検出であるため、詳細については次の3区の節で報告することとする。

このほか、掘立柱建物3の周辺、特にその東側では多くのピットを検出している。直線的に数基が並

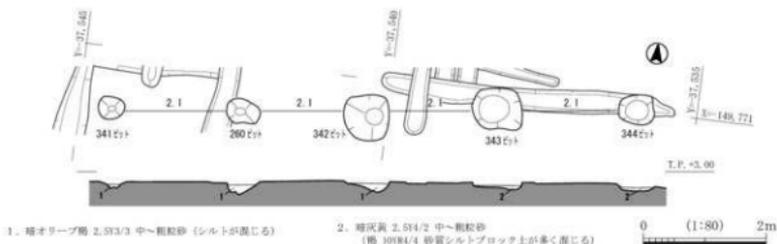


図47 堀1 平面・断面図

ぶ箇所もあるが、建物跡としてまとまるものはない。前述のとおり、図面上は建物の柱穴やピットが細溝を切っているように表現しているが、実際には柱穴やピットは細溝に切られた状態で検出している。

建物としてはまとまらない周辺のピットからもいくつか土器が出土している。

229ピットからは、8世紀後半～9世紀前半の須恵器甕(428)と12世紀代の瓦器椀(427)が出土している。428は口縁部が垂下するタイプで、頸部外面にタタキの痕跡が認められる。3～2層出土の破片と接合した。427は断面三角形の高台を付す。

354ピットからは8世紀代の土師器杯(430)、353ピットからは8世紀後半～9世紀前半頃の鈎付長胴甕(432)のほか、製塩土器(431)が出土している。

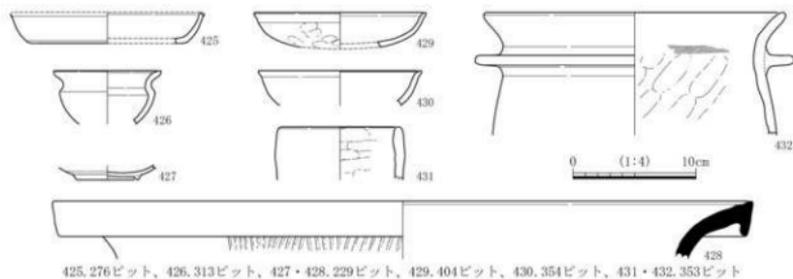
404ピットからは8世紀末～9世紀初頭の土師器椀(429)が出土している。

**堀1** 掘立柱建物3の南側に位置する。柱穴5基が直線的に並んでいたことから、堀と判断した。柱間寸法は2.1m等間である。ただし近接する掘立柱建物3や、これまでの掘立柱建物2棟とは振れが逆で、座標北から約7度西に振っている。柱穴の大きさも揃っておらず、隅丸方形の大型のものから、楕円形の小規模なものまで様々である。深さも0.1～0.2m程度と浅く、柱痕跡も検出できなかった。

これもまた、図面上は柱穴が東西・南北の細溝を切っているように表現しているが、実際にはそれらの細溝が柱穴を切った状態であった。

この堀に伴う柱穴からは遺物は出土していない。

**196・356土坑** 中央南壁際に位置する。遺構名称は2つに分けたが、本来は両者一体となった大型の土坑である。平面形は太いL字状を呈する。その西側へ張り出した箇所を356土坑、北側を196土坑とし



425. 276ピット、426. 313ピット、427・428. 229ピット、429. 404ピット、430. 354ピット、431・432. 353ピット

図48 第3面ピット出土遺物実測図

た。356土坑側は南北幅約4m、深さ約0.25mを測る。埋土は下層が細～中粒砂が少量混じる黄灰色粘土質シルトで、上層がにぶい黄褐色のシルトブロック土が混じる炭である。北側の196土坑とした箇所では東西幅10m強、深さ約0.35mを測る。埋土は下層が黄灰色シルト質粘土、上層が中粒砂～細礫混じりの褐灰～灰黄褐色砂質シルトである。196土坑の周縁部では、いくつかのピットと重複するが、西側の1基以外は、全て埋土掘削後の底面での検出であった。

196土坑からは、須恵器・土師器・黒色土器・瓦などのほか、灰釉陶器や緑釉陶器、また図示していないが、凝灰岩の切り石（写真図版40-f）や製塩土器も出土している。9～10世紀代のものが中心である。

434は8世紀末頃の須恵器壺G。底部は糸切りとする。435は須恵器椀。やや高い高台を付し、内面には墨が付着する。10世紀代か。436は9世紀前半の須恵器杯。437は須恵器甕。器壁は厚手で、瓦質土器のように焼成がamai。9世紀代。438は甕。439は8世紀後半～9世紀初頭の土師器杯。440はこの土坑から出土した遺物の中でもっとも新しい時期を示すものである。「て」の字状口縁の土師器皿で、10世紀末～11世紀前半に位置する。441は9世紀代の土師器皿。体部はヨコナデにより外反し、口縁端部を丸くおさめる。442・443は土師器椀。442は10世紀代、443は9世紀代のものである。443は体部下半に指頭圧痕が残り、口縁端部は丸くおさめる。外面には煤が付着する。444は土師器鍋の把手。ケズ

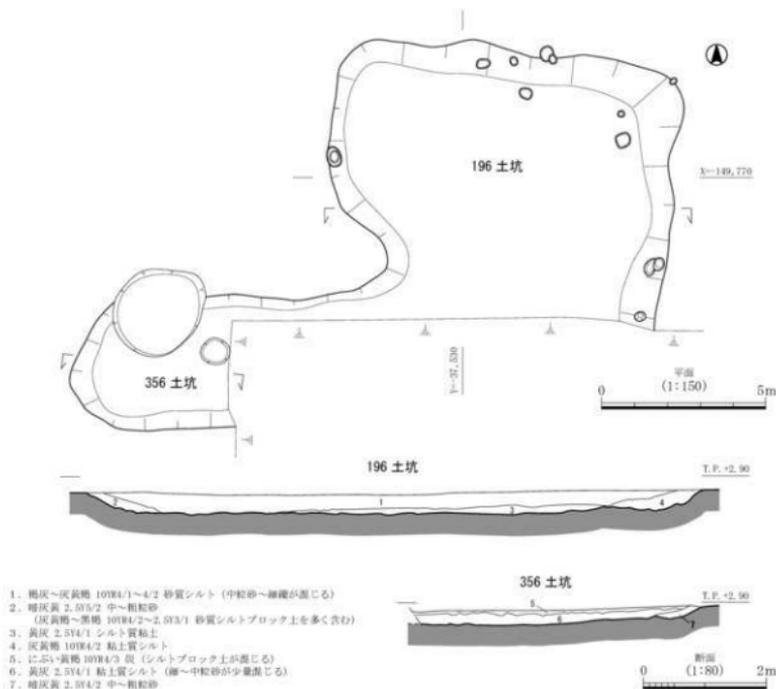


図49 196・356土坑平面・断面図

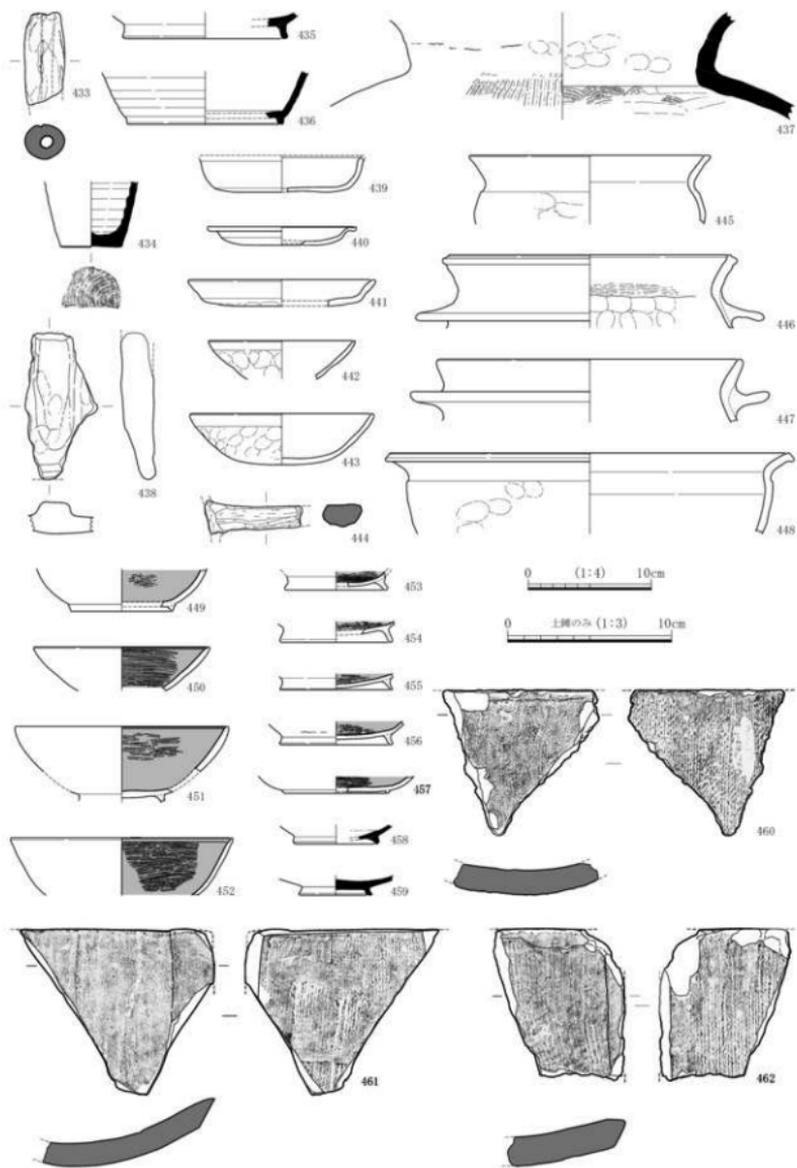


图50 196土坑出土遺物実測図

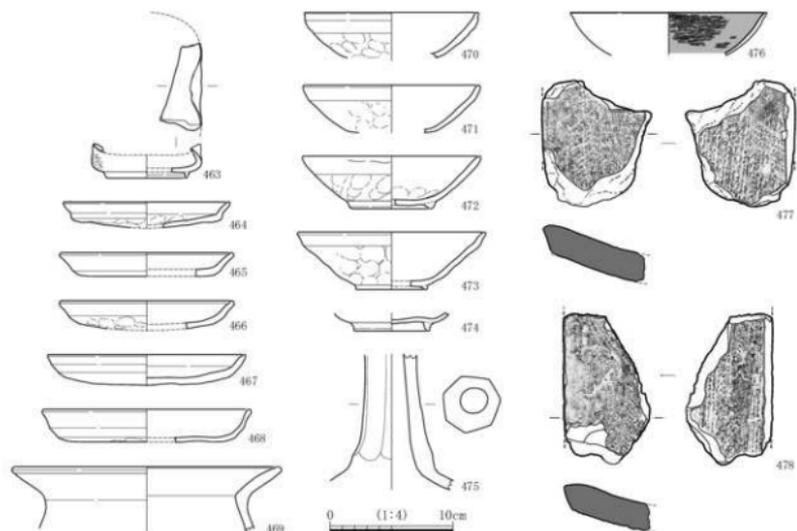


図51 356土坑出土遺物実測図

りによって面取りし、断面は半月状を呈する。平坦面が上を向く。下面側にのみ真黒な煤が付着する。445は8世紀末～9世紀の土師器甕。446・447は9～10世紀頃の土師器鈎付長胴甕。447の口縁部は短く、端部は細く丸くおさめる。446は体部が外側に膨らむ形態となる。448は土師器鍋。頸部外面にはヨコナデによる明瞭な段がつく。口縁端部には外傾する面をもつ。449～457は10世紀代の黒色土師器。全て内黒である。450・452は体部片で、450は密に内面を磨く。452は細いミガキで、やや隙間がみられる。両者ともに口縁端部内側に沈線がめぐる。そのほかは底部片で、453～456は高台が長いタイプで、449・457は高台が低く三角形を呈する。451は接合できないが体部片もある。口縁端部内側には450・452よりはやや細めの沈線がめぐる。458は灰釉陶器碗。器壁は薄手で、短い三日月高台を付す。見込み部以外の内面に施軸がみられる。10世紀前葉頃。459は9世紀後半～10世紀前半頃の緑釉陶器碗。高台は削り出しの輪高台で、外側にハの字に開く。見込みには僅かな段を有する。内面から高台外面までを施軸する。釉調は濃緑色である。460～462は凸面縄タタキの平瓦、433は土錐である。

356土坑からも196土坑と同時期の遺物が出土している。図示していないが、須恵器も含まれている。

463～468は土師器皿。463は本調査唯一の耳皿である。折り曲げ部外面にはミガキ状の工具痕がみられる。9世紀代。464～466は9世紀後半。464は体部外面が大きくくの字に屈曲する。467・468は二段のヨコナデで、口縁部は外反する。467の内面は破砕後に付着した煤により黒化している。11世紀代。469は9世紀代の土師器甕。470～474は高台付の土師器碗。指オサエで成形した後、口縁部をヨコナデする。472・473の内面には黒色土師器風に薄く煤が付着する。9世紀後半～10世紀。475は土師器高杯。脚柱部は7面の面取りをする。9世紀前半か。476は内黒の黒色土師器。器壁が薄い。10世紀。477・478は凸面縄タタキの平瓦。

**210土坑** 調査区東半部中央に位置する。平面形は東西1.4m、南北1.7mの七角形を呈する。深さは0.28

mで、埋土は下層がシルト混じりの灰色中～粗粒砂、上層が粗粒砂混じりの暗オリーブ灰色粘土質シルトである。

9世紀後半～10世紀前半の土師器甕(479)が出土している。口縁端部は外反し、端部に水平な面をもつ。

**211土坑** 調査区東半、掘立柱建物2の西側に位置する。南西-北東方向にやや長い不整形な土坑で、長さ1.4m、幅約0.9mを測る。深さは約0.2mで、埋土は中～極粗粒砂混じりの黄灰色粘土質シルトである。

13世紀中頃の瓦器椀(481)がほぼ完形で出土している。外面のミガキはない。見込みの連結輪状の暗紋と圏線ミガキは一連で、見込み側から磨かれている。ミガキ単位の幅は2～3mm程度と広い。480は玉緑式の丸瓦である。

**224土坑** 調査区東半の北壁際に位置する。西側が攪乱によって削られており、北側は調査区外であるため、全体の規模は明らかでない。遺構の南東隅がほぼ直角であること、また深さも約0.55mと深いことから、おそらく後述する296・297土坑のような、長方形の長い土坑であったと推測できる。埋土は灰色シルト質粘土と褐色粗～極粗粒砂の混合土である。

9世紀後半～10世紀前半頃の灰軸陶器片(482)が出土している。小さな三日月高台を付す。

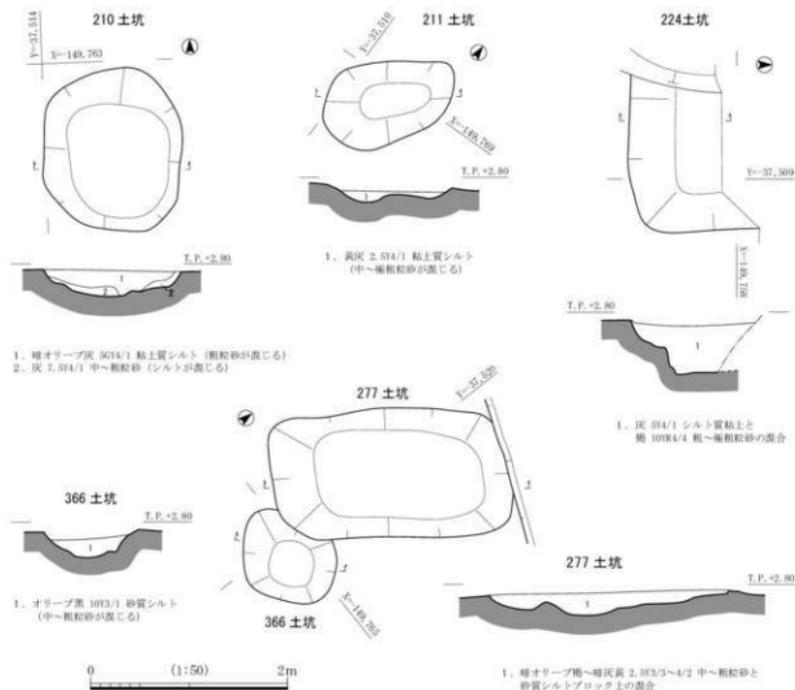


図52 210・211・224・277・366土坑平面・断面図

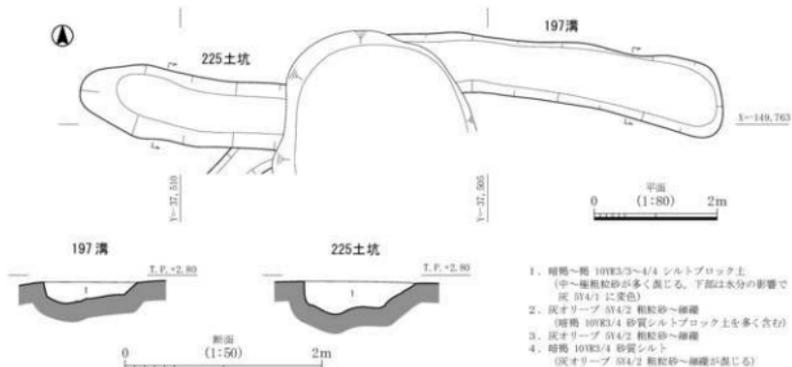


図53 197溝、225土坑平面・断面図

**225土坑** 210土坑のすぐ東側に位置する。東西方向に長い土坑であるが、東端が掘乱によって削られているため、全体規模は不明。残存長は東西3.35mで、幅は約1.1～1.2mを測る。埋土は中～極粗粒砂が多く混じる暗褐～褐色シルトブロック土で、下部は水分の影響で灰色に変色している。

8世紀代の須恵器・土師器が出土している。483はやや焼成不良の須恵器壺。484は8世紀前半の土師器杯。底部外面はおそらくケズリと思われるが、全体に磨滅しており、調整は不明瞭。暗紋等も確認できない。

**277土坑** 調査区のほぼ中央に位置する。平面形は南西～北東方向に長い隅丸長方形を呈する。長さ約2.5m、幅約1.35mを測る。深さは約0.2mで、埋土は中～粗粒砂と暗灰黄～暗オリーブ褐色砂質シルトブロック土との混合土である。

8世紀後半の須恵器蓋(485)が出土している。天井部はケズリ後ヨコナデによって仕上げる。

**296土坑** 調査区中央に位置する。平面形は東西に長い長方形で、長さは4.3m、幅は1.2～1.4mを測る。深さは約0.55mで、埋土は黒褐～いぶい黄褐色砂質シルトブロック土と、灰色粘土ブロック土、中～粗粒砂の混合土である。

古代の須恵器・土師器小片が出土している。

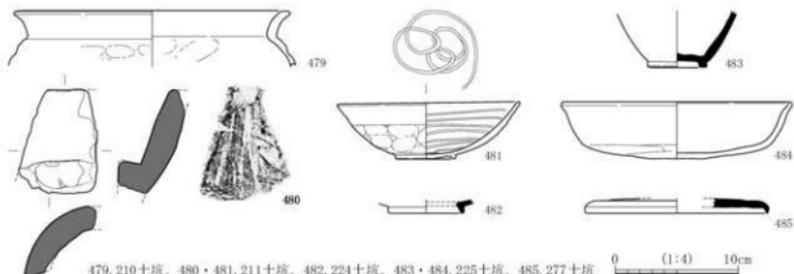


図54 210・211・224・225・277土坑出土遺物実測図

**297土坑** 296土坑の西側に接する。296土坑とよく似た東西に長い長方形の土坑である。296土坑と一部重複し、296土坑に切られる。長さは4.7m、幅は0.75～1.2mを測る。埋土は296土坑と同じ、黒褐～にぶい黄褐色砂質シルトブロック土と、灰色粘土ブロック土、中～粗粒砂の混合土である。

古代の須恵器・土師器小片が出土している。

**298土坑** 297土坑のすぐ北側に位置する。平面形は東西に長い歪んだ隅丸長方形で、長さ1.13m、幅約0.6～0.65mを測る。深さは約0.4mで、埋土は下層が296土坑と同じ黒褐～にぶい黄褐色砂質シルトブロック土と、灰色粘土ブロック土、中～粗粒砂の混合土、上層が黒褐色砂質シルトである。

古代の須恵器・土師器小片が出土している。

**306土坑** 296土坑のすぐ北側に位置する。平面形は長径0.87m、短径0.62mの楕円形を呈する。深さは一部深くなっている箇所ので0.27mを測る。埋土はシルト混じり細～粗粒砂である。

古代の須恵器・土師器小片が出土している。

**308土坑** 調査区中央北寄りの、277土坑の北側に位置する。平面形は隅丸方形に近い円形を呈する。直径は約1.7m、深さは約0.35mを測る。埋土は下層が炭を多く含む灰オリーブ色中～極粗粒砂で、上層が炭を多く含む中～粗粒砂と暗灰黄～暗オリーブ褐色砂質シルトブロック土の混合土である。

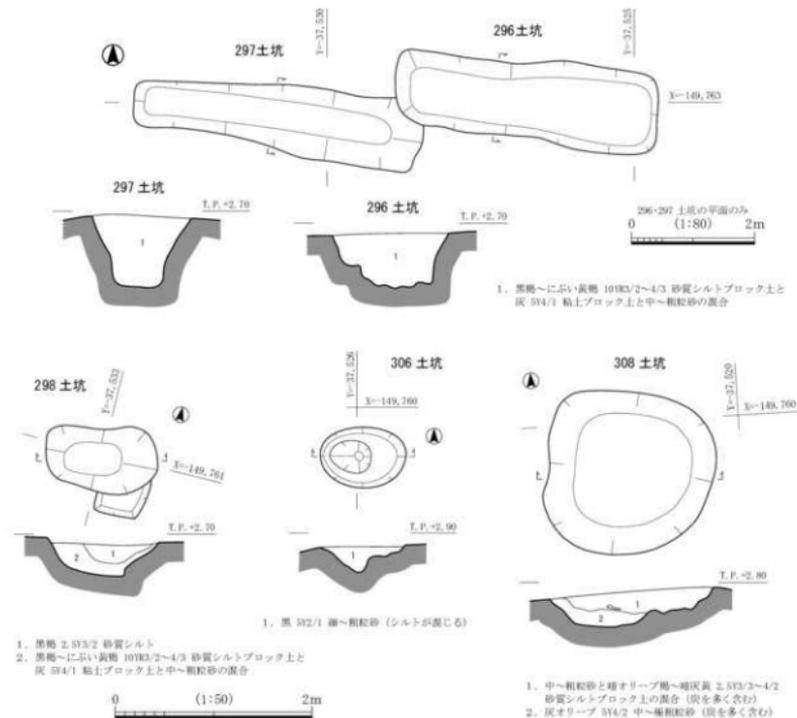


図55 296～298・306・308土坑平面・断面図

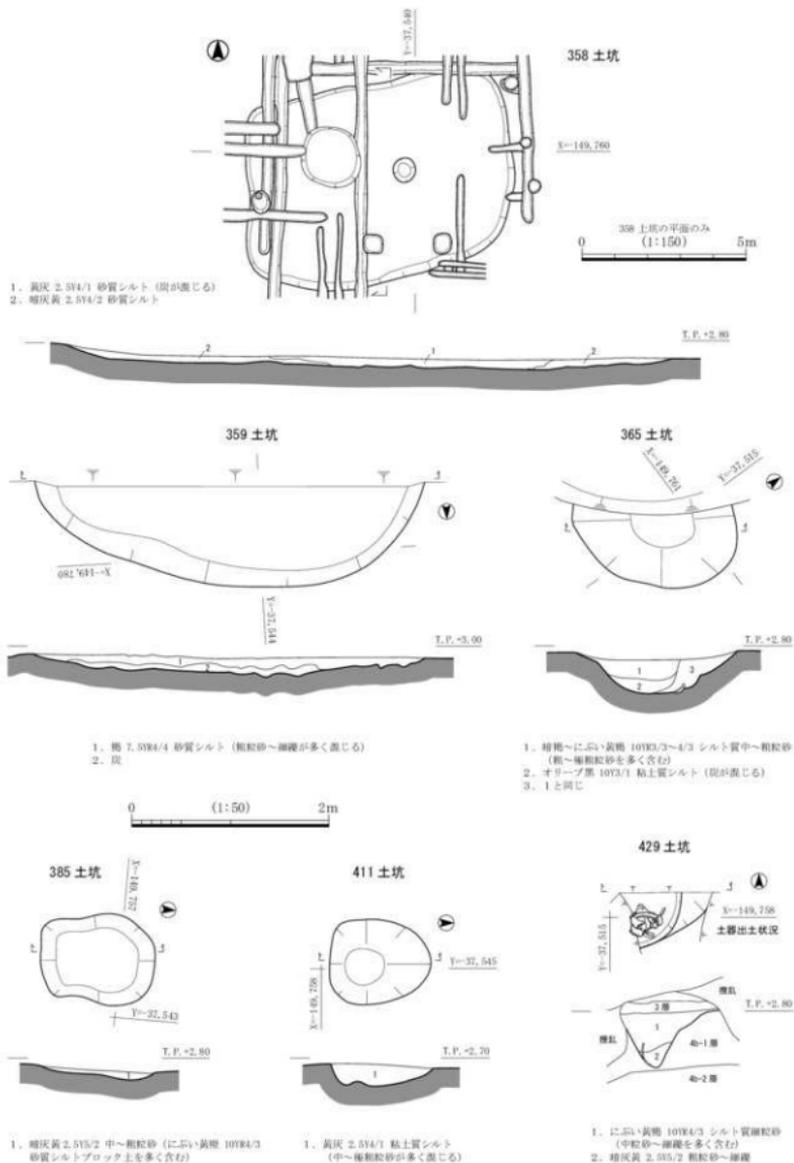


図56 358・359・365・385・411・429土坑平面・断面図

古代の須恵器・土師器小片が出土している。

**358土坑** 調査区北西隅に位置する。掘立柱建物3の柱穴や東西・南北方向の細溝は、この土坑の埋土上面から検出できることから、それらよりも一時期古い遺構であることがわかる。平面形は東西約8m、南北約6mの東西にやや長い隅丸長方形を呈する。深さは平面規模の割には浅く、0.15m程度である。埋土は下層が暗灰色砂質シルト、上層が炭混じりの黄灰色砂質シルトである。

出土遺物には、若干8世紀末頃のものも含まれているが、それらは上層の窪みへの混入と考えられる。他の遺構に比べ7世紀後半～8世紀中頃の遺物が多いことから、掘立柱建物が建てられる以前の8世紀中頃までには、若干の窪みを残し埋没していたと推測できる。

486は須恵器小壺。次の杯蓋と同時期か。底部はヘラ切り後未調整で、雑なつくり。487・488は7世紀後半のかえりをもつ蓋。489は8世紀末～9世紀初頭頃の須恵器杯。494も同時期の土師器甕。頸部のやや下方までヨコナデが及ぶ。490～492は8世紀前半～中頃の土師器杯。内面を暗紋で飾る。493も同時期頃と考えられる土師器鉢。

**359土坑** 調査区南西端の南壁際に位置する。南側の大部分が調査区外のため全体規模は明らかでないが、平面形は円形ないしは楕円形に復原できる。検出できている範囲では、東西4mで、深さは約0.15mを測る。下層に炭が、上層に粗粒砂～細礫が多く混じる褐色砂質シルトが堆積する。

出土遺物には須恵器壺(495)や瓦(496)がある。495は摘み出した細い高台をもつ。9世紀代か。496は玉緑式の丸瓦。

**365土坑** 210土坑のすぐ北側に位置する。西側の約半分が攪乱によって大きく削られているため、全体規模は不明だが、残存部分から、平面形は円形ないしは楕円形であったことが復原できる。残存部の直径は1.65mで、深さは約0.4mを測る。埋土は粗～極粗粒砂を多く含む暗褐～にぶい黄褐色のシルト質中～粗粒砂や、炭が混じるオリブ黒色粘土質シルトなどである。なお断面では、一度掘り直されたような痕跡が観察できる。

この土坑からは須恵器・土師器が出土している。

497は8世紀後半の須恵器杯。498は土師器甕である。体部は指オサエで、口縁部をヨコナデとする。口縁端部内側の一部には沈線状の段が付く。8世紀末～9世紀初頭。

**366土坑** 277土坑の南側に接し、277土坑に切られる。平面形は歪んだ隅丸方形を呈する。一辺の長さは1m弱で、深さは約0.25mを測る。埋土は中～粗粒砂が混じるオリブ黒色砂質シルトである。

古代の須恵器・土師器小片が出土している。

**385土坑** 調査区北西隅、358土坑のすぐ北側に位置する。不整形な土坑で、東西約0.8～0.9m、南北約1.2mを測る。深さは約0.1mで、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトブロック土を多く含む暗灰色中～粗粒砂である。

遺物は出土していない。

**408土坑** 調査区西端部に位置する。平面形は直径約1m強のほぼ円形を呈し、深さは約0.2mを測る。埋土は粗粒砂～細礫を多く含む暗褐色砂質シルトで、下部は鉄分より褐色に変色している。

遺物は出土していない。

**409土坑** 調査区西端、408土坑の西側に位置する。平面形は南北約0.8m、東西約0.9mの楕円形を呈する。深さは0.2mで、埋土は下層がシルト混じりの粗粒砂～細礫、上層が粗粒砂～細礫を多く含む暗褐色砂質シルトである。

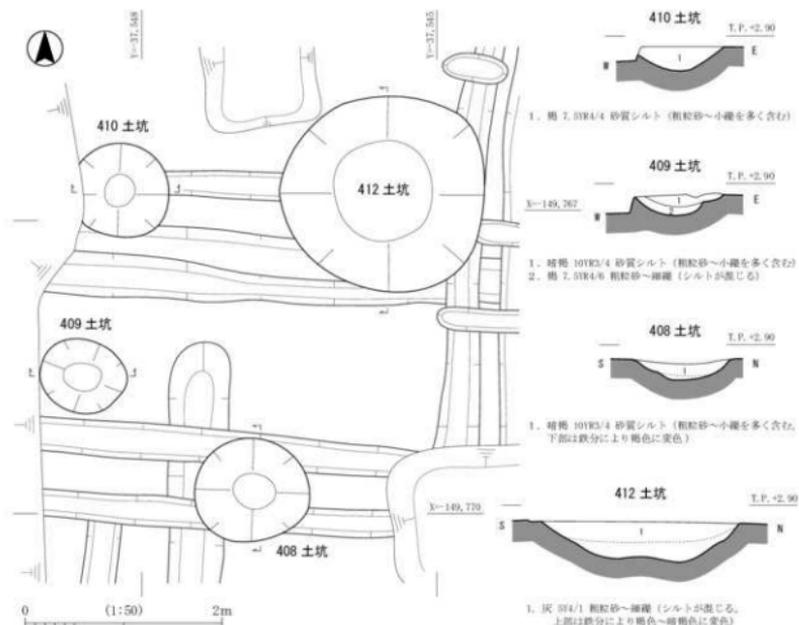


図57 408～410・412土坑平面・断面図

遺物は出土していない。

**410土坑** 409土坑のすぐ北側に位置する。西端部は調査区境の壁面が崩れ一部が欠けているが、平面形は直径約0.95mの円形に復原できる。深さは0.25mで、埋土は粗粒砂～小礫を多く含む褐色砂質シルトである。

遺物は出土していない。

**411土坑** 調査区北西隅、385土坑のすぐ西側に位置する。平面形は長径1m強、短径0.9m弱の卵形を呈する。深さは0.2m強で、埋土は中～極粗粒砂が多く混じる黄灰色粘土質シルトである。

古代の土師器小片が出土している。

**412土坑** 410土坑のすぐ東側に位置する。平面形は直径約2mの整った円形を呈する。深さは約0.4mで、埋土はシルト混じりの灰色粗粒砂～細礫であるが、上半は鉄分が沈着し、褐～暗褐色に変色している。

古代の土師器小片が出土している。

これら調査区西端に位置する408～410・412土坑は、図面上は東西・南北方向の細溝を切っているが、実際には溝に切られている。どれも埋土の上面が4a層と同化していたため、非常に平面検出が難しく、空中写真測量後の再精査によってようやく検出できたものである。

**429土坑** 調査区東半の北壁際に位置する。攪乱によって東と西側が削られており、北側が調査区外のため全体規模は明らかでない。深さは調査区壁面に残った断面によって0.6mであったことが確認でき

た。埋土は下層が暗灰黄色粗粒砂～細礫、上層が中粒砂～細礫を多く含むにぶい黄褐色シルト質細粒砂である。

8世紀代の土師器鈿付長胴甕が、破片の状態でもとまって出土した。2個体分出土したうちの1点(499)はほぼ完形に復原できた。外面はハケ目で、内面には明瞭な指頭圧痕が残る。鈿以下には煤が付着する。生駒西麓産胎土。もう1点は体部下半のみの大型片である。未掲載であるが、こちらは499よりもハケの目が細かい。

**197溝** 調査区東端、掘立柱建物2の北側に位置する。遺構の種類は、現地で付したままの「溝」としたが、本来はすぐ西側の225土坑と同じく「土坑」とすべき遺構である。遺構の西端は攪乱によって削られているが、残存長は5.5mを測る。幅は0.95～1.2m、深さは約0.2mである。埋土は中～極粗粒砂が多く混じる暗褐～褐色シルトブロック土で、225土坑と同じく下部は水分の影響で灰色に変色している。遺物は出土していない。

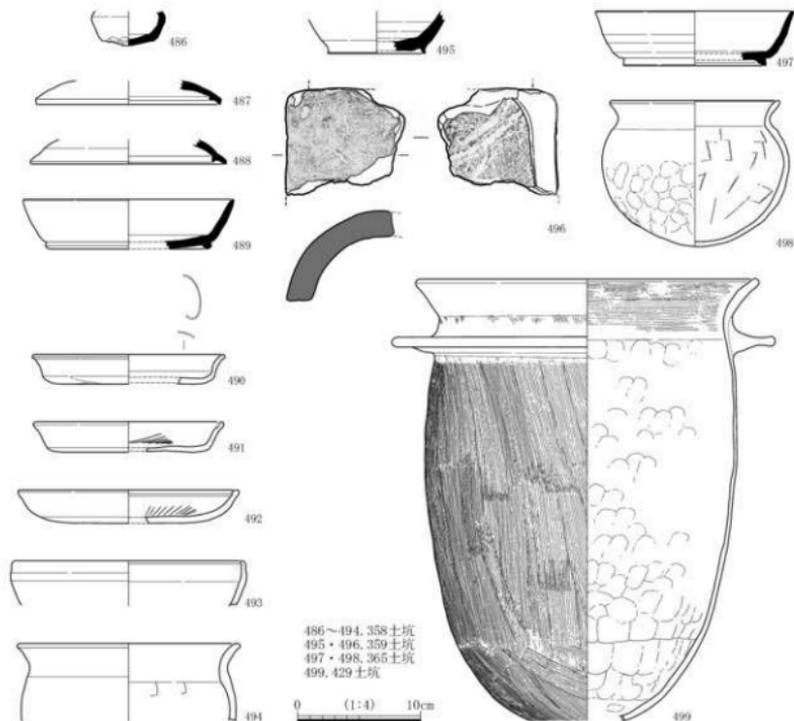


図58 358・359・365・429土坑出土遺物実測図

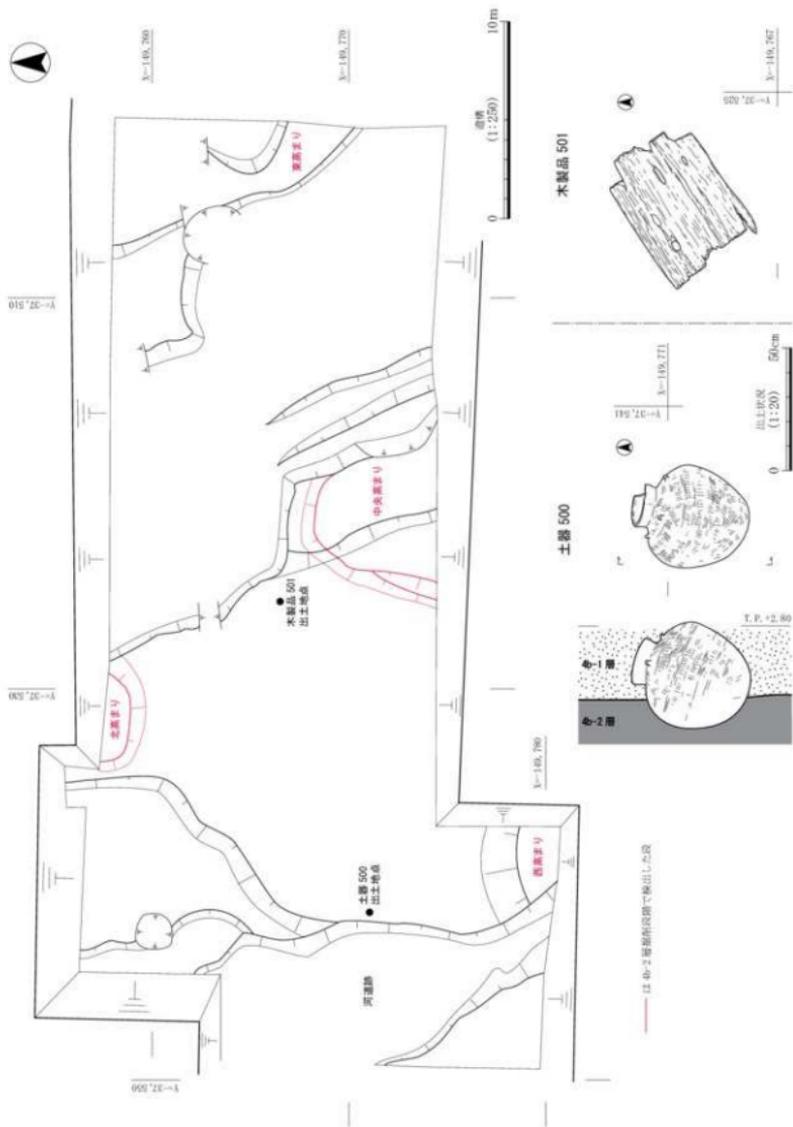


図59 2区4b層下面全体平面図及び遺物出土状況図

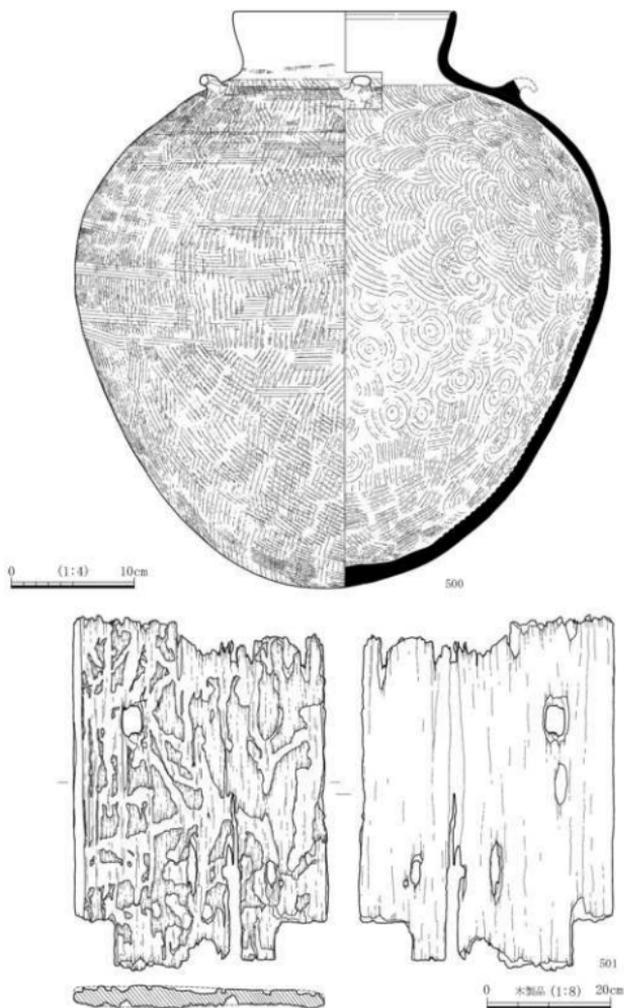


図60 2区4b-1層下面出土遺物実測図

### 3. 4b層下面 (図59~61、写真図版14・37・38・40)

厚い洪水砂層(4b-1層)を除去した面では、調査区西端部で、1区検出のものと同様の大量の砂が流れた河道の跡を検出した。調査区の南壁側から北壁に向かって続いており、一部は3区にも広がっている。幅は南壁際で約3mであるが、北側では7.5m以上となる。埋土は中粒砂~細礫などで、南



図61 5層高まり部出土遺物実測図

壁際では底まで確認できたが、北側では4b-1層下面から更に0.4~0.5mの深さまで掘削した段階で、調査設計深度に達したため、それ以下の掘削は中止した。

河道跡より東側の調査区全体にも、洪水砂の広がり確認できる。特に調査区中央付近には、砂によって削られたような東側に落ちる段があり、それよりも東側では約0.5m、厚い箇所では0.7mほどに厚く砂が堆積する。また、ところどころに1区同様の鳥状に盛り上がる箇所が認められた。一つは東端部の第5面で方形周溝墓2を検出する箇所(東高まり)で、もっとも高い部分には全く砂が及んでいない。また第5面で掘立柱建物4を検出する中央南壁際(中央高まり)のほか、中央北壁際(北高まり)、さらに南壁際の調査区屈曲部(西高まり)にも、砂が及ばない盛り上がり箇所がみられた。これらの箇所は4b-1層とセットとなるシルト質粘土の4b-2層を除去すると、高低差0.4~0.5m程度のさらに輪郭がはっきりとした盛り上がりとなった(図59の朱線)。結果的には下層から方形周溝墓が検出されなかったが、まさに下層に方形周溝墓の存在を示しているかのような盛り上がりであった。

4b-1層を除去した面で、土器や木製品が出土している。先に記した須恵器杯(169)もその一つである。調査区西方では完形の須恵器甕(500)が出土している。横転し、約4分の1が下の4b-2層に埋まった状態であった。内部には4b-1層の砂が入り込んでいたが、上部には空洞もあり、砂礫と共に流されてきた状況が容易にうかがえた。甕の口縁部は直線的に上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。外面はタタキの後、上半部にランダムに横方向のカキ目を施している。肩部には鍵状の耳が4箇所につく。7世紀後半~8世紀前半頃に位置するものと考えている。調査区中央では、切り欠きのある板材(501)がみついている。長さ58.2cm、幅41.6cmの板材の、一方の小口の両側を切り欠いて凸形の平面形としている。凸部の出は約4cmで、幅は26cm、材の厚さはもっとも厚い箇所4cmを測る。片面には虫食いのような痕跡がみられ、長い間地面に接していた様子がうかがえる。形状からは木棺の小口板の可能性が考えられたが、樹種がスギであることから、若干の疑問も残る。

4b層下面で検出した盛り上がり箇所(北高まり・中央高まり)は、上記のとおり、当初は下層にある方形周溝墓の影響によるものと考えたことから、遺物取り上げに際しては、他の地点の5層出土遺物とは分けて取り上げを行なっている。しかし実際には、単に下の5層が他の地点よりも厚いだけで

あり、包含する遺物も方形周溝墓に関わるものではなく、他の地点の5層と同じ古墳時代前期から後期の須恵器や土師器であることが確認された。502～504は北高まりで、505～511は中央高まりから出土した。502・505・506は須恵器蓋杯である。502の蓋は天井部外面のヘラケズリを比較的丁寧に打らない、端部は丸くおさめる。内面は不定方向のナデで仕上げる。6世紀後半。505は6世紀中頃の蓋。天井部内面に当て具が残る。506は6世紀前半の杯。503・511は二重口縁壺。503は受部内面にやや広い平坦部をもつ。口縁部は大きく外反し、端部を丸くおさめる。阿波からの搬入品か。511は受部内面に僅かな平坦部をもつ。口縁部は外傾する面をもつ。内外面ともにヨコナデとする。庄内期後半～布留式期前半頃。504は庄内式期の手埴形土器。507は布留式期前半の土師器高杯である。脚柱部下半に面取りがみられる。上半には横方向の細かいミガキを施す。508は布留式傾向甕・布留式祖形甕などと呼ばれるタイプの甕。口縁部は上半外面を強くヨコナデすることにより、若干外反気味となる。その外面には明瞭な凹みが残る。口縁部は僅かに内側に拡張する。生駒西麓産胎土。庄内式期末～布留式期初頭。509は庄内式甕。口縁部は上方に摘み上げるが、やや丸味をもち、シャープさに欠ける。体部上半は右上がりのタタキのみで、ハケ目はみられないが、頸部外面には僅かにハケ目が観察できる。体部内面はケズリだが、器壁は厚く、厚さ7mmを測る箇所がある。生駒西麓産胎土。後述する462溝出土の518と同一個体である可能性が高い。510は布留式期前半の広口直口壺。口縁部内外面に左上がりのハケ調整がみられる。

#### 4. 第5面 (図62～73、写真図版14～18・40～42)

弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての遺構面である。掘立柱建物1棟、方形周溝墓1基のほか、土坑、溝等を検出した。

**掘立柱建物4** 調査区中央部のやや南寄りに位置する。ちょうど4b-2層下面で検出した中央高まりの下層にあたる。451溝と重複するが、この溝が完全に埋まった後に建物の柱が据えられていることを確認している。東西2間、南北1間の東西にやや長い建物で、柱間寸法は基本的には東西が1.3m等間、南北が2.3m等間であるが、北側柱筋の中央の柱が僅かに東に寄っている。柱穴は直径0.2～0.28mの小規模な円形で、埋土は粗粒砂～細礫混じりの黄灰色粘土質シルトである。柱掘方と柱痕跡とは明瞭に区別できなかった。この建物から調査区南壁にかけてのごく限られた範囲には、6層及び451溝埋土上に、中～極粗粒砂混じりのオリープ黒～黒色粘土質シルトが、約0.1～0.15mの厚さで認められた。柱穴は確実にこの黒色土層の上で検出できた。おそらく建物を構築する際に施された盛土と考えられるが、柱が据えられてから貼られたものなのか、柱穴を掘る前に盛られていたものなのかは判断できなかった。柱穴からやや離れた南壁までこの土層が達していることからすれば、後者の可能性が高い。またこの黒色土層の上には、さらに粗～極粗粒砂混じりの黄灰～暗灰黄色粘土質シルトが、同程度の厚みで認められる。その分布範囲は黒色土層とよく似ており、この建物周辺でしか認められないことから、黒色土層と同様の盛土と考えられるが、建物内部までは及んでおらず、柱穴や後述する462溝などとの重複関係を確認することができなかった。

この掘立柱建物の西側と北側には、壁溝を思わせるL字状に曲がる溝(462溝)がめぐっている。幅は約0.4～0.6m、深さは0.1m足らずである。埋土は中粒砂～細礫混じりのオリープ黒色シルトである。また東側と北側には、西側の溝と対称となるような位置に、高低差15cm前後の段がめぐっており、溝と段とが建物の北・西・東側をきれいなコの字状に囲んでいる。平面的には一見堅穴住居を思わせるよう

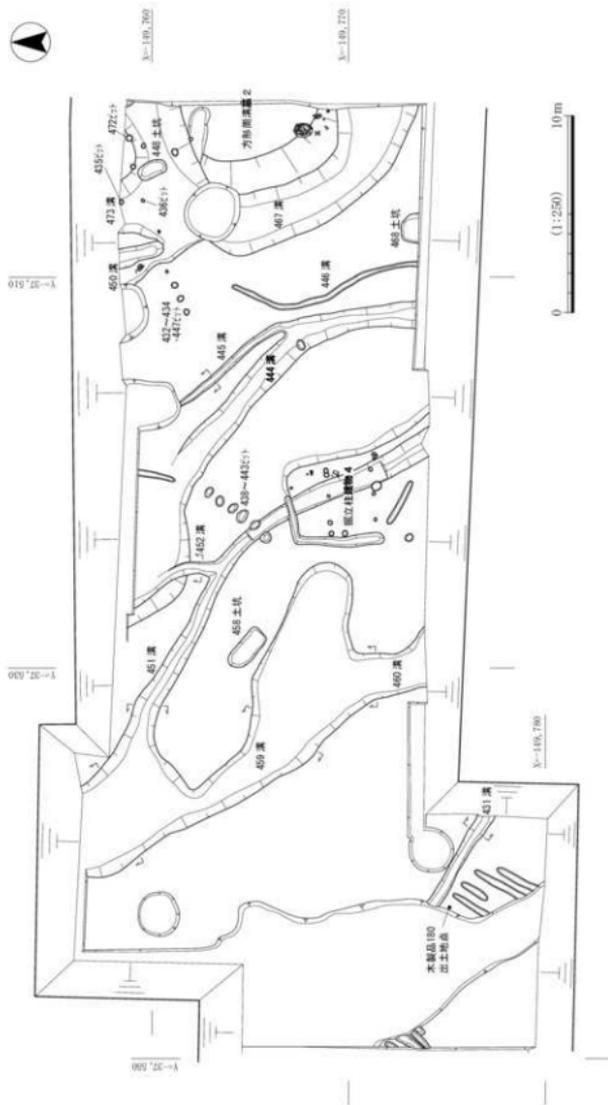


图62 2区第5面検出遺構全体平面图

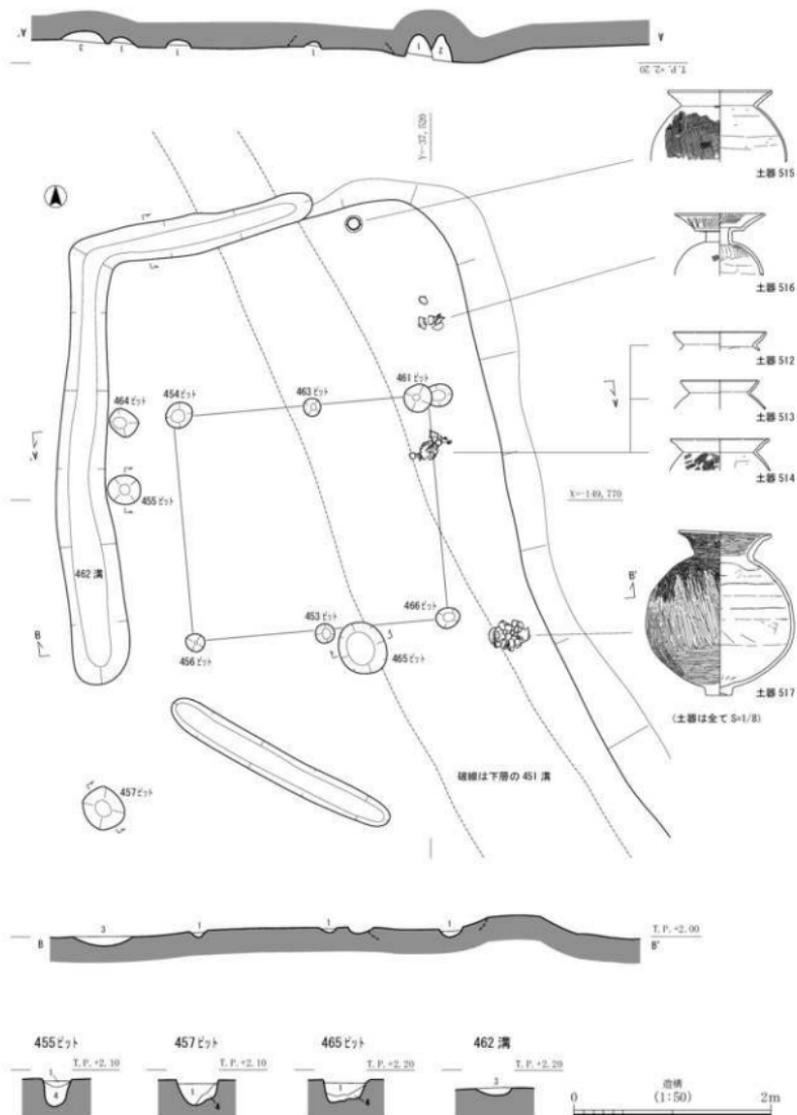
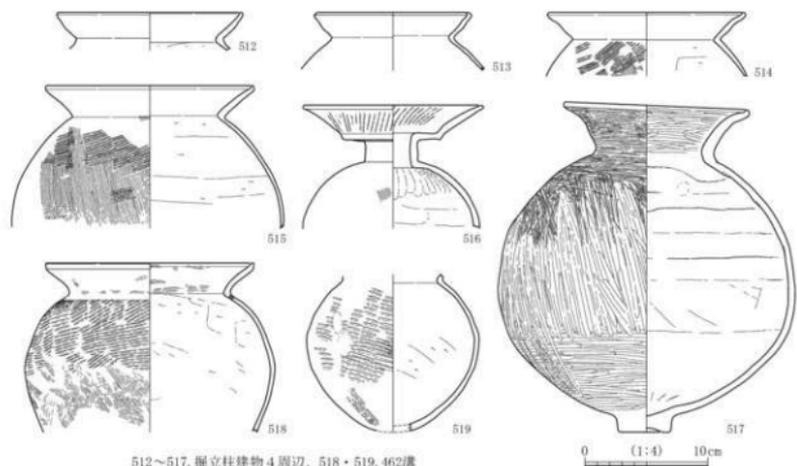


図63 掘立柱建物4平面・断面図



512～517. 掘立柱建物4周辺、518・519. 462溝

図64 掘立柱建物4周辺、462溝出土遺物実測図

な構造だが、実際には溝や段の内側は外側よりも若干高まっており、竪穴状にはなっていない。むしろ平地住居に類する構造といえる。東側の段を上った箇所からは、あたかも建物に伴うかのように、古墳時代前期の土器が点々と並んだ状態で見つかっており、その状況から、段までが一つの建物であったようにうかがえるが、東の柱筋からその東側の段の肩までが約0.7m、西の柱筋からその西側の462溝の肩までが約0.7mであるのに対して、北側の柱筋から、その北側の462溝や段までが約1.6～2.0mも離れており、上屋構造等の復原が難しい。また南辺についても北側と対象となる位置に溝も段も検出できておらず、溝や段が掘立柱建物に伴うものなのか判断が難しい。

東側の段上から出土した土器は、いずれも庄内式期末～布留式期初頭に位置するものである。512～515は土師器の甕、516・517は壺である。512・513は布留式傾向甕・布留式祖形甕などと呼ばれる甕。513は体部まで残っていたが、細片化しており全体の復原が不可能であったため、口縁部のみ図化した。口縁部上半外面にはヨコナデによる明瞭な凹みが残る。端部は内側に拡張するが、端部は丸くシャープさに欠ける。頸部内面も庄内式甕のような稜はなく、丸く屈曲する。表面が全く残っておらず、調整等は確認できない。体部は厚さ約2mmと非常に薄い。橙色を呈する。514・515は庄内式甕。両者共に目の細かい右上がりのタタキによって成形された後、左上がりのハケにより仕上げる。生駒西麓産胎土。514の口縁部上半には513によく似たヨコナデによる明瞭な凹みがみられる。516は小型の二重口縁壺。球形の体部から細い頸部が垂直に立ち上がり、受部が水平に開く。直線的に開く口縁部の内外面には、細いミガキによる加飾がみられる。体部外面の一部には僅かにハケの痕跡が認められる。517は広口壺。きれいな球形の体部に小さな底部をもつ。口縁部は外反気味に開き、端部を僅かに掴み上げる。体部中位以下と口縁部内面に太目のミガキ、体部上部から口縁部外面には細いミガキを雑に施す。口縁部外面には先行するハケ目が僅かに残る。

462溝出土の518は庄内式甕。口縁端部は上方に掴み上げるが、やや丸味をもち、シャープさに欠ける。体部上半は右上がりのタタキで、下半には左上がりのハケ目。なお、頸部外面から口縁部外面にも

ハケ目が観察できる。生駒西麓産胎土。中央高まり5層出土の509と同一一体である可能性が高い。519はV様式の系譜を引く甕。体部上半は水平もしくはやや左上がりのタタキで、下半には非常に見難いが、かすかに残るハケ目が観察できる。内面はケズリ。非生駒西麓産胎土で、淡い橙色を呈する。

**方形周溝墓2** 1区と2区との調査区境に位置する。墳丘の東側約3分の2は1区で、西側の約3分の1は2区で検出した。1区側では北辺周溝を184溝、南辺周溝を132溝と呼び、2区側で検出した周溝については、場所によって遺構番号を分けずに一連のものとして467溝とした。東辺周溝については、同位置に重なるように古墳時代の131溝が開削されているため、詳細は明らかでない。墳丘の規模は南北約8m、東西約12mで、主軸はほぼ座標軸にのる。墳丘が築かれている箇所は、6層の砂礫をもたらした河道上にあたっており、その砂礫の盛り上がりを利用し、その上に細礫・シルト混じりの黒褐色細～中粒砂や、細礫混じりの暗灰黄色細～中粒砂、オリーブ黒色砂質シルトブロック土を含む細礫混じり暗灰黄色細～中粒砂などの盛土を施して墳丘を築いている。墳丘頂部と西辺周溝（467溝）の西側とは、現状で約0.45mの高低差がある。南辺周溝の幅は、1区側では南の肩部が不明瞭であったが、2区側では4m以上になることが判明した。北辺周溝は幅約2.8mで、埋土は最下層に中～粗粒砂混じりのオリ

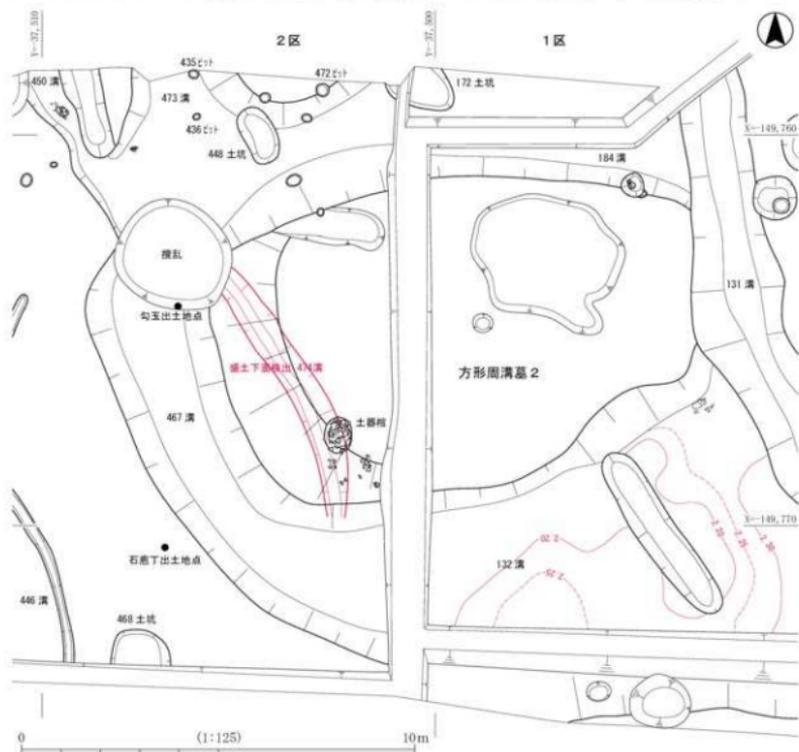


図65 方形周溝墓2全体平面図

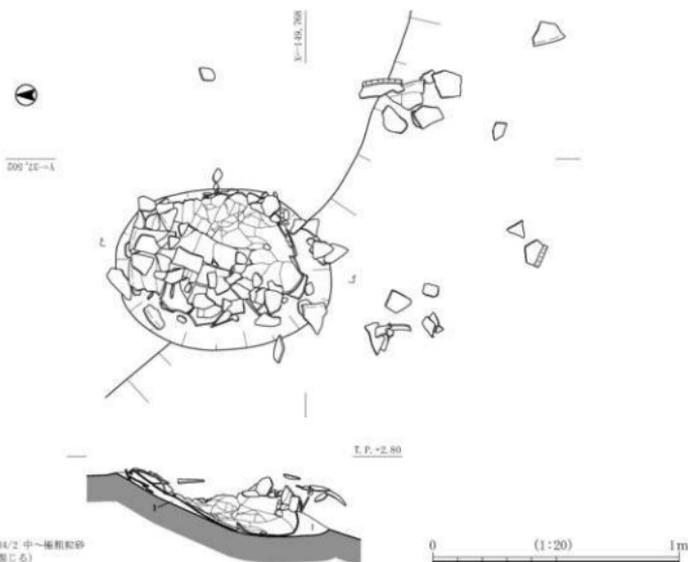


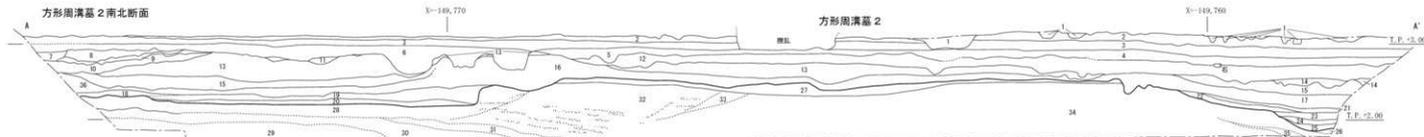
図66 方形周溝墓2 検出土器棺平面・断面図

ーブ黒色シルト質粘土があり、その上がオリブ黒色粘土質シルトブロック土を多く含むオリブ灰色中粒砂～細礫、粘土質シルト混じりのオリブ黒色細～粗粒砂、灰～暗オリブ灰色細～粗粒砂となる。西辺周溝は幅約2.5～3mで、深さは浅く約0.15mを測る。埋土は下層が黒色シルトブロック土混じりの暗オリブ灰色細～中粒砂、上層が暗オリブ灰色細～中粒砂ブロック土混じりの黒色粘土質シルトである。

周溝の北西隅には現代の攪乱が位置するが、その西辺周溝側の壁面から、古墳時代の勾玉(530)が1点出土している。出土地点の地層から「5層下面」と仮層位名を付けて取り上げたが、周溝検出前の攪乱掘削中の出土であったため、遺構に伴っていたのかどうかの確認ができなかった。

墳丘上からはこの方形周溝墓の中心となるような墓壇の痕跡は検出できなかったが、墳丘南西隅の肩部で土器棺を1基検出した。大型の甕の口縁を北向きにして、やや斜め横位で据えられている。後世の攪拌によって、上半部の大半が破壊されており、その破片が周囲に散らばっている。掘方も非常に浅くしか残っておらず、約0.15m程度である。埋土はシルト混じりの灰黄褐色中～極粗粒砂である。棺身となる甕の体部下には、寝かせた時にちょうど底になる側に直径2.5～3cmほどの穿孔が施されている。外面には煤が付着しており、使用土器からの転用品と考えられる。口縁部付近は上記のとおり大きく破壊されているが、甕口縁部の下側に重なるように、甕とは明らかに別個体となる土器が出土した。周辺に散在していた破片と接合した結果、大型の鉢となり、蓋として被されていたものであったことが判明した。

周溝からは、Ⅳ-2様式を中心とした弥生時代中期後半の弥生土器が出土したが、方形周溝墓1のような完形品は少なく、また遺物自体も少ない。



**A断面土色**

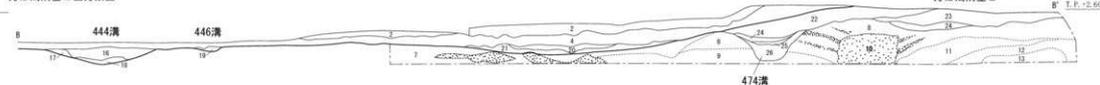
1. オリーブ黒 2.53/4 砂質シルト (細粒砂～細礫を多く含む)
2. 黄褐色 2.53/5 粘土質シルト (中～細粒砂～細礫を多く含む)
3. 灰色黄褐色 1019/1 粘土質シルト (細粒砂～細礫を多く含む)
4. 黄褐色 7.53/3 粘土質シルト (細粒砂～細礫が混じる)
5. 北端部は黄 7.53/4 不定色
6. 黄褐色 2.53/2 砂質シルト (中～細粒砂～細礫を多く含む)
7. 灰黄褐色 1019/2 粘土質シルト
8. 灰色黄褐色 1019/4 粘土質シルト (中～細粒砂を多く含む)
9. 黄褐色 1019/4 2 細粒砂～細礫 (シルトが混じる)
10. 黄褐色 1019/3 2 粘土質シルト (中～細粒砂が混じる)

11. 黄褐色 1019/3 2 中～極細粒砂 (砂質シルトブロック土を多く含む)
12. 暗灰褐色 2.53/2 砂質シルト (細粒砂～細礫を多く含む)
13. 黄褐色 2.53/1 粘土質シルト (中～細粒砂)
14. 黄褐色 2.53/2 粘土質シルト (細～極細粒砂が混じる)
15. 灰黄 2.53/1 シルト質粘土
16. このあたり、黄褐色 1019/3 粘土質シルト (細粒砂～細礫が混じる)
17. 黄褐色 2.53/1 粘土質シルト (細～極細粒砂が混じる)
18. オリーブ黒 53/1 粘土質シルト (細粒砂～細礫を多く含む)
19. オリーブ黒 53/1 粘土質シルト (細～極細粒砂を多く含む) 【調査埋土】

20. 黒 53/2 シルト質粘土 (細～極細粒砂が混じる) 【調査埋土】
21. 暗オリーブ黒 503/1 中～極細砂 (シルトが混じる) 【調査埋土】
22. 黄褐色 2.53/1 粘土質シルト (細～極細粒砂が混じる) 【調査埋土】
23. 黒 5.53/1 粘土質シルト (中～細粒砂が混じる)
24. 灰 101/4 砂質シルト (暗オリーブ黒 503/1 中～極細砂ブロック土を含む)
25. 灰 101/4 1 中～極細砂 (オリーブ黒 53/1 粘土質シルトとオリーブ黒 503/1 シルト質粘土のブロック土を多く含む)
26. オリーブ黒 53/1 1 シルト質粘土 (中～細粒砂が混じる)
27. 暗オリーブ黒～暗灰褐色 2.53/3 2 中～極細砂 【調査埋土】
28. 灰 101/4 1 中～極細砂 (オリーブ黒 53/1 粘土質シルトブロック土を多く含む)

29. このあたり、細～中礫
30. 灰 7.53/1 中～極細砂
31. 灰 7.53/1 1 シルト質粘土
32. 灰オリーブ黒～オリーブ黒 504/2 2～2.53/4 6 中～細砂～細礫
33. 暗緑灰 7.503/1 細～中～細砂
34. 暗オリーブ黒～黒 503/1 7～7.53/4 6 中～細砂～細礫
35. 灰 53/1 1 シルト質粘土
36. オリーブ黒 53/1 粘土質シルト (細～極細粒砂が混じる。砂粒少含む)

**方形周溝墓2西方断面**



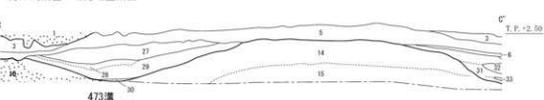
**B断面土色**

1. 暗褐色～黄褐色 7.53/5 6～1019/6 2 中～極細粒砂
2. 灰 2.53/4 1 シルト質粘土 (植物遺体が多く混じる) 【砂・2層】
3. 黄褐色 2.53/4 1 シルト質粘土
4. 黄褐色～暗オリーブ黒 2.53/1 7～53/1 1 粘土質シルト 【5層】 (中～極細粒砂が混じる。西方は黄灰 2.53/4 1 東方の方位角調査遺体付近はオリーブ黒 53/1 1)
5. 黄褐色 2.53/1 1 シルト (中～極細粒砂を多く含む) 【6層】
6. 黄褐色～暗オリーブ黒 503/1 1 中～極細粒砂が混じる層

7. 暗オリーブ黒 503/1 1 細～中～細砂 (土層の影響でオリーブ黒 53/1 粘土質シルトが入り込む)
8. 灰オリーブ黒 53/2 2 細～中～細砂 (暗～暗緑灰色土を含む。上部は暗オリーブ黒 2.53/4 3 中～細砂～細礫)
9. 黄褐色～黄 2.53/4 6 2 中～細粒砂
10. 黄褐色 2.53/1 1 シルト (中～極細粒砂～細礫)
11. オリーブ黒 103/1 1 細粒砂～細礫 (粘土質シルトが混じる)

12. 暗オリーブ黒 503/1 1 中～極細粒砂
13. オリーブ黒～黒 103/1 1～4 1 シルト質粘土 (中～極細粒砂を多く含む)
14. 暗オリーブ黒 503/1 1 中～極細砂 (土層の影響で、オリーブ黒 53/1 粘土質シルトが入り込む)
15. 灰 101/4 1 中～細粒砂
16. オリーブ黒 53/1 粘土質シルト (中～極細粒砂が混じる)
17. オリーブ黒 53/1 粘土質シルト (暗オリーブ黒 503/1 砂質シルトが混じる)

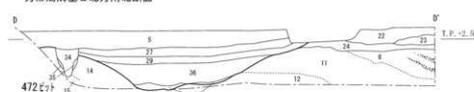
**方形周溝墓2北方北壁断面**



1. 灰 7.53/4 1 細粒砂～細礫 (オリーブ黒 53/1 粘土質シルトが混じる)
2. オリーブ黒 53/1 粘土質シルト (暗オリーブ黒 503/1 砂質シルトが混じる)
3. 黒 53/1 1 粘土質シルト (暗オリーブ黒 503/1 細～中～細砂ブロック土が混じる) 【調査埋土】
4. 暗オリーブ黒 503/1 1 細～極細砂 (黒 53/1 1 シルトブロック土が混じる) 【調査埋土】
5. 暗灰黄 2.53/4 2 細～中～細砂 (オリーブ黒 53/2 砂質シルトブロック土を多く含む。細礫が混じる) 【調査埋土】
6. 暗灰黄 2.53/4 2 細～中～細砂 (細礫が混じる) 【調査埋土】
7. 暗灰黄 2.53/1 1 細～中～細砂 (細礫、シルトが混じる) 【調査埋土】

8. 黄褐色～暗灰黄 2.53/4 2 粘土質シルト (細～極細粒砂を多く含む)
9. 灰 53/1 1 中～細砂～細礫 (粘土質シルトが混じる)
10. 灰～暗オリーブ黒 101/4 1～2.503/4 1 中～細粒砂 【調査埋土】
11. 黒 7.53/2 1 粘土質シルト
12. 暗オリーブ黒 7.53/1 1 細～極細砂 (粘土質シルトが混じる) 【調査埋土】
13. 黒 7.53/2 1 粘土質シルト
14. 灰 101/4 1 中～極細砂 (オリーブ黒 53/1 粘土質シルトブロック土を多く含む)

**方形周溝墓2北方北壁断面**



15. 灰 101/4 1 中～細砂 (オリーブ黒 53/1 粘土質シルトとオリーブ黒 503/1 1 シルト質粘土のブロック土を多く含む)
16. オリーブ黒 103/1 1 シルト質粘土 (中～細粒砂が混じる)
17. 黒 7.53/2 1 粘土質シルト (細粒砂が混じる)
18. 黒 7.53/2 1 粘土質シルト (暗オリーブ黒 503/1 1 中～極細砂ブロック土が混じる)
19. 暗オリーブ黒 2.503/1 1 中～細砂～細礫 (オリーブ黒 53/1 1 粘土質シルトブロック土を多く含む) 【調査埋土】
20. オリーブ黒 53/1 1 シルト質粘土 (中～極細粒砂が混じる) 【調査埋土】

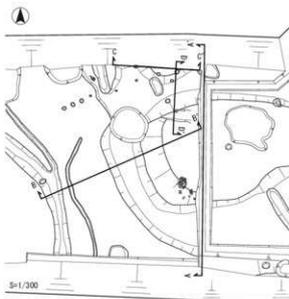
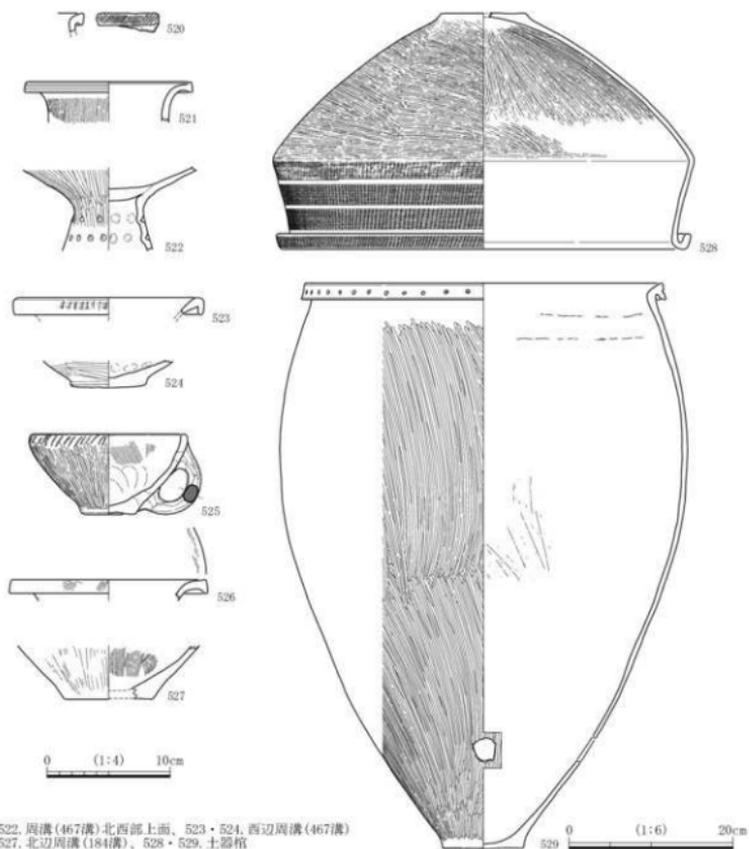


図67 方形周溝墓2周辺遺構断面図



520～522. 周溝(467溝)北西部上面、523・524. 西辺周溝(467溝)  
525～527. 北辺周溝(184溝)、528・529. 土器箱

図68 方形周溝墓2出土遺物実測図

520は鉢の小片である。口縁部は外側に折り曲げ断面三角形となる。端面に列点紋を刻む。生駒西麓産胎土。521は広口壺。口縁端部を上下に摘み出し、端面には2条の凹線をまわす。頸部外面は細かいハケ。非生駒西麓産胎土。522は台付鉢。鉢部内外面及び脚台部外面はミガキ調整とし、脚台部には直径5mmの竹管紋が施されている。内面側にまで貫通せず、内面は円形の影らみとなっている。生駒西麓産胎土。523は広口壺。口縁部を鋭角に折り曲げ垂下させる。磨滅しているが、端面に籐状紋が認められる。生駒西麓産胎土。524は生駒西麓産胎土の壺底部片。底面も磨く。525は把手付鉢。外面は丁寧なミガキで、底部外面も磨く。口縁部外面には列点紋を施す。内面にはハケ目が僅かに残る。生駒西麓産胎土。526は広口壺。口縁部は短く垂下し、その端面及び上面に波状紋を施す。外面には煤が付着する。527は526の底部片と思われる。外面はミガキで、内面は目の細かいハケ調整とする。外面に厚く煤が付着する。非生駒西麓産胎土。

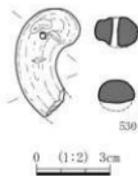


図69 攪乱出土  
勾玉実測図

土器棺の身として使用された甕(529)は、高さ69.7cmに復元できる大型品である。口縁部は垂下し、端面には直径約5mmの竹管状の刺突紋を施す。体部外面は縦方向のミガキで、下部には土器の大きさに対してはやや小さな穿孔が施されている。内面は磨滅し調整が不明瞭だが、一部に縦方向のハケ目ともとれる板ナデの痕跡がかすかに認められる。蓋として使用された鉢(528)は、口縁部は大きく垂下し、端面を簾状紋で飾る。体部上半には幅2.6cmの幅広の簾状紋を3条施す。体部下半はミガキ。共に生駒西麓産胎土である。

このほか前節でも報告したとおり、墳丘南東隅のややくずれ気味の肩部から、壺(361)が1点潰れた状態で出土している。

攪乱出土の勾玉(530)は、材質は滑石で、淡い緑白色を呈する。紐孔は両面穿孔とする。紐孔付近での幅は1.8cm、厚みは1.3cmを測る。5世紀頃のものと考えている。

**448土坑** 方形周溝墓2の北側に位置する。方形周溝墓の周溝と重複する土坑で、周溝埋土上面から検出できる。平面形は南北に長い楕円形で、主軸は座標北から僅かに西に振れる。長さは約1.5mで、幅は約0.8mを測る。深さは0.1m足らずで、埋土は細～中粒砂を含む黒色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

**458土坑** 調査区中央やや西寄りの、後述する451溝と459溝とに挟まれた箇所位置する。平面形は隅丸長方形に近い楕円形で、主軸は座標北から約45°西に振れる。長さは約2.25mで、幅は約1mを測る。深さは0.1m足らずで、埋土はオリブ灰色砂質シルトブロック土混じりの粗粒砂～細礫若干含むオリブ黒色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

**468土坑** 調査区東方の南壁際に位置する。南壁に断面が観察できることから、調査区外へのびる南北に長い楕円形ないしは隅丸長方形の土坑であったことが推測できる。東西幅は約1.5mを測る。深さは約0.1mで、埋土はオリブ黒色粘土質シルトブロック土と暗オリブ灰色細～中粒砂ブロック土との混合土である。

遺物は出土していない。

**432～434・447ピット** 方形周溝墓2の北西に位置する。4基が一列に並ぶことから特記したが、この周辺では、同様の小ピット(435ピットほか)をいくつか検出している。いずれも直径0.2～0.4m程度の円形のピットで、436ピットや472ピットのように、断面から杭のようなものが据えられていた状況が推定できるものもある。432～434・447ピットは、深さ0.05～0.15m程度の浅いものであるが、0.75m間隔に一列に並んでいること、また周辺検出のピットの状況から、杭列などであったと考えている。埋土は暗オリブ灰色の細～中粒砂がブロックで混じるオリブ黒色粘土質シルトである。

432ピットから、土師器小片が出土しているが、時期は不明。

**438～443ピット** 掘立柱建物4の北側に位置する。一列にピットが6基並んでいるが、その一つ一つの平面形は整っておらず、短径約0.3～0.5m、長径約0.5～0.8mの歪んだ楕円形を呈している。深さは0.05～0.15m程度で、埋土は5層によく似た粗～極粗粒砂を多く含むオリブ黒色粘土質シルトである。これと同様の遺構は、続く3区第5面の東端部でも検出している。その3区でもピットが西西北～東南東方向に一列に並んでいる状況が認められたが、それらは明らかに耕作溝の深くなった一部分が、他の部分から切り離されてピット列のように並んでいるものであった。438～443ピットはそれらとほぼ直角方

向となる南南西-北北東方向に並んでいること、また埋土も5層によく似ていることなどから、杭列などではなく、3区検出の耕作溝とは直角方向となる耕作溝の一部であったと考えている。

いずれのピットからも遺物は出土していない。

**431溝** 調査区南西隅に位置する。東南東-西北西方向の溝で、幅は約0.55~0.75mを測る。深さは0.1m強で、埋土は中粒砂~細礫を多く含む黒褐色のやや粘土質シルトである。西側は4b-1層をもたらし河道によって削平されている。

弥生時代後期と思われるタタキのある甕小片が出土している。

**444溝** 方形周溝墓2と掘立柱建物4のちょうど中間に位置する。南壁際ではほぼ南北方向にのびるが、

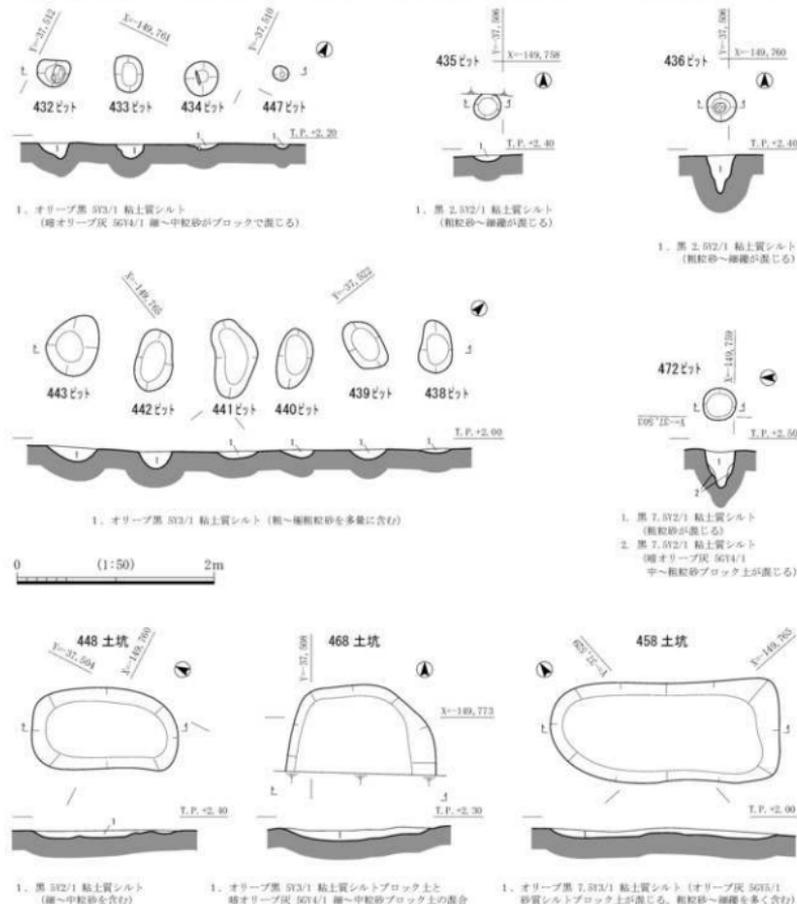


図70 432~436・438~443・447・472ピット、448・458・468土坑平面・断面図

途中から大きく西に振れ、南東-北西方向へと向きを変える。幅は約1~1.6mであるが、調査区北壁際では輪郭が不明瞭となる。深さは約0.2mを測る。埋土は下層に暗オリーブ灰色砂質シルト混じりのオリーブ黒色粘土質シルトや、オリーブ黒色粘土質シルト混じりの灰色粗粒砂~細礫があり、上層に中~粗粒砂混じりのオリーブ黒色粘土質シルトが堆積する。

小片のため図示していないが、弥生時代中期後半に属する水平口縁の高杯が出土している。非生駒西麓産胎土である。

**445溝** 444溝が大きく曲がるあたりから北側に分岐する細溝である。幅は約0.4mで、深さは約0.05mと浅い。埋土は中~粗粒砂混じりのオリーブ黒色粘土質シルトである。

時期は不明の弥生土器小片が出土している。

**446溝** 444溝の東側に位置する。蛇行する細溝である。幅は約0.2~0.35mで、深さは約0.05mを測る。埋土は暗オリーブ灰色砂質シルト混じりのオリーブ黒色粘土質シルトである。

弥生土器とも土師器とも判断がつかない小片が1点出土している。

**450溝** 方形周溝墓2の北西側に位置する。方形周溝墓2の周溝（467溝）北西隅に繋がる溝で、幅は約1.2~2mを測る。西側半分が浅く、東側半分が一段深い二段掘り状になっており、深さは深い側で約0.2m、浅い側で0.1m弱を測る。埋土は下層がオリーブ黒色の砂質シルトブロック土が混じる暗オリーブ灰色シルト質中~極粗粒砂、上層が粗粒砂~細礫を多く含む黒褐色粘土質シルトで、上面からは、土器棺の一部と考えられる大型の甕（532）が、潰れて細片化した状態で出土している。方形周溝墓2で検出した土器棺とは別個体であることから、他の周溝墓上にあった土器棺の一部と考えている。おそらく方形周溝墓2の北側に別の周溝墓が存在しており、そこから後の攪拌などにより移動したものと考えられる。

532は体部下半の大型片で、上半部及び底部は欠損する。復原すると、方形周溝墓2 検出の土器棺（529）とほぼ同じ大きさとなる。外面はミガキで、薄く煤が付着する。内面は磨滅が著しいが、板状工具による圧痕が認められる。この大型片とは接合箇所がないものの、同一個体の穿孔をもつ小片もある。このほかにも弥生時代中期後半の甕（531）が1点出土している。体部内外面には隙間が大きく開



図71 450溝土器出土状況平面・断面図

いた横方向のミガキを施す。ミガキの単位は容易に目で追える程度で、外面のそれは口縁部付近までは達していない。5層出土片と接合した。両者共に生駒西麓産胎土で、IV様式前半に位置する。

**451溝** 調査区中央に位置する。前述のとおり、掘立柱建物4と重複する溝で、掘立柱建物4が建てられる段階には埋められている。南東-北西方向にやや蛇行気味にのび、調査区北西部で後述の459溝に合流する。幅は約0.7~1.3mで、深さは約0.4mを測る。埋土は南と北でやや異なる。南壁際では下層から中~粗粒砂を多く含む炭泥じりのオリブ黒色粘土質シルト、炭泥じり黒褐色粘土質シルト、黄灰色粘土質シルトであるが、北側では下層が暗オリブ灰色砂質シルトブロック土を含むオリブ黒色シルト混じり中~粗粒砂で、上層が中~粗粒砂を多く含むオリブ黒色砂質シルトとなる。

生駒西麓産胎土の弥生土器小片が出土している。時期は不明。

**452溝** 451溝から北側に分岐する溝で、幅約0.55~

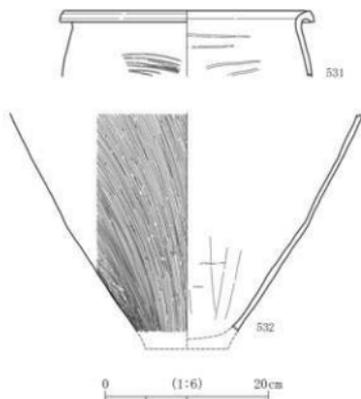


図72 450溝出土遺物実測図

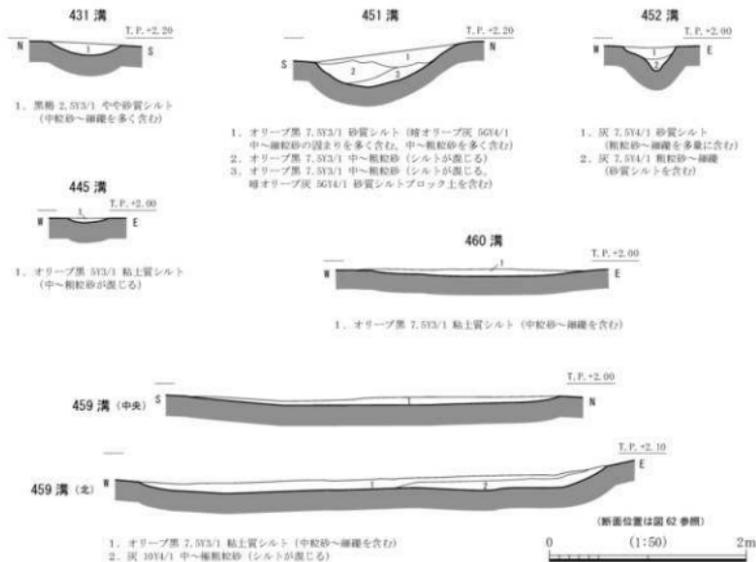


図73 431・445・451・452・459・460溝断面図

0.6m、深さ約0.25mを測る。埋土は下層が砂質シルトを含む灰色粗粒砂～細礫で、上層が粗粒砂～細礫を多く含む灰色砂質シルトである。

遺物は出土していない。

**459溝** 掘立柱建物4の西側に位置する。掘立柱建物4のすぐ西側から北西方向に向かってのびる溝で、幅は後述する460溝や前記451溝との合流部が広く、約5.5mを測る。狭い箇所では幅約1.6mで、深さは浅い箇所もあるが、北壁際で約0.2mを測る。埋土は中粒砂～細礫を含むオリーブ黒色粘土質シルトで、一部下層にシルト混じりの灰色中～極粗粒砂が認められる。なおこの溝よりも西側は、地下水の影響で6層以下は水分を含み非常にやわらかくなっていた。

遺物は出土していない。

**460溝** 459溝の南側に位置する。調査区の南壁側から459溝に合流する溝で、幅は約2～3mを測る。深さは非常に浅く0.1m足らずで、埋土は459溝と同じ中粒砂～細礫を含むオリーブ黒色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

**473溝** 450溝のすぐ東側に位置し、この溝も方形周溝墓2の北辺周溝（467溝）と繋がる。北辺周溝に向かってハの字に広がるが、調査区北壁際では幅約2.9mを測る。深さは約0.55mで、埋土は最下層に黒色粘土質シルトが薄くあり、その上が粘土質シルト混じりのオリーブ黒色細～粗粒砂、灰～暗オリーブ灰色細～粗粒砂となる（図67）。前述のとおり、450溝から土器棺と思われる大型の甕が出土していること、またこの溝が北辺周溝とはほぼ直角に接していることから、この東側に、473溝を西辺周溝とし、方形周溝墓2の北辺周溝を南辺周溝として共有する新たな方形周溝墓の存在が推定できるが、その墳丘と考えられる部分は、調査区北壁際に南西コーナーと考えられる部分が僅かに現れているだけであり、詳細は明らかでない。

非土師西麓産胎土の弥生土器小片が1点出土しているが、時期は不明である。

**耕作溝** 431溝の南側や調査区西端部で、数条の溝を検出している。溝は規則正しく並んでいることから、耕作に伴う畝溝のようなものと考えている。南南西～北北東方向にやや斜行しており、幅は約0.3～0.4m、深さは約0.05～0.1mを測る。埋土は5層と同色・同質の土である。方形周溝墓と同時期ではなく、やや時代が下った5層形成段階での遺構と考えている。

## 第4節 3区の調査成果

### 1. 第3面(図74~77、写真図版19・20・42・43)

3層は、1区から2区の西端部まではその堆積が認められるが、3区では認められない。したがって実際には3層下面の第3面検出遺構ではなく、2層下面検出遺構ということになるが、他の調査区との統一を図るため、3区では2層下面を第3面と呼ぶこととする。

1・2区と同じく、古代から中世にかけての遺構面である。土坑やピット、細溝等の遺構を検出した。これらの遺構は調査区の東側約3分の1の範囲に集中している。西方でも僅かに遺構を検出しているが、東半部のY=-37.567m付近に調査区を南北に横断する擾乱があり、それより西側は遺構が非常に稀薄となっている。3層や4a層を攪拌するような近世の開発(2層)があり、その際にこの時期の遺構の多くが削平されてしまったとも考えられるが、下層まで及ぶような遺構すら残っていないこと、また、4区やこれまでに実施された北側の調査でも、このY=-37.567mラインより西側では古代の顕著な遺構が検出されていないことから、もともと遺構が稀薄であった可能性が高い。なお、大阪府による調査報告では、ちょうどこの南北ラインまでが3期屋敷地の整地範囲として推定されている。<sup>1)</sup>

**細溝** 1・2区から続く東西・南北方向の溝である。重複関係は東西方向の溝が南北方向の溝を切っている箇所もあれば、それとは逆の箇所もありまちまちである。幅は平均0.2~0.4mで、深さは約0.05~0.1mである。中世の耕作溝と考えている。

この溝からは8~9世紀代の須恵器・土師器のほか、図示していないが内黒の黒色土器

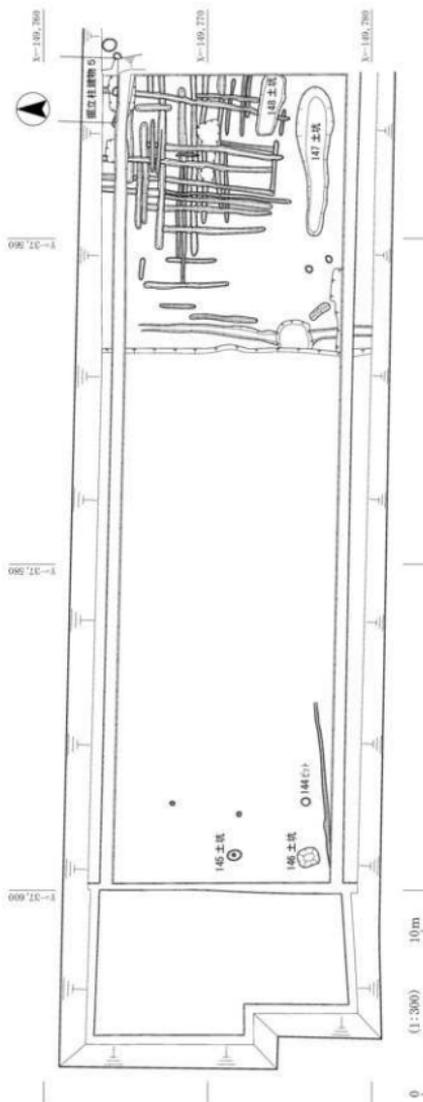


図74 3区第3面検出遺構全体平面図

1. 雑炭 10184/1 砂質シルト  
(泥～粗粒砂～細礫を多く含む)
2. 黄炭 2.534/1 シルト  
(中～極粗粒砂を多く含む)
3. オリーブ層 2.534/3 中～極粗粒砂  
(シルトをわずかに含む)
4. 暗緑炭 2.534/1 砂質シルト  
(中～粗粒砂が混じる)
5. 暗黄褐色 2.534/2 粗粒砂～細礫  
(シルトが混じる)

0 (1:80) 2m

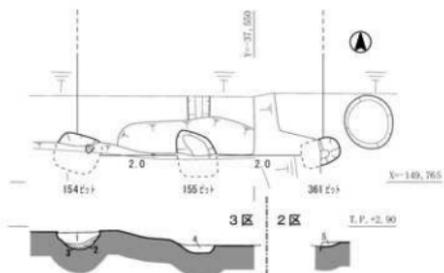
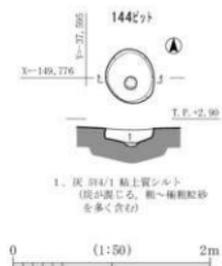
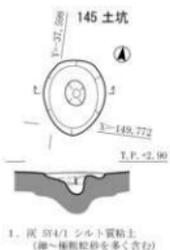


図75 掘立柱建物5平面・断面図

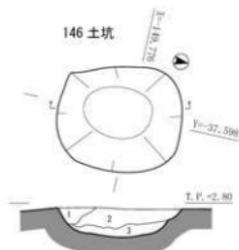


1. 灰 314/1 粘土質シルト  
(泥が混じる, 細～極粗粒砂を多く含む)

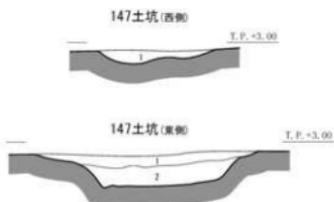
0 (1:50) 2m



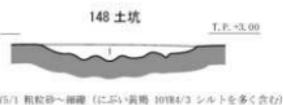
1. 灰 314/1 シルト質粘土  
(細～極粗粒砂を多く含む)



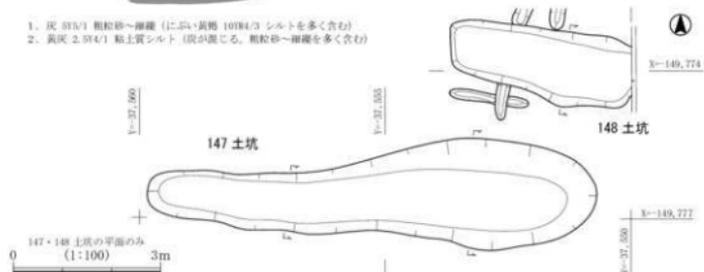
1. 灰 2.535/1 粘土質シルト (細～粗粒砂が多く混じる)
2. に近い黄褐色～灰 10183/4～2.535/1 シルト質粘土
3. 灰 10175/1 細～粗粒砂 (シルトが混じる)



1. 灰 315/1 粗粒砂～細礫 (に近い黄褐色 10184/3 シルトを多く含む)
2. 黄炭 2.534/1 粘土質シルト (泥が混じる, 粗粒砂～細礫を多く含む)



1. 灰 315/1 粗粒砂～細礫 (に近い黄褐色 10184/3 シルトを多く含む)



0 147・148土坑の平面のみ (1:100) 3m

図76 144ピット、145～148土坑平面・断面図

片や凝灰岩切石（写真図版42-h）も出土している。

533は須恵器平瓶の把手、534は壺、535は杯。537は土師器皿である。いずれも9世紀代に位置する。536は8世紀代の土師器皿である。

**掘立柱建物5** 調査区北壁際の、2区との調査区境に跨って位置する。3区の調査では、東西に並ぶ柱穴（154・155ピット）を2基検出し、続く2区の調査で、この2基の柱穴の延長上で、等間隔に続く1基の柱穴（361ピット）を検出した。この3基の柱穴はそれ以上東へ続かないこと、また南側へも折れ曲がらないことから、梁間2間の南北棟の、南妻柱筋であると判断した。柱間は2.0m等間で、主軸はほぼ座標軸にのる。3区検出の154・155ピットは、ともに遺構の南半部を調査区の側溝に切られているため、全体規模は明らかでないが、平面形は隅丸方形に復原できる。南西隅の柱穴にあたる154ピットは、深さ0.3mで、東寄りから根石と思われる厚さ約5cmの板石が1点出土した。埋土は下層からシルトを僅かに含むオリーブ褐色中～極粗粒砂、中～極粗粒砂を多く含む黄灰色シルト、炭・粗粒砂～細礫を多く含む褐灰色砂質シルトである。妻柱の柱穴にあたる155ピットは深さ0.15mで、埋土は中～粗粒砂混じりの暗緑灰色砂質シルトである。2区で検出した361ピットは楕円、もしくは隅丸方形であるが、調査区境の壁面が崩れ、全体規模が明らかでない。深さは0.05mで、埋土はシルト混じりの粗粒砂～細礫である。

3基の柱穴からは遺物は出土していない。

**144ピット** 調査区西半部、南壁寄りに位置する。平面形は南北0.56m、東西0.48mの楕円形を呈し、深さは0.14mを測る。埋土は粗～極粗粒砂を多く含む、炭が混じる灰色粘土質シルトである。底面に食い込むように土師器碗（538）が正位で出土した。

8世紀後半～9世紀初頭頃に位置する碗で、指オサエの後、体部をヨコナデとする。口縁端部には僅かな折り返しがみられる。

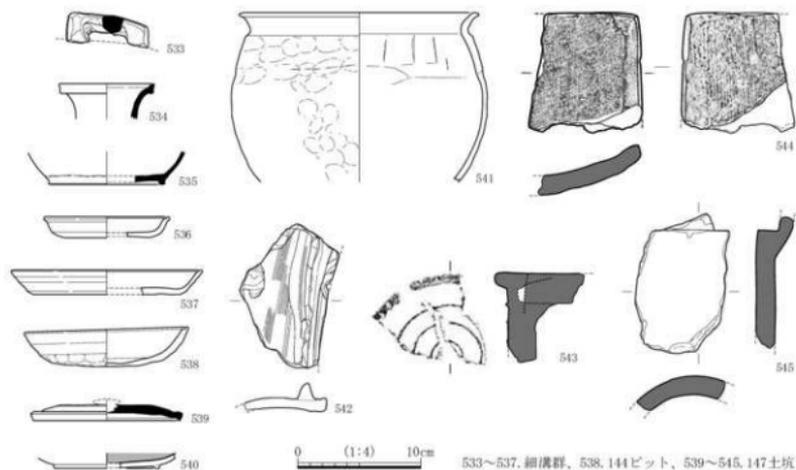


図77 第3面遺構出土遺物実測図

**145土坑** 調査区西方に位置する。平面形は南北0.76m、東西0.62mの南北にやや長い楕円形を呈する。深さは0.22mで、中心が二段掘り状に一段深くなっている。埋土は細～粗粒砂多く含む灰色シルト質粘土である。

遺物は出土していない。

**146土坑** 調査区西方の145土坑の南側に位置する。平面形は南北約1.3m、東西約1.1mの隅丸長方形を呈する。深さは0.3mで、埋土は下層がシルト混じり細～粗粒砂で、上層がにぶい黄褐～灰色シルト質粘土や、細～粗粒砂を多く含む灰色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

**147土坑** 調査区東端の南壁寄りに位置する。平面形は東側がやや膨らんだ東西に長い楕円形を呈する。東西の長さは9m強で、幅は約1～2.25mを測る。深さは深い箇所約0.35m、埋土は下層が粗粒砂～細礫を多く含む炭混じりの黄灰色粘土質シルト、上層がにぶい黄褐色のシルトを多く含む灰色粗粒砂～細礫である。特に新しい時代の遺物が含まれているわけではないが、同時期の遺構と考えている次の148土坑が、東西・南北方向の細溝を切っていることから、溝よりも一時期新しい時代の遺構と考えられる。

この土坑からは須恵器・土師器・瓦などが出土した。9世紀代のものがほとんどであるが、10世紀代の黒色土器(540)も確実に含まれている。

539は須恵器蓋、540は黒色土器碗である。540は内黒で、三角形の低い高台を付す。541は9世紀後半頃の土師器甕。口縁は短く外反する。542は竈である。543は8世紀後半～9世紀初頭のやや小ぶりの重圏紋軒丸瓦。544は凸面縄タタキの平瓦。545は玉縁式の丸瓦である。このほか凝灰岩切石(写真図版42-g)も出土している。

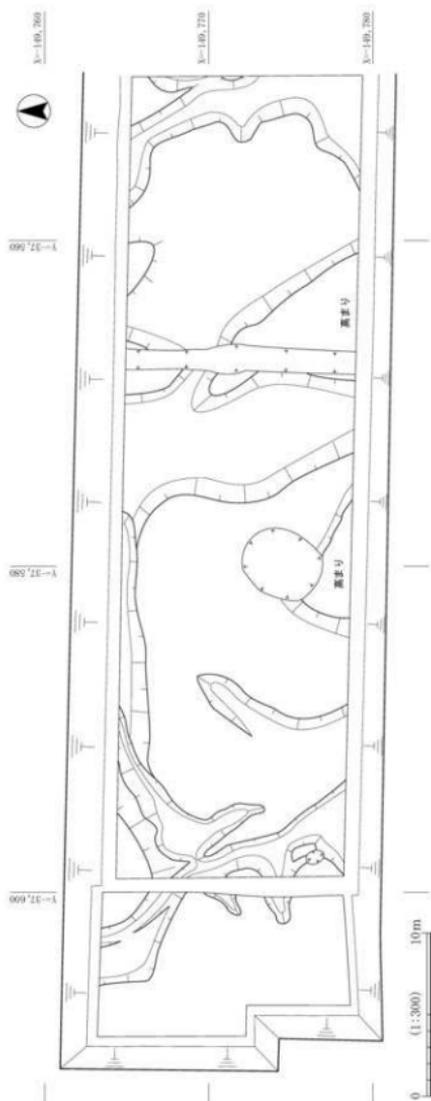


図78 3区4b-1層下面全体平面図

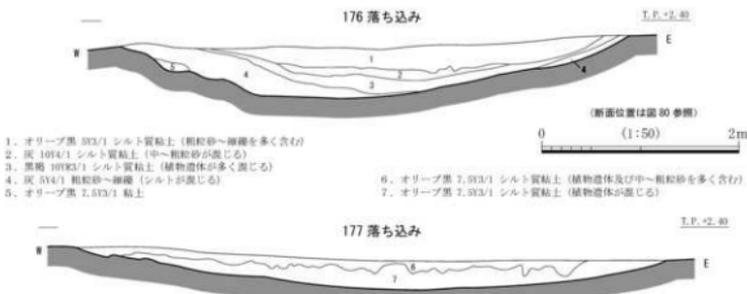


図79 176・177落ち込み断面図

**148土坑** 147土坑の北側に位置する。147土坑と同種の遺構で、平面形は東西に長い長方形を呈する。南北長は東端まで完全に検出できていないが、約4mに復原できる。幅は約1.2～1.6mを測る。深さは0.2m弱で、埋土にはぶい黄褐色のシルトを多く含む灰色粗粒砂～細礫である。前述の細溝と一部重複し、溝を切る。147土坑と同じく黒色土器が出土していることから、147土坑と同時代の遺構と考えられる。

この土坑からも、古代の須恵器・土師器・瓦等のほか、内黒の黒色土器片が出土しているが、147土坑に比べ数は少なく、僅かに小片が7点のみである。

## 2. 4 b 層下面 (図78・79・85、写真図版20・21・43)

洪水砂層である4b-1層を除去した面である。洪水砂は調査区のほぼ全面に及んでおり、その下面では、砂が流れた小規模な溝や落ち込みを検出した。ただし1・2区で検出したような大規模な河道の跡は認められなかった。また西端のY=-37.600m付近で、0.3mほどの高低差のある段を検出した。この段を境に西側が高くなっており、3区の北側に位置する4区へも続いている。

このほか島状に大きく盛り上がる箇所を2箇所で見出した。一つは第5面で検出する方形周溝墓3の墳丘部で、砂層が全く及ばず、まさに下層に方形周溝墓の存在を示しているかのように盛り上がっていた。もう一箇所は、上記高まりの約15m東側で、0.3～0.35mほどの高まりが、南壁から舌状に張り出していた。ただしこの高まり上には、4層が薄くではあるが認められた。

なお、次に報告する176・177落ち込みについては、続く第5面で遺構検出し、空中写真測量・写真撮影等を行なっているが、断面や埋土を検討した結果、実際には5層下面から掘り込まれた遺構ではなく、5層上面にできた深い窪み状の落ち込みに、4b-2層及びその相当層が厚く堆積したものであることが判明した。したがって、図面は第5面検出遺構のままであるが、4b-2層下面検出遺構としてここに報告する。

**176落ち込み** 調査区中央部に位置する。調査区を横断するほどの大型の落ち込みである。幅はもっとも広い箇所約6m、第5面からの深さは約0.4～0.65mを測る。埋土はシルト混じりの灰色粗粒砂～細礫、植物遺体が多く混じる黒褐色シルト質粘土、中～粗粒砂混じりの灰色シルト質粘土、粗粒砂～細礫を多く含むオリーブ黒色シルト質粘土などである。

弥生時代前期の甕底部片(547)と共に、サヌカイトの剥片(546)が1点出土している。

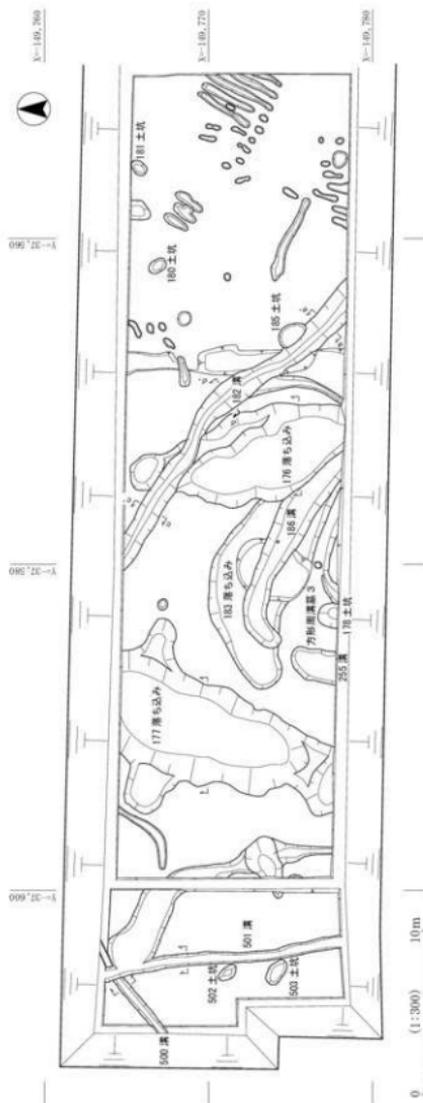


図80 3区第5面検出遺構全体平面図

**177落ち込み** 調査区西半部に位置する。176落ち込みと同じく調査区を南北に横断する大型の落ち込みである。幅はところどころ東西に張り出す箇所もあるが、広い箇所で6m以上ある。深さは約0.4~0.45mで、埋土は4b-2層とよく似ており、下層が植物遺体が混じるオリブ黒色シルト質粘土、上層が植物遺体や中~粗粒砂を多く含むオリブ黒色シルト質粘土である。

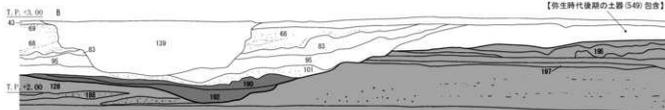
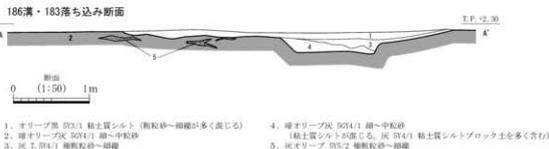
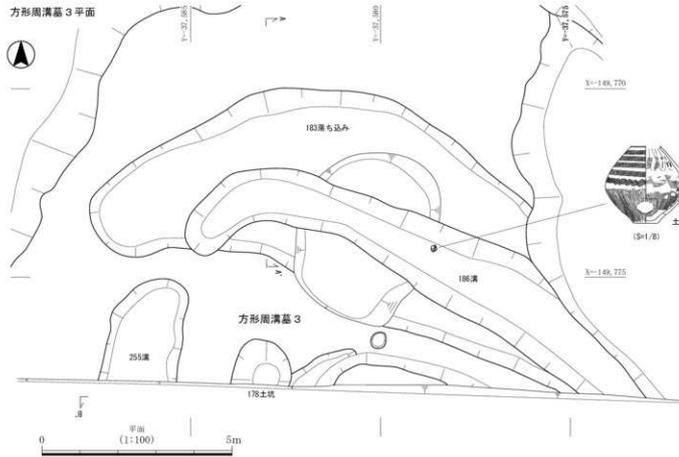
これらの大きな土坑状の落ち込みは、北側に位置する4区でも検出している。

この落ち込みからは、ローリングを受けて角が取れた弥生時代前期の土器片が出土している。

### 3. 第5面 (図80~85、写真図版20~23・42・43)

1・2区から続く弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての遺構面であるが、ここ3区では、確実に古墳時代といえる遺構は見つかっていない。方形周溝墓1基のほか土坑や溝を検出した。

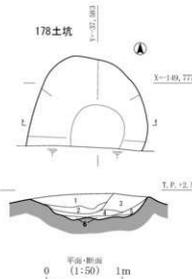
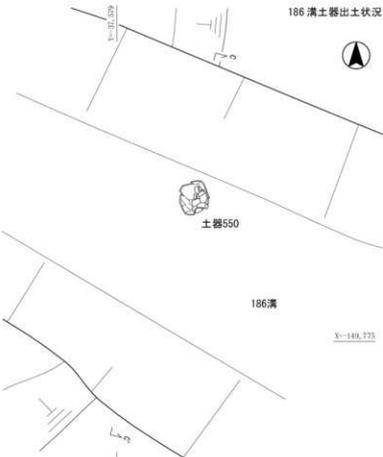
**方形周溝墓3** 調査区中央の南壁際に位置する。北辺と西辺の一部のみの検出であり、正確な全体規模は明らかでない。東西9m以上あり、北辺周溝である186溝の傾きから、主軸は座標北から東に30°ほど振っていることがわかる。その北辺周溝(186溝)の幅は約1.2~2.1m、深さは約0.3m、西辺周溝(255溝)の幅は約2m、深さは約0.25mで、埋土は底にオリブ黒色の粘土質シルトブロックを多く含む暗オリブ灰色細~中粒砂があり、その上が粗粒砂~細礫やオリブ黒色の粘土質シルトブロックを多く含む暗オリブ灰色細~中粒砂、最上層が中~細礫が少量混じる黒色粘土質シルトとなる。空中写真測量の段階では、186溝はその周囲の窪み(183落ち込み)の影響で検出しきれなかったが、



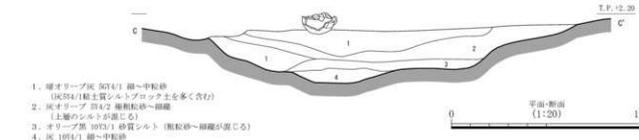
- ※土色は要5図と同-%を使用
67. 黒 100% 4 シルト (粗～細粒砂が多量に混じる) 【5層】
  68. 灰オリーブ灰 50% 1 細～中粒砂 【4層】
  69. このあたりは、68に相当する(4)シルトが多量に混じる 【6層】
  70. 灰 10% 1 シルト粗粒の土が多少混入 【4層】
  83. 灰 30% 1 シルト質シルト 【4b-2層】
  85. 黄 2. 20% 4 粘質シルト (粗～細粒砂が多量に混じる) 【5層】
  96. 黄 2. 20% 4 シルト質シルト (灰オリーブ 2. 20% 2 細～中粒砂や細砂が多量に混じる) 【5層】

100. 黄 2. 20% 1 今や粘土質シルト (粗粒砂～細砂を多く含む) 【5層】
101. 黄 2. 20% 1 粘土質シルト (粗粒砂～細砂が多量に混じる) 【5層】
102. このあたりは、砂・礫や中粒砂
103. 黄 2. 20% 1 粘土質シルト (粗粒砂～細砂が多量に混じる) 【5層】
125. 灰オリーブ灰 50% 1 中～細粒砂
129. 灰オリーブ 20% 2 粗粒砂～小礫
138. 中～大礫・礫のブロックと土・砂・1層上の混合
163. オリーブ灰 50% 2 砂質シルト (中～粗粒砂を多く含む、落ち込み層土)
188. 灰 10% 1 砂質シルト (粗粒砂～小礫を多く含む)

190. 黒 50% 1 粘土質シルト (中粒砂～細砂が少量混じる) 【埋戻土】
191. 灰オリーブ灰 50% 1 細～中粒砂 (粗粒砂～細砂を多く含む) 【埋戻土】
192. 灰オリーブ灰 50% 1 細～中粒砂 (オリーブ灰 50% 1 粘土質シルト・ブロックが多量に混じる) 【埋戻土】
193. 灰オリーブ灰 50% 1 細～中粒砂 (オリーブ灰 50% 1 粘土質シルト・ブロックが多量に混じる) 【埋戻土】
194. 黒 10% 1 粗粒砂～細砂 (シルトを多く含む)
195. 埋戻土 2. 20% 2 細～中粒砂



1. 黄 2. 20% 1 粘土質シルト (粗粒砂～細砂が多量に混じる)
2. 埋戻土 20% 1 粘土質シルト (粗粒砂～細砂が多量に混じる。灰を多く含む)
3. 黄 2. 20% 1 粘土質シルト (粗粒砂～細砂が多量に混じる)
4. 灰 30% 1 粘土質シルト (中～粗粒砂が多量に混じる)
5. 埋戻土 2. 20% 2 粗粒砂～細砂
6. 灰 10% 1 粘土質シルト (中～粗粒砂が多量に混じる)



1. 埋オリーブ灰 50% 1 細～中粒砂 (灰 10% 1 粘土質シルト・ブロックと多く含む)
2. 灰オリーブ 20% 2 粗粒砂～細砂 (上層のシルトが多量に混じる)
3. オリーブ灰 50% 1 砂質シルト (粗粒砂～細砂が多量に混じる)
4. 灰 10% 1 細～中粒砂

図81 方形周溝墓3周辺遺構平面・断面図及び土器出土状況図

183落ち込み内を再度精査した結果、周溝の輪郭が明らかとなり、方形周溝墓であることが確定となった。186溝からは中期後半の壺（550）が1点出土しているが、周溝底ではなく、浮いた状態での出土であることから、周溝がある程度埋まった段階で、墳丘から転げ落ちたものと考えられる。

墳丘については、周辺よりも0.15～0.2m程盛り上がった6層の上に、更に黄灰色細粒砂～細礫、暗灰黄色細～粗粒砂など厚さ約0.35mの盛土が認められる。墳頂部は後世の削平を受けているが、現状では周辺から0.5～0.55mほどの盛り上がりを見せる。なお、上記盛土のすぐ上にはシルトを多く含む黒褐色の粗粒砂～細礫（図81の土色No.193）が堆積しており、これについても、当初は墳丘の盛土と考え調査を進めていたが、この地層中から、弥生時代後期末から庄内式期初頭頃のタタキを有する甕体部片（549）が出土したことから、墳丘盛土ではなく、弥生時代後期末から庄内式期初頭以降に形成された地層であることが後に判明した。これによって、この時期には既に方形周溝墓の墳頂部を削平するような開発が進んでいたことが明らかとなった。なお、5層については墳丘頂部までは達しておらず、肩部ですり付くように収束していた。

主体部については、調査区南壁の断面観察によって、その可能性のある掘り込みを確認している。上端部の幅は約1.6m、下端部の幅は約1mで、断面形は逆台形を呈する。ただし、意図的に遺構の軸に対して垂直に切った断面ではないため、遺構を斜めに断ち割っている可能性が十分考えられる。本来の幅はこれよりもさらに狭いと考えた方がよいかもしれない。底部は水平ではなく、波打つような凹凸がみられる。深さは約0.5mで、埋土は黄灰～灰オリーブ～暗灰黄色の中粒砂～細礫である。木棺の痕跡が残っていないか丹念に調べたが、部分的な変色・変質はみられるが、それらしい痕跡は確認できなかった。

北辺周溝から出土した550は広口壺で、頸部より上を欠損する。内面はハケ調整。外面下半はケズリ後ミガキ、上半は最下段に波状紋で、その上に櫛描直線紋が5条観察できる。体部下半に穿孔あり。非生駒西麓産胎土。方形周溝墓1出土の土器と同じくⅣ-2様式に位置する。

**178土坑** 方形周溝墓3の墳丘内西寄りに位置する。南側が調査区の側溝に切られているため、全体規模は明らかでないが、調査区南壁に僅かに遺構の延長部が確認できることから、平面形は南北に長い楕円形であったと復原できる。東西幅は1.5m強で、深さは0.35mを測る。埋土は粗粒砂～細礫が多く混じる黄灰色や黒褐色の粘土質シルト、中～粗粒砂が多く混じる灰色粘土質シルトなどである。墳丘内の土坑であったことから、主体部の可能性も考えられたが、墳丘の北西側は後世に大きく削平され、盛土が全く残っておらず、溝状の窪みなどもみられること、また南壁に現れた断面では、埋土が5層下部にあたる5～2層とほとんど区別がつかない土色・土質であったことなどから、5層形成段階に掘られた、方形周溝墓よりも後の遺構と判断した。

この土坑からは、弥生土器片に混じって、布留式期の土師器壺片が出土している。

**180土坑** 調査区東半の北壁寄りに位置する。平面形は南東-北西に振った楕円形を呈する。長径は1.1m強、短径は0.77mを測る。深さは0.2mで、埋土はオリーブ黒色粘土質シルトブロック土を多く含む灰色粗粒砂～細礫である。

遺物は出土していない。

**181土坑** 180土坑の東側に位置する。平面形は南西-北東方向に振った楕円形を呈する。長径は1.1m、短径は0.7mを測る。深さは0.3mで、埋土は下層からシルト混じりの中粒砂～細礫、細粒砂混じりのオリーブ黒色粘土質シルト、炭化した植物遺体が多く混じる黒色粘土質シルトである。

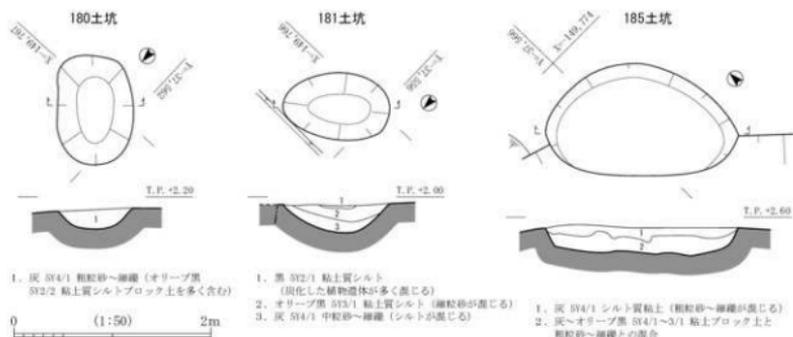


図82 180・181・185土坑平面・断面図

遺物は出土していない。

**185土坑** 調査区東半部に位置する。182溝と重複する土坑で、182溝に切られる。西半が完全に削られており、正確な規模は不明だが、おおよそ直径約2mの平面円形の土坑に復原できる。深さは0.3mで、埋土は下層が灰～オリーブ黒色の粘土ブロック土と粗粒砂～細礫との混合土、上層が粗粒砂～細礫混じりの灰色シルト質粘土である。

弥生時代前期の土器小片が出土している。

**182溝** 調査区中央部、方形周溝墓3の東側に位置する。上記方形周溝墓3の振れとほぼ同じ南東-北西方向に斜行する溝である。図面上は前記176落ち込みをこの溝が切っているように表現しているが、実際には176落ち込みが溝を切っており、落ち込みの埋土が、溝の底近くにまで及んでいる。溝の幅は約1.4～1.7mで、深さは約0.3～0.6mを測る。埋土は粗粒砂～細礫混じりのオリーブ灰～暗オリーブ灰色粘土質シルトや、粘土質シルト混じりの粗粒砂～細礫などである。

弥生時代前期の土器片に混じて、縄文時代晩期後葉の凸帯紋土器小片(548)が1点出土している。今回の調査で出土した唯一の縄文土器で、凸帯上には太い刻み目を入れる。

**500溝** 調査区の北西隅に位置する。南西-北東方向に斜行する溝で、次に報告する501溝と交差し、501溝に切られる。幅は約0.6～0.7m、深さは約0.2mを測る。埋土は褐～オリーブ褐色の粗粒砂～細礫と灰～オリーブ黒色シルト質粘土の互層となっている。

遺物は出土していない。

**501溝** 調査区の西端部に位置する。南北方向に調査区を横断する溝で、幅は約0.6～0.8m、深さは約0.15mを測る。埋土は中～極粗粒砂混じりのオリーブ黒色粘土質シルトである。この溝については、こ

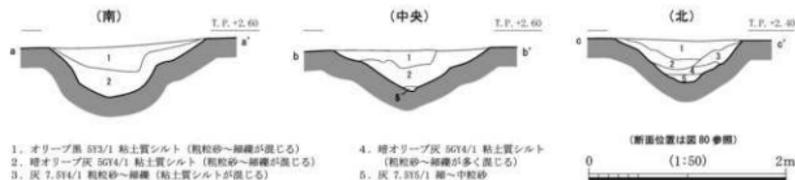


図83 182溝断面図

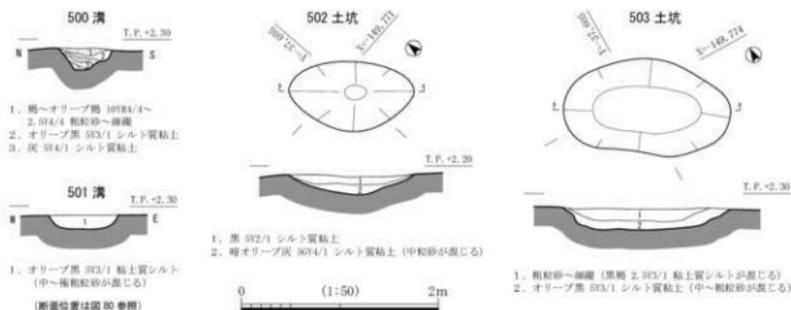


図84 500・501溝、502・503土坑平面・断面図

の第5面にて遺構検出し、空中写真測量・写真撮影等を行なったが、南と北の壁面を丹念に精査したところ、5-1層下面から掘り込まれている様子が確認できた。第5面検出遺構として図面に載せ、報告しているが、実際には一つ上の遺構面に伴う遺構ということになる。

この溝からは、ローリングを受けて角が取れた弥生時代前期の土器片が出土している。

**502土坑** 調査区西端部、501溝の西側に位置する。平面形は長径1.28m、短径0.72mの、南東-北西方向にやや振った楕円形を呈する。深さは0.2mで、埋土は下層が中粒砂混じりの暗オリーブ灰色シルト質粘土、上層が黒色シルト質粘土である。

遺物は出土していない。

**503土坑** 502土坑の南側に位置する。平面形は長径1.7m、短径1.0mの、南東-北西方向に振った楕円形を呈する。深さは約0.25mで、埋土は下層が中〜粗粒砂混じりオリーブ黒色シルト質粘土、上層が黒褐色粘土質シルト混じりの粗粒砂〜細礫である。

遺物は出土していない。

**耕作溝** 182溝以東の第5面は、北東方向に向かって緩やかに傾斜しており、南壁際と調査区北東隅とは高低差が0.6mほどとなる。この範囲では上記180・181土坑のほか、耕作溝と考えている幾筋もの溝を検出している。2区でも報告した溝で、南南西-北北東方向にやや斜行しており、規則正しく並ぶ。幅は約0.3〜0.6m、深さは約0.05〜0.1mを測る。埋土は5層と同色・同質の土である。方形周溝墓と同時期ではなく、5層形成段階での遺構と考えている。

この溝からは、古墳時代前期のものと思われる土師器の高杯片が1点出土している。

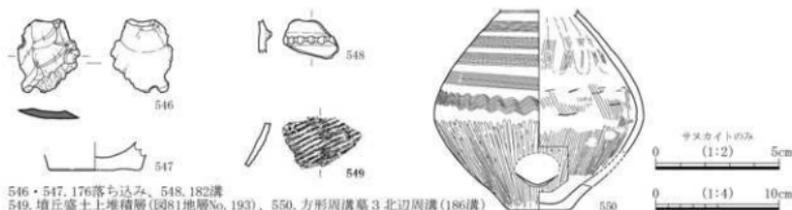


図85 4b層下面・第5面遺構出土遺物実測図

## 第5節 4区の調査成果

1. 第3面(図86~89、写真図版24・44)  
調査区東端部には、1区から続く「チョコレート」の3層が遺存しているが、東壁から僅か数メートルのY=-37.563m付近には、この3層を切る段があり、これより西側では3層が削平されている。したがって西方の大部分は、3区と同じく3層が全く残っておらず、実際には2層下面での検出である。

この段は、高低差が約0.4mある。西側が低く、段の西裾部には溝が伴っている。溝の幅は約0.5~0.7mで、深さは約0.1mを測る。おそらく近世以降の耕作(2層形成段階)に伴って築かれたものと考えられる。

段東側の3層下面でピットや溝を、段のすぐ西側で大型の土坑を2基検出した。しかし調査区西側の約3分の2の範囲では、溝やピットなど遺構は全く確認できない。また深い土坑のような遺構ですら検出できない。上記の段を構築した後世の削平によって、多くの遺構が削られたとも考えられるが、状況が3区と全く同じであり、その遺構が稀薄となる境のラインまでも重なることから、4区についても、全体に遺構が広がっていた訳ではなく、西側はもともと遺構が稀薄であった可能性が高い。

**細溝** 1~3区でみられたような耕作溝と考えている細溝である。南北方向の溝が主で、東西方向は1条のみである。幅は約0.2~0.5mを測る。深さはどれも0.1m以下である。

これらの溝のうちの一つからは、8世紀後半頃の須恵器蓋(551)が出土している。

**475ピット** 調査区の北東隅に位置する。北側と東側が調査区外のため正確な全体規模は明らかでないが、平面形がほぼ円形であることから、直径約1mの遺構になることが復原できる。深さは0.1mで、埋土は黒褐色のシルト

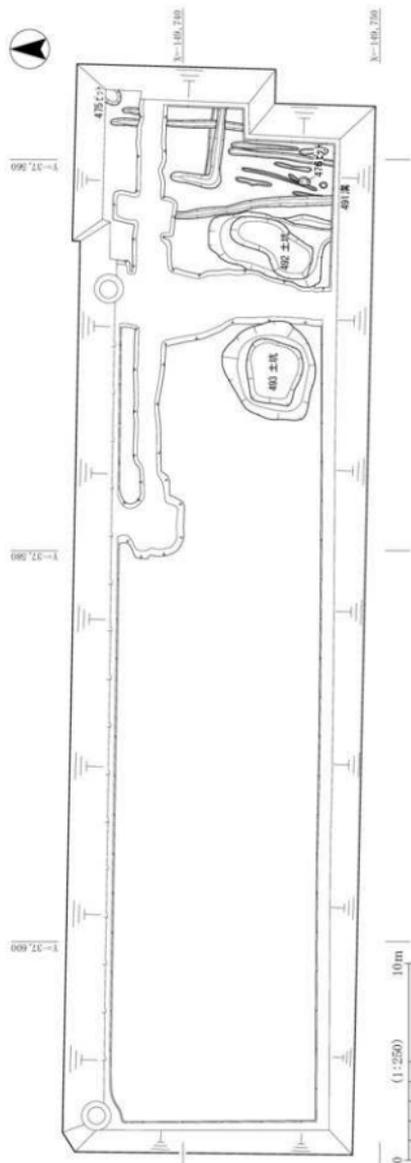


図86 4区第3面検出遺構全体平面図

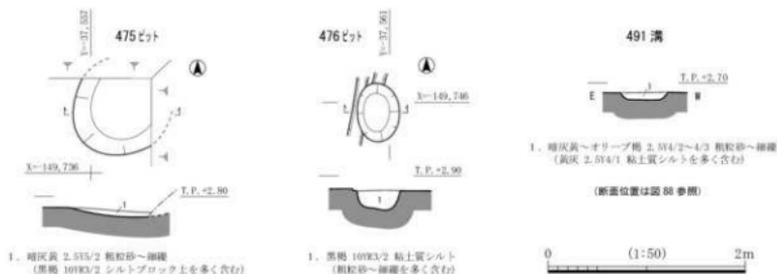


図87 475・476ピット、491溝平面・断面図

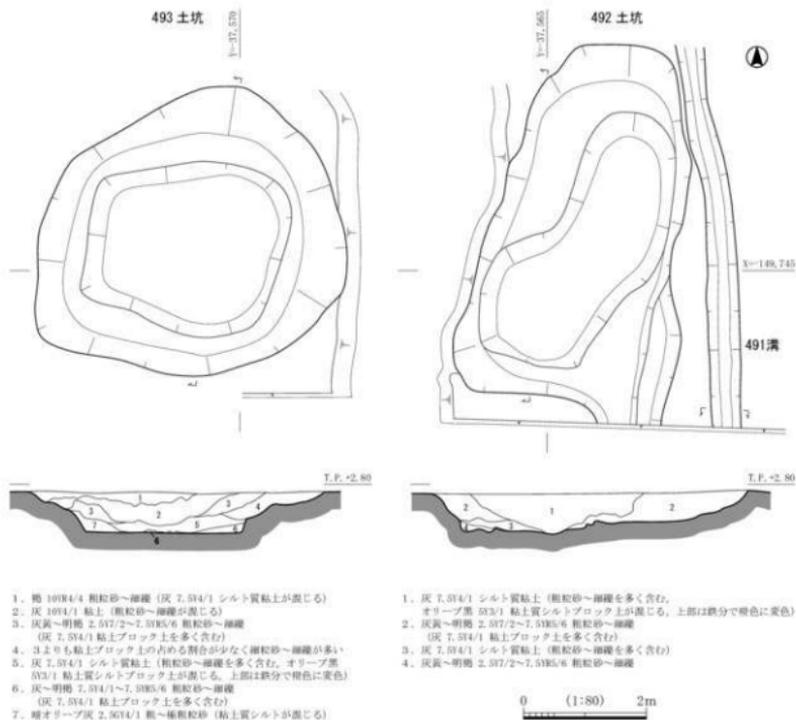


図88 492・493土坑平面・断面図

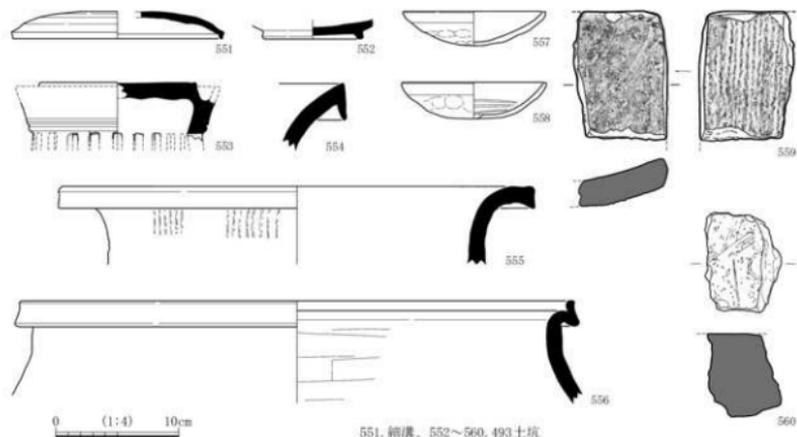


図89 細溝、493土坑出土遺物実測図

ブロック土を多く含む暗灰黄色の粗粒砂～細礫である。

このピットからは、須恵器・土師器の小片が出土している。時期は不明。

**476ピット** 調査区東端の南壁寄りに位置する。平面形は東西0.43m、南北0.6mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は粗粒砂～細礫を多く含む黒褐色粘土質シルトである。

このピットからは、土師器片と共に内黒の黒色土器小片が出土している。

**492土坑** 上記段の西裾部に位置する。南北に長い大型の土坑で、東西約2.8～3.7m、南北約5.9mを測る。平面形は整っておらず、南側にはさらに溝状の広がりが見られる。底部は2段に掘り込まれており、深さは約0.7mを測る。埋土は灰色の粘土ブロック土を多く含む粗粒砂～細礫や、粗粒砂～細礫を多く含むオリーブ黒色粘土質シルトブロック混じりの灰色シルト質粘土などである。

古代の須恵器・土師器・瓦のほか、馬の上顎の歯（写真図版44-u）が1点出土している。長さは約5.5cmあり、5～6歳の馬の歯であると推定できる。

**493土坑** 492土坑のすぐ西側に並んで位置する。492土坑同様の大型の土坑で、平面形は東西約5m、南北4.8mの歪んだ五角形を呈する。底部も492土坑同様に2段に掘り込まれている。底面はほぼ水平で、深さは約0.7mを測る。埋土は粗粒砂～細礫を多く含むオリーブ黒色粘土質シルトブロック混じりの灰色シルト質粘土や、粗粒砂～細礫混じりの灰色粘土、灰色シルト質粘土混じりの粗粒砂～細礫などである。

この土坑からは、古代の遺物と共に瓦器椀など中世の遺物が出土している。

552は9世紀前半の灰軸陶器椀である。断面方形の高台を付し、内面に軸を施す。見込みにトチンの痕跡が残る。553は圈足円面視である。器壁が厚く、陸部では1.2cm以上の厚みがある。陸の周囲2.2cmの範囲まではヨコナデの痕跡が認められるが、陸中央部には全く痕跡が残っておらず、周囲よりも更に一段と滑らかな状態となっている。陸の周縁にはやや幅広の凹線状の窪みがめぐる。陸から海に向かっては急角度で落ち、深い海をつくる。台脚部までは残っていないが、幅5～8mm程度の狭い透しが開けられていた痕跡が認められる。554・555は須恵器甕。554は口縁端部が下方に垂下するタイプで、頸部に

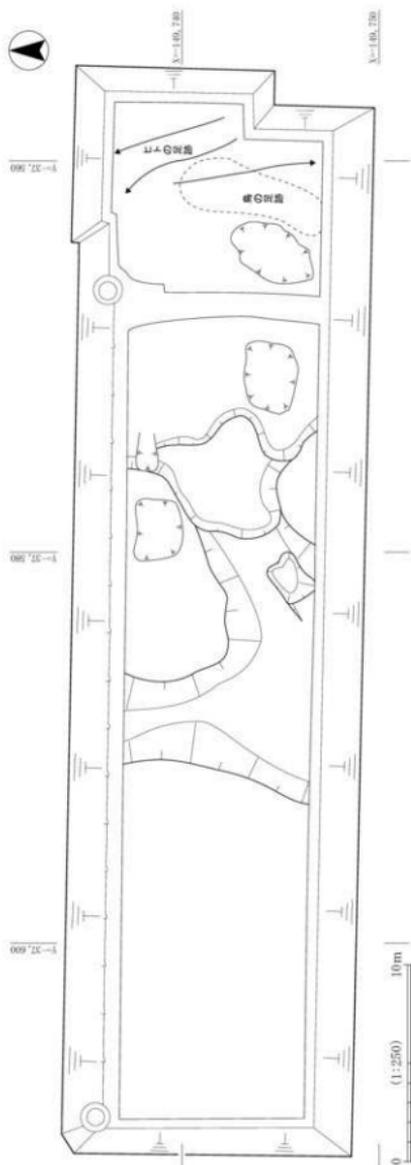


図90 4区4b-1層下面全体平面図

はナデに先行するタタキが認められる。8世紀後半～9世紀前半。556は常滑焼の甕。口縁部は受け口の断面N字状を呈し、緑帯は2.1cmを測る。13世紀後半。557・558は低平化が進んだ13世紀末～14世紀初頭の瓦器椀である。高台は消失する。内面のミガキは558のみで、557には認められない。559は凸面縄タタキの平瓦、560は砥石である。

## 2. 4b層下面 (図90・91・93、写真図版24・25)

洪水砂層である4b-1層を除去した面である。Y = -37.590m付近には3区西端部から続く段があり、砂層はそれよりも東側の調査区の約3分の2の範囲に堆積する。段の高低差は約0.15～0.2mで、西側が高い。段より西側は、砂は及んでいないが、砂層とセットとなるシルト質粘土の4b-2層がみられることから、本来は多少なりとも砂が堆積していたことがうかがえる。おそらく後世の開発によって削平されたのであろう。段よりも東側のうち、調査区中央付近の4b-1層下面には、若干の起伏がみられるが、1・2区で検出したような大規模な河道の跡は認められなかった。東の約3分の1の範囲はほぼ平坦で、その東端部では、ヒトの足跡や鳥の足跡を検出した。大洪水が襲う前には、ヒタヒタとした湿地状の環境であったことがうかがえる。

なお、調査区中央部の南壁寄りで検出した大型の落ち込みについては、続く第5面で検出し、写真撮影・図面作成等を行なっているが、南壁の断面を観察すると、これらは5層を切るような状況で窪んでおり、また落ち込み内に5層も堆積していないことがわかる。3区検出の176・177落ち込みと同じく、本来は4b-2層を除去した4層下面検出の遺構とすべきものであるので、次項ではなく、ここで報告することとする。ただし図面は第5面検出遺構のままと

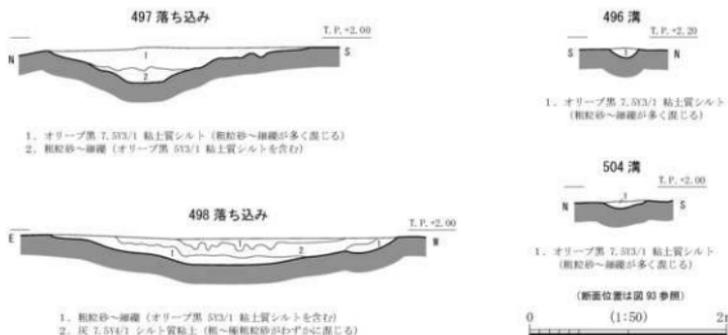


図91 497・498落ち込み、496・504断面図

した。

**497・498・505・506落ち込み** 調査区中央部の南壁寄りに位置する。幅3m前後もある大型の落ち込みで、平面形はU字状に曲がるなど整っていない。埋土はオリブ黒色粘土質シルトを含む粗粒砂～細礫や、粗粒砂～細礫を多く含むオリブ黒色粘土質シルト、粗～極粗粒砂が僅かに混じる灰色シルト質粘土などで、第5面からの深さは約0.2～0.35mを測る。なお、落ち込みの肩部は非常になだらかな傾斜であり、平面形状も上記のとおり不整形である点などから、人為的な掘り込みとするよりは、自然にできた落ち込み(窪み)と考えた方がよいかもしれない。

いずれの落ち込みからも遺物は出土していない。

### 3. 第5面(図91～93、写真図版25)

他の調査区に比べ遺構は非常に稀薄である。溝や落ち込みを検出したが、前記のとおり、落ち込みは4層下面検出の遺構とすべきものであったので、既に前項で報告している。

なお、東半部を通るY=-37.570mのラインから東側は、5層上面(一部4b-2層の途中)で、すでに調査設計深度に達したため、オフィスの17mを除き、それ以下の掘削・調査は行っていない。



図92 第5面土器出土状況図

**504溝** 調査区東半部の北寄りに位置する。東南東-西北西方向にのびる溝で、幅は東側で若干広がるが平均約0.5mを測る。深さも浅く0.1m以下で、埋土は粗粒砂～細礫を多く含むオリブ黒色粘土質シルトである。上記のとおり、Y=-37.570mのラインから東側は5層を掘削していないため、東端部までは確認できていない。

なお、この5層未掘削部の上面で、帯状にのびる薄い砂の広がりを検出している。これは工具によって意図的に掘り込まれた遺構ではなく、僅かにできた凹凸の中に、薄く砂が堆積したようなものであった。それはちょうど上記504溝の延長上で検出され、さらに東に4mほど延長した地点で、南西-北東方向の砂の帯と合流している状況が認められた。下層の溝の影響でできた僅かな窪みに砂が入り込んで

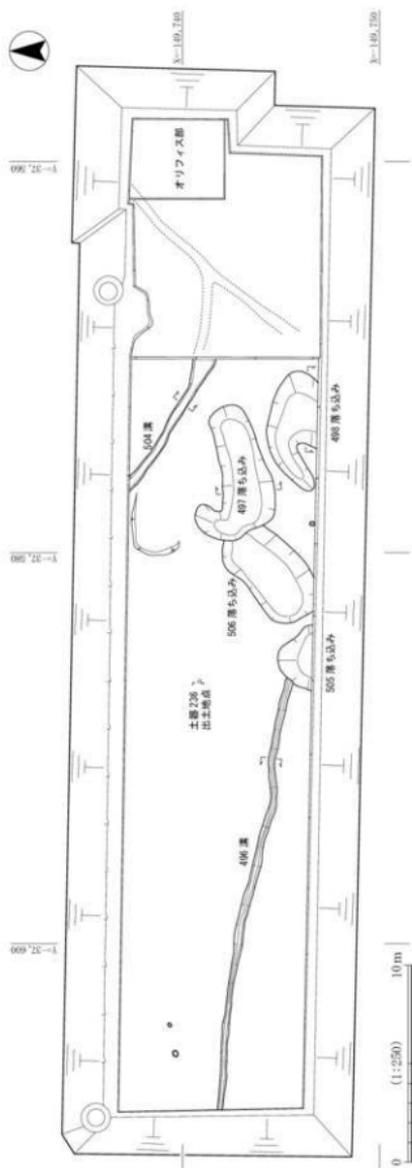


図93 4区第5面検出遺構全体平面図

きたものである可能性が高く、これによって未調査部分である504溝の東側延長部状況がある程度の復原できた。

この溝からは遺物は出土していない。

**496溝** 調査区西半部に位置する。西半部の遺構はこの496溝と小ピット2基だけであり、遺構が非常に稀薄である。溝の幅は約0.25~0.45mで、深さは浅く0.1m程度である。溝底のレベルは東側が僅かに低い。埋土は粗粒砂~細礫が多く混じるオリブ黒色粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

#### 引用・参考文献

- 1) 大阪府教育委員会 2006 『新上小阪遺跡』

## 第5章 新上小阪遺跡09-1の調査成果

### 第1節 はじめに

この調査は、新上小阪遺跡08-1調査地の北側に面する府営住宅敷地内道路の下水管理設工事に伴う発掘調査である。調査区は下水マンホールを設置するための立坑部2箇所、東側の調査区を1区、西側の調査区を2区とした(図94)。調査は平成21年5月8日に着手し、同6月2日に終了した。調査面積は1・2区併せて19.2㎡である。

### 第2節 調査成果

#### 1. 1区(図94・95、写真図版45)

調査面積は東西2.4m×南北2.4mの5.76㎡である。現地表面(T.P.+4.3m)から調査対象最終面(T.P.+1.0m)まで、深さ3.3mについて発掘調査を行なった。この範囲には、マンホール1本と交差する下水道管3本が埋め込まれている。そのため、ほぼ全城が最終掘削面まで攪乱を受けていたが、南壁・北東隅・北西隅の一部に遺物包含層が残存していた。

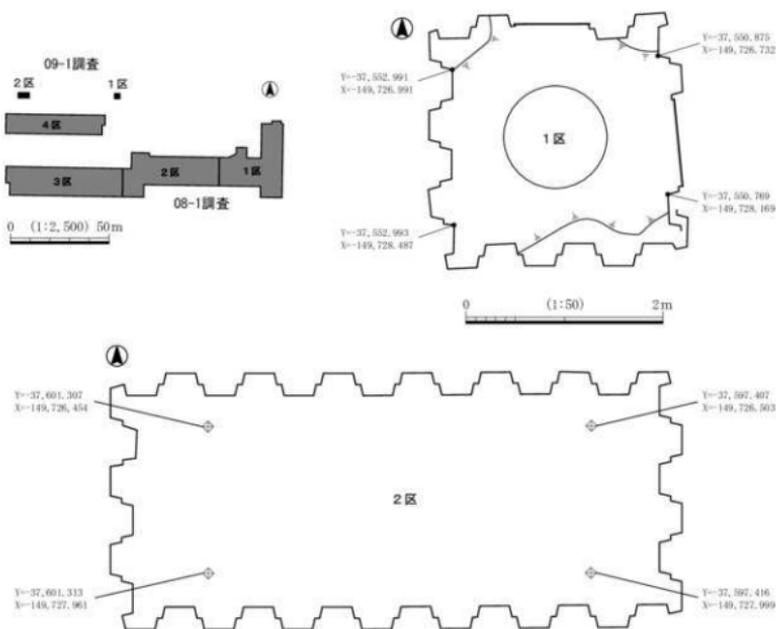
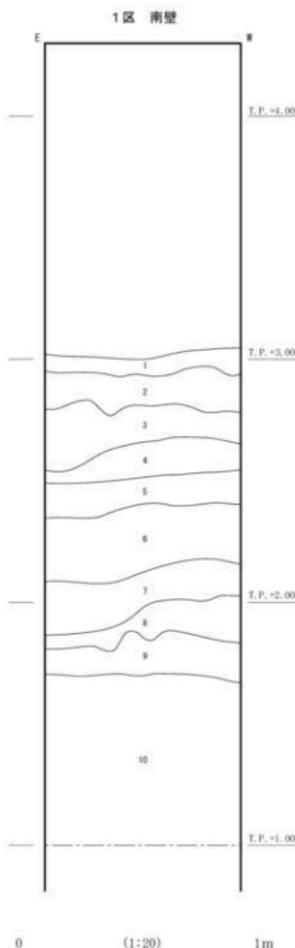


図94 調査区平面図



1. 黒層 2.0/3/1 に 暗褐色 10YR3/3 が認められる粘質土 (細粒砂混じる。遺物包含)
2. オリーブ黒 5Y3/1 粘質土 細～粗粒砂混じる
3. 灰 7.0/4/1・灰オリーブ 5Y4/2 粗粒砂
4. 黒 10YR4/4 粗粒砂
5. 灰オリーブ 5Y4/2・オリーブ黒 2.0/4/3 粗粒砂
6. 灰 7.0/4/1 粗粒砂
7. オリーブ黒 10Y3/1 粘土
8. 灰 10Y4/1 粘質土 (極細粒砂混じる)  
・オリーブ黒 2.0/3/1粗粒砂 (細粒砂混じる)
9. 黒 7.0/2/1 粘質土 (粗粒砂・小石混じる)
10. 黒 10Y2/1 粗粒砂

図95 1区地層断面図

上面の攪乱土層を機械で除去した後、人力で掘削した。南壁部で計10層の土層の堆積を確認した。今回の調査区の土層の堆積状況は、新上小阪遺跡08-1調査区と基本的に同じである。1層は08-1調査区の3-1層に、2層は3-2層に、3-6層は4層に、7層は5層に対応するとみられる。各層ごとに掘削したが、遺構は認められなかった。

08-1調査区と同様に、1層は瓦・黒色土器・土師器片を比較的多く包含していたが、そのほかの土層からの遺物の出土はなかった。

## 2. 2区 (図94・96・97、写真図版45)

調査面積は東西5.6m×南北2.4mの13.44㎡である。現地表面(T.P.+4.3m)から調査対象最終面(T.P.+0.9m)まで、深さ3.4mについて発掘調査を行なった。

上面の攪乱土層を機械で除去した後、人力で掘削した。西壁際の攪乱を受けていない地点での3層を加えた計18層の土層の堆積を確認した。4-6層が08-1調査区の3層に、7・8・10層が4b-1層に、11層が4b-2層に、11・12層が5層にそれぞれ対応するものと考えられる。各層ごとに掘削し、上面の精査を行なったが、遺構は認められなかった。

各遺物包含層からの出土遺物は、古代に属するとみられる瓦・土師器・須恵器片が大部分を占める。4-6層からの出土がほとんどで、須恵器壺(562)や瓦(563)のほか、灰粘陶器(561)や製塩土器も含まれている。14層以下は砂層の堆積となり、遺物は包含していない。

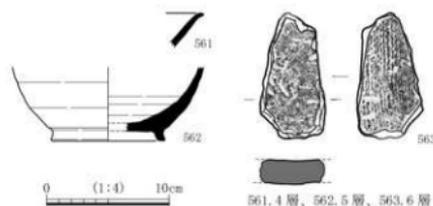


図96 2区出土遺物実測図

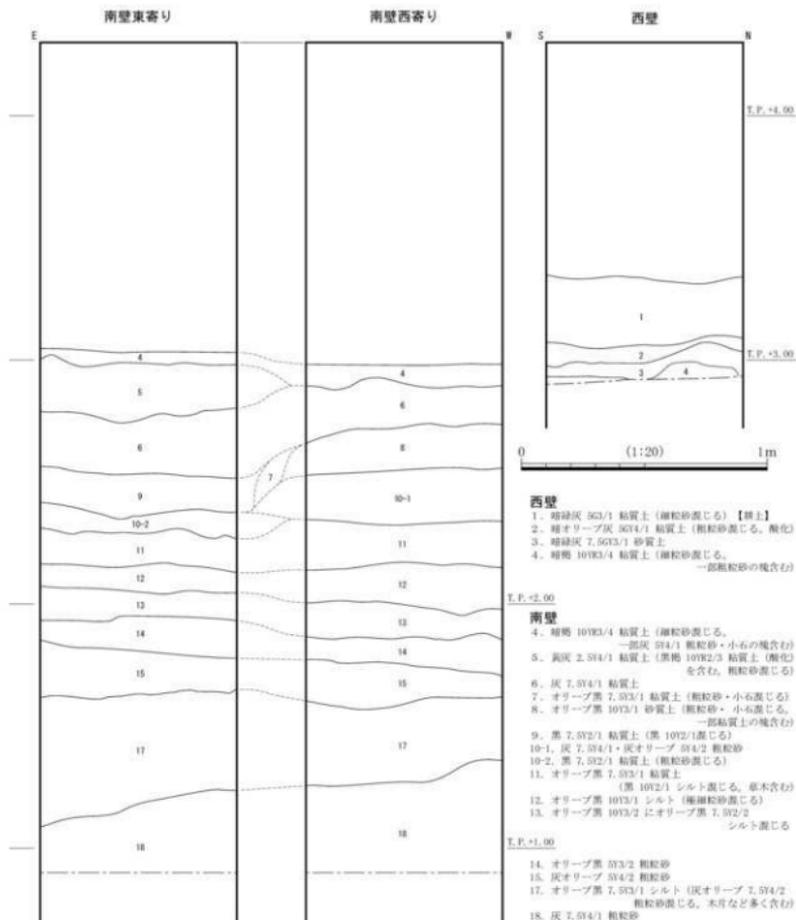


図97 2区地層断面図

### 第3節 小結

この調査では、両調査区で08-1調査区から続く中世から古代にかけての遺物包含層が確認できた。08-1調査においては、この下面で掘立柱建物等の遺構を検出しているが、09-1調査区内では検出できなかった。08-1調査区で5層と呼ぶ弥生時代から古墳時代末の遺物包含層も、両調査区で確認できたが、遺物は含まれておらず、その下面で遺構も検出できなかった。

1区では8層以下、2区では第14層以下に厚い砂層が堆積している。

## 第6章 まとめ

これまでの新上小阪遺跡内の発掘調査は、府営住宅建替え事業の工程に従って、遺跡の北側から順次進められてきた。数次にわたる調査によって、遺跡北半部についてはある程度遺跡の状況が解明されてきたが、南半部についてはこれまで全く調査が行なわれておらず、その様相は明らかとなっていないかった。今回はじめて遺跡南半部で調査を実施し、弥生時代中期後半から中世に至る良好な遺構が広がっていることを確認することができた。特に、これまで未確認であった弥生時代中期後半の方形周溝墓や古墳時代前期の建物跡の検出、また一般の小規模村落のものとは考え難い古代の貴重な遺物の出土など、周辺遺跡との関係を考える上でも重要な成果をあげることができた。

以下、調査によって明らかとなった事柄について、これまでの成果と併せながら、大きな時期ごとに簡単に記し、まとめとする。

### ◆弥生時代(図98)

検出した弥生時代中期後半の遺構は、厚い氾濫堆積層(6層)の上に築かれていた。おそらくその氾濫堆積層を除去した段階で、弥生時代中期前半や前期の遺構などが検出できるものと思われるが、調査設計深度の都合上、今回そこまでは調査できず、中期後半以前の状況を明らかにすることができなかつた。しかし、3区の6層からは、他の調査区に比べ多くの前期土器が出土していることは注意しておきたい。今回の調査で出土した20点ほどの前期の土器片のうち、2区の遺構出土の1点以外は全て3区からの出土であり、中でも3区6層からの出土は11点を群を抜いて多い。第1期(2001年度調査)<sup>①</sup>・第2期(2005・2006年度調査)<sup>②</sup>の調査でも、また今回の調査でも前期の遺構は未検出であったが、このような遺物の出土密度からは、調査区西側の3区周辺に前期の遺構が多く広がっていたことが推定できる。

なお中期前半(Ⅱ様式)の遺構については、これまでに実施した北側の調査では、掘立柱建物が建つ集落の一部や大溝群、また集落の東側で水田域を検出しているが、上記のとおり、今回はその深度まで調査を行っていないため、遺構を確認することができなかった。

中期後半の遺構は、第2期調査でⅣ-1様式の水田跡が見つかってはいるが、第1期調査では「遺物の出土はⅢ様式前半までに収まり、Ⅲ様式後半～Ⅳ様式にかけての、弥生時代中期後半の様相は不明である。なお、生産域でもないようである」とされているとおり、遺構が非常に乏しく、その様相があまりつかめていなかった。第2期調査では、ほぼ完形の土器が2点出土しているが、それ以外この時期の遺物はほとんど出土しておらず、報告でも「弥生時代中期後半の遺物(Ⅲ様式後半～Ⅳ様式)は両調査区含めて非常に少なく、中期前半(Ⅱ様式～Ⅲ様式前半)の居住域とは位置が異なるものと考えられる」とまとめられているほどであった。

このため、今回の調査地内にもこの時期の顕著な遺構はそれほど広がっていないものと思われた。しかし調査の結果、第5面において、全く予想もしていなかった方形周溝墓が発見され、遺跡の南半部に中期後半の墓域が広がっていることが明らかとなった。

方形周溝墓は3基あり、その東側では数条の溝を検出している。方形周溝墓からは、主となる明確な埋葬施設は確認できなかったが、方形周溝墓1の周溝からは、体部下半に穿孔のある完形に近い供献土器が多数出土し、方形周溝墓2の墳丘肩部からは、子供の遺体を納めたと考えられる土器棺も発見さ

れた。

穿孔された供獻土器については、方形周溝墓1から9点が出土しており、一つの方形周溝墓からの出土としては、やや違和感をもつほどの数の多さとなっている。同じ東大阪市内に位置する巨摩遺跡でも、11号方形周溝墓から少なくとも10個体の穿孔された壺・甕・高杯・水差しなどの供獻土器が出土しているが、ここでは墳丘の全体が検出されていないにもかかわらず、土器棺も含め11基の埋葬施設が検出されている。つまり一見多く見える巨摩遺跡の穿孔土器の数も、埋葬回数を考慮すれば、妥当な数といえるのであり、そう考えると、本調査の方形周溝墓1も、主体部は未確認ではあるが、これだけ多くの穿孔土器が出土していることから、墳丘上には多数の埋葬施設があったのではないかと推測できる。

この土器に穿孔する行為は、供獻土器にとどまらず、方形周溝墓2で検出した土器棺にもみられ、棺身となる甕の体部下半には、斜めに寝かせた時にちょうど底になる個に穿孔が施されている。本来の穿孔の理由は別にあったとしても、棺として地面に据える際には、棺内に溜まった液体が棺外にうまく排水されるよう、明らかに意図的に穿孔箇所を下向きにして据えている様子がうかがえる。

これら方形周溝墓に伴う土器群は、そのほとんどがIV-2様式を中心とするものであるが、方形周溝墓2出土の広口壺(361)などのように、若干新しい様相を示すものもあり、それぞれには微妙な様式差が認められる。土器棺に使われた甕や鉢についても、方形周溝墓構築の契機となった最初の埋葬に伴う供獻土器よりも、僅かであっても当然新しいはずのものであり、その様相の違いがうかがえる。本報告では十分な検討ができなかったが、細かく分析すれば、上記のように埋葬回数なども推定できるかもしれない。

今回の調査で、はじめて方形周溝墓が発見され、当遺跡内に中期後半の墓域が広がっていることが明らかとなったが、先にも記したとおり、第2期調査では、このすぐ北側で水田跡が検出され、生産域が広がっていたことが確認されている。その両者の遺構面の高さを比較すると、北側の水田面はT.P.+

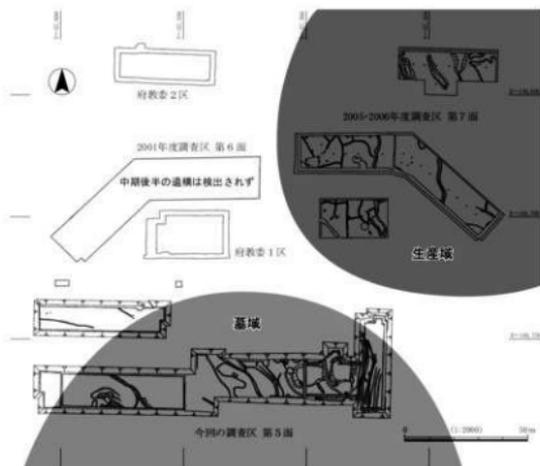


図98 遺構分布図1 (弥生時代中期後半)

1.3~1.8m付近であったのに対して、今回の方形周溝墓はその周囲でもT.P.+2.2~2.5mくらいの高さであり、そこには1mほどの高低差があったことがわかる。つまりこの時期の新上小阪遺跡内は、北半部が低く、南半部がやや高いという地形となっており、その北半の低地部には水田が築かれ、南側の微高地上には墓城が形成されていたという景観であったことがわかってきた。

このように今回の調査によって、新上小阪遺跡内における中期後半の生産域と墓城との関係をつかむことができたが、当遺跡内からは、未だ方形周溝墓に伴う時期の集落は見つかっていない。それについては一つの遺跡の中だけにとどまらず、山賀遺跡など周辺の遺跡までも含めた広い範囲での検討が必要と思われる。

たとえば東方に広がる山賀遺跡との関係を見てみると、新上小阪遺跡に祭祀土坑や掘立柱建物などからなる集落が広がる中期前葉の段階には、山賀遺跡には方形周溝墓や木棺墓・土器棺墓などからなる墓城が形成され、逆に中期後半になると、山賀遺跡側は一変して掘立柱建物・溝・井戸・土坑などからなる集落となり、新上小阪遺跡側が方形周溝墓からなる墓城となる、という具合に、両遺跡には密接な関係がうかがえる。

この時期の集落と墓城との関係については、地理的にはやや離れるが、寝屋川市の丘陵上に立地する太秦遺跡<sup>98</sup>と大尾遺跡のように、ある程度の距離を隔てて形成されていたと推測されることから、当遺跡の方形周溝墓に伴う集落についても、当遺跡からやや離れた場所に広がっていたと考えている。周辺遺跡の調査成果を総合すると、現時点では、上記のように山賀遺跡で確認されている集落がその候補としては有力であるが、未だ遺跡が発見されていない当遺跡南方に存在した可能性も考えておきたい。

なお、方形周溝墓の東側に掘られた溝については、遺物が伴っておらず、所属時期を特定することができない。北側の調査では、Ⅱ様式の大溝群が検出されているが、今回検出した溝とは規模や構造が明らかに異なっており、一連のものとは考え難い。また第5面からはⅡ様式の遺物がほとんど出土していないことから、そこまで所属時期を遡らせることも難しい。現時点では、方形周溝墓と同じ中期後半の遺構で、方形周溝墓と同時並存していたと考えておきたい。

その性格についても、方形周溝墓を築くにあたっての排水のため、北側の水田への用水路、あるいは水害からの防壁、などいくつか考えられるが、現時点では明らかではない。

弥生時代後期後半の遺構については、第2期の調査で良好な集落跡を検出しているが、今回の調査地帯では、もっとも第2期調査区に近い1区北端部において、124溝が1条検出できた程度で、他にこの時期に属する遺構は全く確認できなかった。第2期の報告では、溝によって囲まれた北東-南西方向に約70m、北西-南東方向に100+a mという居住域の範囲が推定されているが、今回検出した124溝は、その南限にあたる可能性が高い。

#### ◆古墳時代 (図99)

この時代の遺構は、各調査でやや様相を異にする。今回の調査では、1区と2区で庄内式期末から布留式期初頭、もしくは前半頃にかけての掘立柱建物や土坑などの遺構を検出したが、これまでの北側の調査では、この時期の遺構はほとんど検出されていない。第1期調査では、もっとも第2期調査寄り的一部で、掘立柱建物ほか溝や土坑など、これに近い時期の遺構を検出しているが、遺物の時期は布留式期が中心であり、僅かながら時間的なズレが認められる。また第2期調査では、前述のとおり弥生時代後期後半の掘立柱建物や竪穴建物によって構成される良好な集落跡を検出しているにもかかわらず、次

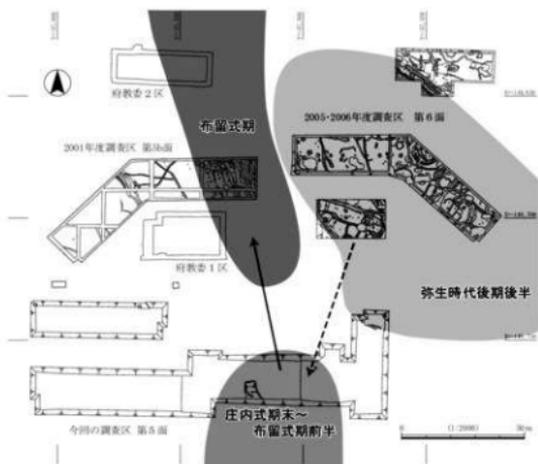


図99 遺構分布図2（弥生時代後期後半～布留式期）

の遺構面では、遺物も少なく、古墳時代前期の遺構がほとんど認められない非常に稀薄な状況となっている。

このように、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけては、狭い範囲の中での居住城の移動がみられる。今回の調査では、古墳時代前期の建物跡は1棟だけしか検出できておらず、集落の検出とまでは言えないが、北側に同時期の遺構が広がっていないことから、今回の調査地から南側に庄内式期末から布留式期前半頃の居住城が広がっていたことが推測できる。

おそらく、弥生時代後期後半に第2期の調査区を中心に広がっていた居住城は、古墳時代になると姿を消し、庄内式期の終わり頃に今回の調査地から南側にその中心を移したと考えられる。空白期となる庄内式期の居住城は、また別の場所にあったのかもしれない。その後少しずつ居住城が北に向かって移動し、布留式期には第1期調査区の東端部付近を占めるようになる。

このように、短い周期で居住城が点々と移動していった様子が復原できる。

その後、6世紀後半になるまでのしばらくの間、人々の活動の痕跡を示す顕著な遺構がほとんどみられなくなるが、山賀遺跡で発見された古墳などのように、周辺で造墓活動が行われていたことがうかがわせる埴輪や勾玉が出土していることは注意しておきたい。

6世紀後半になると、方形周溝墓の高まりを残したまま、全体に土地の攪拌が及ぶ。5層とした地層がそれにあたる。おそらく全体が耕作地として利用されたためと考えられる。3区第5面の東端でみられるような溝は、この時の耕作痕跡と思われる。また、方形周溝墓1と2の間を流れる131溝も、この段階に開削されたものである。

今回の調査区内では、上記の遺構と1区検出の数基の土坑以外、この時期の顕著な遺構は検出されていないが、北側の第2期調査では、古墳時代後期末（6世紀末～7世紀初頭）の水田跡が検出されている。131溝はこの北側に広がる水田の排水などに使われていたのかもしれない。

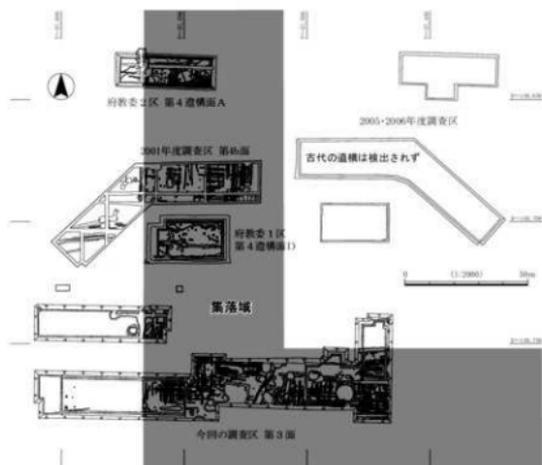


図100 遺構分布図3 (古代)

◆古代～中世 (図100)

6世紀後半になって開削された上記の131溝の中には、7世紀前半頃の遺物が僅かではあるが含まれていることから、131溝はこの時期までは溝として機能していた、あるいはある程度の窪みを残していたということがわかる。

しかしその後、この地に大規模な洪水が襲う。その時期は、前後の地層の年代から、7世紀前半から8世紀初頭までの間と推定できる。4b層がそのときの洪水堆積層であるが、古代の遺構は、この地層の上面を整地して築かれている。

検出した遺構には、掘立柱建物4棟、堀1条のほか、土坑や溝などが多数あり、出土した遺物は、8世紀前半や13世紀代のものもあるが、8世紀後半から9世紀前半頃の長岡京期を中心としたその前後の時期のものが圧倒的に多い。この状況は、平成15年に北側で実施された大阪府教育委員会の調査でも同じで、同時期の掘立柱建物が多数検出されている<sup>17)</sup>。出土した遺物も、8世紀末から9世紀中葉にかけてのものが顕著であると報告されている。なお、この大阪府教育委員会による調査では、検出した掘立柱建物群を、整地の分離から8世紀後半・9世紀前半・9世紀中頃～後葉の3時期に分け、その変遷が復原されているが、今回の調査では、検出した遺構をそこまで細かく分類することができなかった。

今回の調査では、古代の遺構は1区の南3分の2から2区にかけて分布しており、3・4区の西方、及び1区北端部では非常に稀薄、あるいは全く検出できないという状況が明らかとなった。遺構が広がる区域と稀薄となる区域の西側の境は、3区も4区も共にY=-37,567m付近であったが、この南北のラインが、大阪府教委の調査によって、3期屋敷地の整地範囲として推定されているラインとピッタリと重なることは非常に興味深い。遺跡の北半で実施された大阪府教委の調査でも、当センターが行なった第1期の調査でも、この南北ラインより西側では、今回の成果同様に古代の顕著な遺構は検出されておらず、これより東側のみ遺構が広がっていた。つまり、今回の調査地側だけでなく、遺跡の南側から北方までの広い範囲で、Y=-37,567mというラインを境にその東と西で遺構の分布が異なるという状

況が明らかとなったのである。

また、これだけ周辺で古代の遺構が確認されているにもかかわらず、第2期調査では古代の遺構が全く検出できないことも注意したい。遺構が検出されない理由については、後世の開発により削平されたためとも考えられるが、もともと遺構が広がっていれば、たとえ後世に削平されたとしても、遺物はある程度出土するはずである。しかしそういった状況でもなく、また土坑のような深い遺構すら検出されていない。後世に削平されたために検出できなかったとするよりは、もともと遺構は広がっていなかったと素直に考えるべきであろう。この状況は、第2期調査の南側にあたる今回の調査の1区北端部でも認められ、ここでは $X = -149.753\text{m}$ 付近より南側には遺構が広がるが、これより北側では全く遺構が検出できないという状況であった。

このように古代の遺構の分布をみてみると、遺構が築かれた区域と、そうでない区域とが明瞭に分かれる状況が見えてくる。すなわち、第1期と第2期調査の間の $Y = -37.510\text{m}$ 付近より東側で、 $X = -149.753\text{m}$ よりも北側にあたる第2期調査区を中心とする範囲と、上記の $Y = -37.567\text{m}$ より西側の区域には、古代の遺構が築かれておらず、それ以外の範囲にのみ掘立柱建物等の遺構が密集するといった状況である。このように、当遺跡に広がる古代の集落は、四方位を意識した直線によって計画的に区画されたものであったことがわかってきた。

ただし、集落と言っても、一般の小規模村落のようなものではないことが、多くの瓦や硯、製塩土器などの出土遺物からはうかがえる。

それについては、古代の遺物が多く出土した第1期の調査でも、「一般の小規模な集落から出土する類の遺物ではなく、一定規模の集落が当遺跡に営まれていたことが推定される」とし、青谷式の軒丸瓦を含む瓦や埴、緑軸陶器片や円面硯、製塩土器、また錦織村主との関連が考えられる「村主」と墨書された土器などの出土から、さらに踏み込んで「小規模な仏教施設であった可能性が考えられる」と指摘されている。

古代の遺物が少ない第2期の調査においても、包含層から都城や官衙、寺院などからの出土が多い越州窯系青磁の碗が1点出土しており、今回の調査でも、重圈紋軒丸瓦をはじめとする多くの瓦や埴のほか、基壇などに用いられたと思われる凝灰岩切石、また一般の村落ではまず見ることのできない貴重な新羅系陶質土器も見つかっていることから、近隣に役所などの公的な施設や寺院が存在した可能性が十分考えられた。

日本出土の新羅系土器を集めた江浦洋氏の研究によれば、近畿地方の新羅系土器は、官に関わる遺跡や寺院から出土することが多く、また「官管施設に関わる遺跡から出土する統一新羅系土器では圧倒的に長頸壺が多い<sup>4)</sup>という。当遺跡からも図11に示したような新羅系土器の長頸壺が出土していることは、当遺跡、あるいはその周辺に広がる古代の集落が単なる一般村落ではなく、公的な施設や寺院であった可能性を強く後押しするものといえよう。

ただし、古代の遺構・遺物が少なかった第2期調査では、「今回の調査区では古代の遺構は検出されなかったものの、包含層中から少量ながら越州窯系青磁・灰軸陶器・瓦片など、一般的な集落では認められない遺物が出土した」としながらも、「その遺構や遺物の内容をみると、官衙関連施設である可能性は残されるものの、少なくとも郡衙クラスの施設が存在した可能性は低い。また、「小規模な仏教関連施設」の存在が推定されているように、瓦の出土などからは寺院との関連も推測されるが、瓦や寺院関連遺物の出土量の少なさから周辺に寺院そのものが存在する可能性は低い。そして、8世紀後葉から

の掘立柱建物群の出現と同時期に条里開発が始まる点からは地域開発の拠点であった可能性があり、荘園と推測される長原遺跡などに近い性格も考えられる」と、当遺跡の集落を、有力貴族や寺院による荘園経営に関連したものと解釈し、公的な施設や寺院であった可能性については低いと結論付けられている。

この公的な施設や寺院の存在について否定的な根拠の一つとして、「瓦や寺院関連遺物の出土量の少なさ」が挙げられているが、第2期調査区画は、前述のとおり集落外であり、遺物が少ないのは当然といえる。遺構がなければ、遺物も少なく、今回の調査のように遺構が多く検出されれば、それに比例して遺物の量が多くなるのは当然である。荘園に関連した村落とすることについては否定しないが、遺構が広がらない区域の遺物量をもって、周辺への寺院の存在までも否定することについては反対である。

とは言え、第1期調査の報告のように、当遺跡検出の遺構が仏教施設そのものであったとは考えていない。第1期調査では「掘立柱建物の性格を先述のように小規模な仏教施設と考えた」が、調査では基礎が見えられた訳でも、瓦を葺くような礎石建ちの建物が見つかった訳でもなく、検出した遺構が仏教施設の一部とすることにはいささか抵抗がある。現地調査をしている段階でも、仏教施設そのものを調査しているという感触は全くなく、遺物以外は一般の集落となら変わらないものであった。その遺物に関しても、瓦など寺院関連の遺物が通常の集落遺跡よりは多いとは言え、施設の中心部から出土するほどの量ではなく、中心からやや外れた地域から出土する程度の量であった。遺構の性格が、寺院であったのか公的な施設であったのかは別として、当遺跡で検出した古代の遺構は、施設そのものではなく、その周辺に広がる集落と考えた方がよからう。おそらく施設本体はこの新上小阪遺跡内ではなく、近隣にあったと考えている。今後の周辺調査を期待したい。

なお、寺院であったのか、役所などの公的な施設であったのかについては、現時点では断定できないが、どちらかと言えば、出土遺物から、前者の可能性が高いと考えている。

当遺跡のすぐ北側には、今でも宝持という地名が残っており、その若江郡の宝持村には「宝持廃寺」が存在していたことが、江戸時代に編纂された「五畿内志」に記されている。廃寺の詳細は全く明らかにされておらず、所在についても不明だが、そういった未だ明らかにされていない寺院が近隣に存在していたことは注目される。

この集落の存続時期については、出土遺物からは8世紀前半から10世紀頃と推定できるが、掘立柱建物等が建っていた居住域としての期間は、それよりもやや短く9世紀後半頃までであり、10世紀以降は水溜め用とも考えられる土坑などがいくつか築かれるが、基本的には次第に耕作地へと変わっていったと考えている。

本文中で「細溝」とした東西・南北方向、あるいは斜行する溝がこの時の耕作痕跡と考えているが、第1期調査では、耕作溝が掘立柱建物避けるように掘削されていること、また出土遺物から、建物のすぐ横には耕作地が広がっていたと推定している。今回の調査では、「細溝」とした耕作溝と掘立柱建物とは完全に重複しており、建物避けた耕作地を想定することはできない。またその重複関係から、耕作溝が掘立柱建物よりも新しいことも確認している。確かに溝内に混入する遺物は、8～9世紀のものかほとんどであるが、「て」の字状口縁皿や黒色土器など、確実に新しい時期のものも含んでいる。このように、遺構からも遺物からも、建物と耕作溝とが同時並存していたとは考え難い。

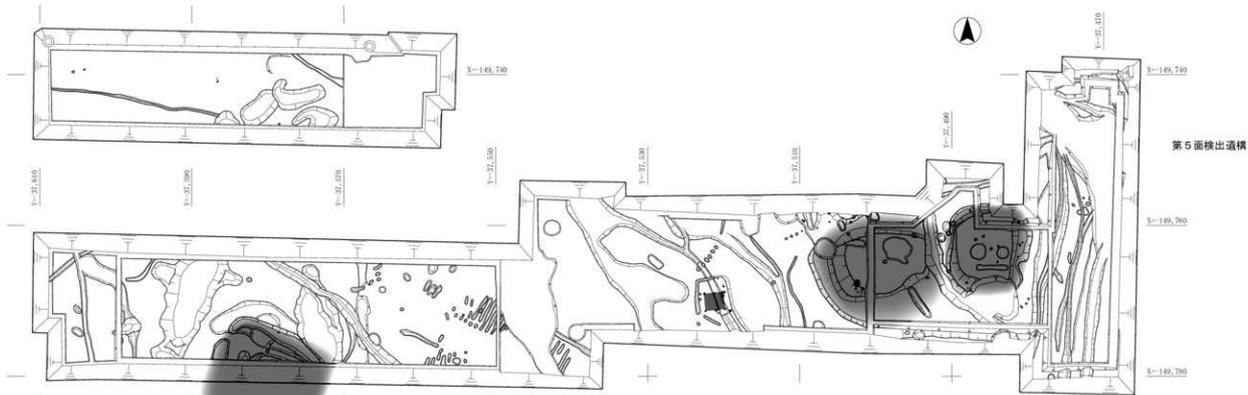
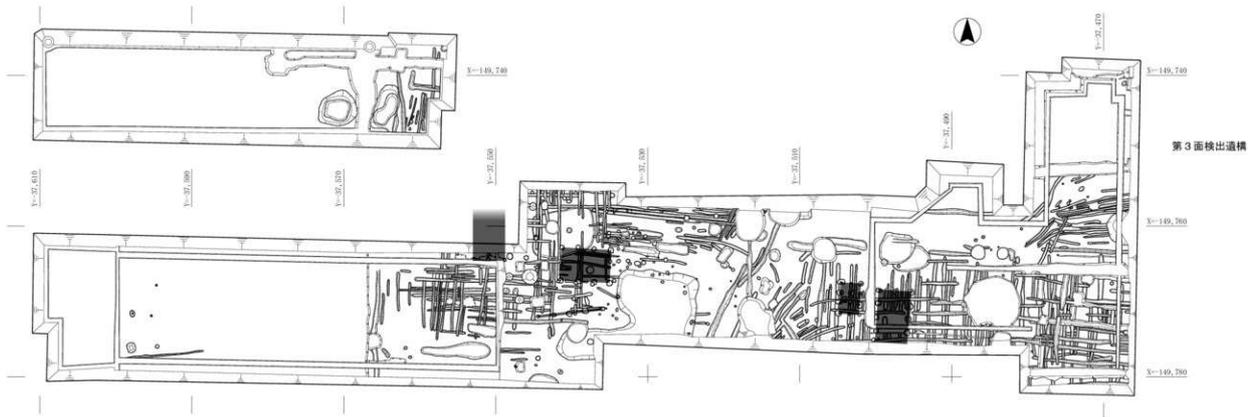
建物が完全に廃絶した後の10世紀以降には、集落から耕作地へと土地の利用形態が変化し、それ以降府営住宅が建てられる直前頃まで、しばらくの間その形態が続いていたと考えている。

以上、遺構の変遷について大きな時期ごとに簡単にまとめた。

第3期目にあたる今回の府営東大阪新上小阪住宅建替え工事に伴う調査では、これまで確認されていなかった弥生時代中期後半の方形周溝墓の発見や、古代の貴重な遺物の出土など、多くの新しい成果を得ることができ、この地の歴史に新しい1頁を加えることができた。しかしまだまだ未解決の部分も多く、また調査で得られた資料についての細かな検討が行なえず、遺跡の評価に十分に反映させることができなかった部分も多い。今後の周辺調査の進展とともに、遺跡の性格や意義・重要性などについての踏み込んだ見解が示されることを期待したい。本書が中河内地域の歴史解明に少しでも役立つならば幸いである。

#### 引用・参考文献

- 1) 財団法人 大阪府文化財センター 2003 『新上小阪遺跡』
- 2) 財団法人 大阪府文化財センター 2007 『新上小阪遺跡Ⅱ』
- 3) 財団法人 大阪文化財センター 1995 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第4次—』
- 4) 財団法人 大阪文化財センター 1984 『山賀（その3）』
- 5) 財団法人 大阪府文化財センター 2006 『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』
- 6) 財団法人 大阪府文化財センター 2003 『大尾遺跡』
- 7) 大阪府教育委員会 2006 『新上小阪遺跡』
- 8) 江浦 洋 1988 「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌』第74巻 第2号  
日本考古学会
- 9) 大日本地誌大系 1971 『五畿内志・泉州志』第一巻 雄山閣



0 (1:500) 20m

图101 第3面·第5面檢出遺構全体平面图

表1 土器計測表

遺物 番号	調査区	遺構・層	種別	器種	残存率 (%)	法量(cm)		特徴・備考
						口径	高さ	
1	1区	3-1層	須恵器	蓋	30	つまみ径 1.85	(1.5)	
2	1区	3-1層	須恵器	蓋	20	(13.6)	(0.9)	天井部内面不定方向ナデ
3	1区	3-1層	須恵器	杯	10	高台径 (8.1)	(2.0)	
4	1区	3-1層	須恵器	杯	10	高台径 (10.1)	(1.1)	
5	1区	3-1層	須恵器	杯	10	高台径 (10.2)	(2.0)	
6	1区	3-1層	須恵器	杯	5以下	高台径 (12.2)	(2.0)	
7	1区	3-1層	須恵器	碗	15	底径(5.8)	(2.5)	傘の可能性もあり
8	1区	3-1層	須恵器	蓋	10	底径3.95	(3.6)	蓋部未切り
9	1区	3-1層	須恵器	蓋	5以下	底径(6.8)	(2.8)	蓋部未切り
10	1区	3-1層	須恵器	壺	5	高台径 (6.6)	(3.3)	
11	1区	3-1層	須恵器	壺	5以下	高台径 (12.2)	(3.7)	
12	1区	3-1層	須恵器	壺	5以下	高台径 (10.0)	(4.1)	
13	1区	3-1層	灰釉陶器	皿	30	(12.4)	2.7	取り付け高台。見込み目縁2ヶ所残存。内面→外面上半に釉
14	1区	3-1層	緑釉陶器	碗	5以下	—	(3.5)	内外面に釉。胎土の色調は灰色
15	1区	3-1層	土師器	皿	10	(12.0)	2.0	
16	1区	3-1層	土師器	鍋?	5以下	—	(4.8)	把手部
17	1区	3-1層	土師器	高杯	15	脚径3.4	(9.8)	頸柱部面取り10面
18	1区	3-1層	製灰土器	—	5以下	—	(4.5)	
19	1区	3-1層	製灰土器	—	5以下	—	(6.0)	
24	1区	3-2層	須恵器	蓋	25	(14.4)	(2.0)	
25	1区	3-2層	須恵器	蓋	25	(13.8)	(1.4)	
26	1区	3-2層	須恵器	蓋	5	(14.0)	2.0	
27	1区	3-2層	須恵器	蓋	5	(14.5)	(1.2)	
28	1区	3-2層	須恵器	蓋	10	(17.4)	(1.9)	
29	1区	3-2層	須恵器	蓋	20	(17.2)	(1.1)	天井部内面不定方向ナデ
30	1区	3-2層	須恵器	杯	15	(10.5)	3.4	
31	1区	3-2層	須恵器	杯	15	(13.0)	4.1	
32	1区	3-2層	須恵器	杯	20	高台径12.1	(1.6)	蓋部内面不定方向ナデ
33	1区	3-2層	須恵器	杯	10	高台径 (14.0)	(1.9)	蓋部内面不定方向ナデ
34	1区	3-2層	須恵器	杯	70	(13.4)	3.9	壺身「庄」?。蓋部内面不定方向ナデ
35	1区	3-2層	須恵器	杯	15	高台径 (12.2)	(3.4)	
36	1区	3-2層	須恵器	杯	5	高台径 (13.2)	(5.2)	
37	1区	3-2層	須恵器	壺	90	体部最大径 7.7	(5.5)	
38	1区	3-2層	須恵器	壺	90	体部最大径 7.8	(6.7)	
39	1区	3-2層	須恵器	短頸壺	5以下	(12.6)	(4.3)	
40	1区	3-2層	須恵器	長頸壺	30	7.4	(9.9)	
41	1区	3-2層	須恵器	壺	10	高台径7.8	(2.0)	蓋部外面へラケ目
42	1区	3-2層	須恵器	壺	10	高台径6.8	(2.8)	
43	1区	3-2層	須恵器	壺	15	高台径10.7	(2.9)	蓋部内面不定方向ナデ
44	1区	3-2層	須恵器	壺	5以下	底径(10.0)	(2.8)	蓋部未切り
45	1区	3-2層	須恵器	壺	5以下	(22.8)	(6.7)	
46	1区	3-2層	須恵器	壺	5以下	底径(17.8)	(2.5)	体部下縁タキ
47	1区	3-2層	灰釉陶器	碗	15	底径(7.2)	(3.4)	三日月高台。外面へラケ目。内面に釉
48	1区	3-2層	土師器	杯	20	(15.8)	3.0	曜紋
49	1区	3-2層	土師器	杯	10	(17.2)	3.1	曜紋
50	1区	3-2層	土師器	杯	15	(18.0)	2.7	曜紋。蓋部外面へラケ目
51	1区	3-2層	土師器	杯	5以下	(18.3)	3.2	
52	1区	3-2層	土師器	杯	10	高台径 (12.7)	(1.7)	
53	1区	3-2層	土師器	皿	5以下	(23.8)	2.3	曜紋
54	1区	3-2層	土師器	皿	5	高台径 (17.0)	(1.3)	
55	1区	3-2層	土師器	皿	20	(27.1)	3.2	曜紋

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)		特徴・備考
						口径	高さ	
56	1区	3-2層	土師器	碗	15	(13.0)	3.5	底部外面指オサニ残ナゲ
57	1区	3-2層	土師器	碗	20	(13.8)	3.2	底部外面指オサニ残ナゲ
58	1区	3-2層	土師器	碗	10	(14.8)	(3.6)	底部外面指オサニ残ナゲ
59	1区	3-2層	土師器	高杯	40	脚径径(11.6)	(6.4)	脚柱部面取り12面、脚部部内外面ハケ
60	1区	3-2層	土師器	甕	5	(14.8)	(9.5)	底部外面指オサニ
61	1区	3-2層	土師器	甕	5以下	(7.6)	(5.5)	底部外面指オサニ
62	1区	3-2層	土師器	甕	5以下	(9.2)	(5.9)	底部外面指オサニ
63	1区	3-2層	土師器	甕	5以下	(18.4)	(5.5)	底部外面指オサニ
64	1区	3-2層	土師器	貫付長頸甕	5以下	(9.4)	(6.5)	内面ハケ
65	1区	3-2層	黒色土器B	碗	10	高台径(7.8)	(1.7)	
66	1区	3-2層	黒色土器A	碗	5以下	高台径(7.2)	(2.7)	内面ヘラミダキ
67	1区	3-2層	製塩土器	—	5以下	—	(3.6)	
68	1区	3-2層	製塩土器	—	5以下	—	(5.3)	
69	1区	3-2層	製塩土器	—	5以下	—	(8.2)	
70	1区	3-2層	製塩土器	—	5以下	—	(3.9)	
71	1区	3-2層	製塩土器	—	5以下	—	(3.9)	
72	1区	3-2層	灰質土器	足釜	5以下	脚径2.4	(10.4)	
73	1区	3-2層	灰質土器	足釜	5以下	脚径2.9	(12.8)	
87	1区	4層	須恵器	蓋	50	(10.9)	1.1	
88	1区	4層	須恵器	杯	10	(13.4)	4.2	
89	1区	4層	須恵器	杯	70	(16.4)	5.5	高台内側に高台接合時の爪跡あり
90	1区	4層	須恵器	蓋	30	—	(2.6)	
91	1区	4層	須恵器	杯	10	(14.4)	(3.8)	
92	1区	4層	須恵器	提綱	15	8.2	(5.8)	
93	1区	4層	須恵器	提綱	40	8.2	(15.5)	短い方形把手
94	1区	4層	須恵器	蓋	5以下	底径(7.6)	(4.6)	底部糸切り
95	1区	4層	土師器	甕	5以下	(13.4)	(5.0)	底部内面指ナゲ、外面ハケ
100	1区	4b-2層	養生土器	把手付鉢	10	—	(8.2)	把手部、内点紋、生駒西麓産粘土
101	1区	4b-2層	養生土器	甕	5以下	(23.6)	(3.8)	生駒西麓産粘土
102	1区	5層	須恵器	蓋	40	(11.0)	3.9	天井部内面不定方向ナゲ
103	1区	5層	須恵器	蓋	50	(12.0)	5.1	
104	1区	5層	土師器	甕	5	(16.2)	(4.5)	庄内式像、外面タタキ後ハケ、生駒西麓産粘土
105	1区	5層	養生土器	広口壺	5以下	(14.4)	(3.7)	竹管紋、外面ヘラミダキ、生駒西麓産粘土
106	1区	5層	養生土器	鉢	5以下	(27.8)	(8.5)	沈線、内外面ヘラミダキ、生駒西麓産粘土
107	1区	5層	養生土器	甕	5以下	底径7.2	(2.2)	生駒西麓産粘土
108	1区	5層	養生土器	蓋	5以下	底径7.0	(1.9)	内面ハケ、外面ヘラミダキ、生駒西麓産粘土
109	2区	3-1層	須恵器	蓋	5以下	(14.2)	(1.0)	
110	2区	3-1層	須恵器	杯	25	(13.4)	3.95	
111	2区	3-1層	須恵器	杯	10	高台径(11.8)	(2.1)	
112	2区	3-1層	須恵器	蓋	5	高台径(11.5)	(5.9)	底部内面不定方向ナゲ
113	2区	3-1層	土師器	碗	20	(15.4)	(3.4)	外面指オサニ
114	2区	3-1層	土師器	甕	5以下	(20.1)	(6.0)	底部外面指オサニ
115	2区	3-1層	緑釉陶器	碗	5以下	(14.9)	(2.0)	近江産
116	2区	3-1層	緑釉陶器	碗	5以下	高台径(6.2)	(1.4)	足込み同輪、全面輪、近江産
117	2区	3-1層	瓦器	碗	5	高台径(6.6)	(1.9)	
118	2区	3-1層	新羅系陶質土器	長頸壺	15	最大径(15.1)	(8.8)	スタンプによる円紋・縦線紋、4区4a層出土片と同一体
119	2区	3-2層	須恵器	蓋	5以下	つまみ径3.5	(2.2)	
120	2区	3-2層	須恵器	蓋	15	つまみ径2.4	(2.1)	天井部内面不定方向ナゲ
121	2区	3-2層	須恵器	蓋	15	(15.9)	(2.0)	天井部内面不定方向ナゲ
122	2区	3-2層	須恵器	杯	15	(13.2)	3.5	底部内面不定方向ナゲ
123	2区	3-2層	須恵器	杯	15	(13.4)	(4.1)	底部外面ヘラミダキ
124	2区	3-2層	須恵器	杯	5	高台径(13.5)	(2.1)	
125	2区	3-2層	須恵器	杯	5以下	高台径(6.8)	(2.6)	
126	2区	3-2層	須恵器	蓋	5	(8.6)	(5.85)	

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)		特徴・備考
						口径	高さ	
127	2区	3-2層	煎煮器	壺	10	高台径4.8	(3.4)	
128	2区	3-2層	煎煮器	壺	15	(9.9)	(7.3)	胴部に彫刻文様。東海産か
129	2区	3-2層	煎煮器	壺	5以下	体部最大径(22.1)	(5.5)	把手部
130	2区	3-2層	煎煮器	圓足円面碗	5以下	最大径(10.6)	(1.7)	
131	2区	3-2層	煎煮器	圓足円面碗	5以下	底径(17.2)	(2.6)	
132	2区	3-2層	土師器	杯	15	(18.4)	3.1	内外表面摩滅
133	2区	3-2層	土師器	蓋	5	(24.4)	2.95	増紋、底部外面ケズリ
134	2区	3-2層	土師器	甕	5	(16.8)	(6.4)	体部外面指オサエ
135	2区	3-2層	土師器	甕	5	(18.9)	(9.8)	体部外面指オサエ
136	2区	3-2層	土師器	壺	5	最大径(24.8)	(6.4)	把手部
137	2区	3-2層	土師器	鉢	10	(27.0)	(8.1)	
138	2区	3-2層	土師器	鉢	5	(29.5)	(6.8)	内面に彫いへつミガキ、外面指オサエ
139	2区	3-2層	甕	—	5以下	—	—	長さ(9.6)×幅(5.7)×厚さ2.9cm
140	2区	3-2層	甕	—	5以下	—	—	長さ(8.3)×幅(7.1)×厚さ1.8cm
141	2区	3-2層	土師器	小型高杯	95	6.5	4.4	平づくねで成形後杯部内面削ナゲ
142	2区	3-2層	黑色土器A	碗	5	高台径(8.8)	(1.8)	内面へつミガキ
143	2区	3-2層	黑色土器A	碗	10	高台径(8.3)	(2.0)	内面へつミガキ
144	2区	3-2層	黑色土器A	碗	50	15.3	4.1	内面へつミガキ
145	2区	3-2層	灰釉陶器	蓋	5	(14.8)	(2.9)	外面へつケズリ、内面に釉
146	2区	3-2層	緑釉陶器	碗?	10	高台径5.0	(1.3)	糸切り平高台、底面以外に釉
147	2区	3-2層	製灰土器	—	5以下	(8.8)	(3.8)	
148	2区	3-2層	製灰土器	—	5以下	—	(3.4)	
149	2区	3-2層	製灰土器	—	10	—	(6.0)	
161	2区	4層上面	煎煮器	壺	25	(16.0)	(2.1)	天井部内面不定方向ナゲ
162	2区	4層上面	煎煮器	壺	15	(17.6)	(2.7)	天井部内面不定方向ナゲ
163	2区	4層上面	煎煮器	杯	15	高台径(12.4)	(3.8)	底部内面不定方向ナゲ
164	2区	4層上面	煎煮器	壺	20	高台径12.6	(6.6)	底部内面不定方向ナゲ
165	2区	4層上面	土師器	杯	10	(18.0)	(3.4)	増紋
166	2区	4層上面	土師器	蓋	5	(37.8)	(10.4)	体部内面ハケ、体部外面ハケ後へつケズリ
167	2区	4層	煎煮器	杯	10	(13.8)	3.95	
168	2区	4層	土師器	杯	40	(13.0)	3.3	内外表面摩滅
169	2区	4b-1層下面	煎煮器	杯	90	13.0	4.3	
170	2区	4b-1層	土師器	小型丸底壺	10	(7.3)	(5.3)	内面へつケズリ
171	2区	4b-1層	煎煮器	杯	5	(14.0)	(3.1)	
172	2区	4b-1層	土師器	碗	10	底径12.4	(5.1)	凹孔+横口孔
173	2区	5層	赤生土器	鉢	10	(13.0)	(3.5)	凹線紋、内外面に赤色顔料が残る、生駒西麓産粘土
174	2区	5層	赤生土器	鉢	5以下	(13.4)	(3.7)	凹線紋、外面へつミガキ、生駒西麓産粘土
175	2区	5層	赤生土器	高杯	5以下	底径(13.2)	(2.3)	生駒西麓産粘土
176	2区	5層	赤生土器	甕	5以下	底径(8.2)	(3.0)	生駒西麓産粘土
178	2区	5-2層	赤生土器	壺	5以下	底径(6.6)	(2.7)	生駒西麓産粘土
179	2区	5-2層	土師器	壺or鉢	5以下	底径4.1	(3.4)	底部表面指オサエ明確
181	3区	4a層	煎煮器	壺	5	つまみ径1.3	(1.8)	天井部外面沈線
182	3区	4a層	煎煮器	杯	30	(13.5)	3.1	
183	3区	4a層上面	煎煮器	壺	5	(3.6)	(4.0)	
184	3区	4a層	煎煮器	壺	10	高台径(10.0)	(7.0)	底部内面不定方向ナゲ
185	3区	4a層	煎煮器	圓足円面碗	10	最大径(10.2)	(1.4)	
186	3区	4a層上面	土師器	杯	15	(13.4)	2.4	
187	3区	4a層上面	土師器	蓋	90	14.3	3.4	
188	3区	4a層上面	土師器	甕	5	(18.0)	(5.4)	体部外面指オサエ
189	3区	4a層	土師器	甕	5	(18.4)	(9.7)	体部外面指オサエ
190	3区	4a層上面	黑色土器A	碗?	5	高台径(7.8)	(3.4)	
191	3区	4b-2層	煎煮器	壺	30	(15.5)	4.5	
192	3区	4b層	煎煮器	杯	15	最大径15.4	(4.3)	底部内面不定方向ナゲ
193	3区	5層	煎煮器	壺	30	つまみ径2.95	(4.4)	横部径(13.4)cm、天井部内面不定方向ナゲ
194	3区	5層	赤生土器	広口壺	5	(14.2)	(5.2)	

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)		特徴・備考
						口径	高さ	
195	3区	5層	養生土器	広口壺	5以下	(18.4)	(2.1)	口縁部沈没、刻み目、縦孔
196	3区	5層	養生土器	高杯	5以下	(27.8)	(2.2)	生駒西麓産粘土
197	3区	5層	養生土器	甕	5以下	(17.4)	(4.2)	
198	3区	5層	養生土器	鉢	5以下	—	(2.85)	口縁・体部溝状紋、生駒西麓産粘土
199	3区	5層	養生土器	蓋?	100	2.9	5.1	生駒西麓産粘土
200	3区	6層	養生土器	広口壺	5以下	(15.4)	(4.8)	
201	3区	6層	養生土器	広口壺	5以下	胴径(11.0)	(10.8)	沈没2条
202	3区	6層	養生土器	広口壺	5以下	胴径(11.8)	(5.1)	沈没
203	3区	6層	養生土器	長頸広口壺	5以下	(22.4)	(1.5)	口縁部沈没状、刻み目
204	3区	6層	養生土器	広口壺	5以下	胴径(12.4)	(6.1)	沈没、縦斜状列点紋
205	3区	6層	養生土器	広口壺	5以下	胴径(15.4)	(5.1)	沈没7条、内面ハケ
206	3区	6層	養生土器	甕	5以下	(18.4)	(5.0)	
207	3区	6層	養生土器	壺	5以下	底径5.9	(1.4)	
208	3区	6層上面	養生土器	壺	5以下	底径(8.4)	(3.0)	
209	3区	6層	養生土器	甕	5以下	底径(6.6)	(4.7)	外面へラミガキ
210	3区	6層	養生土器	甕	5以下	底径(6.4)	(2.4)	
211	3区	6層	養生土器	甕	5以下	底径(8.0)	(3.9)	
212	4区	3-1層	須恵器	龍足円面碗	5	(12.4)	(3.0)	匱立て付き
213	4区	3-1層	黒色土器A	碗?	5以下	高台径(6.4)	(0.8)	
214	4区	3-1層	瓦器	碗	5以下	高台径(3.0)	(0.8)	
215	4区	3-1層	瓦器	碗	5以下	高台径(6.2)	(1.4)	
217	4区	3-2層	須恵器	杯	5	高台径(13.4)	(1.6)	
218	4区	3-2層	須恵器	壺	5	高台径(9.4)	(2.3)	
219	4区	3-2層	緑釉陶器	碗?	10	高台径(6.8)	(1.5)	削り出し輪高台、内面から高台外面に輪
220	4区	3-2層	製塩土器	—	5以下	(10.4)	(4.1)	
223	4区	4a層	須恵器	蓋	10	つまみ径3.3	(1.8)	
224	4区	4a層	須恵器	杯	5	高台径(10.4)	(1.4)	
225	4区	4a層	須恵器	甕	5以下	—	(3.9)	胴部外面タキ後ナデ
226	4区	4a層	瓦器	碗	5以下	高台径(5.4)	(1.4)	格子状埋紋
227	4区	4a層	土師器	杯	5	高台径(7.2)	(1.3)	
231	4区	4b-2層	製塩土器	—	40	底径(7.4)	(4.0)	外周タキ
232	4区	4b-2層	須恵器	蓋	10	(6.8)	(2.2)	
233	4区	5-2層	須恵器	蓋	15	(14.2)	(4.0)	
234	4区	5-2層	須恵器	杯	5以下	最大径(15.4)	(3.1)	
235	4区	5-3層	土師器	小型丸底壺	10	胴径(6.4)	(3.5)	
236	4区	第5面	養生土器	鉢	35	(26.4)	13.95	内外面へラミガキ
237	4区	6層	養生土器	広口壺	5以下	(22.4)	(7.1)	底縁紋、生駒西麓産粘土
238	1区	7土坑	土師器	杯	5以下	—	(2.7)	
239	1区	7土坑	須恵器	壺	5	高台径(3.8)	(4.15)	
240	1区	19溝	須恵器	蓋	50	最大径13.5	(3.95)	天井部内面当て具板
241	1区	斜行溝	土師器	甕	5以下	(15.4)	(3.9)	体部外面ハケ
242	1区	斜行溝	土師器	壺?	5以下	—	(4.2)	把手部
243	1区	斜行溝	瓦釉陶器	碗	5以下	高台径(8.4)	(1.9)	三日月高台
244	1区	貯留槽部北平 細溝	須恵器	蓋	10	つまみ径2.5	(1.3)	
245	1区	貯留槽部北平 細溝	須恵器	蓋	10	つまみ径(2.4)	(1.85)	天井部内面不定方向ナデ
246	1区	貯留槽部北平 細溝	須恵器	蓋	15	(11.4)	(1.7)	
247	1区	貯留槽部北平 細溝	須恵器	杯	25	(13.4)	3.65	
248	1区	貯留槽部北平 細溝	須恵器	杯	5	高台径(11.2)	(2.65)	
249	1区	貯留槽部北平 細溝	土師器	蓋	20	(8.0)	1.45	ての字状口縁
250	1区	貯留槽部北平 細溝	土師器	杯	10	口径(13.8)	(3.4)	
251	1区	貯留槽部北平 細溝	土師器	碗	10	(13.0)	(3.0)	
252	1区	貯留槽部北平 細溝	土師器	碗	15	(15.4)	(3.4)	外面指オナエ
253	1区	貯留槽部北平 細溝	土師器	樽村長胴壺	5以下	樽径(32.3)	(4.5)	内面ハケ、指オナエ

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)		特徴・備考	
						口径	高さ		
254	1区	貯留槽部北平	細線	土師器	鉢	5以下	(33.8)	(4.2)	
260	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	蓋	20	(14.2)	(1.9)	天井部内面不定方向ナデ
261	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	蓋	10	(15.4)	(1.2)	天井部内面不定方向ナデ
262	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	蓋	10	(17.8)	(1.1)	
263	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	蓋	5	(19.8)	(1.7)	
264	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	杯	15	(13.0)	3.3	
265	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	杯	15	(13.5)	4.5	
266	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	杯	10	高台径 (9.2)	(3.2)	
267	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	杯	10	高台径 (9.6)	(1.6)	
268	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	杯	10	高台径 (7.4)	(1.6)	
269	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	杯	10	高台径 (10.6)	(1.4)	
270	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	杯	5以下	高台径 (12.0)	(1.6)	
271	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	杯	5以下	高台径 (13.4)	(1.4)	
272	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	壺	5以下	高台径 (4.5)	(1.4)	
273	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	短頸壺	5以下	(10.8)	(2.5)	
274	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	壺	5	高台径8.3	(3.6)	
275	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	壺	5	高台径 (15.4)	(6.9)	底部内面不定方向ナデ
276	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	鉢	5以下	(23.2)	(5.9)	
277	1区	貯留槽部南平	細線	須恵器	壺	5以下	(24.0)	(3.8)	
278	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	小型杯	30	(6.0)	2.2	手づくね
279	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	杯	5	(15.2)	(2.1)	
280	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	杯	10	(15.4)	3.0	
281	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	皿	10	(17.0)	1.6	
282	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	皿	5	(22.2)	2.5	環紋
283	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	皿	5	(22.4)	2.4	
284	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	碗	25	(14.2)	3.4	
285	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	碗	95	36.1	4.3	体部外面指オサエ明線
286	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	鉢	5	(19.0)	5.0	
287	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	鉢	25	(21.6)	5.1	外面ヘラミガキ
288	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	高杯	5	(21.6)	(1.7)	環紋、外面ヘラケズリ
289	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	高杯	5	(30.6)	(4.6)	環紋、外面ヘラミガキ
290	1区	貯留槽部南平	細線	土師器	壺	5以下	(17.0)	(6.5)	外面指オサエ
291	1区	西平部	細線	須恵器	蓋	60	33.2	2.2	天井部内面不定方向ナデ
292	1区	西平部	細線	須恵器	蓋	5	(14.6)	(1.5)	
293	1区	西平部	細線	須恵器	蓋	10	(18.4)	(1.35)	
294	1区	西平部	細線	製塩土器	—	5以下	(8.2)	(3.6)	
295	1区	西平部	細線	製塩土器	—	5以下	(9.8)	(4.1)	
296	1区	西平部	細線	製塩土器	—	5	(7.4)	(7.6)	
297	1区	西平部	細線	土師器	杯	5	(14.4)	(2.2)	環紋
298	1区	西平部	細線	土師器	杯	10	(16.0)	2.4	環紋
299	1区	西平部	細線	土師器	杯	5	(18.4)	(2.8)	環紋
300	1区	西平部	細線	土師器	杯	5	(16.3)	(2.9)	
301	1区	西平部	細線	土師器	杯	15	(18.4)	3.3	内外面環線
302	1区	西平部	細線	土師器	杯	5	高台径 (13.8)	(1.5)	
303	1区	西平部	細線	土師器	碗	10	(15.0)	3.6	
304	1区	西平部	細線	土師器	碗	15	(15.6)	(3.85)	
305	1区	西平部	細線	土師器	高杯	5	(25.4)	(2.4)	環紋、外面ケズリ裏ヘラミガキ
306	1区	西平部	細線	土師器	高杯	5以下	(16.6)	(1.7)	
307	1区	西平部	細線	土師器	壺	5以下	(28.8)	(6.2)	外面指オサエ、内面彫り付着
308	1区	西平部	細線	土師器	壺	10	(24.2)	(8.3)	把平行、内面彫り付着、外面ヘラケズリ裏側へラミガキ、内面に彫り付着
309	1区	西平部	細線	土師器	押し長頸壺	5	(29.6)	(6.7)	口縁部内面ヘケ後ナデ
310	1区	西平部	細線	土師器	鉢	5以下	(38.0)	(7.5)	
311	1区	西平部	細線	土師器	小型高杯	95	5.9-6.3	4.7	手づくね
313	1区	29ビット		須恵器	壺	5以下	高台径 (5.8)	(2.3)	縦立柱建物1
314	1区	32ビット		須恵器	蓋	25	(13.5)	(1.6)	縦立柱建物1

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)		特徴・備考
						口径	高さ	
315	1区	32ピット	製塩土器	—	513下	(9.2)	(5.6)	竪立建物1
316	1区	46ピット	須恵器	鉢	513下	(22.2)	(2.7)	
317	1区	100ピット	土師器	甕	513下	(19.6)	(4.2)	
318	1区	51ピット	土師器	鉢	513下	—	(5.4)	
319	1区	111ピット	須恵器	蓋	10	(19.4)	2.1	竪立建物1
320	1区	111ピット	土師器	甕	15	(15.4)	(6.5)	竪立建物1、体部外面指オサエ
321	1区	160ピット	土師器	甕	10	(13.4)	(1.7)	での字状口縁
322	1区	41土坑	須恵器	蓋	10	つまみ様	2.3	(1.4)
323	1区	41土坑	須恵器	甕	513下	直径(5.6)	(1.9)	
324	1区	41土坑	土師器	蓋	50	(8.8)	2.3	灯明蓋、外面2段ナデ
325	1区	41土坑	土師器	蓋	5	(10.2)	1.25	での字状口縁
326	1区	41土坑	土師器	蓋	25	(11.0)	1.7	での字状口縁
327	1区	41土坑	土師器	甕	20	14.7	(6.2)	内面板ナデ、外面指オサエ
328	1区	41土坑	土師器	甕	10	(18.0)	(8.3)	内面板ナデ、外面指オサエ、外面覆付着
329	1区	41土坑	黒色土器A	甕	10	高台径(7.8)	(1.3)	内面ヘラミガキ
330	1区	41土坑	黒色土器A	甕	10	高台径(8.2)	(1.6)	内面ヘラミガキ
331	1区	41土坑	黒色土器A	甕	15	高台径(7.6)	(2.7)	内面ヘラミガキ
332	1区	41土坑	黒色土器A	甕	50	(15.4)	6.2	口縁内面沈線、内面ヘラミガキ
333	1区	41土坑	黒色土器B	甕	20	高台径×2	(1.9)	内面から底部外面ヘラミガキ
334	1区	41土坑	黒色土器B	甕	50	(10.8)	3.5	内外面ヘラミガキ、口縁内面沈線
335	1区	14土坑	土師器	蓋	15	(11.4)	(1.5)	での字状口縁
336	1区	42土坑	須恵器	杯	513下	高台径(6.8)	(8.95)	
337	1区	42土坑	須恵器	杯	20	(11.0)	3.55	
338	1区	42土坑	須恵器	杯	513下	高台径(10.4)	(1.5)	
339	1区	42土坑	須恵器	杯	513下	高台径(11.6)	(2.1)	
340	1区	42土坑	須恵器	甕	30	高台径×5	(7.5)	底部外面須恵器片着着
341	1区	50土坑	須恵器	杯	5	高台径(9.6)	(3.0)	
342	1区	50土坑	土師器	杯	10	(15.2)	3.0	
345	1区	129溝	養生土器	蓋	30	(8.7)	3.2	生駒西麓産粘土
346	1区	129溝	養生土器	無明蓋	90	(8.2)	10.5	口縁部～体部上半縁状、細孔、穿孔、体部内面下半ハケ、外面下半ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
347	1区	129溝	養生土器	把手付鉢	90	12.6	5.7	口縁部端部内面、内面板ナデ、口縁部外面ハケ、把手欠損、生駒西麓産粘土
348	1区	129溝	養生土器	把手付	5	脚径(8.8)	(6.2)	把手付、外面ヘラミガキ
349	1区	129溝	養生土器	台付鉢	80	16.7	14.1	口縁部～体部上半縁状、体部下半角状、脚部管背状、脚部内面ハケ、体部内外面ヘラミガキ、外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
350	1区	129溝	養生土器	高杯	90	14.0	19.8	穿孔、脚柱部外面、脚部内面ハケ、杯部脚部外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
351	1区	129溝	養生土器	甕	85	14.5	26.1	穿孔、外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
352	1区	129溝	養生土器	甕	85	14.0	24.2	穿孔、内面脚部底下ヘラミガキ、体部以下ハケ、外面体部上半ヘラミガキ、下半ハケ後ヘラミガキ
353	1区	129溝	養生土器	水差し形土器	85	8.0	21.3	穿孔、口縁部刻み目、脚部～体部上半縁状、内面ハケ、外面ヘラミガキ
354	1区	129溝	養生土器	広口甕	90	20.3	36.0	口縁部凹線状、脚部～体部上半直線状、底状、穿孔、内面指オサエ明瞭、外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、脚部底、外面覆付着
355	1区	141溝	養生土器	広口甕	5	(16.4)	(18.2)	口縁部～脚部縁状、体部上部直線状、脚部下端扇形状、内外面ハケ、生駒西麓産粘土、外面覆付着
356	1区	141溝	養生土器	広口甕	5	(28.0)	(8.7)	口縁部内面円形浮紋、外面縁状、刻み目、脚部底線状、生駒西麓産粘土
357	1区	141溝	養生土器	細明蓋	85	9.3	22.4	口縁部～体部上半に円形浮紋、縁状、穿孔、内面ハケ、体部下半ヘラミガキ
358	1区	141溝	養生土器	甕	65	底径6.9	(32.2)	穿孔、内面板ナデ、外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、外面全体と内面に指・刻付着
359	1区	141溝	養生土器	甕	5	(18.2)	(12.5)	体部内面ナデ、外面上半ハケ・タタキ後ナデ、下半ヘラミガキ
360	1区	141溝	養生土器	広口甕	90	(23.0)	(46.6)	口縁部～脚部縁状、体部上半縦型流水紋、穿孔、体部内面ハケ、脚部内面ヘラミガキ、脚部～体部上半外面ハケ、体部下半外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土、外面覆付着
361	1区	132溝	養生土器	広口甕	85	14.2	30.2	穿孔、内面ハケ、外面ハケ、ヘラミガキ、外面覆付着、生駒西麓産粘土
362	1区	132溝	養生土器	広口甕	513下	(20.4)	(8.8)	口縁部に扇形状、波状紋、脚部に縁状、363・364と同一個体か

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率(%)	法量(m)		特徴・備考
						口径	高さ	
363	1区	132溝	養生土器	広口甕	5	体部最大径(30.4)	(11.3)	直線紋。磁形紋。外面ヘラミダキ。362・364と同一個体か
364	1区	132溝	養生土器	広口甕	5以下	底径(8.40)	(4.0)	外面ヘラミダキ。362・363と同一個体か
365	1区	132溝	養生土器	広口甕	5以下	(14.0)	(4.5)	外面ヘラ。生駒西麓産物土。130土坑出土379と同一個体か
366	1区	132溝	養生土器	広口甕	5以下	—	(5.8)	口縁部縞状紋(または波状紋)。生駒西麓産物土
367	1区	132溝	養生土器	広口甕	5以下	底径(15.5)	(6.4)	外面ヘラ。胴部凹頭圧痕で加飾
368	1区	132溝	養生土器	広口甕	5以下	底径(16.4)	(2.3)	内面取ナド。外面ヘラミダキ。生駒山西麓産物土
369	1区	132溝	養生土器	受口状口縁甕	5以下	(18.8)	(3.7)	凹線紋
370	1区	132溝	養生土器	受口状口縁甕	5以下	(24.0)	(3.3)	凹線紋
371	1区	132溝	養生土器	甕	5以下	(24.6)	(3.5)	生駒西麓産物土
372	1区	132溝	養生土器	甕	5以下	(30.6)	(6.3)	内面ヘラ。373と同一個体か
373	1区	132溝	養生土器	甕	5以下	底径(8.2)	(6.0)	内面ヘラ。外面ヘラミダキ。372と同一個体か
374	1区	132溝	養生土器	鉢	5以下	(16.2)	(4.1)	縞状紋。生駒西麓産物土。131溝出土の297同一個体か
375	1区	184溝	養生土器	高杯	10	(14.6)	(4.3)	凹線紋。内面ヘラミダキ
376	1区	184溝	養生土器	水差し型土器	5	(9.4)	(7.2)	凹線紋。波状紋。直線紋。生駒西麓産物土
377	1区	172土坑	養生土器	甕	5以下	(10.8)	(3.9)	生駒西麓産物土
378	1区	130土坑	養生土器	広口甕	5	(13.8)	(9.75)	体部内面ハケ。体部へ細部外面ハケ。生駒西麓産物土。132溝出土365と同一個体か
379	1区	133土坑	須恵器	甕	35	(14.0)	4.8	
380	1区	133土坑	須恵器	甕	10	(16.0)	(3.8)	
381	1区	138土坑	須恵器	甕	10	(14.0)	(2.3)	
382	1区	135土坑	土師器	有段口鉢鉢	20	(13.8)	(4.2)	内外面ヘラミダキ
383	1区	135土坑	土師器	甕	90	13.9	17.6	庄内式甕。内面土平ケズリ。外面タタキ。外面横付着。生駒西麓産物土
384	1区	131溝	須恵器	甕	60	12.3	3.6	ヘラ記号。天井部内面不定方向ナド
385	1区	131溝	須恵器	甕	70	13.6	3.6	天井部内面不定方向ナド。他成跡小穿孔
386	1区	131溝	須恵器	椀椀	70	最大径20.9	(20.1)	カヤ状把手。体部内面細いカヤ目。前面はタタキ後コナダ
387	1区	131溝	土師器	椀	60	11.4	4.7	底部ヘラケズリ。内面工具痕。外面指オサエ
388	1区	131溝	土師器	椀	70	13.6	4.8	外面指オサエ
389	1区	131溝	土師器	高杯	30	(17.1)	(12.1)	杯部内面ハケ。脚柱部内面ヘラケズリ
390	1区	131溝	土師器	高杯	40	脚柱(12.5)	(9.6)	
391	1区	131溝	土師器	複合口縁甕	5	(17.8)	(3.1)	内外面ハケ。生駒山西麓産物土
392	1区	131溝	土師器	甕	10	(18.6)	(5.0)	庄内式甕。外面タタキ。生駒西麓産物土
393	1区	131溝	土師器	甕	5	(15.6)	(5.4)	庄内式甕。外面粗いタタキ。生駒西麓産物土
394	1区	131溝	養生土器	甕	5以下	底径(8.8)	(3.4)	外面ヘラミダキ
395	1区	131溝	養生土器	甕	5以下	底径7.8	(3.0)	内面取ナド。外面ヘラミダキ。生駒西麓産物土
396	1区	131溝	養生土器	甕	5以下	底径7.2	(4.5)	内面ヘラ。外面ヘラミダキ。生駒西麓産物土
397	1区	131溝	養生土器	鉢	5以下	(16.2)	(4.35)	縞状紋。生駒西麓産物土。132溝出土374と同一個体か
398	1区	131溝	養生土器	甕	5以下	(30.8)	(5.4)	外面ヘラミダキ。生駒西麓産物土
399	1区	131溝	養生土器	甕	5以下	—	(3.2)	生駒西麓産物土
401	1区	124溝	養生土器	甕	5	底径(4.2)	(17.2)	外面タタキ
402	2区	東平部 細溝	土師器	椀	10	(12.8)	(3.3)	
403	2区	東平部 細溝	土師器	椀	10	(13.4)	3.15	
404	2区	東平部 細溝	土師器	皿	5	高台径(24.4)	(1.6)	研紋
405	2区	東平部 細溝	土師器	皿	5以下	(21.1)	(2.2)	研紋
406	2区	東平部 細溝	須恵器	杯	5	(14.4)	(4.0)	
407	2区	東平部 細溝	須恵器	杯	5	高台径(7.2)	(1.2)	
408	2区	東平部 細溝	須恵器	杯	5以下	高台径(8.8)	(0.85)	
409	2区	東平部 細溝	須恵器	杯	10	高台径(15.2)	(2.8)	
411	2区	西平部 細溝	土師器	杯	20	(13.6)	3.1	
412	2区	西平部 細溝	土師器	高杯	40	脚柱径4.9	(7.1)	脚柱部面取り11面
413	2区	西平部 細溝	土師器	甕	5	(19.0)	(4.4)	体部外面指オサエ
414	2区	西平部 細溝	須恵器	甕	20	(13.8)	2.8	
415	2区	西平部 細溝	須恵器	杯	10	(13.6)	2.5	
416	2区	西平部 細溝	須恵器	杯	10	(14.3)	4.2	
417	2区	西平部 細溝	須恵器	甕	10	高台径(8.6)	(7.3)	底部内面不定方向ナド
418	2区	西平部 細溝	須恵器	甕	5	体部最大径(21.0)	(6.9)	体部外面下平ヘラケズリ

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)		特徴・備考
						口径	高さ	
420	2区	227溝	煎煮器	杯	15	高台径(9.2)	(2.8)	
421	2区	276溝	煎煮器	杯	5	高台径(13.0)	(1.5)	
422	2区	276溝	煎煮器	杯	15	高台径(13.3)	(1.8)	底部内面不定方向ナデ
423	2区	276溝	煎煮器	水筒	15	胴径2.4	(7.6)	
425	2区	256ピット	土師器	杯	5	(15.4)	(2.5)	竪立柱礎物3
426	2区	313ピット	土師器	皿	35	(8.4)	(4.4)	竪立柱礎物2、323ピット出土片と接合
427	2区	229ピット	瓦器	碗	10	高台径(5.2)	(1.2)	
428	2区	229ピット	煎煮器	甕	5以下	(56.8)	(4.7)	胴部外面タキ後ヨコナデ、3-2層出土片と接合
429	2区	404ピット	土師器	碗	25	(13.8)	(2.85)	
430	2区	354ピット	土師器	杯	10	(13.2)	(2.8)	
431	2区	353ピット	製塩土器	—	5以下	(9.6)	(3.3)	
432	2区	353ピット	土師器	罎付長頸壺	5以下	(24.2)	(10.0)	
434	2区	196土坑	煎煮器	皿	10	底径(5.0)	(5.4)	底部未切り
435	2区	196土坑	煎煮器	碗	5以下	底径(13.4)	(2.1)	内面磨付着
436	2区	196土坑	煎煮器	杯	10	高台径(12.8)	(4.3)	
437	2区	196土坑	煎煮器	甕	5以下	胴径(24.8)	(8.7)	焼成不良
438	2区	196土坑	甕	—	5以下	—	—	長さ(12.0)×幅(5.9)×厚さ(2.7)cm、内面ハケ
439	2区	196土坑	土師器	杯	20	(13.4)	(3.0)	
440	2区	196土坑	土師器	皿	15	(12.0)	1.5	での字状口縁
441	2区	196土坑	土師器	皿	10	(15.0)	(2.15)	
442	2区	196土坑	土師器	碗	15	(11.8)	(3.2)	体部外面指オサエ
443	2区	196土坑	土師器	碗	40	(14.8)	4.2	体部外面指オサエ、外面磨付着
444	2区	196土坑	土師器	罎	5以下	—	—	把手部、長さ(2.7)×幅(7.9)×厚さ1.7cm、外面ヘラケズリ、下面磨付着
445	2区	196土坑	土師器	甕	5以下	(19.4)	(5.6)	体部外面指オサエ
446	2区	196土坑	土師器	罎付長頸壺	5以下	(22.8)	(6.0)	内面ハケ、指オサエ
447	2区	196土坑	土師器	罎付長頸壺	5以下	(25.8)	(5.2)	
448	2区	196土坑	土師器	罎	5	(32.4)	(6.6)	体部外面指オサエ
449	2区	196土坑	黒色土器A	碗	5	高台径(8.5)	(3.5)	内面ヘラミガキ
450	2区	196土坑	黒色土器A	碗	10	(14.2)	(3.6)	口縁端部内面沈線、内面ヘラミガキ
451	2区	196土坑	黒色土器A	碗	10	(17.2)	(6.2)	口縁端部内面沈線、内面ヘラミガキ
452	2区	196土坑	黒色土器A	碗	10	(18.0)	(4.7)	口縁端部内面沈線、内面ヘラミガキ
453	2区	196土坑	黒色土器A	碗	5	高台径(8.4)	(1.5)	内面ヘラミガキ
454	2区	196土坑	黒色土器A	碗	5以下	高台径(9.2)	(1.7)	内面ヘラミガキ
455	2区	196土坑	黒色土器A	碗	10	高台径(9.2)	(1.3)	内面ヘラミガキ
456	2区	196土坑	黒色土器A	碗	10	高台径(9.2)	(1.9)	内面ヘラミガキ
457	2区	196土坑	黒色土器A	碗	5	高台径(8.4)	(1.4)	内面ヘラミガキ
458	2区	196土坑	灰釉陶器	碗	5	高台径(7.0)	(1.6)	短い三日月高台、見込み以外の内面に釉薬
459	2区	196土坑	緑釉陶器	碗	25	高台径8.0	(1.6)	削り出し高台、底部外面以外に釉、見込みに段
463	2区	356土坑	土師器	耳皿	20	高台径(6.4)	3.8	外面ヘラミガキか?
464	2区	356土坑	土師器	皿	35	(13.4)	(2.1)	
465	2区	356土坑	土師器	皿	10	(13.8)	1.9	
466	2区	356土坑	土師器	皿	15	(14.0)	(2.3)	
467	2区	356土坑	土師器	皿	15	(16.0)	2.5	2段ナデ、破砕後内面磨付着
468	2区	356土坑	土師器	皿	10	(16.8)	2.7	2段ナデ
469	2区	356土坑	土師器	甕	5	(21.6)	(5.3)	
470	2区	356土坑	土師器	碗	15	(14.0)	(3.7)	体部外面指オサエ
471	2区	356土坑	土師器	碗	15	(14.2)	(3.9)	体部外面指オサエ
472	2区	356土坑	土師器	碗	25	(14.3)	4.3	体部内外面指オサエ、内面磨付着
473	2区	356土坑	土師器	碗	15	(15.2)	4.7	体部外面指オサエ、内面磨付着
474	2区	356土坑	土師器	碗	15	高台径6.2	(1.5)	
475	2区	356土坑	土師器	高杯	40	—	(11.1)	胴柱部面取り7面
476	2区	356土坑	黒色土器A	碗	5	(16.0)	(3.5)	内面ヘラミガキ
479	2区	210土坑	土師器	甕	5以下	(22.4)	(4.6)	体部外面指オサエ

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)		特徴・備考
						口径	高さ	
481	2区	211土坑	瓦器	甕	80	14.7	4.7	連結輪付破紋、和瓦型
482	2区	224土坑	灰釉陶器	甕?	5以下	高台径(6.2)	(1.1)	三日月高台
483	2区	225土坑	灰土器	甕	10	高台径4.8	(4.7)	
484	2区	225土坑	土師器	杯	50	(18.4)	4.7	底部外面ヘラケズリ、内外面摩滅
485	2区	277土坑	灰土器	甕	10	(14.8)	(1.2)	
486	2区	358土坑	灰土器	甕	30	体部最大径5.8	(2.8)	底面ヘラ切り
487	2区	358土坑	灰土器	甕	5	(15.0)	(1.9)	
488	2区	358土坑	灰土器	甕	5	(15.8)	(2.0)	
489	2区	358土坑	灰土器	杯	15	(17.0)	4.1	
490	2区	358土坑	土師器	杯	20	(15.4)	2.45	破紋、底部外面ヘラケズリ
491	2区	358土坑	土師器	杯	15	(15.2)	2.5	破紋、底部外面ヘラケズリ
492	2区	358土坑	土師器	杯	20	(17.8)	2.7	破紋
493	2区	358土坑	土師器	鉢	5以下	(18.4)	(3.7)	
494	2区	358土坑	土師器	甕	5以下	(17.4)	(6.4)	
495	2区	359土坑	灰土器	甕	5以下	高台径(8.0)	(3.5)	縞み出し高台
497	2区	365土坑	灰土器	杯	20	(16.0)	4.5	
498	2区	365土坑	土師器	甕	80	13.6	11.9	体部内面板ナゲ、外面指サエ
499	2区	429土坑	土師器	細形長脚甕	50	(27.4)	(36.2)	口縁部内外面ハケ後ナゲ、体部内面指サエ、体部外面ハケ、生駒西麓産粘土、外面底付着
500	2区	44-1層下	灰土器	甕	95	18.0	47.3	外面タタキ後ナゲ、頸部4ヶ所にカガキの耳
502	2区	北高まり部	灰土器	甕	50	13.7	4.1	天井部内面不定方向ナゲ
503	2区	北高まり部	土師器	二重口縁甕	10	(20.2)	(7.3)	阿波からの贈り品か
504	2区	北高まり部	土師器	中筒形土器	5以下	最大径(16.5)	(6.15)	内面ヘラケズリ
505	2区	中央高まり部	灰土器	甕	70	14.4	4.0	天井部内面当て具痕
506	2区	中央高まり部	灰土器	杯	10	(11.4)	(3.1)	
507	2区	中央高まり部	土師器	高杯	30	-	(10.0)	細柱部面取り、ヘラミガキ
508	2区	中央高まり部	土師器	甕	5	(15.8)	(2.9)	和留式胴内裏、口縁部内面ハケ、生駒西麓産粘土
509	2区	中央高まり部	土師器	甕	10	(16.8)	(9.9)	庄内式裏、口縁部内面ハケ、体部内面ヘラケズリ、外面タタキ、ハヤ、生駒西麓産粘土、462産出538と同一個体か
510	2区	中央高まり部	土師器	広口甕口甕	5	(17.2)	(5.4)	内外面ハケ
511	2区	中央高まり部	土師器	二重口縁甕	10	(27.4)	(8.7)	内外面ナゲ
512	2区	籬立柱建物4周辺	土師器	甕	5以下	(14.9)	(3.1)	和留式胴内裏、内面ヘラケズリ
513	2区	籬立柱建物4周辺	土師器	甕	5	(12.2)	(4.7)	和留式胴内裏
514	2区	籬立柱建物4周辺	土師器	甕	5以下	(15.8)	(5.2)	庄内式裏、内面ヘラケズリ、外面タタキ後ハケ、生駒西麓産粘土
515	2区	籬立柱建物4周辺	土師器	甕	25	16.8	(11.7)	庄内式裏、内面ヘラケズリ、外面タタキ後ハケ、生駒西麓産粘土
516	2区	籬立柱建物4周辺	土師器	二重口縁甕	50	14.4	(10.1)	口縁部内外面に破紋、体部外面ハケ後ナゲ
517	2区	籬立柱建物4周辺	土師器	広口甕	80	14.9	27.1	口縁部内面ヘラミガキ、口縁部外面ハケ後ヘラミガキ、体部外面ヘラミガキ
518	2区	463溝	土師器	甕	10	(16.8)	(13.9)	庄内式裏、口縁部内外面ハケ後ナゲ、体部内面ヘラケズリ、体部外面細いタタキ後ハケ、生駒西麓産粘土、口縁部と体部接合せず、中央高まり出土506と同一個体か
519	2区	463溝	土師器	甕	20	胴径(8.2)	(12.8)	V様式、内面ヘラケズリ、外面左上がりの細いタタキ、ハケ
520	2区	方形周溝墓2周縁(467溝)北西部上面	弥生土器	鉢	5以下	-	(1.6)	口縁部点状、生駒西麓産粘土
521	2区	方形周溝墓2周縁(467溝)北西部上面	弥生土器	広口甕	5以下	(13.3)	(3.3)	口縁部点状、底部外面ハケ
522	2区	方形周溝墓2周縁(467溝)北西部上面	弥生土器	台付鉢	20	-	(6.8)	竹管状、外面・鉢部内面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
523	2区	方形周溝墓2周縁(467溝)北西部上面	弥生土器	広口甕	5以下	(14.6)	(1.4)	口縁部点状、生駒西麓産粘土
524	2区	方形周溝墓2周縁(467溝)北西部上面	弥生土器	甕	5	底径6.2	(2.2)	底部外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
525	2区	方形周溝墓2周縁(467溝)北西部上面	弥生土器	肥子付鉢	60	(12.6)	6.6	口縁部点状、内面ハケ後ナゲ、体部一部外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
526	2区	方形周溝墓2周縁(467溝)北西部上面	弥生土器	広口甕	5以下	(15.7)	(1.7)	口縁部点状、外面底付着、527と同一個体か
527	2区	方形周溝墓2周縁(467溝)北西部上面	弥生土器	広口甕	5以下	底径(7.0)	(4.4)	内面細いハヤ、外面ヘラミガキ、外面底付着、526と同一個体か
528	2区	土器類	弥生土器	鉢	20	(49.0)	(29.1)	土器指高、体部上半へ口縁部摩滅、体部下内外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
529	2区	土器類	弥生土器	甕	50	(43.4)	(69.7)	土器指高、口縁部竹管状の刺突、穿孔、内面摩滅、板ナゲ又はハヤ、体部外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土
531	2区	436溝	弥生土器	甕	5以下	(30.0)	(8.1)	内外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土、第5層出土片と接合
532	2区	450溝	弥生土器	甕	20	-	(27.0)	穿孔、土器指?、外面ヘラミガキ、生駒西麓産粘土、外面底付着

遺物 番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)		特 徴 ・ 備 考
						口径	高さ	
533	3区	細溝	須恵器	平板	5以下	—	—	肥半部、長さ(2.5)×幅0.7×厚さ1.3cm
534	3区	細溝	須恵器	皿	5以下	(7.6)	(2.9)	
535	3区	細溝	須恵器	杯	10	高台径 (9.4)	(2.7)	
536	3区	細溝	土師器	皿	20	(10.0)	1.7	
537	3区	細溝	土師器	皿	15	(15.2)	2.0	
538	3区	144ビット	土師器	椀	95	13.1	3.2	
539	3区	147土坑	須恵器	蓋	10	(11.8)	(1.3)	
540	3区	147土坑	黑色土器A	椀	10	高台径 (8.6)	(1.2)	
541	3区	147土坑	土師器	甕	20	(18.4)	(13.9)	内面板ナゲ、体部外面粗オサエ
542	3区	147土坑	甕	—	5以下	—	—	長さ(11.8)×幅(7.2)×厚さ0.8cm、外面ハケ
547	3区	176部へ込み	弥生土器	甕	5以下	底径(7.6)	(2.3)	
548	3区	182溝	縄文土器	深鉢	5以下	—	—	長さ(3.2)×幅(4.3)×厚さ0.6cm、凸帯紋
549	3区	墳丘盛土上層積層	弥生土器 土師器ナ	甕	5以下	—	—	外面タタキ
550	3区	方形周溝墓3 北辺周溝(189溝)	弥生土器	大口皿	40	体部最大径 (17.1)	(16.4)	直線紋、波状紋、内面ハケ、体部外面下平ヘラケズリ後ヘラミガキ、穿孔
551	4区	細溝	須恵器	皿	25	(17.0)	(2.2)	天井部内面不定方向ナゲ
552	4区	493土坑	灰輪陶器	椀	10	高台径 (8.2)	(1.6)	内面のみ跡、見込みに目跡
553	4区	493土坑	須恵器	楕円片面碟	10	体径(12.4)	(4.8)	
554	4区	493土坑	須恵器	甕	5以下	—	(5.5)	胴部外面タタキ後ヨコナゲ
555	4区	493土坑	須恵器	甕	5以下	(38.2)	(6.4)	胴部外面タタキ後ヨコナゲ
556	4区	493土坑	陶器	甕	5以下	(45.0)	(8.4)	常滑産
557	4区	493土坑	瓦器	椀	50	11.4	2.8	内面のヘラミガキなし、高台なし
558	4区	493土坑	瓦器	椀	25	(11.6)	3.0	内面ヘラミガキ、高台なし
561 09-1 2区		4層	灰輪陶器	椀	5以下	—	(2.8)	
562 09-1 2区		5層	須恵器	皿	10	底径(8.0)	(6.1)	

※( )は残存寸法、又は 復原寸法

表2 軒瓦瓦計測表

遺物番号	調査区	遺構・層	寸法(cm)				瓦当紋様	残存率(%)	特徴・備考
			瓦当径	瓦当厚	外縁高	外縁幅			
74	1区	3-2層	—	—	—	0.80	5以下	各区調査枚数	
75	1区	3-2層	—	—	0.77	(1.1)	重畳紋	5以下	
154	2区	3-2層	—	—	—	—	0	瓦当欠損、丸瓦部は長さ(14.9)×幅(10.6)×厚さ1.9cm	
155	2区	3-2層	—	—	—	—	0	瓦当欠損、丸瓦部は長さ(15.8)×幅(10.7)×厚さ1.8cm	
158	2区	3-2層	(17.0)	3.0	0.8	3.5	単弁蓮華紋	15	
256	1区	野宮槽部北平 細溝	—	—	0.4	0.80	重畳紋	5	
259	1区	野宮槽部南平 細溝	—	—	—	(1.1)	重畳紋	10	
543	3区	147土坑	(13.2)	2.2	1.0	1.1	重畳紋	40	

※( )は残存・復原寸法

表3 丸瓦・平瓦・道具瓦計測表

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	寸法(cm)			残存率(%)	特徴・備考
				長さ	幅	厚さ		
21	1区	3-1層	平瓦	(7.9)	(9.1)	2.4	5	凸面陶タタキ
22	1区	3-1層	平瓦	(10.3)	(7.7)	2.1	5	凸面陶タタキ、凹面和目タテ酒し
23	1区	3-1層	平瓦	(11.1)	(13.25)	1.9	10	凸面陶タタキ
76	1区	3-2層	丸瓦	(10.9)	(7.9)	1.9	5	凸面陶タタキ後ナゲ酒し
77	1区	3-2層	腰板瓦	(9.6)	(13.7)	1.7	5	凸面陶タタキ後ナゲ酒し
78	1区	3-2層	平瓦	(16.6)	(12.4)	2.6	15	凸面陶タタキ
79	1区	3-2層	平瓦	(10.6)	(17.8)	2.3	25	凸面陶タタキ
80	1区	3-2層	平瓦	(8.5)	(8.1)	2.0	5	凸面陶タタキ
81	1区	3-2層	平瓦	(14.5)	(13.7)	1.8	10	凸面陶タタキ、凹面和目や文様い
82	1区	3-2層	平瓦	(17.8)	(15.8)	2.5	30	凸面陶タタキ後ナゲ酒し、凹面和目ナゲ酒し
97	1区	4層	丸瓦	(8.1)	(5.9)	2.2	5	凸面ナゲ
98	1区	4層	平瓦	(14.35)	(9.7)	2.65	15	凸面陶タタキ
99	1区	4層	平瓦	(10.3)	(10.4)	2.6	10	凸面陶タタキ、凹面和目ナゲ酒し
150	2区	3-1層	平瓦	(11.4)	(10.0)	1.8	10	凸面陶タタキ
151	2区	3-1層	平瓦	(10.6)	(11.5)	2.4	20	凸面陶タタキ
152	2区	3-1層	平瓦	(14.7)	(10.5)	2.1	25	凸面陶タタキ、端部側の一部タタキナゲ酒し
153	2区	3-2層	平瓦	(12.6)	(14.5)	2.0	25	凸面陶タタキ後ナゲ酒し、凹面和目ナゲ酒し
156	2区	3-2層	丸瓦	(15.8)	(8.2)	2.4	10	凸面陶タタキ後ナゲ酒し
157	2区	3-2層	丸瓦	(8.1)	(12.3)	2.4	10	凸面ナゲ
221	4区	3-2層	平瓦	(14.4)	(12.0)	2.1	10	凸面陶タタキ
222	4区	3-2層	丸瓦	(13.8)	(11.8)	1.9	15	玉縁式、凸面ナゲ
228	4区	4層	丸瓦	(15.3)	(8.4)	1.8	10	凸面ナゲ
229	4区	4層	丸瓦	(15.4)	(10.8)	1.7	10	凸面ナゲ
230	4区	4層	丸瓦	(9.6)	(9.9)	1.8	5	玉縁式、凸面ナゲ
255	1区	野宮槽部北平 細溝	丸瓦	(12.7)	(9.1)	1.9	10	腰板瓦の可能性あり、凸面陶タタキ後ナゲ酒し
312	1区	西平部 細溝	丸瓦	34.4	16.6	2.1	98	凸面陶タタキ後ナゲ酒し
344	1区	41土坑	平瓦	(10.7)	(9.0)	2.1	5	凸面陶タタキ
419	2区	西平部 細溝	平瓦	(12.7)	(11.0)	2.3	10	凸面陶タタキ、凹面和目
424	2区	278溝	平瓦	(8.0)	(9.3)	1.7	5	凸面陶タタキ
460	2区	196土坑	平瓦	(11.3)	(12.6)	2.0	20	凸面陶タタキ
461	2区	196土坑	平瓦	(13.8)	(16.3)	1.9	25	凸面陶タタキ、狭端側の一部ナゲ酒し
462	2区	196土坑	平瓦	(12.4)	(11.3)	2.4	10	凸面陶タタキ
477	2区	356土坑	平瓦	(10.3)	(8.4)	2.3	5	凸面陶タタキ
478	2区	356土坑	平瓦	(12.3)	(7.8)	2.2	5	凸面陶タタキ
480	2区	211土坑	丸瓦	(8.9)	(9.6)	2.2	5	玉縁式、凸面陶タタキ後ナゲ酒し
496	2区	359土坑	丸瓦	(8.8)	(11.5)	2.2	5	玉縁式、凸面陶タタキ後ナゲ酒し
544	3区	147土坑	平瓦	(9.9)	(9.5)	1.5	5	凸面陶タタキ
545	3区	147土坑	丸瓦	(11.7)	(7.9)	1.6	20	玉縁式、凸面ナゲ
559	4区	493土坑	平瓦	(10.6)	(8.1)	2.3	5	凸面陶タタキ
963	99-1 2区	6層	平瓦	(10.4)	(5.4)	2.0	5	凸面陶タタキ

※計測値はベタ置きした状態での寸法、( )は残存寸法

表4 木製品計測表

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	寸法(cm)			残存率(%)	特徴・備考
				厚さ	長さ	幅		
180	2区	第5面	大足 (出子盤)	1.8	19.2	2.7	40	断面菱形、片端欠損
301	2区	40-1層下面	木棺小口板等	4.0	196.2	41.6	100	材料、知り欠いて凸状に加工

表5 石製品計測表

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	寸法(cm)			残存率(%)	特徴・備考
				厚さ	長さ	幅		
85	1区	3-2層	礫石	1.1	4.9	1.4		
96	1区	3-2層	礫石	3.7	(14.6)	(16.0)		
177	2区	第5面	石釘丁	(6.6)	(4.25)	(5.7)	35	緑色片岩製
257	1区	貯留槽部北平 細溝	礫石	(3.9)	(9.0)	(5.1)		
343	1区	41土坑	礫石	3.9	(9.4)	5.2		
400	1区	131溝	割片	0.8	9.05	4.1		サヌカイト製
410	2区	東平部 細溝	割片	0.5	2.95	2.7		サヌカイト製
530	2区	溝底	勾玉	1.2	(4.5)	1.8	75	燧石製、両面穿孔
546	3区	176落ち込み	割片	0.4	3.0	2.5		サヌカイト製
560	4区	493土坑	礫石	(6.8)	(8.2)	(6.2)		

※( )は残存寸法

表6 土製品計測表

遺物番号	調査区	遺構・層	種類	寸法(cm)			残存率(%)	特徴・備考
				厚さ	長さ	幅		
20	1区	3-1層	土埴	径2.6	4.7	—	100	孔径0.3cm
83	1区	3-2層	埴	6.5	(9.5)	(13.5)		
84	1区	3-2層	土埴	径2.0	(4.1)	—	50	孔径0.7cm
96	1区	40層	土埴	径1.9	(4.2)	—	90	孔径0.6cm
159	2区	3-2層	埴輪	—	—	—	5以下	円筒埴輪、外面タテハケ、凸部幅1.5cm、高さ0.6cm、V期
160	2区	3-2層	埴輪	—	—	—	5以下	斬頭形円筒埴輪、V期
216	4区	3-1層	埴	(3.9)	(12.4)	(15.6)		
258	1区	貯留槽部南平 細溝	土埴	径1.8	4.0	—	100	孔径0.5cm
433	2区	196土坑	土埴	径2.4	(5.7)	—	80	孔径0.7cm

※( )は残存寸法

# 写真図版





1. 第3面全景 (西から)

2. 貯留槽部第3面全景 (南西から)  
3. 周囲拡張部東辺～南辺第3面 (北東から)

4. 周囲拡張部南辺第3面 (西から)

08-1 調査

写真図版2  
1区遺構



1. 2層下面検出遺構（中央は7土坑）  
2. 7土坑

3. 19溝  
4. 3-1層下面検出斜行溝



5. 75溝  
6. 41・42土坑

7. 41土坑 土器出土状況  
8. 50土坑



1. 49 土坑  
2. 171 土坑



3. 掘立柱建物 1 (南から)  
4. 28 ピット



5. 32 ピット  
6. 40 ピット

7. 160 ピット  
8. 4b-1 層下面全景 (西から)



1. 貯留槽部 4b-1層下面検出河道跡 (北西から)



2. 貯留槽部第5面全景 (南から)



1. 第5面全景（西から）



2. 方形周溝墓1（北から）



1. 129溝 土器出土状況



2. 129溝 土器 (346・350～352) 出土状況  
3. 129溝 土器 (354) 出土状況

4. 方形周溝墓1墳丘南裾部 土器 (360) 出土状況  
5. 方形周溝墓1墳丘南裾部 土器 (357) 出土状況



1. 141溝 土器 (358) 出土状況



2. 132溝 土器 (361) 出土状況



3. 131溝 (南東から)

4. 131・141溝 断面 (南西から)



5. 方形周溝墓1 地層断面 (南西から)

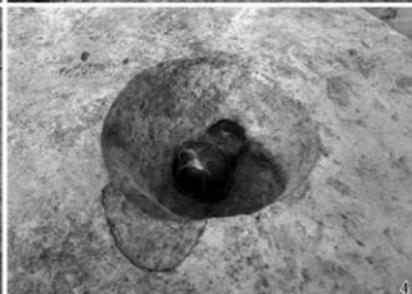


6. 方形周溝墓1 地層断面 (西から)



7. 方形周溝墓1 盛土下面検出507溝

8. 方形周溝墓2 墳丘断ち割り断面 (南西から)



1. 130 土坑  
2. 133 土坑

3. 134 土坑  
4. 135 土坑



5. 138 土坑  
6. 139 土坑

7. 172 土坑  
8. 124 溝



1. 125 溝  
2. 126 溝

3. 127 溝  
4. 128 溝



5. 周回拡張部北辺第5面 (西から)  
6. 周回拡張部南辺第5面 (北東から)

7. 6-1層下面検出段 (南西から)  
8. オリフィス部調査完了状況 (南東から)



1. 第3面全景（東から）

2. 北西部2層下面検出溝（西から）  
3. 掘立柱建物2層辺検出遺構（東から）4. 西半部第3面検出遺構（北から）  
5. 中央部196土坑周辺検出遺構（北から）



1. 掘立柱建物 2 (北から)

2. 掘立柱建物 2 柱痕跡 (北から)

3. 堀 1 (西から)



4. 掘立柱建物 3 (東から)

5. 322 ピット

6. 302 ピット

7. 335・270 ピット



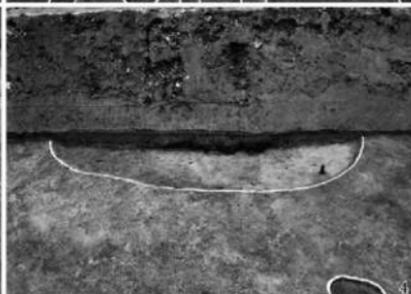
1. 210 土坑  
2. 211 土坑

3. 224 土坑  
4. 197 溝、225 土坑



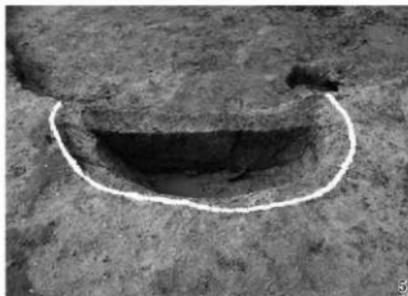
5. 277・366 土坑  
6. 297 土坑

7. 298 土坑  
8. 306 土坑



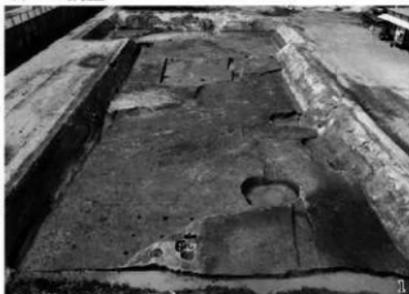
1. 308 土坑  
2. 356 土坑

3. 358 土坑  
4. 359 土坑



5. 365 土坑  
6. 412 土坑

7. 429 土坑 土器 (499) 出土状況  
8. 227・278 溝



1. 4b-1層下面全景（東から）

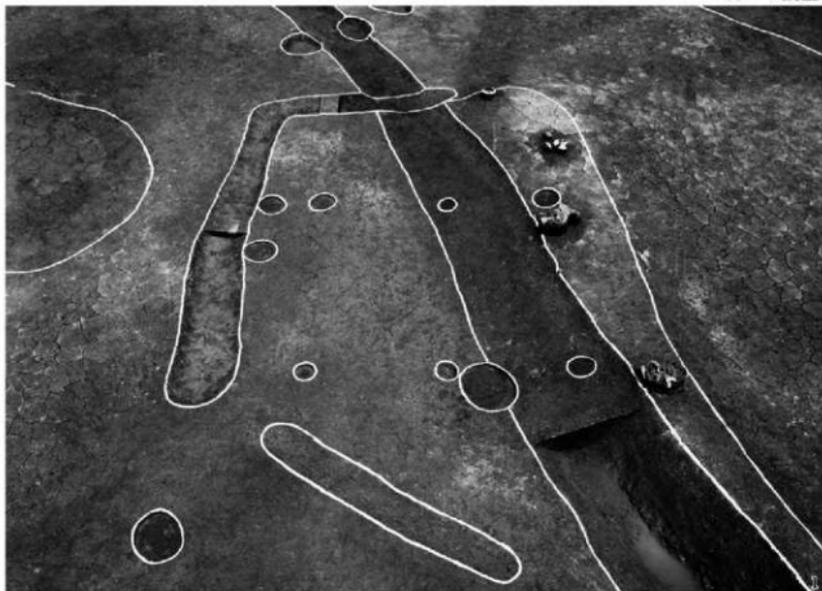
2. 4b-1層下面 土器（169）出土状況

3. 4b-1層下面 土器（500）出土状況

4. 4b-1層下面 木製品（501）出土状況



5. 第5面全景（東から）



1. 掘立柱建物4 (南から)



2. 掘立柱建物4周辺土器(516)出土状況



4. 掘立柱建物4周辺土器(517)出土状況



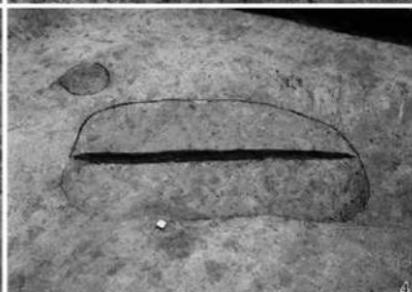
3. 掘立柱建物4周辺土器(513)出土状況



5. 掘立柱建物4周辺土器(515)出土状況

08-1 調査

写真図版  
16  
2区遺構



1. 453ピット

2. 432~434ピット

3. 438~443ピット

4. 448土坑



5. 458土坑

6. 450溝 土器 (532) 出土状況

7. 第5面 木製品 (180) 出土状況

8. 第5面 石庭丁 (177) 出土状況



1. 方形周溝墓2周辺遺構検出状況（南西から）



2. 方形周溝墓2（南西から）



1. 方形周溝墓2土器棺出土状況（西から）



2. 方形周溝墓2土器棺出土状況（北東から）



4. 方形周溝墓2盛土下面検出474溝（北西から）



3. 方形周溝墓2北辺周溝完掘状況（北西から）



5. 方形周溝墓2墳丘下部砂層堆積状況（南西から）



1. 東半部第3面検出遺構（北東から）



2. 東壁地層断面（北西から）



4. 145土坑



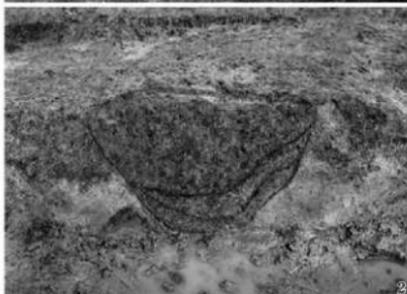
3. 144ピット



5. 146土坑

08-1 調査

写真図版  
20  
3区遺構



1. 147・148 土坑  
2. 154 ピット

3. 4b-1層下面全景(東から)  
4. 西端部4b-1層下面(北から)



5. 第5面全景(東から)



1. 中央部第5面検出遺構（南東から）

2. 182溝

3. 西端部第5面検出遺構（南東から）

4. 177落ち込み



5. 176落ち込み

6. 180土坑

7. 181土坑

8. 185土坑



1. 方形周溝墓3 (北から)



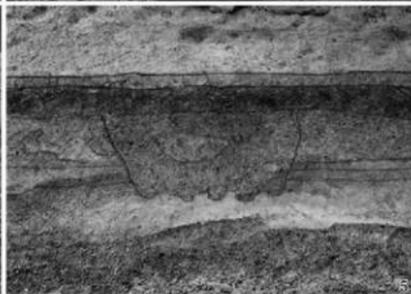
2



4



3



5

2. 186溝 (北西から)

3. 186溝 土器出土状況 (北西から)

4. 186溝 土器 (550) 出土状況

5. 南壁面検出墳丘盛土内土坑断面



1. 方形周溝墓3断面（北東から）

2. 178 土坑

3. 方形周溝墓3断面（北西から）

4. 西端部第5面検出遺構（北から）



5. 500 溝

6. 501 溝

7. 502 土坑

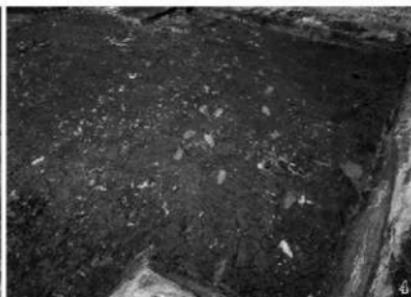
8. 503 土坑



1. 492・493土坑、491溝（南西から）



2. 東端部第3面検出遺構（東から）  
3. 4b-1層下面全景（東から）



4. 4b-1層下面検出ヒトの足跡  
5. 4b-1層下面検出島の足跡

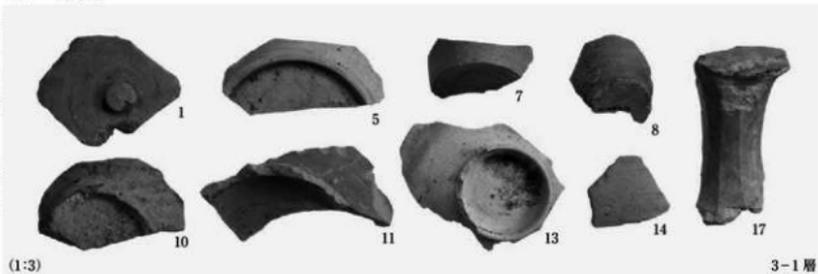


1. 第5面全景（東から）

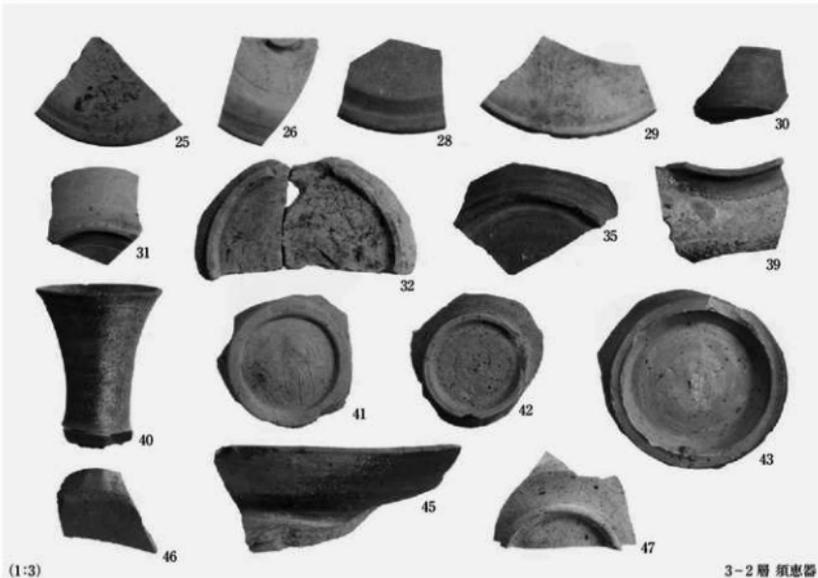
2. 496溝  
3. 497・498・506落ち込み、504溝4. 第5面土器(236)出土状況  
5. オリフィス部調査完了状況（東から）

08-1 調査

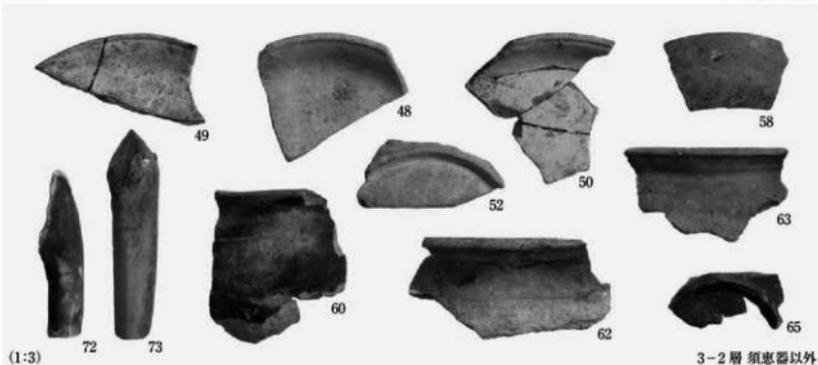
写真図版  
26  
1区遺物



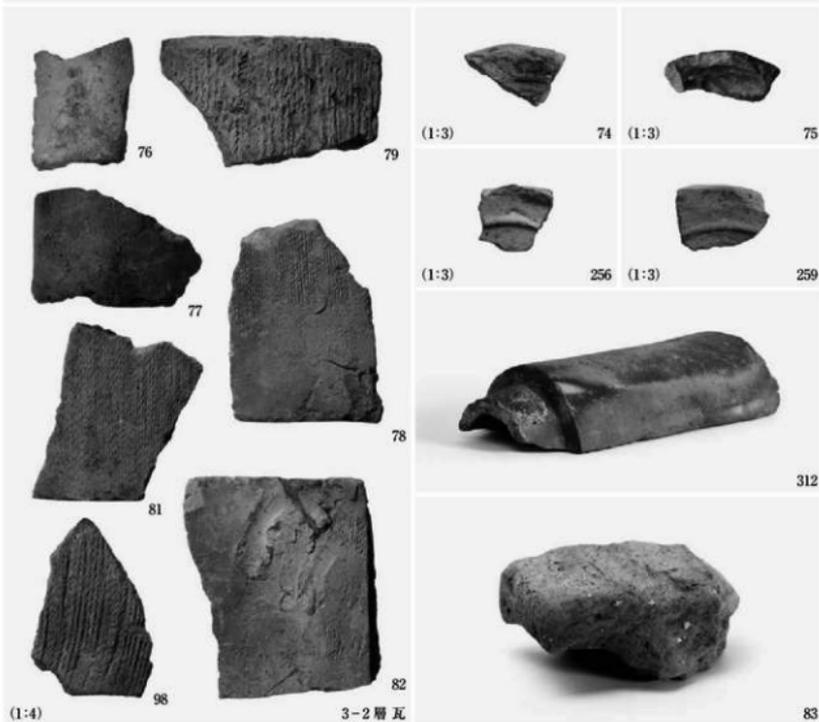
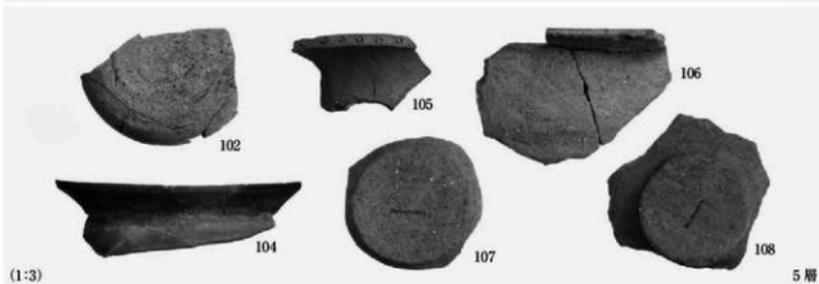
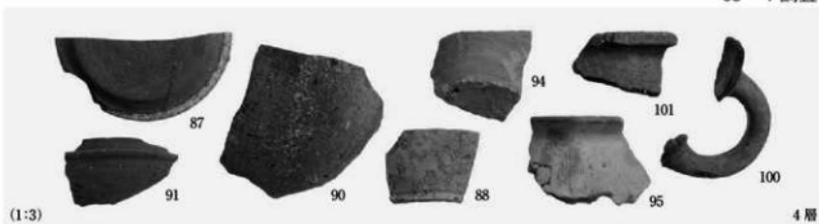
3-1層



3-2層 須恵器



3-2層 須恵器以外





(1:2)

34



55



92



37



93



38



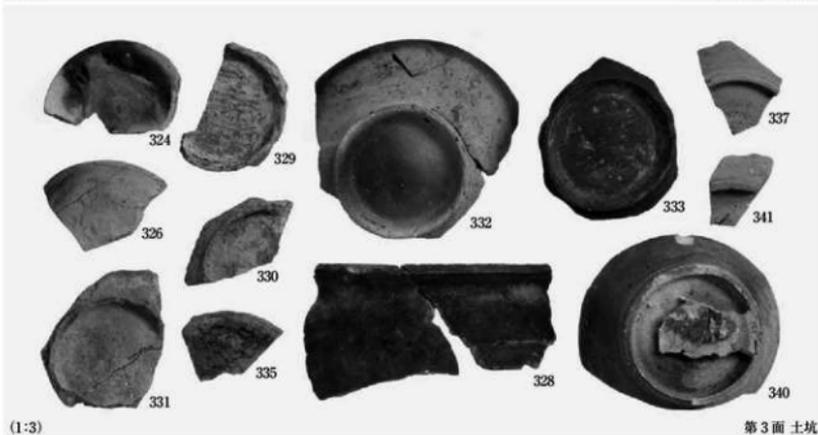
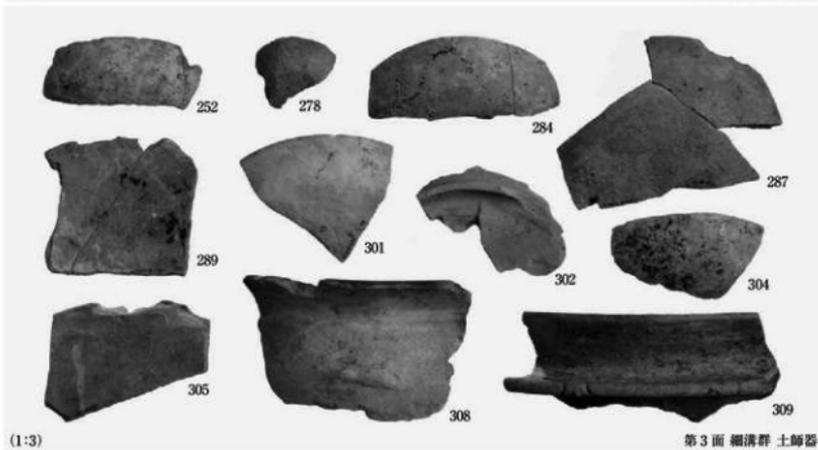
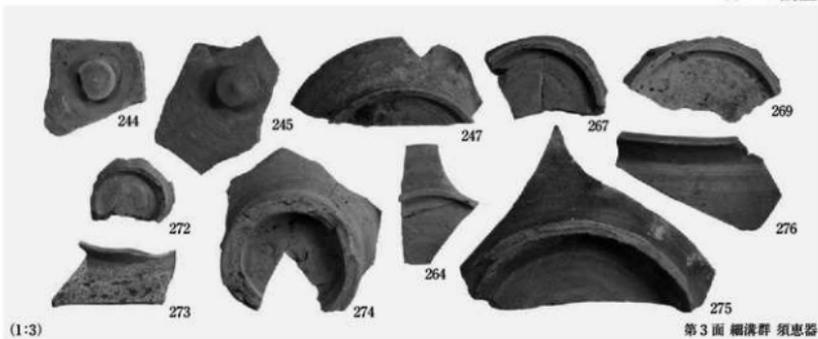
103



59



89





291



285



86

257

85

343

石製品



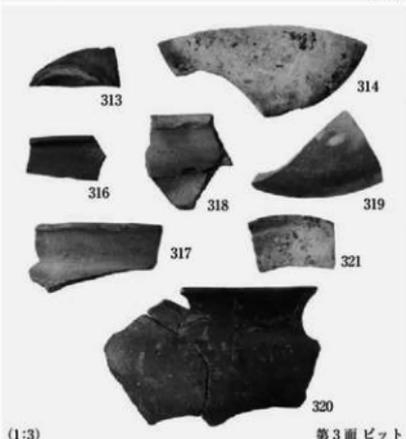
311



327



334



313

314

316

318

319

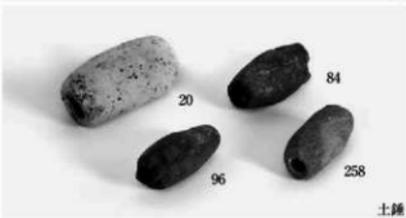
317

321

320

(1:3)

第3面ピット



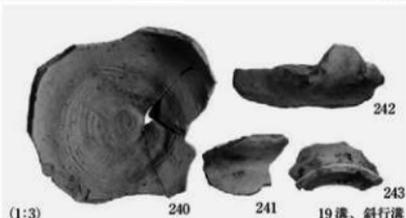
20

84

96

258

土錘



240

241

242

243

19溝、斜行溝

(1:3)



18

19

67

68

69

70

71

294

295

296

315

(1:3)

製塩土器







360



361



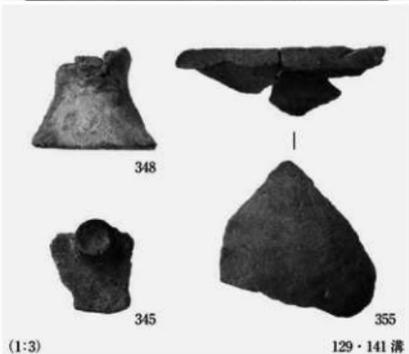
360



360



360



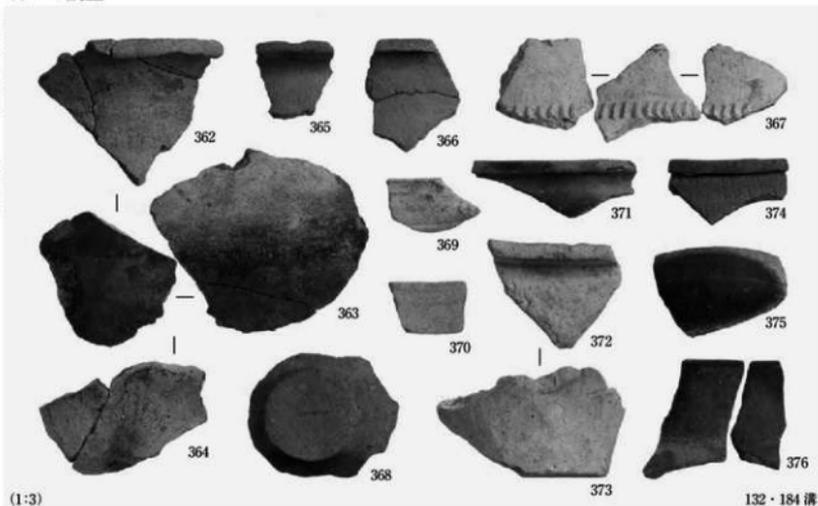
348

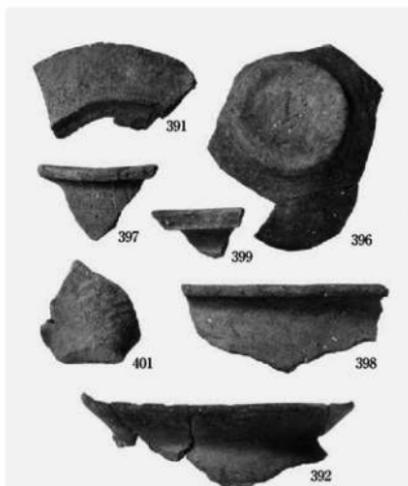
345

355

(1:3)

129・141溝





(1:3)

124・131 溝

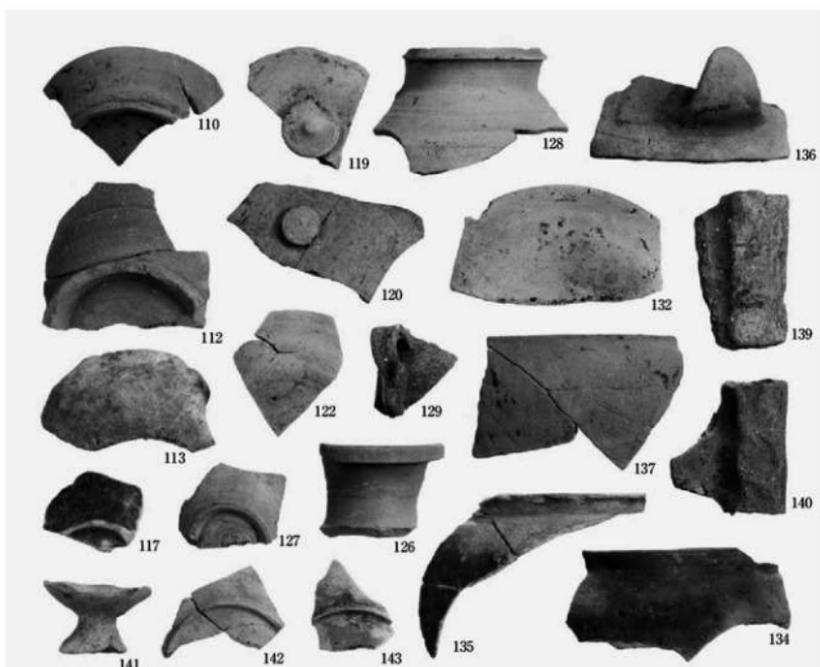


389



(1:3)

第5面土坑

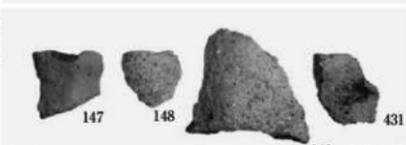


(1:3)

2区 3-1・3-2層



144



147

148

431

(1:3)

149 製埴土器



118



(1:3)

158



(1:2)

118

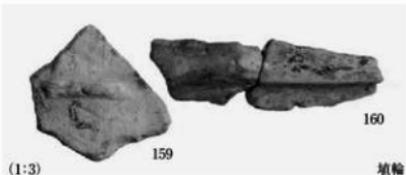


(1:2)

130

131

視

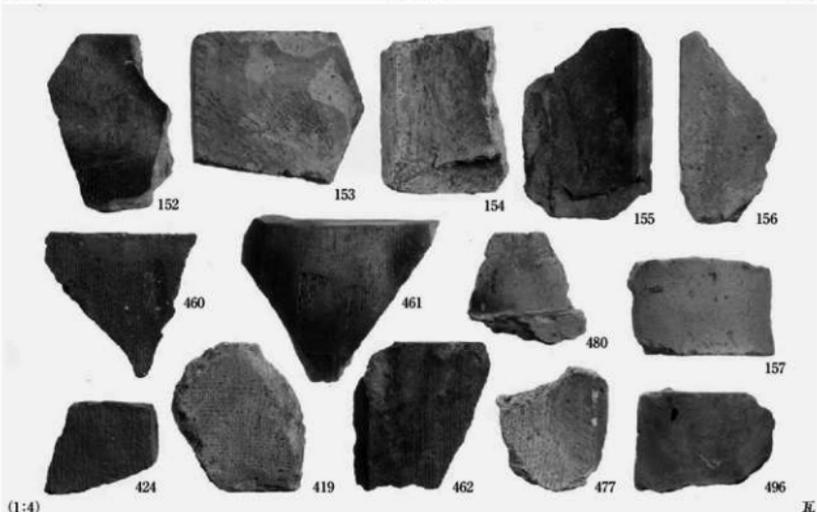


(1:3)

159

160

埴輪



152

153

154

155

156

460

461

480

157

424

419

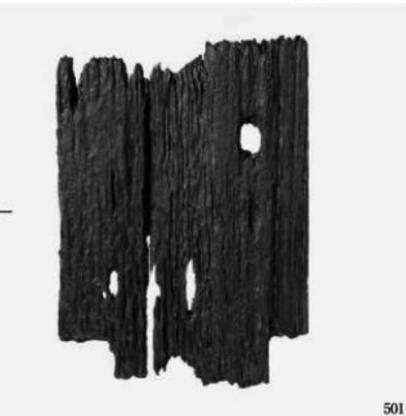
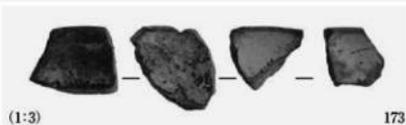
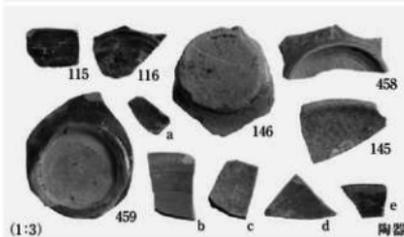
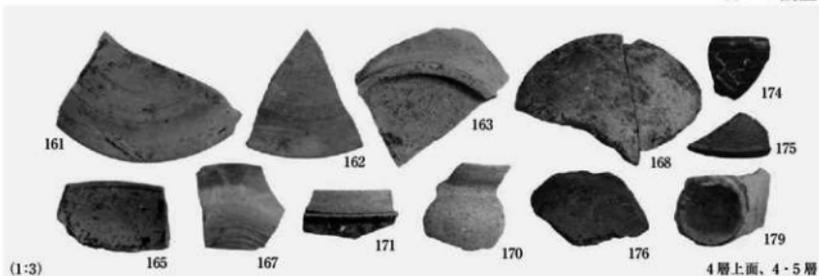
462

477

496

(1:4)

瓦





169



484



499



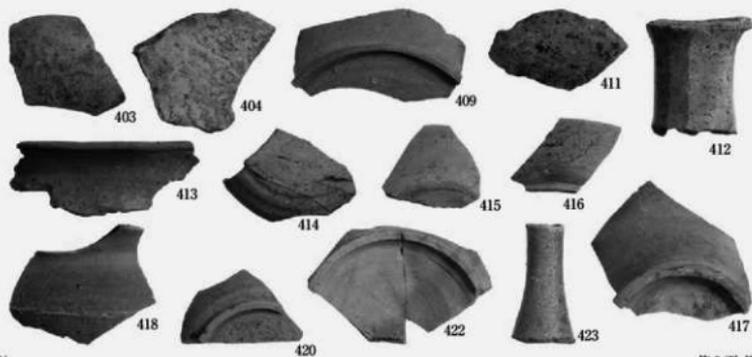
481



498

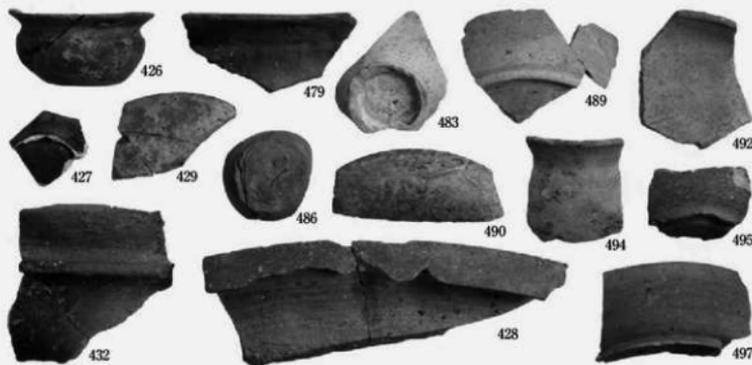


500



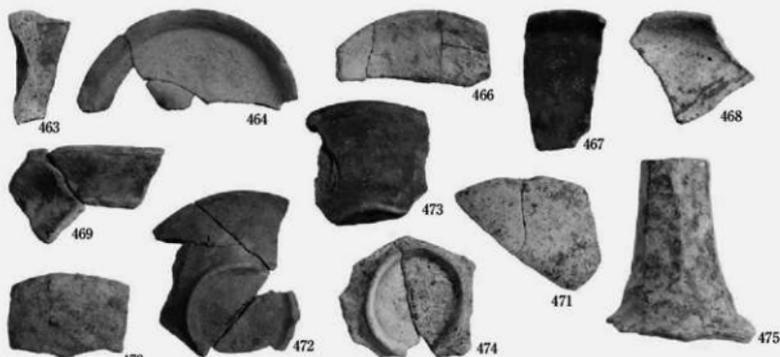
(1:3)

第3面 細溝群



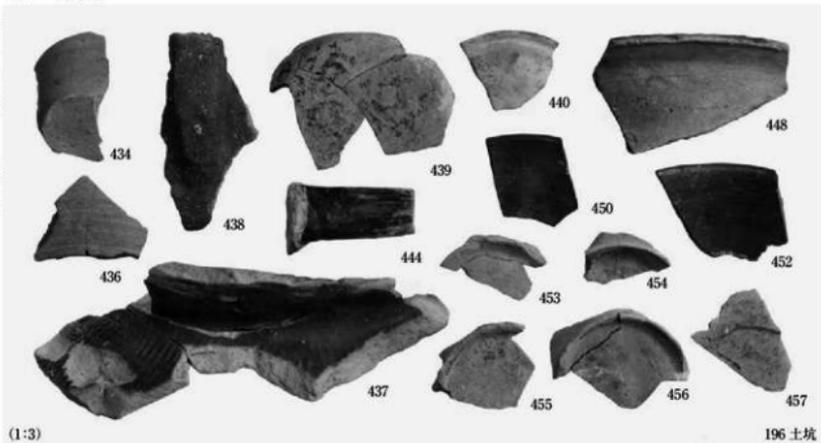
(1:3)

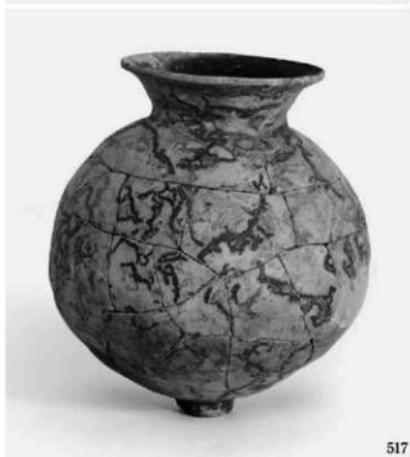
第3面 ビット、土坑



(1:3)

356 土坑

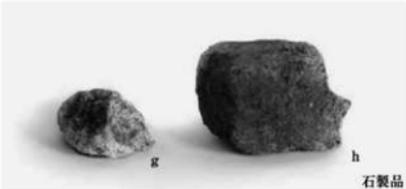
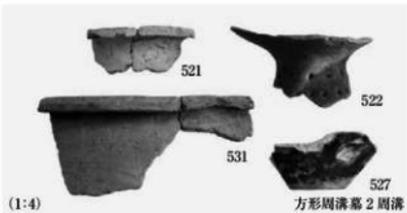


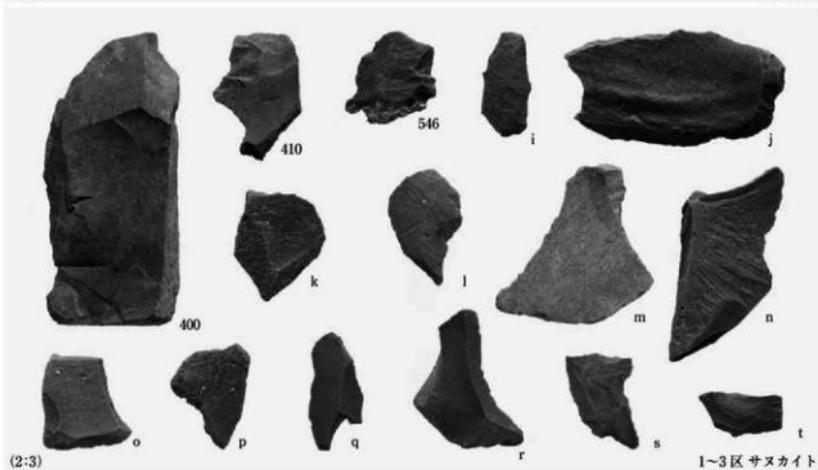
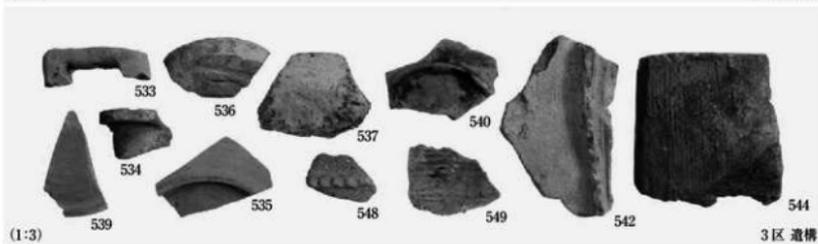
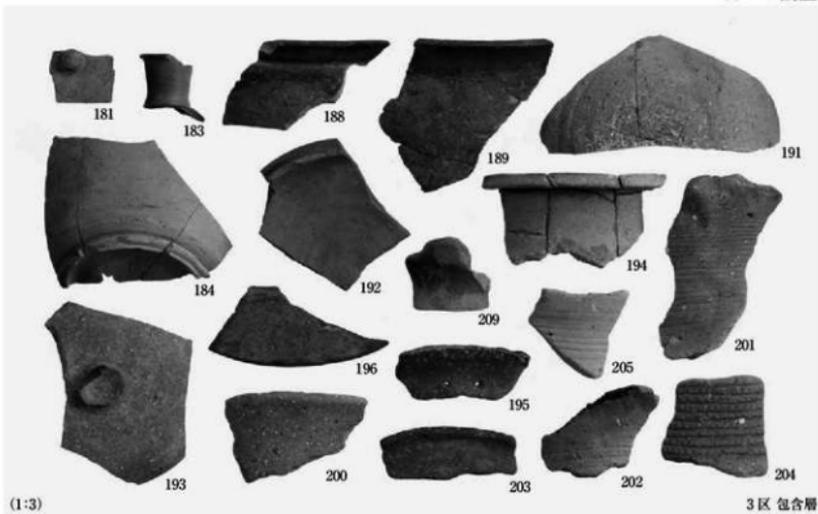


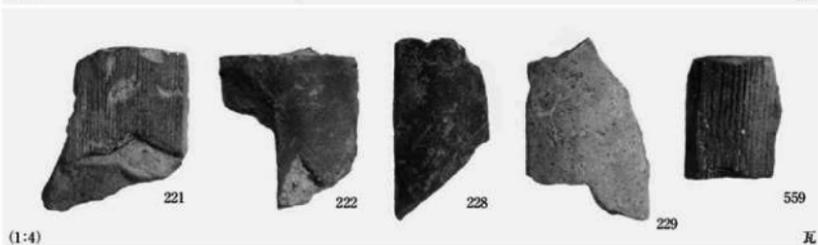
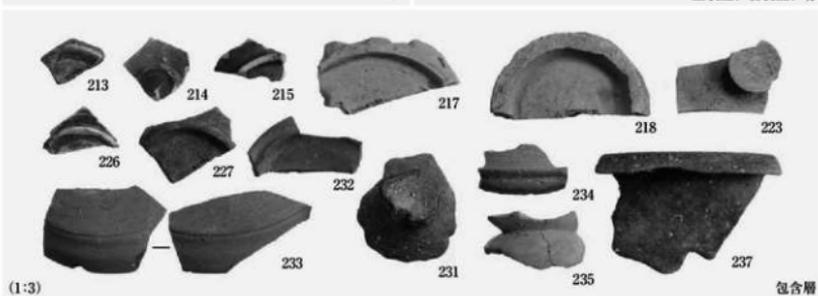
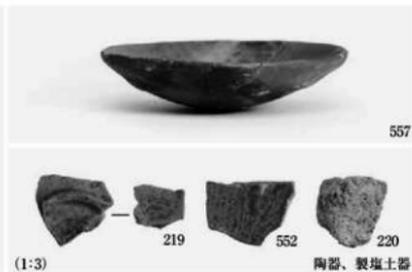
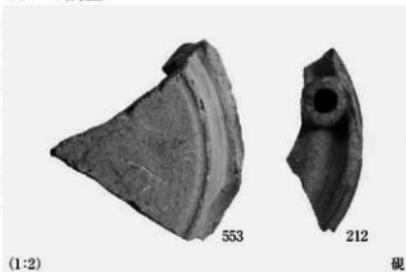
529

528

532









1. 1区1層上面全景（西から）

2. 1区調査完了状況全景（西から）



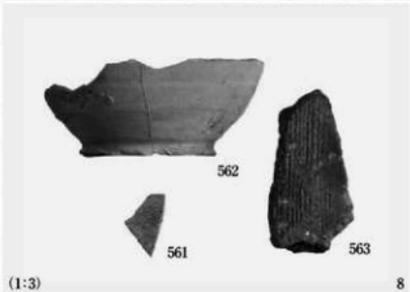
3. 1区南壁地層断面（上層部）

4. 1区南壁地層断面（下層部）



5. 2区11層上面全景（西から）

6. 2区南壁地層断面（上層部）



(1:3)

7. 2区南壁地層断面（下層部）

8. 2区出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	しんかみこさかいせき3							
書名	新上小阪遺跡Ⅲ							
副書名	大阪府営東大阪新上小阪住宅民活プロジェクトに伴う新上小阪遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第209集							
編著者名	伊藤 武							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 堺市南区竹城台3丁21番4号 tel 072-299-8791 fax 072-299-8905							
発行年月日	2010年11月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
新上小阪遺跡	大阪府東大阪市新上小阪	27227	163	34°38'57"	135°35'25"	(08-1調査) 2008.09.01 ～ 2009.08.31  (09-1調査) 2009.05.08 ～ 2009.06.02	(08-1調査) 2,918㎡  (09-1調査) 19.2㎡	大阪府営東大阪新上小阪住宅民活プロジェクト
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新上小阪遺跡	墓	弥生時代中期	方形周溝墓3基、溝	弥生土器、石庖丁		周溝内から穿孔のある多くの供献土器が出土		
	集落	古墳時代前期	掘立柱建物1棟 土坑	土師器		庄内式期末から布留式期初頭に位置する		
	集落	古代～中世	掘立柱建物4棟 堀1条、土坑、溝 耕作溝	土師器、瓦器、瓦質土器 須恵器、陶器、青磁・白磁・青白磁、瓦、木製品、石製品、土製品、金属製品		公的施設や寺院の存在を示す遺物が多く出土		
要約	<p>第3期目の今回の調査で、はじめて弥生時代中期後半の方形周溝墓が発見され、当遺跡内にこの時期の墓域が広がっていることが明らかとなった。方形周溝墓からは土器棺を1基検出したが、その他主となるような明確な埋葬施設は確認できなかった。周溝からは、体部下半に穿孔のある供献土器が多数出土している。</p> <p>重圏紋軒丸瓦をはじめとする多くの瓦や埴、墓壇などに用いられたと思われる凝灰岩切石、また硯や製埴土器・新羅系土器など、近隣に役所などの公的な施設や寺院が存在した可能性を示す遺物が多数出土した。</p>							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第209集

## 新上小阪遺跡Ⅲ

大阪府営東大阪新上小阪住宅民活プロジェクトに伴う  
新上小阪遺跡発掘調査報告書

発行年月日 / 2010年11月30日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁目1-4

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪市東成区深江南2丁目6-8